

Title	命令・依頼表現における中国語と日本語の対照研究(Dissertation_全文)
Author(s)	王, 志英
Citation	Kyoto University (京都大学)
Issue Date	2001-03-23
URL	http://dx.doi.org/10.11501/3183603
Right	
Type	Thesis or Dissertation
Textversion	author

命令・依頼表現における中国語と 日本語の対照研究

王 志英

【博士論文】

命令・依頼表現における中国語と
日本語の対照研究

王 志英

平成十三年三月

目次

第一章 序論

§ 1 本論文の目的	1
§ 2 比較の方法と資料	2
§ 3 本論文における言語的理論	3
3.1 統語論	3
3.2 モダリティ的研究 —— 動詞の重ね型・副詞・語気助詞（終助詞）	4
3.3 意味論と語用論の相補的關係	8
3.4 命令・依頼表現と発話行為の機能との関わり	9
3.5 発話行為から談話行動へのアプローチ	13
3.6 連語論的アプローチ（文としての意味）	13
3.7 認知的アプローチ	14
§ 4 本論文の研究する立場	15
§ 5 本論文の構成	17
5.1 第一章について	17
5.2 第二章について	17
5.3 第三章について	17
5.4 第四章について	18
5.5 第五章について	18
5.6 第六章について	19
5.7 第七章について	19

第二章 命令・依頼表現における機能の定義

§ 0 はじめに	20
§ 1 日中命令・依頼表現に関する先行研究	21
1.1 中国語の命令・依頼表現の先行研究についての紹介	21
1.2 日本語の命令・依頼表現の先行研究についての紹介	29
1.3 Searle (1969) による発話行為の成立条件	33
§ 2 命令と依頼・勧めを決定する言語事象の構成要素と相互の関連性について	34
2.1 言語事象の構成要素についての分析	34
2.2 各要素の間の関連性	38
§ 3 命令・依頼・勧め文の定義及び機能的分析	40
3.1 命令・依頼表現の成立条件	41

3.2	話し手が聞き手に「行動要求」を表すモデル.....	41
3.3	命令文.....	42
3.4	依頼文.....	50
3.5	勧め文.....	59
3.6	まとめ.....	65
§ 4	対人関係による命令・依頼表現の分析.....	67
4.1	先行研究.....	67
4.2	対人関係原則.....	72

第三章 動詞をめぐる命令・依頼表現のアスペクト的・語用論的解釈

§ 0	はじめに.....	86
§ 1	中国語の動詞の特徴とアスペクト性.....	87
1.1	中国語の動詞の特徴.....	87
1.2	中国語の動詞のアスペクトについて.....	90
§ 2	日本語の動詞の特徴とアスペクト性.....	92
§ 3	中国語の動詞の重ね型について.....	93
3.1	先行研究.....	93
3.2	動詞の重ね型の表している意味.....	96
3.3	動詞の重ね型と「把」構文について.....	111
§ 4	命令・依頼表現における動詞の重ね型.....	114
4.1	先行研究の紹介と問題の提起.....	114
4.2	動詞の重ね型はなぜ「少量」が表せるのか.....	115
4.3	語用論の観点から見た動詞の重ね型.....	115
4.4	まとめ.....	117
§ 5	動詞と動詞の重ね型について.....	118
5.1	重ねられる動詞と重ねられない動詞.....	118
5.2	アスペクトによる動詞分類——結果動詞と非結果動詞.....	120
5.3	意図性のある動詞.....	127
§ 6	日本語における「動詞の重ね型」と中国語の動詞の重ね型の対照について.....	129
6.1	重複構文「VにV」について.....	130
6.2	日本語の「～してみる」と中国語の動詞の重ね型及び「～看、～试试」について.....	133
§ 7	おわりに.....	148

第四章 形容詞と命令・依頼表現

§ 0	はじめに.....	150
-----	-----------	-----

0.1 品詞による違い	150
0.2 活用形による違い	151
0.3 意味による違い	151
§1 中国語の「形容詞の命令文」についての分析と問題提起	152
1.1 先行研究の紹介と疑問点	152
1.2 問題点の提起	154
§2 「形式上の形容詞の命令文」の研究・分析について	158
2.1 形容詞と命令文との関連	158
2.2 形容詞と「一点儿」(一些儿)	161
2.3 発話状態の分析	162
§3 「形式上の形容詞の命令文」における「一点儿」についての考察	164
3.1 中国語の形容詞の分類と意味的特徴	164
3.2 「A+一点儿」についての機能分析	165
3.3 「形容詞の命令文」における「一点儿」の文法化	171
§4 「形式上の形容詞の命令文」の形態的分類	172
4.1 第一類 — 形容詞が述語の状語(連用修飾語)、補語として使われる場合	172
4.2 第二類 — 裸の形容詞による命令文の場合	187
§5 人間のカテゴリーに関する形容詞	193
5.1 述人形容詞(human adjective)	194
5.2 述人形容詞と似たような働きを持つ形容詞	196
5.3 まとめ	198
§6 「形式上の形容詞の命令文」における省略の問題	199
6.1 動詞述語が省略できる「形式上の形容詞の命令文」	199
6.2 動詞述語の省略ができない「形式上の形容詞の命令文」	200
6.3 省略の統語的条件と語用論的条件	201
§7 おわりに	202

第五章 命令・依頼表現におけるモダリティ副詞

§0 はじめに	204
0.1 モダリティ副詞	204
0.2 日本語のモダリティ副詞	205
0.3 中国語のモダリティ副詞	205
§1 モダリティ副詞及び研究方法	206
1.1 依頼行為と依頼表現	206
1.2 モダリティ副詞について	206

1.3 モダリティ副詞についての研究方法	208
§2 日本語の「ぜひ」、「必ず」と中国語の「一定」について	209
2.1 「ぜひ」	209
2.2 「必ず」	223
2.3 「一定」	230
§3 「くれぐれも」と「千万」	235
3.1 「くれぐれも」と「千万」のプロトタイプ的な意味	235
3.2 「くれぐれも」と「千万」の典型性条件	235
3.3 「くれぐれも」と「千万」の典型性条件についての検証	235
3.4 まとめ	239
§4 「どうか」と「何とか」	239
4.1 「どうか」	239
4.2 「何とか」	243
4.3 「どうか」と「何とか」の違いについて	245
4.4 まとめ	247
§5 おわりに	247

第六章 中国語の語気助詞「吧」と日本語の終助詞「ね」

§0 はじめに	249
§1 中国語の語気助詞「吧」	249
1.1 今までの研究成果と問題点の提起	249
1.2 本稿の主張	250
1.3 語気助詞「吧」の機能についての分析	251
1.4 語気助詞と認識的モダリティ	263
1.5 まとめ	264
§2 日本語の終助詞「ね」について	264
2.1 はじめに	264
2.2 先行研究及び問題提起	265
2.3 本論文についての研究方法	267
2.4 「ね」の基本的な機能	269
2.5 「ね」と命令・依頼表現との共起	283
§3 おわりに	285
3.1 中国語の「吧」と日本語の「ね」との比較	286
3.2 全体的なまとめ	288

第七章 結語

§1 日中命令・依頼表現のモダリティ的分析	290
§2 日中命令・依頼表現の語用論的の相互関係 — 丁寧さの問題	292
2.1 依頼文における丁寧さ	292
2.2 勧め文における丁寧さの問題	293
§3 今後の課題	294
参考文献	295

使用記号についての注

凡例

1 記号

* 非文法的な表現

? 許容性に揺れがある表現

?? 許容性にかなり揺れがある表現

～ 辞項の省略

() 原著の用例などの訳者が添えた訳文

—— 今議論の焦点になっている現象の場所に注意を促すマーカー

..... 今議論の焦点と関連のある場所

2 略号

V 動詞

O 目的語

A 形容詞

B' 終局点

B 目標点

M モダリティ的要素

S 話し手

H 聞き手

Adv 副詞

第一章

序 論

§ 1 本論文の目的

日常言語の基本的な特徴の一つは、単に情報のやりとりのために使われるだけではなく、言葉による行為として機能する（山梨1989:219）。Austin は私たちは何かを言う（陳述する）ためだけに言葉を使うのではなく、何かを行う（行為を遂行する）ために言葉を用いるのであると確信していた。つまり、言葉は世界について何かを述べるためだけに用いられるのではなく、人は何らかの点で、変えたりするような行為を遂行するために言葉を用いることもあるのである（Thomas 1995: 訳書34ページ）。

人々が相手に意味を伝えることができるのは、意味を伝える「仕組」が存在するからであり、また、その「仕組」を他の人と分け持っているからである。それがもし普遍的なものであれば、外国人との気持ちのコミュニケーションは楽にできる。しかし、実際は社会・文化がそれぞれ異なるのに応じて、その「仕組」も異なっている。それを研究し、どこが共通か、どこが異なるのかを明らかにすれば、社会・文化ごとに異なる「仕組」の間の橋渡しをすることができる。この「仕組」を探るためには、様々なアプローチが可能であるが、その一つとして、言葉の使い方を取り上げることができる。言葉は情報伝達ばかりでなく、話し手が相手に対して持つ気持ちの伝達手段でもあるからである。外国へ行ったら、相手をお願いすることはしなければならないだろう。言葉でどのように相手に対して意味を伝えることができるのか、どのようにスムーズをお願いすることができるのか、その仕組の解明のためには、言葉の使い方の中での命令、依頼に関する研究が必要である。

しかし、中国語¹⁾では「命令文にはがんらい特殊な形式がなく、多くは語気に依存していたものと考えられる。そこでは、文の場や、語気が重要な条件となる」（内田1960:39）と言う。確かに、中国語の命令・依頼表現はどんな形態的特徴を持っているのかと聞かれたら、すぐに具体的なイメージが浮かび上がらないのが普通である。また、中国語には敬語がない²⁾と言われ、外国人にとって、相手に命令或いは依頼をする時、どういう表現を使うかを判断する基準は分からないのである。今まで命令・依頼表現に関する先行研究は数は少ない。本論文では、中国語の命令・依頼表現に関するいくつかの課題を解明するのが一つの狙いである。この目的を達成するために、ほかの言語——日本語と対照し、比較したらその姿はもっと鮮明になると考えている。

1) 本論文での所謂中国語というのは、現代「普通語」（標準語）を基準にして考えたものである。

2) 本論文は現代中国語には敬語があるか否かについては議論しないが、昔、あったことを否定しない。

§2 比較の方法と資料

中国の言語学者高名凱には「中国語に文法はない」(1957)という主張がある。この主張には二つの意味があると考えられる。一つは中国語における文法研究の未発達を意味することと、一つは文法の存在を否定するか、或いはそれが貧弱であると意味するのだという。確かに、中国語は人称・性・数・格・時制・態・法……などの文法範疇はいずれも語形変化に現われない。語の結び付き方・文法的関係は殆ど文中の位置或いは語順で示される。語順に従い、語と語の関係を掴むにしても、それぞれ語の意味や文の大きな流れに依存することが多い。形態的な特徴の乏しい中国語における文法上の重要な手段は、いうまでもなく語順と、幾つかの機能語(虚辞)とである。

逆に、日本語は命令・依頼表現、敬語表現にしても、一つの体系をなしており、法則性を有することが特色である。このように文法形式における差異の大きい両言語の間で、命令・依頼表現の形式構造から対照研究を行うことは意味がない作業である。命令・依頼表現における対照研究が効果を持つためには、両方の言語におけるその問題が、それぞれの言語の内部において、その言語の理論に即した形で、最も深い部分まで掘り下げられ、本質にまで達している必要がある。本論文は中国語と日本語を二つの言語を平行的に研究するのではなく、話題により、分析の素材は主として、中国語に求めるか或いは日本語に求めるかにするが、かかわり合いのある限りにおいて、日本語や中国語との対照研究を行う。というのは、例えば、命令・依頼表現における動詞と形容詞の話なら、中国語のほうがより明確に論点を示すことができる。この話題を取り上げることにより、従来どのような方式においても、不明確であったり、不適切であったりした論点が浮かび上がってくるが、新しい観点・立場からの研究により興味深い研究になるのである。中国語或いは日本語のある話題の基本的な構図を描き出せば、命令・依頼表現に対する理解が深まり、他の言語に対するイメージも少し明確になってくると思われる。比較する方法としては、節を設けて、それぞれについて論じるか或いは中国語(日本語)の問題について論じる時、随時に日本語(中国語)との比較を行うかにする。

本論文の立場は対照的研究(Contrastive study)の立場であるが、真正面から中国語の命令・依頼表現にぶつけるのではなく、中国語の言語の統語的な特徴によって、動詞述語を中心に動詞述語の周りに少しずつ命令・依頼表現の真相を解明したい。というのは、命令・依頼表現において、動詞は構文の中枢的構成要素であるとしても、動詞の意味機能だけでは、命令・依頼表現の意味を尽くすことはできないからである。方法としては、横軸は、「動詞における命令・依頼表現」、「形容詞における命令・依頼表現」などのように、いくつかの文法上の項目を立て、その項目に関しての両者の共通点・相違点を考察する。このいくつかの項目の間は、関連性があまりないように見えるが、すべて命令・依頼表現という糸で関連づけられている。とはいえ、ここで挙げている項目はすべて命令・依頼表現において、よく使われるものであり、まだ解決していない問題であるとも言

えよう。縦軸は、そのいくつかの項目を通して、中国語と日本語の命令・依頼表現の違いに関する全体図を描き出すつもりである。即ち、本論文は中国語と日本語の命令・依頼表現の示す多様性のすべてを取り上げるのではなく、命令・依頼表現の統語レベル、構文レベルにおける典型的な用法を分析することにする。命令・依頼表現に関する中国語と日本語の場合、よく問題にされているいくつかの課題を中心に研究し、細かい差異は捨象するのである。

考察の対象としては、自然な発話——小説、ドラマなどの台詞を中心に、筆者の作例も加えているが、先行文献の用例を借用（目的に合わせて変えたものもある）する場合もある。

§3 本論文における言語的理論

3.1 統語論

命令・依頼表現と言っても、実際にその広がりは大い。命令・依頼表現は統語範疇の変化・語句の選択・様々な婉曲表現により表現されている。終助詞をつけて、話し手の心情を表すものも含まれている。ほかに、疑問文、過去形などの統語範疇、文法範疇の変化、それに語用論レベルの婉曲表現などにより、様々な命令・依頼表現を作り出すことができる。日本語や英語の命令文は動詞の変化によって表され、「歩く」に対して、「歩け」というように形態的に命令を表す手段を持ち、シンタクス上から命令を表す形式を備えている。ところが、中国語では文脈なり場面があって、初めて意味の確定できるものがある。例えば、中国語の「歩く」という場合でも、「歩け」という場合でも、同じ「走」という形が担う。「単なる叙述と命令とを分けるものは、二つの文を成り立たせているムードの違いによるだけである」（荒川1979:34）。つまり、一つの文を判断するには、文脈を離れば、叙述か命令か特定することができない³⁾。よって、中国語の命令・依頼表現を考えるには、動詞だけに限るのではなく、そのまわりの要素についてもそれぞれ考えるべきである。更に、命令・依頼表現の本質を解明するには、動詞或いは周りの主要要素との関係においてみるというところに止まるのではなく、談話全体の流れという一段上のレベルとの関係で見る必要がある。これは命令・依頼表現という現象を解明するには、語用論という視点を導入するということを意味する。そして、ひとたびこの視点が導入されると、統語分野で解明できない様々な疑問が明らかになってくる。統語論を手がかりに中国語と日本語の動詞句と所謂「形容詞の命令文」について観察する。

統語論の立場から、動詞の重ね型について考えるが、動詞の重ね型は統語的な特徴を持ちながら、丁寧な要請として用いられるので、語用論的に特殊化されるということでもある。動詞の重ね型で用いられる話し手の曖昧な要求形式は、起源的には丁寧な婉曲さを生み出す手法であるという点で

3) 中国語では、命令・依頼表現の機能を果たすかどうかを判断するには、言語形式からの判断に頼るのは不十分である。というのは、話し手の声の大きさ・調子・抑揚・速度・リズム・そしてそれに付随する体の動き・ジェスチャー・顔の表情・視線なども大きく関わっているが、本論文は以上のような要素に触れずに、特集な文脈による発話を許容性に揺れがある表現だと見る。

は語用論とは切っても切れない関係にある。

3.2 モダリティ⁴⁾的研究 — 動詞の重ね型・副詞・語気助詞（終助詞）

3.2.1 モダリティの定義について

モダリティという用語は「様相・様態」などと訳される。また、直說法・假定法・命令法などと言う時の「法」(mode)という言葉とも関係がある。要するに、文の意味の主観的な部分或いはある文に対する主観的な色付けである。何をモダリティと呼ぶかは定義の問題であるが、可能性・蓋然性・推測・假定・否定などは代表的なモダリティである。モダリティを具現する形は様々である。モダリティ表現の典型例の一つとして、日本語と中国語では動詞（働きかけのモダリティ）、副詞、語気助詞（中国語の「吧」）、終助詞（伝達のモダリティ）、助動詞（言表事態めあてのモダリティ）などによっても表される。

仁田義雄（1999）は副詞をモダリティ要素だと認めないようである。「モダリティは、文の意味構造のある位置・ある箇所が存在する。文の意味構造にその在りかを持つモダリティは、その中心が、語彙的要素——例えば、「ぜひ」「たぶん」——としてではなく、述語の形態的在り方として実現されることによって、意味——文法的カテゴリーとして立ち現われてくる」（仁田：36）ということである。

しかし、モダリティを広く定義する考え方もある。井出祥子（1995：10-11）は「モダリティは音声、形態素、語彙、統語、ディスコースのレベルで表現される」と指摘する。語彙では、副詞を挙げている。また、工藤浩（1982：47-48）は「叙法」と「叙法副詞」について次のように述べている。

「文の叙法（性）modality という用語は、動詞の形態論的カテゴリーとして用いることにするが、しばらく両者の違いは見ない。叙法（modality, mood）の規定のしかたとしては、大きく分けて、二つの立場がある。一つは文の事柄的内容に対する話し手の態度、と言った主体的作用的な側面から性格づける立場であり、もう一つは、文の事柄的内容と現実との関係とか、主語と述語との関係のありかた、と言った客体的対象的な側面で性格づける立場である」。工藤は「叙法性」を話し手の立場からする、文の叙述内容と、現実及び聞き手との関係づけの文法的表現と規定している（1982：50）。

「叙法副詞」とは、文の叙法性に関わりを持つ副詞である（工藤1982：52）。「叙法副詞」は、必要に応じて、述語の叙法の程度を強調・限定したり、文の叙法性を明確化したりするものであり、構造上必須のものではないという意味では、語彙的な表現手段である。ただ、その語彙的内容が、実質概念性、対象性が希薄で、形式・関係性・作用性が濃厚であるという意味では、文法的である（工藤1982：53）。

本論文は広い定義によるモダリティの観点を取り入れて、モダリティの定義を議論するつもりはなく、ただ叙法副詞は話し手の「心的態度」を表すものであることによって、副詞も一種のモダリ

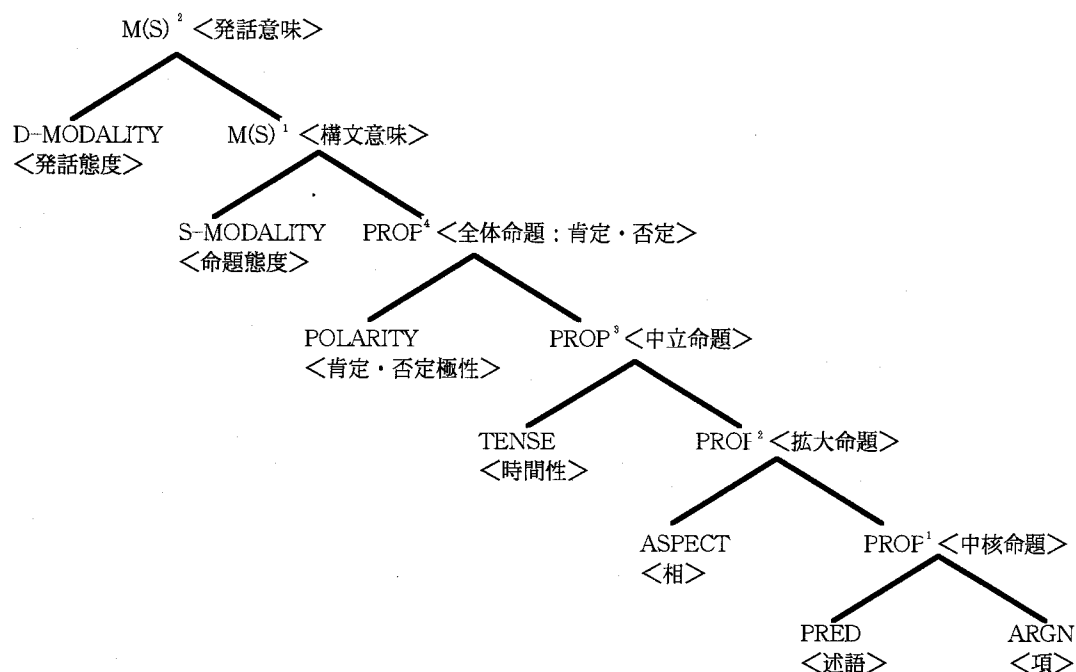
4) 日本語研究において、モダリティは実に多様に定義されて用いられており、現在のところ統一定説はない。ここで述べた捉え方も定説ではないことを断わっておく。

ティだと見ることにする。

3.2.2 階層意味論モデル — 中右実の〈文の意味〉の骨格構造の仮説

中右（2000:3）は自律的意味論の中身は何かについて「どの文にも共通した骨格的な意味構造がある」と主張する。「文の意味の骨格部分は揺るぎのない安定した構造をなしている」ということである。中右はこの仮説を「階層意味論モデル」として、図<3-1>のように定式化し、このモデルこそが普遍的意味論の自律的側面の中核部分を形づくとみることができるといふ。しかし、文は語と談話の接点でもあるので、階層意味論モデルは「文の意味」の骨格構造の形成に体系的に寄与するかぎりの意味構成成分を取り込んでいることになる。わけでも「Dモダリティ」は談話との接点を象徴する文の意味成分であるということである。

図<3-1>



しかし、中右のSモダリティとDモダリティの分類によると、発話者の態度を表す副詞と語気助詞は分類されていないようである。だが、命令・依頼表現では、話し手の心情、態度を表す副詞、語気助詞が使われるのが特徴である。このような副詞、語気助詞は「階層意味論モデル」の中のどの位置に当たるかは、中右は明確にしていない。

3.2.3 中国語と日本語におけるモダリティ事情

3.2.3.1 中国語におけるモダリティ

大河内康憲（1997:42）は中国語の文というものは次のように構成されるという。

M_1 + 主語 + M_2 + 述語 + M_3

Mはモーダルな要素で、文頭と述語の前後を占める。文頭や述語の前後にくる言葉は、ものによって、多少性質は変わっても、本来話者の立場とかかわって表出されたものである。その位置にその種の言葉が現われて、文としての安定を得るのであるという。大河内は統語論の立場から、中国語の特徴をまとめたが、これ以上詳しく説明はなく、紹介はここまでに止まる。

次は古川裕（1989）の説を取り上げる。

古川（1989：26 - 27）は文法的な意味から語気助詞を二分類し、話し手の疑問、命令、主観的な感情などを表す *modality* 的なものを y_1 とし、完成、持続、過去などを表す *aspect, tense* 的なものを y_2 とする。二つの語気助詞が同時に文末に使われる時、語順は

$y_2 \ y_1$

であるとする。

また、これに対応して、話し手の話の内容に対する主観的な認識を表す *modality* 的な副詞と非 *modality* 的な副詞に分けて、それぞれ f_1 と f_2 にする。

二つの副詞が同時に述語の前に現われる時、語順は

$f_1 \ f_2$

である。

それで、次の例のように、文中の副詞と文末の語気助詞は述語を中心に対称関係 (*symmetric relation*) をなしている。つまり、非 *modality* 的な要素は述語に近く、*modality* 的な要素は述語から離れているという指摘である。

- (1) 他们大概都是昨天来的吧。（彼らは多分全員昨日来たのでしょう）

$f_1 \ f_2 \quad y_2 \ y_1$

古川の観察は中右の「階層意味論モデル」に対応することが分かる。*modality* 的な要素は述語から離れているという指摘は「階層意味論モデル」の構造とは一致する。

以上のほかに、これまでの中国語の研究を振り返ってみると、モダリティを扱うものは究めて乏しい。それは中国語は屈折と言った語法形式で表されるモダリティが存在しないからである。

3.2.3.2 日本語におけるモダリティ

日本語においては、述語が文の叙法表現の中核である。基本的には、述語の叙法が文の叙法性を決定するのであって、文末に集中するのが特徴である。仁田（1989：1）は日本語文の基本構造を入れ子の中心となる「言表事態」とそれを包み込む「言表態度」からなるとしている。前者を形成するものは主として命題とすれば、後者を形成するものがモダリティであるという。

図<3-2>



図<3-2>で示したように、日本語の命題とモダリティは、モダリティが命題を包み込むような構造が文の成り立ちとなっている。

よって、中国語のモダリティ事情は日本語のように、述語の叙法が文の叙法性を決定するのではなく、述語の周りに分散し、お互いに影響し合うという特徴を持つ。そして、叙法副詞がなければ、文の叙法性が決まらないというようなことは、日本語にはないということである（工藤1982: 52）。例えば、「どうぞ」という副詞がなくても、述語だけで命令を表すことは変わらないという。

- (2) a どうぞ行ってください。
b 行ってください。

しかし、中国語の叙法副詞は述語の叙法性を決定することができなくても、少なくとも主語は述語の叙法性を決定することができる。例えば、「去（行く）」という動詞だけでは陳述を表すことができるし、命令を表すこともできる。「去（行く）」の叙法性を決めるのは主語である。

- (3) a （一定）去。（私は必ず行きます）（あなたは是非行ってください）
b 我（一定）去。（私は必ず行きます）
c 你（一定）去。（あなたは是非行ってください）

以上では中国語と日本語のモダリティに関する違いについて少し触れたが、中国語のモダリティと日本語のモダリティの事情の違いにより、語彙レベルの対照研究が望ましいと思われる。

命題とモダリティの境界が不明瞭なところが多い。一つの表現が命題もモダリティもともに表現することが少なくない。例えば、中国語の命令・依頼表現は、命題に何も付け加えずにそのまま聞き手に要求することができる。それが命令表現として働くのは、表層構造上はゼロ形式ながらも命令のモダリティが働くからである。ほかには次のようなモダリティ要素が挙げられる。

3.2.4 動詞の重ね型のモダリティ性⁵⁾

中国語の動詞の重ね型の機能はモダリティの特徴を表していると言える。命題にあたる客観的情報が「動詞」或いは「動量詞」として文法的な機能を果たすとすると、モダリティ、つまり主観的な機能を果たす動詞の重ね型が付随することにより、主体の側に関わる事情を表す形式が成り立つ

5) 動詞の重ね型について木村（1987: 64）は「コトのウチ側の成分」とであると主張するが、動詞の重ね型が話し手の意図性と関連して、動詞の重ね型を使うことによって、聞き手のことを配慮することができ、依頼の成功に繋がっていることがモダリティの現れに他ならない。この論文では、動詞の重ね型も一種のモダリティ成分だと見ている。

ていることになるからである。中国語の動詞の重ね型には、話者の視点・態度などの主観性を盛り込んでいるのである。

3.2.5 モダリティ副詞

副詞は話し手自身の感情や志向、欲望など“内に発するもの”を表すことができる言葉で、表現の重要な核である。具体的な発話を構成する文は、話し手が切り取った客体化された現実世界の状況（出来事・状態・行為・過程など）を表す部分と、話し手が発話時において、その状況をどのような態度でとらえ、どのような形式で発話し、どのような態度で聴者に働きかけているかを表す部分との二つからなる。客観的に世界を叙述する中核部分は命題（*proposition*）あるいは命題内容と呼ばれ、命題からいわば遊離し、話者の主観的な態度を叙述する部分は法性（*modality*）と呼ばれる（岡田1985：97）。命令・依頼表現における副詞は、話し手の希望、話し手の主観的な意志を表すというモダリティ機能を持った形である。

本論文で扱われている依頼表現における副詞は、法性表現の一種で、研究方法としては、副詞は統語的側面が制約されるため、談話レベルに目を向け、語用論的観点から検討してみる。

3.2.6 モダリティを表す語気助詞（終助詞）

終助詞の出現は話し言葉に特有な現象である。終助詞は従来、文の末尾について文の表す命題に対する話し手の判断・疑念・同意・感嘆・話し手が聞き手に対して行う伝達・確認・禁止などのモダリティ情報を担うものとして捉えられてきた。中国語の「吧」は、話し手の一方的な判断を表さず、断定ではないというモダリティ機能を持った形式であって、結果的に間接表現になり、中国語の依頼文では口調緩和や丁寧さの効果がある。

意味的に中国語の「吧」とよく似ているのが、日本語の終助詞「ね」である。本論文は意味論と語用論の立場から二つの間の違いについて考察する。

3.3 意味論と語用論の相補的關係

意味論が語や文の意味を記述することを目指すアプローチであるのに対して、語用論は話し手の意図や伝えようとしている意味の記述を目指すのである。中国語における命令、依頼の研究では、文法形式を重視し、統語論の立場から論じた論文が多い。しかし、命令・依頼表現というのは、話し手と聞き手の存在を必要とし、具体的な場面も必要である。簡単にいうならば、命令、依頼は話し手と聞き手の間の具体的な場面における発話である。Leech (1987：xi) は語用論を有益な形で規定するとすれば、具体的な場面において、発話が如何にして意味を持つのかということの研究であると述べている。つまり、意味論は文脈から離れた意味の研究、すなわち文脈に依存しない意味の研究を扱い、語用論は文脈の中における意味の研究を扱うというものである。意味論は特定の場面や話し手、聞き手からは抽象されて、純粹に問題となる言語における表現の有する特性として規定される。普通、命令・依頼表現において、話し手が自分の目的達成のために、その言語内のある形

態を、ストラテジーとしてどのように用いるかに我々が着目する時、はじめて語用論の研究と言えるのである。語用論は話し手と聞き手の関連、発話場面との関連での意味を研究する。しかし、言語をコミュニケーションの体系として研究しようとする際、その全体的なプログラムの中で、語用論と意味論を相補的に捉えなければならない。つまり、意味論と語用論は別個であるが、相補的で、相互に関係し合った研究分野である。形式的な体系として捉えられた言語それ自体を語用論と切り離して、言語の使用を研究するというのではなく、それと相補的な関係にあるものとして研究すべきである。

本論文は意味論、語用論などの立場から、中国語と日本語の命令・依頼表現における具体的な文法形式について研究するが、文法形式を文脈⁶⁾などと切り離した形で研究するのではなく、文法形式というものをその語用論的な様々な形での利用ということとの関連で捉える言語学的記述を目指すのである。というのは、命令・依頼表現における話し手が依頼を成功させるいろいろなストラテジーは直接に語彙や統語構造に反映するのである。つまり、文法（言語の抽象的形式体系）と語用論（言語使用の原理）は言語学の中で、相互に補い合う領域であるということである。言語の本質を理解しようとするならば、これら両方の領域と両者の間での相互作用を研究することが欠かせないのである。

3.4 命令・依頼表現と発話行為の機能との関わり

発話行為 (speech act) の基本なしているのは、「ものを言うことによって」、「(ある目的にかなう) 行為をする」という考え方である。発話行為理論の分野での研究は、1970年代初頭より、Austin (1962) に始まり、Grice (1975)、Searle (1969) らによる哲学的な考察を基盤としている。

3.4.1 Grice (1975) の協調の原則 (cooperative principle)

発話行為が基盤としている規則は、Grice の協調の原則である。Grice の理論の要点は話し手及び聞き手に課せられている強い制約の存在を明らかにしようとした点にある。会話のやり取りというものは協調的作業であり、会話各参加者が遵守するように期待されている原則がある。すなわち、「会話のそれぞれの段階で、その時の会話の目的ないし方向から要求されるように、貢献せよ」ということである (Grice 1975: 45)。協調の原理が働いている際に会話の参加者が具体的に守らなければならない原則 (maxim) (Grice 1975: 45-46) として、次の四項目を挙げた。

i. 量の原則 (maxim of quantity)

a 要求されている情報量の貢献をせよ。

6) 本論で使われている「文脈」という概念は、英語の「context」に対応すると考えられるが、大別すると、二つに分けることができる。一つは言語内の問題であり、これを狭義の「context」として考え、もう一つは、言語内の問題に限らず、発話の場も含めたものである。ここでいう「context」は後者の広義の概念での「context」を指すが、文脈「context」という語は具体的にいうと、参加者が誰であるか、実際の発話の時間や、場所の情報、そして、その実際の発話における参加者の信条・知識・意図なども含むものである。

- b 要求されている以上の情報量の貢献をするな。
- ii. 質の原則 (maxim of quality)
 - a 偽と信じていることを言うな。
 - b 十分な証拠なきことを言うな。
- iii. 関連性の原則 (maxim of relation)
 - 関係のあることを言え。
- iv. 様式の原則 (maxim of manner)
 - a 不明瞭な表現を避けよ。
 - b 曖昧さを避けよ。
 - c 簡潔に述べよ。
 - d 順序立てて述べよ。

このような項目は、一見すると理想ではあっても決して現実の会話では守れそうもないと感じられるかもしれない。しかし、Griceの提案の眼目は、話し手に理想の発話を求めるものではなく、むしろ聞き手の「聞き方」に向けられている。聞き手は、相手の発話を状況と能力に応じて精一杯上の原則を守ろうとして発せられたものとして聞き取る。もし一見上の原則に反していると見られる場合は、直接的には原則を守ることができない理由が存在していると考え、そこから推論が発動される。結果的に相手の発話をもっとも合理的に解釈するための「含意」が導出されるのである。Grice は話し手が会話の含意を使うことによって、明らかに意図的に協調の原則に違反していると思われる時に、どのような解釈をすべきかを考える。真実が語られない時は、文字通りに解釈するのではなく、コンテキスト (context) や量において、関連性iii.や様式iv.の前提から逸脱する条件について十分な分析が必要だと説いている。この発話行為理論のアプローチは、言語による発話を、文としてだけでなく、社会的行動の特有な形式として考えてきた。すなわち、文がある特有のコンテキストで用いられた時、それらの文にはある付加的な意味或いは発語内行為・発語媒介行為の機能が与えられ、それらは話し手の意図・信条・評価・話し手／聞き手の関係によって定義される。Griceの会話の含意の概念は、意味論と語用論の中間にある多くの重要な問題を考えるのに役立つものである。

3.4.2 発話行為理論 (Speech Act Theory) による分析

語用論の研究としては、特に次のような問題が注目される。(i)対人関係／社会関係の機能を明らかにしていく研究、(ii)談話機能／テキストの情報機能の解明に力点を置く研究、(iii)言語的文脈や言語外的な文脈の問題の明確化を図っていく研究。(i)～(iii)の問題の解明は、この点で語用論の中心的な研究のターゲットになっている (山梨1989: 217)。

発話行為には、話し手の発話内容に対する態度や、話し手と聞き手の役割関係が重要な意味を持つ。このような話し手の態度や、話し手、聞き手の役割関係は疑問 (interrogative)、命令 (imper-

tive)、感嘆(exclamatory)などの叙法(moods)に反映される。

Austin (1962 : 訳書 91-93 ; 101-107ページ) は発話行為の基本的な側面を次のように下位区分している。

- i. 発語行為 (locutionary act)
- ii. 発語内行為 (illocutionary act)
- iii. 発語媒介行為 (perlocutionary act)

普通は発語内行為を一般的に「発話行為」と呼ぶことにする。発話行為の中に疑問、命令、依頼、約束、感謝、報告等の発話行為の遂行の具体例がある。

Austin は私たちは何かを言う(陳述する)ためだけに言葉を使うのではなく、何かを行う(行為を遂行する)ために言葉を用いるのであると確信していた。そして、この確信こそが、彼の言うところの発語内行為(illocutionary act)の理論に彼を導いたのである(Thomas1995: 訳書34ページ)。Austin は大部分の発話は陳述でも質問でもなく行為(actions)であると主張したのであるが、彼がこの結論に達したのは彼の言う「行為遂行動詞」(performative verbs)の分析によってであった。行為遂行動詞という用語の意味を理解するために、次の四つの文を比較してみよう。

- i. I drive a white car.
- ii. I apologize.
- iii. I name this ship The Albatross.
- iv. I bet you £ 5 it will rain.

統語論的にはこれら四つの文はお互いによく似ているが、語用論的に最初の文は他の三つの文と大きく違っている。i.は陳述を表す「事実確認的」(constative)な文で、その陳述が真であるか否かを経験的に決定することは容易である。一方ii.~iv.の動詞は陳述をなさず、「行為遂行的」と呼ばれるクラスに属する。このクラスの動詞は真もしくは偽の判断を許さず、一つの行為を行うものと解釈すべきなのである。この発話は依頼、命令などの行為を遂行する発話である。これに関する研究は一般に発話行為(speech act)の研究と呼ばれている。

従来、文の形式がそのままの発話行為を表している場合には、「直接発話行為」といい、それに対して、文の形式と機能が一致していない場合の発話行為を「間接発話行為」という。本論文はLeech (1983) の観点を取り入れて、敢えて、直接的な発話内行為と間接的な発話内行為とを区別することはしない。というのは、「どの発話内行為でも、その効力が含意から引き出されるという限りにおいては、「間接的」である。しかし、その間接さの度合については大きな変動がある」(Leech1983 : 訳書46 ページ) からである。

基本文の発語内効力標識は、それらの文のタイプを修飾する副詞(adverbs)や音調(intonation)のような語句や統語的特徴を含む。そのような特徴の意味は、新しい「発語内効力」の特別な構成

要素を追加したり、強さの度合を変更することによって、それらが生じる発話の完全な発語内効力を決定するのに寄与する（Vanderveken 1994：訳書52ページ）。本論文は命令・依頼表現における日本語と中国語の副詞の機能についても焦点を当てる。

また、間接発話行為を使って丁寧な依頼を表す手法がある。間接発話行為とは、命令、要求、批判などのフェイスを脅かす行為を行う場合、これらの行為を明示する統語構造を避ける操作である（Searle 1975）。この手法には高度に慣習化して、決まり文句になっているものも多い。慣習化の度合いが高いものは、フェイスを脅かす行為の間接性が低いので、丁寧さの程度も低くなる（西村 1992：281）。中国語には敬語がないと言われているが、動詞の重ね型や、語気助詞「吧」の用法はまさに丁寧な間接発話行為だと思われる。

3.4.3 Searle（1969他）の適切性条件

文を言語行為の面から見ると、問題となるのは真理条件ではなく、その発話が適切かどうかという点である。Searle は言語行為理論の創始者で、Searle の言語行為理論は、Austin の理論を体系化し、部分的厳密化したものである。Searle は個々の言語行為が成立するための条件として次の四つを挙げた。

命題内容条件	発話の内容が満たすべき条件
準備条件	発話の状況に関する条件
誠実条件	話し手の意図に関する条件
本質条件	特定の発語内行為の遂行に本質的な条件

以上の条件を言語行為の適切性条件（felicity condition）と呼ぶ。例えば、依頼を例にとって、適切性条件を具体的に以下のように分析することができる（Searle 1969：66）。

命題内容条件	聞き手（H）による将来の行為（A）
準備条件	(a) H は A をする能力を持つ (b) 話し手（S）は、H が A をする能力を持つと信じる
誠実性条件	S は H に A をしてほしい
本質条件	H に A をさせようとする試みと取れる

このように、適切性条件が破られると、依頼行為は適切なものとしての効力を発揮せず、発話はせいぜい冗談としか受け取られない。

以上の適切条件は、命令（ordering）、要請（demanding）、指令（commanding）などの発話行為にもあてはまる。ただし、依頼行為とことなり、これらのタイプの発話行為には相手 X と聞き手 Y の地位関係に関する次の準備条件がさらに付加される（山梨 1986：43）。

準備条件：地位関係からみて、XはYよりも優位

Searleの適切性条件と山梨が適切性条件にもとづく典型的（prototypical）な発話行為の一般規定の補足は、第二章の命令、依頼、勧めを定義するには有効な参考になる。例えば、上司である話し手の立場から言うと丁寧な口調で部下に依頼するつもりであるが、部下である聞き手は要求されることが丁寧な表現であっても命令としか聞こえない。二人の間で何かの要素が上であれば、口調は丁寧であっても、でなくても、優位を持たない人にとっては依頼にならないケースが多い。

3.5 発話行為から談話行動へのアプローチ

本論文は発話行為理論の視点から命令・依頼表現という発語内行為を分析するが、それだけで足りず、談話行動として捉える必要があると提案する。命令・依頼表現を談話の中で捉えようとする視点は、命令・依頼表現のプロセスの分析という言語使用をより動的に捉える研究となる。また、命令・依頼表現の多義性の解明にも役に立つ。

3.6 連語論的アプローチ（文としての意味）

連語とは、二つ以上の自立的な単語の組み合わせによって、一つの名付けの意味を表している合成的言語単位のことである。連語論はこのような連語を基本単位として、文法を研究する構文論の一分野である。ここでの連語とは、一つ一つの単語に対する言い方である。特に本論文で動詞について論じる時、動詞だけを取り上げても、中国語の動詞の重ね型の意味記述が難しい。動詞は名詞などと違って、一語だけを取り上げたのでは、意味がないことが多い。例えば、同じ動詞「看」であっても、目的語が違えば、重ねられる場合と重ねられない場合がある。「看看电影」（映画を見に見る）とは言わないが、「看看电视」（テレビを見に見る）は言う⁷⁾。本来動詞は目的語との関連によって、初めてその意味が実現されるものであるとさえ言えるであろう。動詞の重ね型はまた、時間的な副詞とも関わりを持っている。

(4) *我昨天演了演戏。（昨日劇に出演に出演した）

我这几年就演了演戏。（私はこの何年間の間劇に出演に出演した）

「昨天」という時間副詞であれば、「演戏」という「出演する」の動作は内容的に一つのまとまりとして、一回で終わるので、同じ動作を何回も繰り返すことはできない。逆に「这几年」になると、「出演」の動作が複数になってきて、動詞も重ねられるようになる。このように動詞の重ね型、アスペクトなどを考える時、文全体的な意味を問題にすべきであるという考え方であり、目的語、

7) 動詞の重ね型は特定した量と共起できない（第三章の3.2.2.1を参照）。「电影（映画）」は内容的に一つのまとまりのあるもので、定量だと見られ、動詞の重ね型とは共起できないが、「电视（テレビ）」は内容的に番組内容がいろいろあるから、不定で、動詞の重ね型と馴染みやすい。

副詞的成分の意味も動詞と同じく、動詞の重ね型、アスペクトの意味に深く関与しているという事実に立脚したものである。このような考え方は、動詞の重ね型、アスペクトに限らず、モダリティ副詞の問題でも、「形容詞の命令文」の問題でも、その語彙だけを考える上で、いつも問題になるところであると思われる。

では、文全体的な意味はどのようにして扱えばよいのかということになるのであるが、この研究方法としては、その言葉（動詞、形容詞、副詞、語気助詞）単独の意味で決定できる意味（の範囲）、ほかの文成分の関与を考えている意味、更に用法としてどのような環境でその文が使われるのかということなど意味決定に関与する諸条件を整理して、構成していくのである。

3.7 認知的アプローチ

認知文法では文の構成や使用について、認知・意味論的な概念や状況解釈（*contrual*）などといった観点からの説明を目指している。一般的に言って、言語形式の意味は他のいろいろな認知構造の文脈の中にあってはじめて理解することができる。

3.7.1 プロトタイプ（prototype）理論

プロトタイプ理論は Rosch（1975）の一連の研究により、カテゴリーの内部構造を解明しようとして生まれた新しいアプローチで、認知言語学のカテゴリー論の根幹を成す考え方である。プロトタイプとは、カテゴリーの最も典型的な成員の持つ特徴の抽象的合生物もしくは集合体を言う（河上 1996: 32）。プロトタイプ性は人間に固有の知覚特性の結果生じているように思われる。「プロトタイプ」という用語の理解の仕方には二通りある。一つはプロトタイプという用語をカテゴリーの中心的成員或いは中心的成員のクラスターに適用することができる。もう一つは、プロトタイプをカテゴリーの概念的な核のスキーマ的表象として理解することができる。このアプローチでは、特定の事物がプロトタイプであるのではなく、プロトタイプを例示しているとすることができる。

私たちが事物をカテゴリー化する場合、そのプロトタイプを核とし、その周りに様々な成員を位置付けることで、全体を構造化しているとみなす。この考えに基づけば、カテゴリーの成員は、その成員らしさという点では一様ではなく、中にはプロトタイプに近いものもあれば、それとはかけ離れた周辺的なものがあったり、成員間で段階性が見られることになる（河上 1996: 32）。

このプロトタイプと成員とがどの程度合致しているかを測る基準を、典型性条件（*typicality conditions*）もしくはプロトタイプ属性という。これは、理想的なプロトタイプが備えていると思われる特徴を非網羅的に列挙したものである。この典型性条件の満たされ方は様々で、全ての成員が何かを共有する必要はない。より多くの条件を備えていれば、より中心的な成員だということである（河上 1996: 33）。

以上のように、事物がある基本的、原型的なものから末端のものへ、順序だてて派生していくというのが、プロトタイプ理論の基本的な考え方である。本論文は副詞、動詞の重ね型の用法に関しては、厳密なカテゴリー化を追い求めるより、プロトタイプ理論の考え方が有効だという立場に立つ

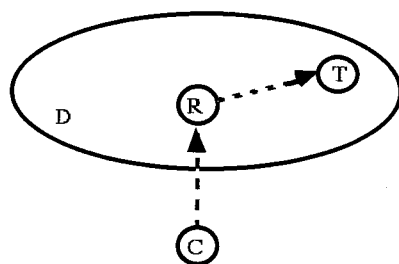
ている。分析の方針として、このようなプロトタイプ的な考えを取り入れ、副詞の語彙的な意味、動詞の重ね型の用法の分析においては、より典型的な用法がどれか、というような研究対象としての意味自体の連続性に注目する。この方向は、プロトタイプ論の考え方そのものが、科学の方法論に関わる根幹的なものなので、その分析は有効であり、必要であろうと思われる。

3.7.2 参照点

あるものに注意を向ける際に、その目印となる存在物を指す。場所を示す言い方、「銀行の隣の店」と言った場合、「銀行」を参照点として、その「店」に注意を向けるのである。つまり、話し手にも聞き手にも際立った存在を——「銀行」を「目印」として、知りたい場所、行きたい場所——「店」を指すのである。このような参照点がなければ、人間は物事を認識する際困難だろう。

Langacker (1993: 6) は参照点とその指示の関係を次の図<3-3>のように表している。

図<3-3>



Cは概念化者（＝話者および聴者）（conceptualizer）、R（referencepoint）は参照点、Tは実際に指示されるターゲット（target）を指す。楕円形の領域（D）は、参照点（R）の支配領域（dominion）を表す。点線の矢印は、CがRを経由して、Tと結ぶメンタルコンタクト（mental contact）（あるものに注意や意識を向けること）を表す。こうした参照点の関係を、ここでは参照点構造と呼ぶことにしたい（河上1996: 136）。

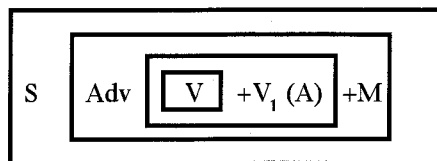
人間には参照点を作り出すという基本的認知能力が備わっており、英語においては、「その能力が様々な言語表現（所有表現、メトニミー、繰り上げ構文、代名詞の照応関係など）」（河上1996: 206）に現われていることが研究されている。英語だけでなく、参照点という理論で、中国語の今までうまく説明できなかった言語表現（「形容詞の命令文」の「一点儿」、動詞述語の数量表現など）を解決することができ、如何に中国語の表現が、参照点との関連性があるのか今回の研究で分かった。

§4 本論文の研究する立場

日本語、印欧語の命令文は動詞の変化によって表される。中国語の述語は形態変化が乏しい。よって、構文論的な意味機能の表現手段が動詞の語形変化に頼ることができない。語順や他の部分との

意味関係（人称性）などが表現手段として働くのである。動詞というのは、主に人間が相手に情報、自分の意志を伝達するものとして使われるが、中国語では動詞自体から命令・依頼表現を読み取るのが難しい。よって、動詞という概念の周辺に様々な要素に求めなければならない。中国語の命令・依頼表現における統語的構造を簡単に以下のようにまとめる。

図<4-1>

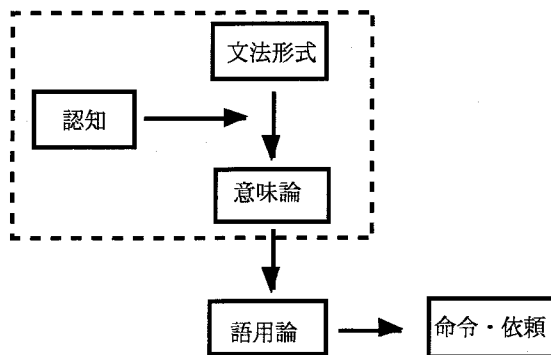


以上の構造図の中で、Vは述語動詞で、V₁ (A) はそれぞれ動詞と形容詞で、どちらかが前の動詞Vの付加要素としてVとともに述語の働きをする。述語の前にまた話し手の態度・心情を表す副詞Advが付けられ、後に話し手の認識態度を表す語気助詞Mが付けられる。Sは主語を表し、主語の人称の違いにより、命令・依頼表現であるかどうかが決められるのである。

命令・依頼表現に対して、定義しようとする、二つの面に対する配慮がどうしても必要になってくる。一つは形態に関する側面であり、もう一つは機能に関する側面である。もしも、形態的基準・機能的基準に基づき、命令・依頼表現を定義することができるなら、問題の大半が解決することになるが、しかし、いずれの基準も命令・依頼表現の必要十分条件を与えることができない。

以下で各文法現象について解釈を行う際、本論文における各理論構造関係図を概観する。

図<4-2>



命令・依頼表現は、定型の表現類型が前もって存在するのではなく、それらが話し手の社会意識とその社会意識内での聞き手との距離の取り方から相互干渉的に出てくるところにある。本論文は形態、意味／構文機能の両面にわたり、形態をベースにし、意味／機能の記述を行うが、各言語現象を説明するために、interface（仲介）として認知という観点を取り入る。文法形式を対人関係の立場から説明することによって、始めて命令の機能を持つことになると考えているのである。

§5 本論文の構成

5.1 第一章について

第一章は序論であり、本論文の全体的な考え方、中国語と日本語の命令・依頼表現研究の在り方に対する筆者の言語観を述べ、理想的な研究方法を検討した。特に、言葉を研究するには、形だけではなく、語用論的・認知的な立場からの挑戦も必要だと指摘した。言葉の意味を解釈するには、プロトタイプ的なアプローチの重要性についても述べた。

第§5では、論文の全体の構成を概観した。

5.2 第二章について

以下、第七章までが本論に当たる。第二章は語用論の立場から、これまでの中国語と日本語の命令・依頼表現に関する先行研究を概観し、中国語と日本語の命令・依頼表現について考察する部分であって、この部分は論文全体の理論・基盤をなすところである。

まず、§1は先行研究を概観し、§2から§4までは中国語と日本語の命令・依頼表現の定義と命令・依頼表現の理論的なところについて論じる。従来、命令と依頼の境界線が曖昧だが、本論文ではその区別についてリサーチしようと思っているのは一つの狙いである。Leechの気配り原則と語用論的尺度に対して、疑問を抱き、表だけから相互の利益・負担を考えるのは不十分で、裏での利益関係も考えなければならないということを主張する。聞き手は話し手から受けた指示が命令か依頼かは、聞き手自身がよく分かり、聞き手が判断できるが、我々は言語形式だけでは分からないのである。相手の発話が命令、依頼或いは勧めのどちらかを判断する時、言語形式だけに頼るのではなく、語用論的な意味からそれらを使い分けしなければならない。

命令・依頼表現を理解するには、それを決める各要素を理解しなければならない。各要素の関係により、命令・依頼表現のモデルを考案する。語用論と統語論の特徴から命令文を「絶対的命令文」と「相対的命令文」に、依頼文を「要求依頼文」と「勧めの依頼文」に、勧め文を「狭義の勧め文」と「勧誘文」に分けることにする。これによって、命令文、依頼文、勧め文の間の機能的連続性が明らかになり、この三つの間の区別を分析するには有効である。また、意味的に依頼文を「慣用的」依頼文と「実質的」依頼文に分ける。というのは、「慣用的」依頼文と「実質的」依頼文の意味と言語形式が明らかに違う特徴を見せているからである。中国語の勧め文と日本語の勧め文の語用論的な違いをも考察する。

5.3 第三章について

第三章では動詞をめぐる命令・依頼表現について考える。動詞というカテゴリーにおいて比較するには、まず、中国語の動詞と日本語の動詞の特徴を明らかにしなければならない。また、アスペクトの特徴についても論じる。中国語の命令・依頼表現では、なぜ動詞の重ね型がよく使われるのかを説明するには、特に、語用論の立場から動詞の重ね型の基本的な機能を説明し、命令・依頼表現に

おける機能的なメカニズムを明らかにする必要がある。

日本語と対照するには、意味的と構文的に対照する方法があるが、本論文は特に意味的な立場から対照を行う。中国語の動詞の重ね型を日本語の「～てみる」と比較し、特に先行研究における「～てみる」と命令文における「～てみる」の機能について問題点を提起し、筆者の観点を主張する。

5.4 第四章について

中国語独特の「形容詞の命令文」について考える。「形容詞の命令文」と言ったら、日本人には馴染みにくい言葉であるし、日本語にはない言語表現である。中国語では、「形容詞の命令文」についての研究が少ないが、しかし、「形容詞の命令文」という言い方をする先行研究があるということによって、「形容詞の命令文」の存在を無視することができない。形容詞は命令文になれないというのは、言語学でよく知られている言語事実であるが、なぜ中国語では例外であろうか。実は中国語の「形容詞の命令文」は動詞述語を省略した命令文のことである。しかし、中国語には、具体的な動詞を補うことができない「形容詞の命令文」が存在する。それについてどう解釈するかは本論文の一つの課題とも言える。また、中国語の「形容詞の命令文」には形容詞の後に「一点儿」というマーカがあるが、この「一点儿」の機能は何かを認知的な観点から検討する。

日本語には「形容詞の命令文」はないと言うが、実は言語形式から言うなら存在するのである。例えば、「静かに!」、「高く(挙げてください)!」などがある。しかし、「形容詞の命令文」に関しては、日本語のと中国語のとはメカニズムが違うので、その違いについて考察する。

5.5 第五章について

第五章はモダリティの立場から命令・依頼表現における陳述副詞について考える。

依頼表現は消極的な行為要求を意味する。相手に何かを頼み要請し、事の成る期待を含意するものだから、程度の差こそあれ、いろいろ話し手の心情と態度を表すモダリティ副詞と共起することができる。モダリティ副詞に関して、本論文は現代日本語と中国語の命令・依頼表現における陳述副詞——話し手が依頼する態度を表す副詞の分析を中心にしたものである。

日本語では、副詞的な機能を持つ語が豊富で、複雑で多様な様相を帯びているのに対して、中国語の副詞が数が少ないのが特徴である。本論文の目的は、日本語と中国語の命令・依頼表現における両国の副詞の示す多様性のすべてではなく、代表的な副詞に絞って直接の対象とし、その一部の違いを明らかにしたい。取り上げる副詞は数としては少ないが、分析の対象として十分価値のあるものと考えられる。これらの副詞を分析することによって、これまでの研究よりプロトタイプ理論を使い、統辞論的、かつ意味論的、語用論的な特徴の記述を行い、まとめていきたい。

ある意味領域(命令・依頼表現)における類義的な副詞を比較しながら、記述を蓄積してゆくことは、副詞の体系的な記述のためにも必要である。ここでは、命令・依頼表現に用いられる代表的な副詞「ぜひ」、「必ず」、「くれぐれも」、「どうか」、「何とか」の五つに絞り、直接の対象とし、これらの副詞は命令や依頼、勧めを表す「働きかけ」において、どう使われているかを分析

する。以上の五つの日本語の副詞と対応に、中国語の副詞を「一定」、「千万」の二つを取り出し、比較してみる。

5.6 第六章について

第六章は中国語の語気助詞「吧」と日本語の終助詞「ね」の違いについて考察する。「吧」についての今までの先行研究に関する問題点を指摘し、話し手自身の認識、話し手と聞き手の相互関係、疑問文との関連などのカテゴリーを設定し、「吧」に関する基本的意味と必須条件を先に出して置く。更に、Brown & Levinson のポライトネスとフェイスの取扱に関する理論から基本的な意味と必須条件について順序を追って、考察し、分析する。また、命令・依頼表現における「吧」の用法も考察する。

日本語において、話し手の領域と聞き手の領域を区別するのは一つの特徴だと言える。終助詞「ね」を考えるには、話し手と聞き手をキーワードにし、発話内容から分析する。また、話し手が聞き手に提供する情報量と「ね」を使用する義務性について考察する。最後に結論とするには、中国語の「吧」と日本語の「ね」の異同について考えてみる。

5.7 第七章について

最後に、本論文の考察したことを簡単にまとめ、命令・依頼表現における中国語と日本語の違いは何かというのを概観する。さらに、今後の課題などを明らかにする。

第二章

命令・依頼表現における機能の定義

§0 はじめに

命令・依頼表現に関する今までの研究は、形式と機能を分離し、独立した立場から命令なり、依頼なりを考えている傾向が多いが、結果的に命令と依頼の間の境界線が曖昧で、混同される時がよくある。しかし、現実の発話状況から見れば、聞き手は言語形式、発話される状況、話し手との関係などの要素によって、言われたことが命令か依頼か或いは勧めか直感的に判断できるが、ただ文字で書かれた表現だけでは区別しにくい。つまり、発話行為を丁寧なものにしたり、そうでなくしたりするのは言語形式のみではなく、言語形式とそれが発話される状況、そして話し手と聞き手の関係が加わったものなのである。われわれは相手の発話が命令、依頼、或いは勧めのどちらであるかを判断する時、殆ど言語形式だけに頼るというよりも語用論的な意味からそれらを使い分けている。

Thomas (1995: 訳書 25ページ) は語用論を「相互交渉 (interaction) における意味」と定義し、意味というのは言葉の中にのみ存在するものではないし、話し手のみ或いは聞き手のみによってもたらされるものでもないという見解を反映するものであると言っている。また、意味を明らかにするというのは、話し手と聞き手の間の、そして発話の (物理的、社会的、言語的) 文脈とその発話の選択可能な意味の間の、意味の取り決めにかかわるダイナミックな過程であると論じている。

言語表現がどのような機能を持つかについては様々な研究がなされているが、まだ分からない点が多い。例えば、日本語では依頼を表現する文型「～てください」は、「命令」という機能を持つ場合もありうる。

先生が学生に向かって、

- (1) 来週研究報告書を提出してください。

という発話は明らかに命令の機能をする。

命令と依頼の定義は、今まで統語論的な立場と語用論的な立場のそれぞれ二つの面から論じられてきた。文法形式と語用論的な二つの独立した立場からの定義にすれば、命令文と依頼文の境界線が曖昧である。命令・依頼の特徴を理解していくためには、文法形式と意味の側面を考察していくだけでなく、話し手と聞き手の対人関係、話題や伝達の目標などを考慮してなされる実際の発話の機能、具体的な発話の成立を可能とする各種の語用論的な条件、発話の動機、発話の伝達上の効果などの側面に関する体系的な考察を行っていく必要がある。命令・依頼・勧めの間の曖昧性につい

て追及するのが本論文の一つの狙いである。

命令・依頼表現の機能を論じる前にまずそれらと関連する先行研究を紹介し、問題を提起する。

§1 日中命令・依頼表現に関する先行研究

1.1 中国語の命令・依頼表現の先行研究についての紹介

1.1.1 马清华1998「汉语祈使句理论本质」『中国語研究』第40号,33-41

马は主に中国語と英語の命令・依頼表現に関する理論から比較し、中国語の「汉语祈使句理论本质」（中国語の命令・依頼文の理論的本質）について四つの面から論じている。

- | | |
|---------------|------------|
| ① 西洋の理論を模倣をする | ② 機能別の性質 |
| ③ 機能条件の決定要素 | ④ 論理学、規定傾向 |

次は本論と関連のあるいくつかの論点を紹介する。

① 西洋の理論を模倣をする

中国語の「祈使句」（命令・依頼文）という概念は主に西洋の影響を受けたのである。例えば、従来、命令文に関する英語の四つの形態理論（「主語説」、「述語説」、「アクセント説」、「句読点説」）¹⁾から、中国語の「祈使句」が英語とよく似ているというような説が挙げられる。

しかし、马は中国語では、「アクセント説」、「句読点説」、「主語説」は中国語の言語事実に反すると指摘する。また、中国語では、次のような命令文が存在することにより、述語説も中国語では通用しないと言う（p.34）。

- (2) 你爽快一点。（率直にしてください）（形容词谓语句祈使句）
- (3) 小林子你就放心交给我吧。（心配しないで、林さんを私のところに預けてください）
（=你把小林子交给我）（主谓谓语句祈使句）
- (4) 一人一个！（一人は一つ！）（名词谓语句祈使句）
- (5) 别被他看见！（彼に見つからないように）（被字祈使句）

四つの論点は英語の言語事実と中国語の言語事実とは全く合わないところもあるが、理論的にはよく似ていて、これはまさに中国語の命令文に関する理論は英語のをそのまま真似しているのを物

1) 马（1998：33-34）の解釈によると、主語説：相手に命令する時、主語を必要としない。述語説：命令文の述語は動詞、動詞の構造を持つものでなければならない。アクセント説：相手に命令をする時は、アクセントが下がる（falling tone）。句読点説：最初の文法家（Curme, G.O. 1931, Fries 1951, Sweet, H.）は、命令文の後は「！」であると言い、最近の文法家は命令文の後は「！」がなく、強い命令を表す時だけは使うと主張する。

語っていると馬は言う。馬の論点は全部正しいかどうかは検証するつもりはないが、例文(2)に関しては、異議を持つ。つまり、例文(2)は「形容词谓语祈使句」(形容詞述語命令文)ではなく、動詞を省略した動詞述語文だと考えている。詳しい議論は第四章を参照されたい。

② 機能別の性質

中国語自身の特徴の制約によって、西洋の言語理論を真似しても、うまく説明できず、もし理論カテゴリーをそのまま維持するなら、内容を変えなければならないと言う。英語と中国語の理論を比較することによって、英語の命令文は形態重視、中国語の命令文は機能重視することが分かった(p.34)という。

②-1 形態による比較

②-1-1 動詞形態

命令を表す語気は英語では動詞の形態範疇に属する。しかし、中国語では、このような独立した語気が存在しない。というのは中国語は動詞の語形変化によって、命令を表すのではなく、文の全体の意味と語気の変化で命令を表すか表さないかを決めるのであると馬は述べている。

②-1-2 主語

英語の命令文は普通主語を必要としない。しかし、中国語の「祈使句」は主語があっても、なくても、文の意味に対して、あまり影響しない。

②-1-3 語順

中国語の「祈使句」は肯定文にしても、否定文にしても、語順は陳述文、疑問文と同じで、否定を表す言葉は主語の後にある。

	命令文	陳述文	疑問文
肯定式	你去。 (行きなさい)	你去过。 (あなたが行ったことがある)	你可曾去过? (あなたが行ったことがあるのか)
否定式	'你'别'去。 (行かないで)	'你'没'去过。 (あなたが行ったことがない)	'你'真的'没'去过? (あなたが本当に行ったことがないのか)

②-2 命令文と命令機能の離合

英語では命令文(imperative)は語法形式で、命令(command)は文の機能である。語法形式とそれらの機能の間は一对一の関係ではなく、命令文は必ずしも命令を表すのではなく、非命令文も必ずしも命令を表さないことはない。例えば、

(6) I insist that you stay.

は陳述文であるが、命令を表し、叙述ではない。

(7) Tell me what you have done.

は命令文であるが、命令を表さず、疑問を表し、よって、英語の命令文は命令を表す機能と分離するのである。しかし、中国語はもともと語形からではなく、機能から「祈使句」について分析しているため、「祈使句」と命令機能は一致すると馬は指摘する。

②-3 命令語気の内包の変化

英語の命令語気は動詞の形態によるものであるが、中国語は命令文を使う目的と文の機能によるのである。英語と中国語はともに文を四種類（陳述文、疑問文、命令文、感嘆文）に分けているが、本質的には違っている。

③ 機能条件の決定的要素

命令機能とは命令文である必要条件である。文の表の意味（literal sense）と裏の意味（implicatures）はともに命令という機能を持つことができるが、命令文であるとは認めない。中国語では、表現の表の意味と話者の意図を総合したもの、或いは普通の間接的に命令を表すものは中国語の「祈使句」の命令機能として表すことができる。

③-1 表の意味と話者の意図（illocutionary）

③-1-1 すべての「祈使句」は、表では命令の意味を表すとは限らない

例えば、「你去上海」（あなたは上海へ行きます）という文は意味的に二つの解釈が可能である。一つは「我请你去上海」（上海へ行ってもらいます）は「祈使句」で、もう一つは「我猜你是去上海」（あなたが上海へ行くと思います）というのは陳述文である。だから、「ただ文の構造から、「祈使句」であるかどうかを判断するのは無理で、文脈で判断するのである」（刘1985）と馬は主張する。

③-1-2 表では命令の意味を持つ文は必ずしも命令文であるとは限らない

③-1-2-1 間接命令文（indirect request）

間接命令文は命令文ではなく、陳述文である。というのは、ここでの命令文は他人の意図であって、話し手の意図ではないためである。例えば、次の文。

(8) 三老爷叫我来查问查问。（三旦那は私に尋ねに来させた）

③-1-2-2 「複述命令」

「複述命令」とは、話し手が自分が相手に命令した内容をもう一度複述する文のことである。

(9) “吓！死讨厌！‘我叫你别去’，你不干好事，准弄脏了苏小姐的衣服。”（本当にいやだね。‘行かないで’と言ったのに。いいことをしないから、きっと蘇さんの服を汚したの

に違いない)

③-2 裏の意味

③-2-1 特殊な裏の意味

話し手が特殊な文脈や場面或いはアクセントの補助手段によって、命令の意を表す。但し、これを命令文だとは認めない。例えば、

(10) 这里有水。(ここには水があります)

の裏の意味は「飲んでください」ということである。

③-2-2 普通の裏の意味

聞き手が文脈に頼らず、「可能」、「反問」、「同意」を表す言葉の意味から、命令だということと理解することができるような文。それぞれの例文は次のようである。

(11) 你可以去了。(あなたはもう行ってもいいよ)

(12) 你为什么不去?(なぜ行かないの)

(13) a 我先给你介绍英雄小八路吧。(私はまずあなたに英雄である子供の八路軍の戦士を紹介する)

b 好哇, 你说吧。(いいよ、お願いします)

以上の文はそれぞれ命令、依頼を表すのである。また、馬のまとめによると、文の表の意味プラス話し手の意図、或いは普通の裏の意味こそは命令文の機能条件を決定する要素であるという (p. 37)。

ここでは、馬の論点について全部取り上げるつもりはないが、後半の部分をまとめると英語、日本語の命令文は動詞の形態から命令を表すマーカーがあるが、中国語の「祈使句」は「祈使句」らしい独立したマーカーが一つもないという。中国語の「祈使句」の形式と言ったら、いろんな要素のまとめである。例えば、文レベル(主語、述語、語気詞)、語彙(指示詞、動詞、副詞)、アクセント、語用(使役、受け身の関係を表すもの)などが挙げられるという。

以上のように中国語の「祈使句」は英語と日本語と違って、決まっている構文形式がないというのが馬の主張である。しかし、馬の中国語では「祈使句」らしい独立したマーカーが一つもないという言い方は、過言ではないだろうか。例えば、中国語では「给我+动词!」という構文は命令しか表せない。馬の研究は問題提起に止まって、中国語の命令文は一体どんなものであるか、解決はしていない。

袁は中国語の「祈使句」について「祈使句」の性質・範囲・文脈・分類と語用の制約などの面から論じた。

中国語では構文形式の違いと会話の中での機能によって、「語用平面」(pragmatic plane)において、文を「陳述文」、「疑問文」、「祈使句」、「感嘆文」に分けることができる。「祈使句」の構文形式から考えれば、「祈使句」の述語は主に動作・行為を表わす動詞であって、主語は大体第二人称の「你」(あなた)、「您」(あなたの尊敬的言い方)或いは、第一人称の複数形「咱们」(私たち)、「我们」(私たち)である。また「祈使句」の主語はよく省略される場合が多い。表現機能から考えれば、「祈使句」の主な働きは聞き手にある動作・行為をするよう或いはしないようということを要求(命令・希望・懇求)するということである(pp.7-8)。

1.1.2.1 「祈使句」のカテゴリー

袁氏は「祈使句」のカテゴリーを以下のように規定している。

「祈使句」のような構文形式を持っていないが、間接的に「祈使句」の意味を表している文であっても、「祈使句」だとは認めない。例えば、次の文。

- (14) 孩子：我们班的同学个个都有溜冰鞋了，就我一个没有。（言外之意：给我买一双溜冰鞋！）（私達のクラスの友達達は皆スケート靴を持っているけど、僕一人持っていない）
（本音は僕にも買ってください）
父亲：行啊，我下午就去给你买一双。（分かった。午後買いに行く）

(14) は「祈使句」の構文形式を持っていないが、しかし、間接的に「祈使句」の意味を表している。だが、それはまた文脈によって、「祈使句」以外の色々な解釈が可能であるため、「祈使句」だとは見ていない。

もし、「祈使句」のような構文形式を持っていなくても、間接的に「祈使句」しか表せない文は「祈使句」だと認めることにする。

- (15) 你少说几句行不行？（少し黙っていたらどうだ）
(16) 一共多少钱吧？（全部でいくらでしょうか）
(17) 你吃饭还是吃面吧？（ご飯を食べるか、それともうどんを食べるか）

以上の文は反問文の形式を持っているが、命令という意味しか読み取れないと袁は述べている。

しかし、中国語では反問文はすべて命令の意味を表すとは言い切れない。どのような反問文は命令の意味しか取れないのかについては袁は明らかにしていない。

逆に、ある文は「祈使句」の構文形式の特徴を持っているが、特別な文脈の場合「祈使」の意味を表せず、風刺・からかうなどの意味を表すことになる。これも一応「祈使句」だと袁は見ている。

- (18) 你醒醒！喝多了不是？哪来这么多废话？（目を醒ましてください。飲みすぎたでしょう。こんなにうるさくて）
- (19) 快摸一下自己的脑门子！看看是不是在发烧。凭你这两下子还想当经理。（熱があるかどうか、自分の頭に触ってみてください。あなたの腕で社長になれるもんか）

一つの文が命令文であるかどうかを袁が判断する基準は文法形式と文法機能によるのである。もし、文が命令の文法形式を持っていて、命令の文法機能も果たしているならば、それは「核心祈使句」（kernel imperative）である。もし、文法形式は命令文ではなく、文法機能は命令の意味しか取れない文であれば、それを「边缘祈使句」（周辺の命令）（marginal imperative）と呼ぶ（pp.8-9）。

1.1.2.2 「祈使句」の「使用语境」（context of situation）

「祈使句」の「使用语境」（context of situation）は、「祈使句」の構文形式とその容認度（acceptability）に影響を与えている。袁氏によれば「使用语境」というのは、少なくとも時間・場所・話題・話し手・聞き手などを含む。特に聞き手が存在するかどうか、聞き手が現場にいるかいないかというの、は、「祈使句」にとってとても大切であるという（p.9）。

1.1.2.3 「祈使句」の分類

「祈使句」の分類について、袁は以下のようにまとめている。

1.1.2.3.1 意味による分類

i. 命令文と禁止文

話し手が自分が聞き手に対して一定の支配する権利があり、直接命令することができると思う時、命令を使う。命令の語気はきついから、語気助詞「吧」を後置することができないが、催促を表す「啊」は使える。

- (20) 去！快去！（行け！早く行け！）
- (21) 看啊！快走啊！（見てよ！早く行けよ！）

禁止文とは、聞き手に何かするのをやめるように命令する文で、語気が強い。よく「不许」（～していけない）、「不准」（～してはいけない）などの言葉と一緒に使う。

- (22) 不许去！（行ってははいけません）
- (23) 不准去！（行ってははいけません）

ii. 劝め文と提議文

劝め文・提議文とは、話し手自身が聞き手に命令する資格がないとか、命令という形をとってはいけないとかと思っている場合によく使われる。よって、劝めの語気が丁寧で、よく語気助詞「吧」と一緒に使う。主語は第二人称の複数「你们」（あなたたち）と「我们」（私たち）である。

勧め文では、モダリティを表す助動詞「(应)该」(～すべき)、「可以」(～してもいい)などを使うことができる。

(24) 咱们走吧。(私たち行きましょう)

(25) 可以快一点了。(早くしてもいいです)

iii. 依頼文と「乞免文」

依頼文とは、話し手が聞き手に何かをお願いする時に使われる。よって、依頼文は謙虚な感じがある。語尾に「吧」を付けたり、文の中で「请」(～てください)、「劳驾」(すみません)、「借光」(すみません)などの敬意を表す言葉を付けたりする。主語はよく尊敬語の第二人称の「您」を使う。

(26) 借光，让我过去！(すみません、通らせてください)

依頼文のもう一つの丁寧な言い方は、文の後ろに「好吗」(いいですか)「行不行」(よろしいですか)などの疑問形式を付けることである。

依頼文の否定形は「乞免文」である。「乞免文」は聞き手に何かをしないようにと依頼する文である。「乞免文」は丁寧な言い方であるから、助動詞「别」をよく使うが、「甬」はあまり使わない(pp.14-16)。

1.1.2.3.2 構文形式による分類

構文形式から「祈使句」は、肯定式と否定式の二種類に分けられる。

i. 肯定「祈使句」

助動詞「(应)该」(～すべき)、「可以」(～してもいい)、「必须」(絶対)、「(一定)要」(必ず)、「(千万)要」(くれぐれも)と「给我～」(私に～)などの言葉を使っている「祈使句」は、話し手が聞き手にある行動を要求する同時に、主観的な態度までもを表しているというのである。

助動詞などを一切使わない「祈使句」は、普通単純に命令を伝える働きだけを持っている。

ii. 否定「祈使句」

否定「祈使句」は「别」、「甬」、「少」、「不要」、「不用」、「不许」、「不准」²⁾などの言葉をつけるのが特徴である(pp.16-17)。

1.1.2.4 「祈使句」の「語用制約要素」

2) 「别」、「甬」、「少」、「不要」、「不用」は語彙的にともに「～しないでください」を表し、「不许」、「不准」は「～してはいけない」という意味を表す。

言葉と言葉を組み合わせ、節（連語）にする時、二つの制約を受ける。一つは文の制約（syntactic constraint）、もう一つは語意の制約（semantic constraint）である。節が「祈使句」として使われる時、「祈使句」の特有の制約——語用の制約（pragmatic constraint）を受けるのである。「祈使句」の語用的制約というものは次のようなものがある。

1.1.2.4.1 「祈使句」の選択の随意的（arbitrary）約束

文法的に適格な言葉や、意味的にも「祈使句」の用法に適切な言葉はすべて「祈使句」になれるとは限らない。ある言葉は「祈使句」になれるのに対して、ある言葉はできないというのは、ただ文法的な立場から説明できないものがある。このような言い方は習慣的で、言葉の随意性と言わざるをえない。袁は次のような文を挙げる。

A	B	C
吃！（食べて！）	*舔！（舐めて！）	舔一下！（ちょっと舐めて！）
喝！（飲んで！）	*咽！（飲み込む！）	咽下去！（飲み込んでいく！）
干！（乾杯！）	*举！（挙げて！）	举起来！（持ち上げて！）
干杯！（乾杯！）	*举杯！（杯を挙げて！）	举起杯子！（杯を持ち上げて！）
坐！（座って！）	*站！（立って！）	站这儿！（ここに立って！）
看！（見て！）	*瞅！（見て！）	瞅瞅！（ちょっと見て！）
瞧！（見て！）	*望！（眺めて！）	望这边！（こちらを眺めて！）
听！（聞いて！）	*想！（考えて！）	慢慢儿想！（ゆっくり考えて！）
留神！（気をつけて！）	*留心！（気をつけて！）	留心这个人！（この人に気をつけて）

上のAとBの動詞は機能と語彙内容においては、基本的に同じである。しかし、Aの動詞は単独で命令文になれるが、Bの動詞はCのように動詞の後に、ほかの要素をつけないと命令文になれないという。また、袁によると、北京方言では、「V下去」（Vつづける）は命令文になれるが、「V起来」（Vはじめる）は命令文になれないという指摘がある。

说下去！（続けて言って！）	*说起来！（言い始めて！）
讨论下去！（続けて議論して！）	*讨论起来！（議論始めて！）

しかし、言葉がこういう言い方はできず、ほかの言い方はできるというのは、必ず何かの理由によるものだと考えられる。言葉の随意性が存在することは否定しないが、例えば、認知の観点から以上の疑問に対して、一定の解釈が可能である（第三章の§1を参照）。

1.1.2.4.2 「祈使句」の「語用常規」（pragmatic convention）の約束

マイナ斯的な意味を表す言葉は、肯定式の「祈使句」に入れないこととプラス的な意味を表す言葉は、否定式の「祈使句」に入れないという制約である。

(27) 热心一点。(親切にしてください)

(28) * 别热心(親切にしないでください)

1.1.2.4.3 「祈使句」の「語用予測」(pragmatic presupposition)

話し手が聞き手に何かを要求する前に、聞き手がその要求を実行してくれる可能性があるかどうか事前に予測するのである。一般的に、話し手は聞き手が要求されたことを実行するのが当たり前だと思う時、特別な表現を使わないのが普通である。もし、その当り前のことを特に強調する場合なら、助動詞「(应)该」、「可以」などの言葉を使う。例えば、次の文。

(29) 你该走了!(行くべきだ!)

(30) 你可以回去了!(帰ってもいいよ)

もし、聞き手が実行してくれるだろうという予測であれば、話し手は肯定式の命令文を使う。聞き手が実行してくる可能性がない、或いはしてくれる気がなければ、話し手は強調式の命令文「一定要/千万要/给我……」(ぜひ(必ず)～してください/くれぐれも～してください……)を使うと袁は述べている。

(31) 千万要小心哪!(くれぐれも気をつけて!)

(32) 一定要把饭吃完。(必ずご飯を全部食べて!)

(33) 给我滚得远一点!(遠くまで出ていけ)

袁は命令・依頼表現に関する研究では、語彙意味論に重点を置き、類型的な分析を行ったが、一つ一つの現象がなぜ言えるか言えないかについては追及していない。しかし、袁の「語用予測」という観点は命令・依頼表現における副詞の機能の分析に有効である。

1.2 日本語の命令・依頼表現の先行研究についての紹介

1.2.1 仁田義雄1990『日本語のモダリティと人称』ひつじ書房

まず、仁田(1990: 17-21)は日本語の文を意味・統語的な構造から、大きく質的に異なった二つの層に分けている。つまり「言表事態」と「言表態度」である。その中の言表態度を形成するのがモダリティと丁寧さであることを指摘した。またモダリティは、大きく「言表事態めあてのモダリティ」と「発話・伝達のモダリティ」との二種類に分けている。「発話・伝達のモダリティ」(pp.21-23)は本論文と関連があるので、もう少し詳しく紹介する。

「発話・伝達のモダリティ」とは、文をめぐる発話時における話し手の発話・伝達の態度の在り方、つまり、言語活動の基本的単位である文が、どのような類型的な発話伝達の役割・機能を

担っているのかの表し分けに関わる文法表現である。更に四種を仮定する。

- | | |
|---------|---------|
| a「働きかけ」 | b「表出」 |
| c「述べ立て」 | d「問い掛け」 |

ここで主に論文と関連のある「働きかけ」について触れてみる。

a 働きかけ (pp.23-24)

「働きかけ」とは、話し手が相手たる聞き手に話し手自らの要求の実現を働きかけ訴えかけるといった発話・伝達的態度を表わしたものである。

話し手を除外し、聞き手のみに行為の遂行を要求する「対他命令」と話し手の行為遂行を前提として、聞き手に行為の遂行を要求する「自己包括命令」と仮称するものと分けられる。対他命令とは、いわゆる「命令」「依頼」「禁止」などと呼ばれるものであり、自己包括命令とは、いわゆる「誘いかけ」といわれるものである。

命令、依頼の定義について、仁田 (1990: 230) は次のように述べている。

- (34) 命令：話し手が働きかけの文を発すれば相手に動きを起こさせうる、つまり、働きかけの文が相手の動きそのものの生起を支配するものである。
- (35) 依頼：動きを起こす相手の意志や話し手のためにしてやろうという相手の好意を前提にして、それに働きかけ、相手に動きを起こさせるものである。

仁田 (1990: 232) は「命令」、「依頼」の諸形式を、ほぼ待遇性の順に列挙している。

命令形：ヤレ、ヤリナサイ、ヤリタマエ、オヤリナサイ、オヤリナサイ (マセ/マシ)

依頼形：ヤツテクレ、ヤツテオクレ、ヤツテクレタマエ、ヤツテクダサイ、ヤツテチョウダイ、オヤリクダサイ、オヤリクダサイ (マセ/マシ)

また、「働きかけの文」が成り立つための運用論的条件について、(1)話し手が働きかけの文を発する際の話し手側の条件、(2)話し手が働きかけの文を発する際の聞き手側の条件、(3)実現される事態の側の条件とに分けて、命令文を成立させる条件を次のようにまとめている (pp.238-239)。

- [I,a] 話し手は相手たる聞き手に対して働きかけを行いうる立場・状況にある。
- [I,b,1] 話し手は、相手たる聞き手がある動きを実現することを、望んでいる。
- [I,b,2] 話し手にとって、相手が実現する事態は、都合のよい・望ましい・好ましいものである。
- [II,a] 話し手の働きかけを遂行する相手が聞き手として存在する。
- [II,b] 聞き手は、自分の意思でもって、その動きの実現化を計り、その動きを遂行・達成するこ

とができる。

[Ⅲ] 命令されている事態は、まだ実現されていない事態である。

命令形の諸相については、仁田（1990：390-490）は人称制限と述語の意味素性、つまり、動作主体が事柄のどの部分をコントロールできるか、当該の事柄が聞き手にとって望ましいことか否かの二点を軸にして、命令文を大きく「達成命令」「過程命令」「願望」「呪い」の四つのタイプに分類している。

(36) a おい、車をとめろ。（達成命令）

b まあ、落ち着けよ。（過程命令）

c 明日天気になーれ。（願望）

d 死んでしまえ。（呪い）

同時に仁田は典型的かつ適切な命令文であるための語用論的な条件を、(a)話し手に関する条件、(b)聞き手に関する条件、(c)実現される事態に関する条件という三つのレベルに分け、それを軸に命令文の意味の派生を詳細に記述している。

以上の仁田の研究は語形中心的な研究だと言える。しかし、実際言語使用の面から言うと、命令か依頼かを判断するには言語だけを取り上げるのではなく、使用者との関係で考えないといけない。その結果、同じ言語形式であっても、含まれる談話の展開の仕方によって談話全体では異なった機能で受け取られたりするのである。例えば、次の例では人間関係、発話場面などの違いにより依頼の形式が命令の意味を感じられたり、命令の形式がさほど失礼だと感じられなかったりするのである。

(37) 悪いけど、コーヒーを買ってくれる？

(38) 先生、頑張れ！

(37) は先生と学生の会話であるが、文法形式は依頼文であっても、この発話は学生にとって、命令だと聞こえる。逆に、(38) は例えばある競技の場面なら、学生が先生に対する発話は命令形を使っている、失礼にはならない。

命令・依頼表現を考える時、言語形式と言語使用の場などに関する要素を同時に考えないと、説明できない文がある。本論文は命令・依頼表現を理解するには、言語形式と語用論を有効に結合し、両方とも念頭に置いて考えるように努める。

1.2.2 柏崎雅世 1993『日本語における行為指示型表現の機能』くろしお出版

著者は行為指示型の表現として、類型化できるもののうち、「～てください」、「お～くださ

い」、「～てくれ」、「～て」にしぼって、これらの表現形式がもつ機能の性格と、その使用条件について分析を試みる。

行為指示型表現の機能を観察した結果、基本的な機能を三つ（命令・指示、依頼、勧め）、派生的な機能を二つ（懇願、激励）抽出し、その連続性を指摘している。

1.2.2.1 依頼機能

話し手または他者に対する利益・恩恵賦与要求であり、聞き手には負担がかかってくる。聞き手の側がその行動をとるかどうかの選択性・随意性は多かれ少なかれある。

(39) 「ちょっと遠くて恐縮なんですが、何とかご出席頂けないでしょうか」（話し手に対する恩恵賦与）

(40) 岸本（服部の先生）「ほんとの被害者は服部君かもしれませんよ。どうか皆さん、私に免じて許してやってくれませんか」（他者に対する恩恵賦与）

1.2.2.2 勧め機能

聞き手に対して利益・恩恵賦与がある行動の勧めであり、話し手に負担がかかる場合もあるし、かからない場合もある。聞き手の側がその行動をとるかどうかの選択性・随意性はある。

(41) 良明「親父、蛍光灯を替えたほうがいいよ」

「良明、明日初詣にでも行くか」（父は良明の発話には答えていない）（話し手に負担がかかる可能性あり）

1.2.2.3 命令・指示機能

話し手に利益・恩恵賦与する行動の要求（聞き手に負担がかかる）、および聞き手に利益・恩恵賦与する行動の要求（話し手には負担はかかる場合もあり、かからない場合もある）で、共に聞き手の選択性・随意性がかなり小さいかほとんどない。すなわち、話し手によって指示された行動を聞き手はとらなければならないのである。話し手が上位者で、聞き手が下位者の場合、一般にこの選択性は小さくなる。

(42) 藤村（情報を持ってきたゴロ新聞記者へ）「今度は票を持ってこいよ」

「へっへっへー」（話し手への恩恵賦与）

(43) （美子）「さっきのお金をお遣いなさい」

（三四郎）「借りましょう。要るだけ」

（美子）「みんなお遣いなさい」（聞き手への恩恵賦与、話し手は負担あり）

著者は小説から用例を採集し、文法形式だけでなく、その表現が使用される場面とか、話し手と

聞き手の利益関係、話し手と聞き手の上下関係などを含む語用論的な条件を考慮し、それぞれの言語表現がどのような機能を持つかを分析するのである。このように、表現形式が文脈や背景によってどのように機能し、聞き手に対して話し手のどのような伝達態度を示すかという研究方法は、少なくとも日本語教育に大きな貢献をもたらしたと言える。

1.2.3 佐藤里美 1992「依頼文——してくれ、してください——」『ことばの科学5』むぎ書房

まず、この論文では、依頼表現について次のように説明している。「述語が《してくれ》や《してください》《してちょうだい》《しておくれ》などのかたちでできている文は、／相手に動作の実行をたのむ・おねがいする／というモーダルな意味を表現している。このようなモーダルな意味につつまれた文を依頼文とよんでおく」。また、「動作のにない手が二人称であることは、この種の文にとって本質的な特徴であって、人称が変われば、《してくれ》の文は依頼表現であることをやめ、話し手の《のぞみ・期待》を表現する《まちのぞみ文》に移行する」と指摘し、動作のにない手が自然現象などの場合、文は話し手の《いのり》のニュアンスを伴うことについても分析している。

1.3 Searle (1969) による発話行為の成立条件

Grice は、発話行為の「働き」を説明するために一連の行動指針と原則を提案したが、Searle は規則を確立しようとAustin 理論を体系化し、形式化しようと試みたのである。Searle は八つの発話行為（依頼 (requesting)、断定 (asserting)、質問 (questioning)、感謝 (thanking)、助言 (advising)、警告 (warning)、挨拶 (greeting)、祝福 (congratulating)）について、規則群の例を提案している（1969: 66 - 67）が、さまざまな発話行為をいつでも十分に区別できるわけではない。というのは一つの発話行為動詞が一定範囲のやや異なる複数の現象をカバーすることができるし、複数の発話行為の内容が「重複する」こともある。

また、Searle の提案する条件（補足的事前条件を含めても）の多くはさまざまな発話行為を区別することができない。例えば、Searle は「命じること」或いは「命令すること」を「依頼すること」から区別する補足的な事前条件を導入した。

「命じる」と「命令する」は、S が H³⁾ に対して権力的に上位にあるという補足的な事前条件を持つ。…さらに、この上下関係は、両者の本質条件にも影響を与えている。なぜなら、その発話は、S の H に対する権限を使って H に A をさせる試みと見なされるからである (Thomas 1995: 訳書 103 ページ)。

つまり、多くの発話の発語内の効力を解釈するには話し手と聞き手の間の力関係がどうなっているかの理解が必要であるが、Searle が補足的な事前条件を追加しても規則が扱えるのはすべての場合で

3) 「S」は話し手のこと、「H」は聞き手のことを指す。

はない。Searle は発話行為を規則によって記述することが可能だと信じている。しかし、いろいろな反例がある。Thomas は「構成的規則」(constitutive rules)によって、発話行為を記述しようとする Searle の企てが失敗に終わったことを明らかにしようと試みた。Thomas (1995) は対話者たちの力関係が競合している時、命令行為が成功する保証はないという反例を次のように出している。

- (44) [ロンドン警視庁のダルグリーシュ警視長は、ある尼僧に質問するために女子修道院に来ている。彼女の姉が疑わしい状況で亡くなったからである。最初の話者は修道院長]
わずかにうなずいて彼女は次のように言った。「シスター・アグネスを呼びましょう。
いい天気ですし、薔薇園をいっしょに散歩なさってはいかがでしょう」
ダルグリーシュは、それが提案ではなく命令であることに気付いた… (訳書104ページ)

Thomas (1995) によれば、誰が上位の権限を持つのかは決め難い。ダルグリーシュは修道院長が命令のつもりで話しているのに気付くが、彼女が彼に命令する権限を持っているとは認めていない。にもかかわらずこの場面では彼は自分の権限を主張しないことを選択し、彼女の意向に従うのである。Searle の条件では、(補足的事前条件を含めても) こうしたケースを適切に説明することはできない (Thomas 1995: 訳書104 - 105ページ)。

Searle の規則は循環論的であり、発話行為の区別において不備があり、発話行為の典型例のみをカバーしているに過ぎないということになる (Thomas 1995: 訳書106ページ)。Searle は発話行為の規則を記述していると主張していながら、実際にやっていることは発話行為動詞の意味の記述に過ぎないということである。また、これらの発話行為が重要な点で相互に違っていることは大部分の英語の母国語話者には直感的に分かるが、文字で書かれた表現で区別することは難しい。命令と依頼の語用論的と機能的な区別については、§3で改めて考察する。

§2 命令と依頼・勧めを決定する言語事象の構成要素と相互の関連性について

2.1 言語事象の構成要素についての分析

人と人との間で、お互いに気持ちよくやりとりができるためには、一定の規則性が維持されているという了解のもとに行われている。つまり、おおむね一定の法則性に従って行動しているということである。

話し手が聞き手に命令・依頼をする時、発話した文が命令であるか依頼であるかは具体的な状況があれば、大体判断がつく。それは人間が相手に命令・依頼する時、表現使用の裏にある法則性の基本軸が存在しているからだと考えられる。相手に命令・依頼或いは勧める時、いろいろな表現があるが、どれを選ぶか、どういう方法で選ぶか、そして、それを選ぶ理由は何かということについては、個人差・文化による差は大きい。しかし、言語を問わず語用論的な言語選択を支配している

と見られるような配慮を取り込んでいるという意味で、命令・依頼表現は言語を越えた共通性を持つと言える。また、その基本軸を現実はどう反映させるかという点ではいろいろな要素によって違いがある。主な要素は次の通りである。

- (a) 話し手
- (b) 聞き手
- (c) 指示内容
- (d) 発話の場

話し手が自分の目的を達成するために、聞き手に動作・行為を要求するのである。基本的に要求が叶えられるだろうという予測の前提で、表現を選択し、聞き手に要求する。成功する可能性が十分ある場合、表現の選択にこだわらず、ストレートに要求するのが普通である。話し手の力関係が下で、成功する可能性が低い場合、いろいろなストラテジーを考慮しなければならない。つまり、依頼する時、頼みごとの内容・相手との関係・場面（改まった場かどうか）といった個別の状況ごとの諸要因をも考慮しながら話し手は依頼をする。

以下でそれぞれについて詳説する。

2.1.1 話し手

ここで話し手というのには二つの概念が含まれている。一つは命令・依頼・勧めをする発話者のことで、もう一つは話し手の権威・権力・プライベートの領域を指す。ここでの発話者は集団と個人とに二分類できる。集団と言っても、個人によって発話するのである。

2.1.2 聞き手

命令されたこと、頼まれたこと、勧められたことを受ける人。聞き手の場合も権威・権力・プライベートの領域が含まれている。

2.1.3 指示内容

話し手が聞き手に命令・依頼・勧めをする中身のことを指す。具体的にどんな表現を使うかは別として、相手に指示している用件のことだけを指す。指示内容の中に相手にかける負担⁴⁾の大きさも入っている。

話し手は聞き手に依頼をする時、聞き手が依頼されることに応じるというのは、聞き手もある利益或いは満足感を得るからである。話し手が聞き手とやり取りをする時、自分の状況を聞き手の状況と比較し、現時点での状況、利益のままとを常に維持するため、聞き手にかける負担の大きさによ

4) 負担の大きさというのは、頼みごとが相手にとってどのぐらいたいへんなものなのかということを意味する（Thomas 1995: 訳書141ページ）。

て、表現でその均衡を保つのである⁵⁾。かける負担が大きければ、丁寧な表現が要求され、聞き手に与える満足感が次第に大きくなるのである。

利益と負担を考える時、二つの面から考えるべきである。

2.1.3.1 利益

話し手が聞き手に依頼をする時点で、話し手と聞き手が全く初対面でない限り、二人の間で利益関係がすでに絡んでいる。二人の間の利益関係の均衡性を保つために、いろいろなストラテジーが必要である。利益に関して、更に次のように分類することができる。

2.1.3.1.1 表利益 — 実際利益

実際目に見え、話し手或いは聞き手にとって、すぐに役に立つもの。こういうような利益は物質的で、ある行為を通して、実際、体で感じられるものである。表利益を得ると同時に精神的な負担を背負うのである。

2.1.3.1.2 裏利益 — 精神的満足感

表に出ていない利益だが、話し手或いは聞き手にとって、精神的な満足感が心で感じられるものである。この時は表利益を失うのが普通である。

2.1.3.2 負担

2.1.3.2.1 表の負担 — 実際負担

話し手が聞き手にある動作・行為を実行させる時、聞き手にとって実際負担になる。話し手は聞き手に負担をかけ、表利益を得ると同時に精神的な負担を背負うのである。実際負担は二面性がある。一つは話し手が相手にかける依頼内容の負担である。この負担の大きさは絶対的で、表現の丁寧さ、聞き手の受け入れ能力などとは無関係である。もう一つは聞き手が実際に感じる負担のことで、これを相対的負担と呼ぶ(北尾 1988: 53)。相対的負担は聞き手の受け入れ能力、話し手と聞き手の間の付き合い関係、表現の丁寧さに関係する。聞き手が受け入れ能力が十分ある時、聞き手にとって、負担が小さい。逆であれば、負担が大きくなる。また、話し手と聞き手の間が親しければ、或いは話し手の依頼が聞き手にも間接的な利益をもたらすことができれば、依頼内容の負担が聞き手にとって小さく感じられる。逆に、話し手と聞き手が親しくなければ、或いは話し手の依頼が聞き手に何の利益ももたらすことができなければ、依頼内容の負担が聞き手にとって、大きく感じられるのである。実際負担は利益関係と反比例である。普通言語表現の丁寧さによって相手の負担を軽減するというのは実際負担を軽減することを意味しない。というのは、表現が丁寧かどうかにも関わらず、相手にかける実際負担は変わらないのである。表現の丁寧さによって負担を軽減するのは相手に精神的満足感を与えることを意味し、相手の相対的負担を軽減するのである。

2.1.3.2.2 裏の負担 — 精神的負担

話し手が聞き手から利益を得ると同時に、不安、或いは恩返し、感謝しなければならないというような精神的な負担を背負うのである。

5) 言語表現以外に、後の補償行為も含まれている。4.2.2.3を参照。

2.1.4 発話の場（状況）

すべての言語事象は時と場所に応じて必然的に出現する。特定の時に、或いは特定の場所で出現するというのが、時には事象の弁別基準の一つとなる。本論文における発話の場（状況）というのは具体的に話し手と聞き手がやりとり時の会話の環境の条件「場（状況）」、話し手と聞き手の間の力関係（支配力）、社会的力距離などを指すのである。ここでの発話の場は社会言語学の観点を入れ、独立的要素ではなく、話し相手・場所・話題なども考慮したものである。

2.1.4.1 発話の環境

例えば、醤油ラーメンがほしい時、話し手は自分の一つの目的を達成するため、一つのメッセージを選ぶ。言い替えれば、話し手は「私は醤油ラーメンがほしい」という命題をまとめあげる。話し手は同じような発話行為を他のいくつもの違ったやり方で、まとめあげることができるが、その内のどれを選ぶかは、その場面がどの程度の表現を必要とするかによって決まる。例えば、レストランでの注文という場と、自宅で奥さんに頼むという場とは異なるし、表現も勿論違う。

ある発話の場において、話し手と聞き手の間に、相互的に力関係・支配力・社会的距離という要素が生まれる。

2.1.4.2 支配力

支配力とは話し手が聞き手に対して当該行動を行うように要求する権限の強さである。Spencer-Oatey (1992) は支配力の種類とその構成要素について論じている。彼女の説を以下に簡単にまとめる。

高圧的支配力 (Coercive Power) 報酬支配力 (Reward Power) 正当支配力 (Legitimate Power)
偶像支配力 (Referent Power) 専門支配力 (Expert Power)

支配力は、依頼内容、社会的習慣、文化の違いなどの要因で、以上のSpencer-Oateyの列举した他に、まだいろいろ挙げられる。それらの殆どは話し手と聞き手の間の指示内容と発話の場と関連していて、どれが決定的な要因になるかということである。つまり、話し手と聞き手の間の相互関係の在り方は、やりとりを遂行していく様々の領域で、状況の変化に合わせて、関係は刻々変化するし、決定要因も変わるのである。例えば、先生と学生の関係はもともと権限を中心とした関係であるが、パソコンの知識が自分より詳しい学生に先生がある問題の解決を教えてもらおうとする時、実質的に専門支配力が中心になって、力関係は学生が上で、先生がフォロアーになっているのである。

本論文では以上の分類を考慮した上で、ここでいう支配力とはもっと一般的で、漠然としたもので、その場その場での一時的なものを指す。つまり、その場での話し手と聞き手の力関係、権利のようなものを指す。

2.1.4.3 社会的距離

話し手と聞き手の間に存在している地位・年齢・性・親密度などの要素を指す。

支配力と社会的距離は区別しにくく、同時に現われることがきわめて多い。これも発話の状況と内容により両者を合体させる場合と、別個の次元のものとして分ける場合と両方あることを主張する。

以上は命令・依頼表現における各要素を取り上げてみた。

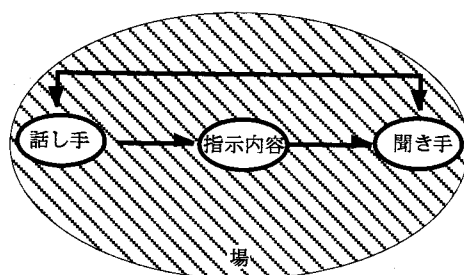
2.2 各要素の間の関連性

話し手が聞き手に命令・依頼或いは勧めをする時、どんな表現を使うかは、以上の要素によって決められている。どんな表現を使うかという時、どれだけの要素によって決められるかというのではなく、各要素間の相互的な関連によるものである。普通は命令・依頼表現の間の関連性について考える時、行為を要求するのはだれか、それによって、利益を受けるのはだれか、相手に対して強制力があるのか、行為を要求される側は選択する余地があるのかなどの軸によって分類される。以下は各要素の間の関連について分析する。

2.2.1 普通の発話場面における命令・依頼表現の各要素の関連

普通の発話場面における命令・依頼・勧め文のモデルは、各要素の間は互いに関連しあうが、日本語の場合は発話の場によって決められるケースが多いようである。

図<2-1>



つまり、具体的な表現に関して、話し手と聞き手・指示内容は発話の場に依存するのである。例えば、普段親しい友人であっても、学会とかゼミなどの公の場面になると、言葉遣いや依頼に関する発話行為は丁寧化される現象が日本語には見られる。発話の場によって、表現の丁寧さが大きく関わっていることが日本語の特徴とも言えよう。各要素によって出来上がった表現には丁寧さの問題が絡んでいる。

例えば、指示内容が同じである場合、話し手が発話した指示内容に対して、話し手の権威、権力が大きければ、大きいほど、表現の丁寧度が低い。逆に指示内容によって、話し手の力関係が弱ければ、話し手の使う依頼表現の丁寧度が高く要求される。また、依頼する内容が相手にかかる負担が強いものである場合ほど、表現が丁寧となり、話し手が聞き手の大きな服従のディスプレイが示される。指示する内容が話し手にとって正当な権限を行使する場合なら、表現が丁寧でなくてもいい。話し手は認められた役割の外に踏み出したら、つまり指示内容が話し手の権限から離れていたら、表現が丁寧になる。

例えば、指導教官の先生が学生に対して、

(45) a 明日研究計画を出してください。

b? 悪いけど、明日研究計画を出してくれますか?

という表現と、また

(46) 悪いけど、コーヒーを買ってきてくれますか?

という表現が指示する内容と発話の場により、表現がそれぞれ少し違いがある。文法形式から判断すると、(45)の文は命令文で、(46)の文は依頼文である。しかし、聞き手にとって両方とも命令文のように聞こえるに違いない。つまり、この場合は(46)の文は話し手(先生)の権限を越えたとしてもこのような頼みは、聞き手にかけた負担がそれほど大きくないから、依頼する態度を取る必要はないのである。また、(45)と(46)の例は「義務」とも関連する。つまり、学生に研究計画を出してもらうのは先生にはその権利があり、逆に学生にも研究計画を提出する義務があるから、命令文であるはずである。コーヒーを買ってもらうのは先生にはその権限があまりないし、学生にもそれを引き受ける義務が当然存在していないが、でもそれは大した負担ではないから、先生の権限内だと認められる。しかし、(45)より正当性が弱いから、表現が少し丁寧になる。

逆のことも言える。話し手の権限内の発話なら、表現が丁寧であっても、発話効力は命令である。例えば、(44) (p.40)の文はダルグリーシュ警視長が権限を持っていたとしても、二人の間の発話の内容から見れば、女子修道院のある尼僧に関する話だから、ダルグリーシュ警視長は自分が修道院長より権威が大きいと感じていても、修道院は彼の縄張りではないため、彼の力関係は弱い立場にある。だから、修道院長の話が彼にとって命令するように聞こえたのである。

指示内容が話し手の権限から遠く離れれば、もともと命令する立場にある話し手が聞き手に依頼する態度を取る例もある。

例えば、賄賂を受け取ったことを部下にばれたら、同じ職場であっても、依頼事の内容は話し手の権限を越えたため、部下が有利な立場に変わる。「力」関係も逆転化し、上司の発話が普通の命令から依頼に変わるのである。

(47) 誰にも言わないで、お願い。

指示内容が話し手と聞き手の対等な距離にあり、話し手と聞き手の間の力関係は対等である時、表現はどうなるだろう。その時、指示内容、具体的に言うと相手にかける負担の大きさによって決まる。或いは、もし、話し手と聞き手の力関係(絶対的力関係と名付ける)が決まっていれば、話し手が聞き手にかける負担が大きければ大きいほど、表現の丁寧さも増す。以上の結論は井出(1986: 57)の観察「依頼内容が重いものほど丁寧度であることがわかった。借りるものの価値の軽重

が丁寧さの要因となっていると言える」と同じである。

話し手が聞き手にお願いする内容が聞き手の権力範囲に近ければ近いほど、威圧感が感じられ、表現が丁寧でなければならない。ここでは目下の人が目上の人をお願いをするということに想定できる。

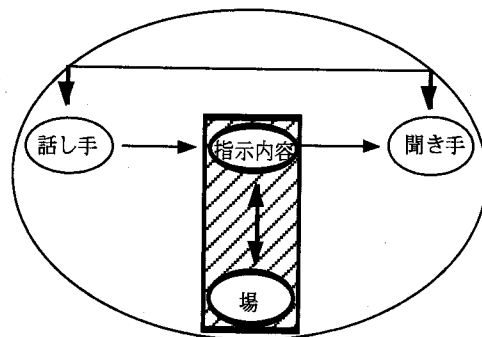
もし、話し手が聞き手の権限を無視し、勝手に聞き手の権限内に入り、相手と同じ立場に立ち、聞き手の権力を振る舞っていたら、相手の権威を無視することになり、「聞き手の私的領域」⁶⁾を侵害することになるのである。相手に勧めをする時、相手の権威を認めた上でしなければならない。この点に関しては、中国語と日本語は違う様な捉え方をするが、また後述する(3.5を参照)。

日本語は発話の場を重視することに対して、中国語は聞き手にかかる相対的負担、話し手と聞き手の利益関係によって表現を決めるようである。例えば、発話場面が違うと言葉遣いや表現に関する丁寧さが違うということは中国語には目立たないようである。また、ある依頼内容に対して、話し手と聞き手の間の利益関係が大きく働いて、話し手と聞き手の間の力関係、上下関係は無視することができる。

2.2.2 緊急事態・職務遂行における命令・依頼表現の各要素の関連

緊急事態、軍隊での職務遂行を要求される状況では、話し手はそのメッセージの意味内容に集中し、それを発話する際の相手の人間関係という側面にはあまり注意を払わないことが多い。話し手と聞き手の影響力が弱く、指示内容と場の相互関係が目立つようになる。こういう時は要領よく主旨を相手に伝えるために、言語形態が短く、丁寧でない表現を使うのが普通である。

図<2-2>



§3 命令・依頼・勧め文の定義及び機能的分析

本論文は命令・依頼表現を広く「行動要求表現」として捉え、「話し手が聞き手に何らかの行動を取ることを要求する」と暫定する。また、言語表現が運用される時の発話場面、話し手・聞き手の間の利益関係(どちらのためになる行為を表す発話か)、話し手と聞き手の間の力関係などの条

6) この用語は田窪行則(1997: 58)のを引用する。

件によって言語表現がどのような機能を持つようになるかを明確したい。「行動要求表現」を便宜上大きく「命令文」、「依頼文」、「勧め文」に分類することにする。

まず、命令・依頼表現の成立条件について考えてみる。

3.1 命令・依頼表現の成立条件

- (a) 話し手は聞き手が依頼する行為を実行する能力を持つと信じる。
- (b) 依頼される行為は聞き手にとって自制可能なものである。
- (c) 命令・依頼或いは勧める動作・行為を引き受ける相手が存在する。
- (d) 相手に指示する内容が明瞭である⁷⁾。

以上の条件が命令・依頼表現の成立条件として挙げている。上の条件の違反によって、命令・依頼行為が成立しなくなる様子を以下の例で観察してみよう。

(48) (貧乏な人に)

*一億円貸してくれないか。

(49) *你长长个子。(身長を高く伸ばしてください)

(50) 雨が降れ!

(51) *你等。(あなたは待つ)

貧乏な人に(48)のような依頼をすることは有りえないことである。というのは、聞き手が話し手の依頼を実行する能力があるからこそ、話し手が依頼行為をするのである。(49)、(51)はそれぞれ(b)と(d)の条件に違反するから、中国語では非文である。(50)は行為を実行する相手がいないため、命令文とは言えない⁸⁾。

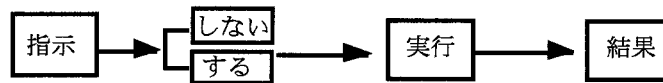
3.2 話し手が聞き手に「行動要求」を表すモデル

話し手が聞き手に「行動要求」をすることをここでは「指示」という言い方をする。指示には話し手の聞き手に対する命令・依頼・勧めが含まれている。

7) Leech (1983: 訳書143ページ) は Grice (1975) の「様態の原則」(明晰であること) については、明瞭さには二種類あると指摘する。一つは、言語の統語や音韻論を曖昧さのない形で使用することによって、明瞭なテキストを構成するというものである。もう一つの型の明瞭さとは、明瞭なメッセージの形成に関するものである。つまり、意図する発語内行為的ゴールを受信者に対して伝えようという意味で明晰ないしは、理解可能であるようなメッセージを形成することである。ここでいう明瞭さというのは、統語的、文法的な要因、中国語の言語形式からいうことである。つまり、その形式上の特徴を示す標識(markers)の数や、明示性(量的範疇から表す)が必要とされる。それは中国語の動詞の特徴によるものであり、中国語の裸の動詞は動作のみを表すから、後に補語のようなものをつけないと、相手に指示する意味内容が不明になり、文法的にも成立しない場合があるということである。

8) 仁田(1991: 240) はこのような文を願望文と名付け、命令文の中に含まれているが、本論文はこのような願望文を命令・依頼表現から除く。

図<3-1>



図<3-1>では、話し手から「指示」が出されたら、まず聞き手のほうでは選択する余地があると考えられる。もし、「する」という返事であれば、聞き手が動作の実行に移る。動作を実行すれば、一定の「結果」が得られると考えられる。

次は、このモデルで具体的に命令文、依頼文、勧め文における使用状況について考察する。

3.3 命令文

話し手が絶対的な権威を持ち、聞き手にある行為を実行するよう強く要求するのが命令文である。

3.3.1 成立条件

- (a) 話し手が聞き手に行為をさせる権限と権利を持っている。
- (b) 話し手が聞き手に断わる可能性、選択する余地を与えない。
- (c) 話し手との力関係・社会道徳・社会ルールの立場から聞き手が要求された行為を実行する義務を持っている。

3.3.2 特徴

- (a) 話し手が聞き手に依頼する内容の程度の加減を表す副詞⁹⁾（依頼の程度副詞）とともに共起できるかどうかにより、「絶対的命令文」と「相対的命令文」に分けることができる。
- (c) 発語行為と発語内の力（illocutionary force）が一致する¹⁰⁾場合と一致しない場合がある。
- (b) 疑問形と共起しない。

3.3.3 利益関係

- (a) 話し手の利益になるのが殆どである。
- (b) 聞き手の利益になる場合もあるが、それは特殊な時である。例えば、緊急事態の命令、慣用的な表現、挨拶表現など。

次は以上の成立条件、特徴、利益関係について具体的に考察する。

9) きみ、ちょっとこっちへ来い。

という言い方ができるが、ここの「ちょっと」というような副詞は依頼をする程度の加減を表す副詞ではなく、相手に行為をしてもらう時間的な量を表す副詞である。

10) 命令の行為を遂行する発語が、発語内行為としての機能（発語内の力）は言語化されていないが、この種の機能ないし発語内の力の部分は遂行動詞を使って明示的な遂行表現にパラフレーズすることができる。

3.3.4 命令文の機能的分類 — 「絶対的命令文」と「相対的命令文」

言語を使用するということは、規則に従って行為を遂行することであり、その言語行為を理論分析し、発展させたのが Searle である。Searle (1969:30, 訳書52ページ) の分析によれば、命令法は直接的な言語行為で命令形で発話することは、聞き手に命令として働きかけることを直接的に表していると考えられる。しかし、実際に命令形は具体的な文脈・背景・場面などの語用論的条件によって遂行している発話の発語内行為は異なっている。

例えば、

(52) お帰りなさい。

は命令形を使っているにも関わらず、命令を表す文ではなく、挨拶表現である。

(53) (スチワードスが機内で) 危険ですので、お立ちの方はお座席にお戻りください。

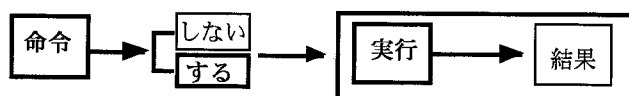
は「依頼」の形式を取りながら、その発語の力 (illocutionary force) は「命令」に近いと言ってよい。

一口に命令と言っても、話し手の「指示」に対する聞き手の実行する状況から考えれば、「絶対的命令文」と「相対的命令文」に分けることができる。つまり、「絶対的命令文」は話し手の一方的な強制要求を表し、他の要素を一切配慮しない。一方、「相対的命令文」は、聞き手が話し手の要求を実行してくれない可能性があるため、話し手が強制的な命令を表す一方で、事態を実現させるために、他の手段も取るのである。例えば、聞き手が依頼される行為を実行する結果から見れば、期待できる「結果」と、期待できない「結果」があると考えられる。つまり、命令文は必ずしも「結果」まで達成できるとは限られない。

まず「絶対的命令文」について見てみよう。

3.3.4.1 絶対的命令文

図<3-2>



図<3-2>のように「絶対的命令文」の場合は聞き手が選択する余裕を持たず、動作を実行すれば、「結果」まで含意するのである。つまり、「絶対的命令文」は聞き手が「命令」をやり遂げるかどうか、「結果」が確かかどうかというのを問題にしないのである。

「絶対的命令文」は、文法形式と語用論的な意味（発語内の力）が一致しない場合がある。文法形式は様々であるが、文脈・発話状況によって、依頼の形式をとりながら発語内の力が命令である場合、語用論的な説明が必要である。「絶対的命令文」は、話し手がどんな表現を使おうと遂行目

的が明確で、しかも発語内の力が同じで、個人の場合と公の場合で使われる。利益関係からいうと、話し手の利益になる発話が殆どであるが、特殊な状況や聞き手の利益になる場合（緊急事態類）、或いはどちらの利益とも言えない場合（職務執行類）¹¹⁾がある。「絶対的命令文」は、命令形の使用のみによって遂行されるものではない。言語形式から言うと、「絶対的命令文」は動詞が命令形である場合と、丁寧な形式の場合と二つに別れることができる。

日本語の動詞には語尾の活用形があるため、典型的な命令形式を次のように挙げることができる。

～しろ、～せよ、～しなさい

この場合は発話の内容によって、話し手が聞き手より「絶対的」な力関係にあるのが普通である。日常生活では、絶対的な命令は、個人と個人との間ではあまり使われていないと言われているが、しかし、雑誌とか、漫画では、割合よく見られる¹²⁾。命令形はスローガン、掲示の場合も見られる。

(54) スピードを落とせ。

(55) ごみを捨てるな！

命令形以外に、文法形式が丁寧な依頼の形式を取りながら、命令をすることも可能である。この場合の発話の特徴は集団的で、公での場面が基本である。公のルール、義務づけられている習慣に関して、話し手の命令は聞き手に選択する余地を与えず、言われた通りにするのが聞き手の義務である。つまり、話し手の言っていることに対して、聞き手が当然それに従うべき立場にあるのである。話し手と聞き手が一対一でない時、aのように対人機能を表すモダリティ（第五章の2.4を参照）を表す終助詞は使わない。

例えば、飛行機でのアナウンスの放送の場合、

(56) a* シートベルトをお締めくださいね。

b シートベルトをお締めください。

bの表現は丁寧であっても命令である。つまり、形式的に依頼だと見ることもできるが、その発語内の力は命令に近いと言ってよいであろう。社会的なマナー、社会的なルールの場合、聞き手がそれを守る義務があるため、表現が丁寧であっても、命令だと理解したらよいだろう。

11) 職務遂行の時、命令形を使うのが多い。例えば、軍隊では、

向前進。（進め！）

こういう時は誰の利益のためになるかは言い難く、命令を発する人と命令を受ける人はともに与えられた任務を果たすためである。

12) 王（1996：63-80）の調査の結果によるものである。

ここで、Thomas (1995: 訳書173ページ) がある高級レストランで見つけた例を紹介する。

- (57) お召し上がりの飲食物の香りを十分お楽しみになりたい場合は、当然ですが、お食事の間、お煙草をお控えください。また、お煙草をお吸いになりますと、他のお客様の楽しみを損なうことにもなります。

Thomas の説明によると、喫煙しないようにと「お願い」されているのか「命令」されているのかは、客自身の判断に委ねられているのだという。しかし、店がそこまで書いたら、多分皆守るだろう。その店に書かれたものはその店のルールになるし、その店で食事する人は当然それを守ることが義務づけられている。もし、本当に守らない人がいれば、或いは知っていながら、わざとそれを破る人がいれば、その人は皆に嫌われるのに決まっている。よって、だれでもそれを見たら、「No Smoking」だと理解し、自然に守るだろう。

ここで、この店が直接的な命令を使わないというのは、お客様は店の神様だから、お客さんから利益を蒙っているので、お願いする立場にいるからである。「No Smoking」で直接命令する権限を与えていないため、ほのめかすという言い方をしたのである。或いは、直接的な命令を使ったら、お客さんの反感を買うことになるおそれがあるので、間接的な言い回しを使っているのである。

話し手側のルールであるが、聞き手がそれに従う義務が弱い時、明示的な依頼表現「～お願いします」を使う。

例えば、速達手紙を持ってきてくれた郵便屋さんが、

- (58) ここにサインをお願いします。

という言い方をするが、(58) は話し手側のルールであって、聞き手にそうしてもらわないと、話し手側の責任も問われるので、依頼表現を使うのが当然なことだと考えられる。聞き手の立場から言うと、規則によって、自分がサインしないと、郵便物を渡してくれないから、話し手の依頼は自分にとって、命令である。次の例も同じことが言える。

夜行バスで、

- (59) バスの前にお湯がありますが、コーヒーやお茶を入れる時、くれぐれも火傷をしないようにお願いします。

という言い方をするが、火傷をしたら、普通お客さん自身の責任だと考えるが、日本の場合は会社側も責任を取る所以、明示的な依頼をしている。お客さんの立場から言うと、マナーを守るのが自分の義務でもあって、バス会社の願いは自分にとって、命令であるように聞こえるのである。

しかし、話し手が相手に何かさせる権利を十分持っていて、相手がそれに従う義務があっても、

国の社会的な事情と文化の違いにより、丁寧さの度合が少し異なってくる。

例えば、駐車違反や、スピード違反の行為に対して、警察はそれをやめさせる権限を十分に持っている。中国なら、警察は国の権利の代表的な機構の一つであるから、当然命令でその行為をやめさせるのである。

(60) 停車！超速了！罰款！（車を止めろ！スピード違反だ！罰金だ）

しかし、日本では、警察官は公務員で、国民の税金で生活しているため、命令であっても口調が幾分丁寧である。或いは、間接的な表現を使う。

例えば、スピード出しすぎのある年配の女性に、婦人警官が

(61) スピードはちょっと出しすぎですよ。

という間接的な表現を使うのである。

話し手が聞き手より強制力が強いと感じられる時、丁寧な依頼も聞き手にとって、命令である。ある文章を翻訳してもらう時、友達同士の間なら、話し手が聞き手に対して、強制力がなく、当然自分の都合により、聞き手が断わることができる。逆に、自分の指導教官の先生からの頼みなら、先生からの強制力が感じられ、先生の依頼が聞き手にとって、命令になるのである。

以上のように、日本では、明らかに相手が社会的ルールを破ったり、義務を果たしていなかったりしても、話し手が十分な権限を持っているにも関わらず、相手に命令する弱い立場に立っているなら、話し手は聞き手との関係を友好的に維持するために、いろいろな丁寧な表現を使うのである。

日本語では、当り前のこと、だれでも知っていることを敢えて相手に提示すれば、「聞き手の私的領域」を犯すことになる場合がある。例えば、信号を渡る時、青になってから渡るとするのは子供の時から皆知っている常識である。それでも、もし、

(62) 信号が青になってから、渡ってください。

という表現を使ったら、相手が常識を知らないか、子供に注意するか、或いは相手がわざとそのルールを破る気があるかのように聞こえる。だから、実際に

(63) 信号が青になってから、渡りましょう。

という言い方をするのである。ここで、「～ましょう」を使うというのは、話し手と聞き手がともにある行為を行うという前提があって、行為実行者に話し手が含まれる表現を用いて、行為の実行者を聞き手のみに限定せず、命令を行う者と行為を実行する者を明確に分離しないことで、命令の

威嚇的ニュアンスを緩和することができるのである。また、話し手が相手に命令・指示するという意味が弱ってきて、相手の私的領域を犯す危険も減少した。「～ましょう」というのは相手を誘う時に使う表現だから、話し手も含めて一緒にそうしようという言い方にすれば、聞き手を話し手と同一範疇によって捉え、聞き手に強制する意味が和らげられたのである。このように日本語では誘い・呼びかけの行為を命令に転用するのは一つの丁寧さのストラテジーとも言える。

中国語の動詞は語尾の変化がないため、表現は文脈依存性が強い。しかし、言語形式から判断することができないわけではない。命令文として使われる言語形式は次のようなものがある。

(a) 裸の動詞¹³⁾

(64) 站起来！（立て！）

(65) 坐下！（座れ！）

(a)が命令文として機能すると言えるためには、未然の行為の動作主は聞き手であり、動詞が言い切りの形となっているという条件が必要である。また、命令文の場合の動詞は補語を後続する特徴がある。例えば、同じ「坐る」という動作を相手に要求する時、命令文の場合は補語「下」をつけるが、勧め文の場合は「坐」だけでよい。それは中国語では、相手の行為に関しては細かく指示しないのが丁寧さのストラテジーであるからと言える¹⁴⁾。

日本語にもこれに似たような表現がある。つまり動詞の終止形による命令表現がそれである。尾上圭介（1979: 23）は動詞の終止形による命令表現と動詞の命令形によるそれとの違いを次のように説明している。

「ソコニスワル」という形は「そこにすわる」という一つの事態をあくまでただその事態として表示するだけのものである。何かを相手に求め得るような、あるいは求めざる得ないようなあり方の言語場において、実現を求めるその事態内容をただそのまま「そこにすわる」とことばにす

13) 中国語の動詞は動作のみを表すから、後に結果とか状態を表す言葉をつける必要があるが、ここでの言う「裸の動詞」は補語をつけた後の動詞のことを指す。

14) 中国語では細かく相手に指示するのは、逆に失礼な面があって、相手が分かっていることをいちいち言うのは相手に対する不信頼、信頼感がないことを意味する。この点に関しては、日本人の考えとは違うようである。例えば、アパートで日本人の生活習慣を知らない中国人に、次のような貼紙、

(1) 部屋に入る前に靴を脱いでください。

があれば、中国人は抵抗感がないが、もし、共同用の炊事場で、

(2) 料理の後、換気扇を切ってください。

の貼紙を貼ったら、誰が見ても、少し不愉快な気がするだろう。というのは料理の後に換気扇を切るということは常識なことであり、皆知っていることを取って言うというのは、皆がそれを守っていないという非難する意味を含意する。日本の駅、或いはスーパーのエレベーターとかエスカレーターとかの放送は、外国人の目から見れば、親切どころかうるさいと感ずる場合はあるだろう。

もし、相手に詳しく指示する必要があるれば、丁寧な用語を使うか、理由を説明するかする。

(3) 请您快坐下，有话慢慢说。（早くお坐りください。ゆっくり話をしましょう）

るとき、聞き手の状況認識能力によって、それは聞き手自身に向けられた要求の内容、あるいは聞き手がそこで為すべき行為の指定内容となる。

ただし、日本語の動詞終止形による命令は、現場での発話でない限り、ほかの修飾語などをつけずに、動詞終止形そのものによる命令表現はあまりないようである。例えば、「そこにすわる」ではなく、「坐る！」だけなら、言わないようである。次の例も同じである。

(66) a 神様はぼくの左腕の皮膚を、親指と人さし指できゅっとつまみあげて、「よく見る」と叫んだ。(阪田1987:312)

b? 神様はぼくの左腕の皮膚を、親指と人さし指できゅっとつまみあげて、「見る」と叫んだ。

(b) 给我+動詞

日本語は発語内的な力が統語形式と一致するのが多い。中国語は統語形式は発語内的な力と一致しないのが殆どであるが、「给我+動詞!」のような発話は慣習的に対応する命令形の発語の力を持つとされる。

「给」はもともと中国語の授受動詞で、この一語が日本語の「くれる、くださる、やる、あげる、さしあげる」に対応する。しかし、「给」は単なる与え動詞で、日本語の授受動詞のように、敬語、非敬語、身内、よそものの区別なく使えるのである。「给」の後に一人称の主語「我」をつけて、話し手への利益要求を表し、命令表現として使うことができる。

(67) 给我出去!(出てけ!)

(a)と(b)の用法を比べれば、中国語では、「给我~」があるほうが話し手のために何かをしてくれと相手に強引に要求する意味があり、生意気な感じがする。裸の動詞の形式は前後関係・文脈によって、勧めである可能性もあるのに対して、「给我+動詞」の形式は「絶対的命令文」である。

中国語の「给我~」は意味的に日本語の「~てくれ」に近いが、語用論的な効果が違う。日本語の「~てくれ」は「物事を頼んでしてもら場合、すなわち相手の好意に訴えて、その動作によって所望の効果を自分の方へもたらそうとする場合に用いられるのですから、日常生活における利用価値はかなり大きいわけです」(佐久間1983:198)という。日本語では、裸の動詞の命令形より、「~てくれ」のほうが、「いささか相手の人格を認めた」ニュアンスがあって、「大体部下などに対する場合に使われるだけ」(佐久間1983:200)である。「给我~」と「~てくれ」は語彙的に近いが、利益関係の視点の置き方の違い(中国語は話し手利益を強調するのに対し、日本語は聞き手から利益を蒙るという違い)によって、語用論的な効果が違ってくる。

(c) 把 + 目的語 + 動詞

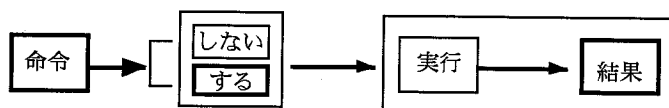
(68) 把衣服洗了。(服を洗いなさい)

命令・依頼表現が「把構文」と相性がいいのは、情報伝達論の観点から説明がつく。目的語が文頭に起こる傾向に情報伝達上の理由がある。一般的に文頭にあるものは古い情報を伝え、動詞及び述語は新しい情報を伝える。そして情報伝達は古い情報を先に与え、それに対して新しい情報を付け加えるという「旧→新」という順序で行われる傾向がある。というのは、聞き手が文を聞き始める時点では十分に注意が払われていない可能性が高く、文頭の方が文末より聞きのがしやすいということや、新しい情報を先に与えても、それが何についてか分かっていなければ理解しにくいという理由が挙げられる。聞き手に既知の概念を頭に浮かばせ、それに新しい情報を関連させるというのが理想的な情報伝達の方法である。目的語が文頭に起こり、動詞が文末に起こる傾向はこの情報伝達に関する効率の反映に他ならないと考えられる。「把構文」は発話者や聞き手は明示されない限り、何かについてどうするという要求内容を聞き手にストレートに述べているため、命令表現だと受け取られるのである。

しかし、話し手は聞き手が「命令」に従わないだろうとか、「結果」まで確実に実現できないだろうとかということを考慮するなら、或いは相手に強制的に命令に従わせるのではなく、上下関係から命令形を使っている場合であれば、「相対的命令文」になるのである。

3.3.4.2 相対的命令文

図<3-3>



命令文の成立条件をすべて満たさず、聞き手が「命令」に従う可能性と「結果」まで達成する確実性が100%でない時、「相対的命令文」になり、話し手の心情・態度を表す依頼の程度副詞との共起ができる。話し手の心情・態度を表す依頼の程度副詞¹⁵⁾との共起可否は命令文の機能分析に有効である。「相対的命令文」と言えるのは基本的に二つに分けることができる。

(a) 親しさを示す類

日本語では、話し手と聞き手が、もし、社会的地位が同じで、人間関係が親しくなればなるほど言葉が砕けていく傾向が見られる。或いは、上位の人が部下に親しみを示すために、ぞんざいな言葉を使うことが多い。こういう場合は、聞き手の利益になるのが殆どであって、勧め文と連続的關係を持つ。というのは聞き手にとって有益である場合、直接的な命令文が使われていることが通常完全にポライトであると見なされる(Thomas 1995: 訳書170ページ)からである。Thomas (1995: 訳

15) 以下はモダリティ副詞と称する。

書170ページ)は「ある発話行為を実際の状況の中に入れてみるとすぐ、言語形態そのものとその発話行為から生じるポライトネスとの間には必然的なつながりはないことがわかる」と述べている。またうわべの言語形態とポライトネスとを同一視することは危険であるという。例えば、ある夫婦がどのレストランで食事をしようか思案している。夫が言う。

(69) You choose. (君が選んで) (Thomas 1995: 訳書170ページ)

ここでの直接的な命令文は完全にポライトであると見なされ、聞き手が必ずしも話し手のいう通りに結果まで成し遂げる義務を持っていないため、「相対的命令文」だと見なされる。

(b) モダリティ副詞と共起できる類

モダリティ副詞と共起できるかどうかによって、命令文を「絶対的命令文」と「相対的命令文」に分けることができる。それは「絶対的命令文」と「相対的命令文」の違いはモダリティ副詞の使用によって、その差が明らかに現われるからである。

次の例は殺し屋の親分と子分の会話である。

(70) S: あの女を必ず殺せ。

H: 分かりました。

(71) 辛いことがあったら、ぜひ帰ってこい。(小林1992: 13)

(70)は「相対的命令文」で、100%の確率で「殺す」という行為を聞き手に成し遂げさせるものであり、行為そのものの自体を聞き手に強要するのではなく、行為の結果を強調するのである。

(71)は親が子供に言っている言葉で、強制的な命令だというより、親しみを込めて話し手の強い願望を表すのである。

モダリティ副詞と共起できる「相対的命令文」は、殆ど話し手が聞き手に今すぐある行為を実行してもらうというわけではない場合が多い。

以上をまとめると、命令形というのは二つの発語の力を持っていると言える。一つは「絶対的命令文」で、話し手と聞き手の絶対的な力関係を強調し、話し手の強制力は最も強く、要求された事態を聞き手が実現するかどうかという選択の自由度は極めて低い。それに対し、「相対的命令文」は話し手の強制力に焦点があるのではなく、命令された行為の結果、或いは話し手の強い願望、話し手と聞き手の親しみの関係に焦点を当てるのである。

「絶対的命令文」、「相対的命令文」とモダリティ副詞の使用状況について第六章で改めて論じる。

3.4 依頼文

聞き手が話し手より力関係が優勢である時、話し手が聞き手にある行為をするように望んでいる場合は依頼文である。

3.4.1 依頼文の成立条件

- (a) 話し手が聞き手にある行為をさせる権限と権利を持っていない
- (b) 話し手が聞き手に断わる可能性、選択する余地を与える
- (c) 聞き手が行為を実行する義務を持っていない

3.4.2 特徴

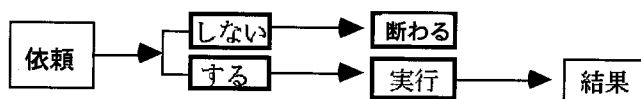
- (a) 発語行為と発語内の力が一致する場合と一致しない場合がある。
- (b) 相手に動作・行為を指示すると同時に依頼する程度の加減を表す副詞と共に起る。

3.4.3 利益関係

- (a) 話し手の利益になるのが殆どである。
- (b) 聞き手の利益のために依頼する場合もあるが、それは話し手の責任感が問われる時である。

3.4.4 依頼文の機能的分類 — 「要求依頼文」、「勧め依頼文」

図<3-4>



依頼行為というのは、聞き手がその依頼を引き受けるかどうかという選択する余地を持っているのが特徴である。また、依頼文は特定の副詞・語句と共に起しやすい。例えば、程度副詞「少し」を使い、文意を婉曲に表現し、「ぜひ」、「何とか」のような副詞で、強調気味に表現することで、話し手の依頼する気持ちを伝えることができる。

依頼表現は要求的性格を持つものとして、一元的に考えられてきたが、利益関係の観点から分析すれば、他に勧めの性格を持つ用法が見られる。ここでは、依頼文を二種に分類する。

依頼文とは「話し手が自分の要求の実現を相手の意志や好意に働きかける」という意を表し、話し手の利になるのが基本である。しかし、相手の利になる依頼もある。前者を「要求依頼文」、後者を「勧め依頼文」と名付ける。

(72) a もう時間です。中にお入りください。

b* ありがとう。

(73) a どうぞお入りください。

b ありがとう。

談話の立場から分析すると、「要求依頼文」((72)) は感謝表現を取ることができないが、「勧め依頼文」は感謝表現を取ることができる((73))。以上のように同じ「お入りください」という発話を談話そのものを検討すれば、違いが明らかになる。

3.4.5 命令文と依頼文の相違及び連続性

依頼に最も近いと思われる発語内行為は命令であろう。命令と依頼を峻別する最大の要因は、前者では話し手が聞き手に当該行動を要求する権力を持っているとされている(Searle 1969: 66)。話し手と聞き手の間の「強制力」という要素が大きく働き、聞き手がそれに従う義務があるかどうかにも関わっている。命令では、話し手は聞き手が要求された動作を実行することが当然だと想定しているのに対し、依頼はそのような強い想定が存在しない。命令は話し手に何らかの根拠による強制力があり、聞き手が選択する余地がないのである。命令は積極的な行為要求を意味し、依頼は消極的な行為要求を意味する。表現上依頼の形式を取りながら、命令をすることも可能である。例えば、切符売り場の窓口のところで、

(74) 一列にお並びください。

は形式的には依頼と見ることができるとは言えるが、その発語内の力は命令に近いと言ってよいであろう。つまり、命令文と依頼文の機能上の連続性というのは具体的に「絶対的命令文」(58)と「要求命令文」(72)に現われていると言える。

命令・依頼を言語形式の丁寧さから判断する認識は皮相的なものである。というのは、依頼も、親しい相手ならその表現形式は簡素なものになるし、権限をもって指示する場合なら、丁重に扱うべき相手に対しては待遇レベルの高い形式を用いなければならないのである。

3.4.6 意味論による依頼文¹⁶⁾の分析

今までの研究では、「依頼」は日常頻繁に行われる行為であり、言語形式が比較的定型化されており、形式と機能との関係を明示的に示しやすいという理由で、「依頼」は発話行為研究の中で頻繁に取り上げられてきた(熊取谷1995: 13)。

人間は自分の目的を達成するために、相手にある行為をしてもらおうと頼む時、依頼の内容や相手に及ぼす影響、発話の場面、相手との利益関係などを常に配慮しつつ、適切な依頼表現を取る。多くの言語において、話し手が様々な依頼行為を取るため、依頼表現には様々なタイプの形態が見られる。しかし、依頼表現とは何かを言語形式から決めるのは中国語ではまず無理なことである。日本語の場合でも命令・依頼表現に関して、決まっている言語形式があっても、場面と状況によって、遂行動詞を使って明示的な遂行表現にパラフレーズすることができる場合もあるし、一律には

16) ここで論じている依頼文は、非言語的手段による依頼や間接的な依頼は考察の対象外とし、主に直接的な依頼表現について考えることにする。

決められない表現もある。たとえ同じ遂行動詞による依頼文でも、その依頼内容により相手に負担がかかるものから、全く負担がかからないものまである。この節では、言語形式にこだわらず、話し手の依頼する内容から分析をしたい。

日常の発話では、話し手が聞き手に本当に依頼する内容のある依頼と、依頼する内容がなく単に儀礼的に依頼しているものがある。依頼内容があるかないかによって、次のような二分類をする。

「慣用的」依頼文¹⁷⁾

「実質的」依頼文

依頼内容がない場合は「慣用的」依頼文で、依頼内容がある場合は「実質的」な依頼文だとする。

「実質的」依頼文は、また、「明示的」依頼文と「場面的」依頼文に分けることができる。

3.4.6.1 「慣用的」依頼文——相手に依頼する内容がない依頼文

「慣用的」依頼文とは、初対面の挨拶や、儀礼的な対応として、慣用的に用いられるものであって、依頼内容の行為が具体性・実質性を欠く依頼文のことである¹⁸⁾。

「慣用的」依頼文については、またそれぞれ中国語と日本語の立場からその異同について考える。

3.4.6.1.1 中国語の「慣用的」依頼文

中国語の依頼文における「慣用的」依頼文は、よく「多(多)」という言葉を使う。「多」は形容詞で、「多い、たくさん、多く」の意味を表す。

(75) 请多照应。(よろしく願います)

(76) 请多指教。(ご指導願います)

このような慣用的な言い方は、挨拶表現である場合、相手に依頼する内容が多く見えるが、実際に相手にかける負担はゼロに近い。相手に多く依頼することは「相手の存在をより重く見る態度に繋がり、より丁重な敬意表現である」(木村1987: 63)。

中国語での慣用化された表現は、日本語ほど多くない。例えば、日本人向けの中国語の教科書に必ず出てくる「请多多关照」¹⁹⁾ (どうぞよろしく願います) という挨拶は、中国人の間では実際に使われていない。

中国語には、「无事不登三宝殿」(ふだんはお参りせず、願をかけるときに初めて仏殿に上がる。用件を切り出すときに用いるきまり文句。) という言葉がある。これは相手に頼みごとがあれば、

17) ここでの「慣用的」依頼文は、木村(1987: 63)のいう「加重化」表現の中の「儀礼的な依頼文」に当たる。

18) この定義は木村(1987: 63)のを参考にしたものである。

19) これについては相原茂(1995: 64)の解釈を引用したい。

「逆に中国人がこの挨拶ことばを使えば、いやに律儀で、儀式張っている。堅苦しいというふうにとられます。そこで日本人がこういう初対面の挨拶を、それこそ長々と、交互に頭を下げながら交しているのを見るとちょっと滑稽な感じがしてくるから不思議です。」(相原茂『中国語』1995, 11)

と言われるように、中国人にとって、この挨拶は少し違和感がある。

依頼をするという慣習を表している。つまり、中国語では慣用的な言い方はあまり使われていないのである。

3.4.6.1.2 日本語の「慣用的」依頼文

日本語の「慣用的」依頼文は、丁寧な慣用的な言い方（動詞の尊敬形を除く）で、よく使われているのは次のような文がある。

(77) 何卒よろしくお願いします

(78) どうぞ指導のほどよろしくお願いします

(77) と (78) は話し手が相手に何かを依頼しているように見えるが、実際依頼している内容がなく、ただ儀礼的な挨拶に過ぎない。これはどちらかの利益にもならないし、待遇表現において相手の目下の者には言わない丁寧な表現である。「慣用的」依頼文は相手を尊敬する意を表すというより、人間関係をスムーズにさせるための潤滑油の働きをしていると考えられる。

中国語では挨拶的、慣用的な言い方は日本語ほど存在していない。中国語の「慣用的」依頼文は、相手に実際に負担をかけるのではなく、相手を尊敬するため、相手のフェイスを立てるための表現であり、相手を喜ばせるための表現でもある。

例えば、次のような丁寧な「慣用的」依頼文に対して、中国人と日本人の反応が違っているのである。いつもお世話になっている大家さんが、旅行に出かける前に、

(79) 留守の間、どうぞよろしくお願いします。

と言ったら、下宿している日本人は普通「はい、分かりました」で対応するが、もし、下宿しているのが中国人で、日本に来てまもないなら、その場で恐縮して、思わず「いいえ」で答えてしまうだろう。それは頼まれたことに応じないのではなく、「どうぞよろしくお願いします」という頼み方に対して、「自分はそういう丁寧に頼まれる身分の者ではない」ということを主張したいだけである。

3.4.6.2 「実質的」依頼文 — 相手に依頼する内容がある依頼文

話し手が聞き手に依頼する行為の内容がある依頼文のことを「実質的」依頼文という。

「実質的」依頼文は、いろいろな言語形式によって表される。例えば、モダリティ副詞や、「軽減化」²⁰⁾的な表現が挙げられる。日常言語の話し言葉では、省略や曖昧性を伴う原初的な発話の方が広範に見られる（山梨1989:223）。「実質的」依頼文は、また話し手が相手に依頼する内容が具体的であるかどうかによって、「明示的」依頼文と「場面的」依頼文に分けられる。「明示的」依頼文というのは、言語形式から依頼する内容が明示的にされている表現のことで、この種の機能な

20) 「軽減化」というのは、木村の説でいうと、「相手に依頼する動作を短く少なめな形 — 言わば「軽減化」を示した形 — で提示することで、こちらの控えめな要求の姿勢を示し、それによって、より円滑な依頼行為の遂行を促す働きを担っている」ということである。（p.61）

いし発話の力の部分は、行為の遂行を示す動詞によって明示することになっている。このように遂行動詞によってその発話行為が直接的に示される発話は、「明示的」依頼文と呼ぶ。「場面的」依頼文とは、言語形式から依頼する内容が明示的されず、文脈や、具体的な場面から言語的推論をしなければならない表現のことをいう。具体的な例は、またそれぞれ次で挙げる。

3.4.6.2.1 「明示的」依頼文

(80) 我小孩一个人在家，我不太放心，请麻烦给看着点儿。（内の子は今一人家にいます。ちょっと心配していますが、面倒を見てくださいか）

(81) 请你一定帮帮我这个忙。（ぜひ一つ手伝ってください）

(80) の例は、留守の間子供の面倒を見てくれるようと具体的な依頼内容を明確に示している。

(81) は相手に手伝ってもらおうと依頼する文であるが、副詞「一定」の修飾を受けて、話し手の依頼する気持ちを強調することができる。

中国語では、相手に実質的な依頼事をする時、数量表現で依頼する言い方がある。

(82) a 掌柜的，多给一点儿好肉。（ご主人、もう少しいい肉をたくさんください。）

b 掌柜的，多给几斤好肉。（ご主人、もう何斤かのいい肉をたくさんください）

(83) a 别吵了，让我多睡一会儿。（騒ぐな。もうしばらく長く寝かせて）

b 别吵了，让我多睡十分钟。（騒ぐな。もう10分長く寝かせて）

例 (82) の a、b と (83) の a、b は「数量化」依頼文で、相手に具体的な依頼行為を数量表現で示す時、「多（多）」を使う以外に、数量を表すもの、「一（几）²¹⁾ + 量詞」を後続するのが普通である。

「数量化」依頼文は大抵相手に「量」の多いことを要求しながら、その後にも「一（几） + 量詞」の言葉をつけ、話し手の要求している「量」を抑えるのである。語用論的な立場から考えると中国語ではこの場合、相手に依頼する行為の内容に具体性・実質性がある依頼表現は、無限に相手に「多」（たくさん）要求するのではなく、どこまで要求するかを限定しなければならない。そうしないと、(84)、(85) のように相手に一方的に多く要求することは厚かましさに繋がり、非文である場合もある。

(84) *掌柜的，多给好肉。（ご主人、いい肉をたくさんください）

(85) *别吵了，让我多睡。（騒ぐな。長く寝かせて）

「一（几） + 量詞」の文法的な働きは参照点である。つまり、今のを基準にし、今のより少し

21) 「几」は不定の数をさす。

「多」という意味を表す。

しかし、「多(多)」は必ずしも依頼表現にとっては必須の要素ではない。というのは(86)、(87)のように「多(多)」がなくても、その表現は成立する。

- (86) a 掌柜的，给一点儿好肉。（ご主人、少しいい肉をください）
b 掌柜的，给几斤好肉。（ご主人、何斤かのいい肉をください）
(87) a 别吵了，让我睡一会儿。（騒ぐな。ちょっと寝かせて）
b 别吵了，让我睡十分钟。（騒ぐな。10分寝かせて）

「多」の後ろに「少量」を表す数量詞「一」或いは「几」をつけてもいいし、具体的な数量をつけてもいい。もちろん「多」の後の数量が多ければ多いほど相手にかける負担が大きい。

- (88) 这次我女儿是第一次出远门上学，在那边还得求你多给照顾着点儿。（今度は娘が初めて遠い所へ勉強に行くから、向こうでいろいろよろしくお願いします）

例(88)は話し手が相手に依頼している具体的な内容は「照顾」（世話をしてもらう）であり、それはただ一方的に「多照顾」（多いに世話をしてもらう）ではなく、相手にかける負担を軽減するため、「（一）点」²²⁾をつけ、厚かましさを感じさせないのである。

- (89) 老兄，求您在上司面前好好美言几句。（友よ、上司の前で私をよく褒めてくれ）

(89)は「多」の代わりに、相手に「好好」（よく）を使い、依頼することを強調しながらまた、「几句」（何言か）で「強調」している気持ちを「少なく」或いは曖昧な量で抑える姿勢を示している。

もし、話し手が相手に依頼している行為の内容がゼロに近ければ、つまり「慣用的」依頼文であれば、「一（几）+量詞」をつけない。というのは、この時の「多(多)」は相手に依頼する量が多いほど自分が相手への依存度も高くなることを示し、相手を自分より一段高い位置へ持ち上げているのである。相手に実際依頼している行為の内容がないからこそ、表現を控え、軽減する必要もないからである。

次は「慣用的」依頼文と「一（几）+量詞」と共起できない例である。

- (90) a* 初次见面，请多关照一点儿。（初めまして、少しよろしくお願いします。）
b 初次见面，请多关照。（初めまして、よろしくお願いします。）
(91) a* 请多指教一点儿。（少しご指導ください。）

22) 「一点」の機能については、第四章の§3を参照。

b 请多指教。(ご指導ください。)

「多+一(几)+量詞」の用法は勧め文でもよく使われている。

(92) 今天没什么好招待的, 请你多吃点儿吧。(今日は何にもありませんので、少し多く召し上がってください)

この場合の「(一) 点儿」はお客さんにこれからもう「少し」「多く」食べるように、或いは今食べている量より更に「少し」「多く」してくださいという二通りの解釈が考えられ、「(一) 点儿」は参照点マーカークの働きをする。

日本語では「多く」の「数量」表現を使って、相手に依頼する言い方はない。

(93) *多くよろしく願います。

また、相手に「多く」要求する上に更に控えめに依頼する用法と、勧め文での「多く」勧めの上にまた控えめに「少し」で相手に勧める用法は、日本語には通用しない。

例えば、

(94) *これから多いに ちょっと (少し) よろしく願います。

(95) *どうぞたくさん ちょっと (少し) 召し上がってください。

(94)、(95) はともに非文である。というのは、日本語の「多い、たくさん」と「ちょっと、少し」は、依頼表現では「コト」のソト側に属するもので、数量表現そのものの文字通りの意味を取るなら、多いことと少ないこととの共起は意味的に矛盾するため非文になる。

日本語では、相手に具体的な行為・動作を要求することにより、「明示的」依頼文を表すのである。

(96) 是非日本語を教えてください。

日本語では「数量」的に相手に「多く」依頼することは厚かましく感じられ、言わない。というのは命令・依頼表現における日本語のモダリティ副詞の用法が発達しているのに対して、中国語の副詞の数が少ないため(第五章を参照)、「多~一点儿」の用法で補っていると考えられる。

3.4.6.2.2 「場面的」依頼文

「場面的」依頼文とは、その場の場面により、相手に依頼する行為の内容があるが、具体的に明示されず、文脈と文の前後関係により、依頼している内容を推論しなければならない文のことである。

る。

- (97) 張局長，這就是我家老二，今後煩您老多照應照應。（張局長，これはわが家の次男です。これからよろしくお願いします。）

「多照應照應」は「慣用的」依頼文とよく似ている。ここでは「張局長」に依頼する内容を具体的に示していないが、場面によって、推論することができる。つまり、話し手は自分の息子を「張局長」に紹介して、「張局長」のもとで働かせて、いろいろ面倒をみてもらおうとしていると想定できる。

「場面的」依頼文は、相手に具体的な依頼行為を示さないことにより、厚かましい印象を与えない。また、相手にどのぐらいしてもらうかは、はっきり指示せず、相手次第だから、よく目上の人に頼み事をする時に使われる。また、頼みにくい依頼をする場合にも使われ、丁寧に依頼する時の一つのストラテジーとも言える。

相手に依頼することは、その場の文脈が与えられてはじめてお互いに了解し、文脈依存的な依頼文である。

日本語では「場面的」依頼文と「慣用的」依頼文と形式的にはよく似ているが、このような依頼文はそれぞれの場面により、相手に依頼する行為の内容を明示化しない。

例えば、二人で話し合ってから、別れる際に、

- (98) それじゃ、来週からということで、どうぞよろしくお願いします。

のような言い方をする。また、日本語でよく使われているものに、「ひとつ～」というのがある。

「ひとつ」は「あるものごとを取り立ててひとまとまりとして言う」語と解されるが、依頼表現では話し手の漠然的な要求を表すのである。

日本語では「場面的」依頼文はよく相手に依頼事を頼んだ後に念を押すために改めて言うことが多いようであるが、中国語では、「場面的」依頼文を使うというのは相手に念を押すためではなく、相手に具体的な依頼事をする時、話し手が言いにくいこと、また相手の反感を呼ぶ可能性があることの時、どこまでしてもらえるかは相手に任せる態度を示し、相手にかかる負担を減少するためである。

3.4.6.3 まとめ

中国語と日本語の依頼表現には、相手に依頼する行為の内容がある時とない時の二つのタイプがある。ここでは依頼する行為の内容がないほうを「慣用的」依頼文と呼び、依頼する行為の内容があるほうを「実質的」依頼文と呼ぶ。「実質的」依頼文はまた二つに分けられる。一つは「明示的」依頼文で、相手に明確に依頼する行為の内容を指示し、二つ目は「場面的」依頼文で、相手に依頼する行為の内容があるが、具体的に指示しない表現であるのが特徴である。

中国語では、依頼内容がないほうの「慣用的」依頼文は、相手に敬意を表すという点で、表では、相手に「多く」の負担をかけるように見えるが、実際それは相手を重く見る態度と繋がり、相手にかかる負担はゼロに近く、相手を立てることにもなるのである。しかし、日常では、この用法はあまり使われていない。

日本語でも、「慣用的」依頼文があるが、それは相手に敬意を表すまでには行かず、ただ、人間関係を維持するための手段として使われている。意外に、日本語にはこのような表現が多い。

「実質的」依頼文の場合は、中国語では話し手が依頼の気持ちを強調したい時、数量表現²³⁾を伴うのが一つの特徴である。その代わりに、日本語はモダリティ副詞を伴って、具体的な行為を指示するのが特徴である。これは主に中国語と日本語の動詞の性格の違いによるものだし、日本語のほうではモダリティ副詞が発達しているからでもある。

3.5 勧め文

勧め文とは、話し手が聞き手に利益をもたらすようなことを提案したり、或いは聞き手とともにある行為を遂行するよう聞き手に働きかける発話行為である。

話し手が聞き手に要求する行為は、基本的には聞き手に何らかの利益をもたらすという前提がある。勧めというのは話し手が強制的に相手に要求をする意味がないため、聞き手が十分に断わる余地を持っている。

3.5.1 勧め文の成立条件

- (a) 話し手が聞き手にある行為をさせる権限と権利を持っていない
- (b) 聞き手が断る可能性と選択する可能性を十分持っている
- (c) 聞き手が行為を実行する義務を持っていない

3.5.2 勧め文の特徴

- (a) 聞き手に勧めている行為を話し手が一緒に行う時もある
- (b) 行為を行う人が二人称か一人称の複数形である
- (c) 「すみません」のような謝る言葉は勧め文と共起できない²⁴⁾

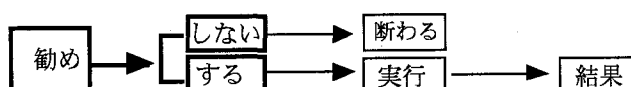
23) 「軽減化」依頼について、木村(1987: 62)はその述部の特徴について、次のようにまとめている。「行為の軽減化に活用される語彙的或いは文法的手段としては、少なめの動作量や少なめの回数を表す一連の数量表現や、短めの時間を表す幾種類かの時間表現、或いは、試み適度に「～てみる」といったアスペクト的な意味を表す動詞の重ね型形式——たとえば「找找」(捜して見る)、「看看」(見てみる)など——更に「手伝う、助ける」の意の動詞「帮」などいくつかのタイプの形式があり、いずれも次のような依頼表現のための常套手段として広く活用される。」。ここで、まとめられている述部の特徴は、「実質的」依頼文の述部の特徴であるとも言えるが、木村の説を更にまとめると、「帮」などのいくつかの慣用的な動詞以外に、数量表現というのが殆どである。というのは、動詞の重ね型も基本的に数量表現の一種で、「不定量」を表すからである。

3.5.3 勧め文に関する利益関係

- (a) 聞き手の利益である
- (b) 話し手と聞き手の両者の利益である

3.5.4 勧め文の機能的分類 — 「狭義の勧め文」、「勧誘文」

図<3-5>



話し手の勧めに対して、聞き手が「する」「しない」という二つの選択がある。勧め文の基本的な意味は、聞き手にとって有益な何らかの行為を提供することである。機能的に勧め文を「狭義の勧め文」と「勧誘文」に分けることができる。前者は完全に聞き手の利益になる行為を行うことを求める話し手の一方的な行為の要求が特徴で、「狭義の勧め文」と名付ける。もう一方は話し手と聞き手の両方の利益のために、聞き手の意志を確認する要求で、話し手とともに行為を遂行しよう聞き手に働きかけることを目的とする発話行為を「勧誘文」と呼ぶ。

勧め文におけるこの二つの分類は違うメカニズムを見せる。簡単に言うならば、「狭義の勧め文」は聞き手にとって利のあることで、場合によって控えめな態度を取る必要はなく、ストレートに勧めればよい。一方、「勧誘文」は話し手の意志だけを表せず、聞き手にも同様の意向を共有させ一緒に行動するよう働きかけ、依頼と勧めの中間的な要求表現として、それなりの控えめな態度が求められ、聞き手の意志を尊重する必要がある。勧め文のこの二つの機能の違いは、第六章の中国語の語気助詞「吧」の用法において、明らかになる。

3.5.4.1 日中の「狭義の勧め文」の相違について

相手に勧める時、聞き手に「ノー」と言わせない勧め文は、申し出をする際の積極的な丁寧な方法となる。話し手は相手に積極的に提供することは、聞き手の消極的丁寧さ²⁵⁾を予期し、それを中和することを意味する。次のような表現の説得的強調によって、丁寧さが増進されることさえある。

24) 明示的勧め文の場合、謝り言葉と共起しない。勧めを表す語形が日本語には「～したほうがいい」、中国語には「最好～」がある。

- (1) *本当に申し分けないですが(悪いけど)、一緒にお茶を飲みに行かない?
- (2) *本当に申し分けないですが(悪いけど)、お茶を飲んだほうがいいですよ。
- (1) *对不起, 我们一起喝杯茶吧。
- (2) *对不起, 你最好喝杯茶。

勧め文は話し手が聞き手の利益のため、提案などをしているので、聞き手の利益を損害したことではないから、謝る行為をする必要はない。

25) 消極的丁寧さとは、話し手が相手との距離を広げることによって、自由を侵害されたくないという相手の消極的体面を守る行為である。

(99) Do have another sandwich.

(100) You must have another sandwich.

英語におけるこの勧め文の語用論的な説明は、中国語にも通用する。つまり、相手の利益になると見られる時、「何の緩和策も講じずにむき出しのまま (bald-on-record) FTA (face-threatening acts: フェイスを脅かす行為) をする」²⁶⁾。典型的な用法は、中国語の「吧」の使い方である。相手の利益になる場合は、相手に選択権を与え、拒否しやすいように「吧」を使うのが好まれないのである²⁷⁾。

(101) a 这是我刚做的，来尝一尝吧。(これが私がさっき作ったもので、味見をしてください)

b 这是我刚做的，来尝一尝。(これが私がさっき作ったもので、味見をしてください)

語用論的にはbのほうがaより丁寧度が高い。

(102) 老板，您应该注意身体。(社長、体に気をつけるべきです)

法助動詞による直接的な形式の勧めは、中国語では丁寧である。

Leech (1983) は多くの行動指針を導入し、それらがポライトネスの原則に対して、Grice (1975) の行動指針 (質・量・関係・様式) が協調の原則に対して持っている関係と同様の関係を持っていると主張している。彼の挙げている行動指針は気配り (tact)、寛大性 (generosity)、是認 (approbation)、謙遜 (modesty)、合意 (agreement)、共感 (sympathy) (Leech 1983: 訳書190-191ページ) である。気配りの行動指針の第2の側面は、選択の余地を与えることによって、依頼による影響を緩和することである。日本語では、特に勧め表現においては、話し手の領域と聞き手の領域がはっきり分かれている。日本語の場合は相手の利益になっていても、勝手に相手の私的領域に立ち入ることはしない。というのは、相手の身内のことを直接的な表現で勧めたりすることは相手のプライバシーを脅かすということになり、失礼に当たるからである。例えば、「狭義の勧め文」に関しては、先生が外から教室に入ってきて、教室の中がとても暑い場合、中国語は直接的な表現、

(103) 老师，您把衣服脱了。

は失礼な表現にならず、日本語なら、

(103) 先生、服を脱いでください。

26) Thomas (1995: 訳書185-86ページ) による。

27) 王 (1998) 日本言語学会第116回大会口頭発表「中国語の語気助詞「吧」の伝達機能」を参照。

のほうが不自然だろう。つまり、中国語では相手の利益になるなら、率直な勧めは失礼にならない。むしろ相手の領域に入り、相手と同じ立場に立ち、相手の身を案じるのは一層の親しみの表示でもある。話し手が聞き手と心情を共有することを示して、親近感を生み出す。もし、相手の利益になるのに、選択の余地を与えたり、よそよそしい表現を使ったら、礼儀正しいとは見なされない。逆に(103)の日本語の表現は相手のプライバシーを侵害することになり、失礼な表現である。こういう発想は日本語はあくまでも話し手と聞き手が常に対立型関係にあるからである。中国語では話し手と聞き手の区別をするが、話し手が聞き手に愛想を示そうと思う時、相手の立場に立って発話するところは日本語と違うのである。

中国語は話し手と聞き手の間の人間関係・利益関係、日本語は話し手と聞き手の間の社会的距離・上下関係のほうに重点を置いていると言えるだろう。

3.5.4.2 日中の「勧誘文」と否定形

勧め文に関しては、日本語と中国語のもっとも違うところの一つとしては、「否定疑問文型式による勧め、誘いかけ表現にしても、日本語ではごく普通に用いられるのに対して、中国語の場合は、小説、シナリオ等から例を集めるのに苦労するほど少なく、肯定(疑問文)型式のほうがはるかに優勢である」(大西1988:197)というのが挙げられる。ここでは、否定疑問文型式による勧め(狭義の勧め文)、誘いかけ(勧誘文)の在りかたの違いについて、中国語、日本語、英語の間で比較してみる。

否定疑問文は否定的な命題についての質問であり、それ自体は肯定的命題の否認を含意する。中国語の勧誘文における否定形は、否定形を使った間接的な表現により、消極的な選択へ片寄せ、その結果聞き手が格段にノーといいやすくなるように仕向ける。そうすると勧誘文では、否定形で相手を誘う場合、本気で相手を誘っていないという意味が読み取れる。例えば、次の日本語の勧誘表現、

(104) 今晚一緒に食事しませんか。

を中国語に訳したら、

(104') 今晚不一起去吃饭吗?

になるが、中国語の感覚で受け取るなら、相手が自分を誘っているが、否定形を使って、行ってもraitakunaiという本音を暗にほのめかしているように聞こえるのである。しかし、日本語の勧誘文は否定形を使うのが普通である。というのは相手の気分をそこなうことを避ける「～しないか」という表現は、相手の意志を強制する意味が読み取れず、相手の「私的領域」を尊重することになるのである。誘い表現においては、英語の発想は中国語に近い。ここで、ポリー・ザトラウスキー

(1986: 27) の観察を引用する。(104) の日本語の文を英語に直訳すると、

(104") Will you not eat dinner tonight?

になるが、英語の感覚で受け取って答えるなら、

(105) Yes, I will. Why do you ask?

のように、返事をするということになるという。

もし、聞き手に勧めていることが、聞き手の意志に関わることであれば、英語はまた、日本語の表現に近く、否定疑問文で勧めるのが丁寧なようである。というのは、例文(106)のように聞き手の利益のために勧めているというより、聞き手の意志の有無について確認するので、否定形で聞くのは、聞き手を尊重することになり、しつこくさが感じられなくなる。まず、日本語の例を見よう。

(106) 何か食べませんか？

英語でも否定の疑問文(106")は肯定疑問文(106')より丁寧である。

(106') Will you have something to eat?

(106") Won't you have something to eat?

日本語と英語においては、誰かに何かを提供することは丁寧である。しかしまた、提供を受けるよりも辞退することがしばしば一層丁寧である。否定の質問は現実の否定的仮定と取り消された肯定の信念を含意する。日本語と英語では、否定の質問文で、相手に勧め、相手の意志を確認する時、聞き手はより否定の言葉を言いやすくなり、無理に相手に同意を求めるといった感じを与えず、丁寧である。この解釈はちょうど丁寧さを表す Leech の如才なさの行動指針「選択の余地を与える」と一致しているのである。

中国語では聞き手の利益のための話し手からの一方的な勧めであれば、Leech の行為拘束型によると、聞き手にとって有益な行為の提供・勧めでは、丁寧さを表すために発話を積極的側面に片寄せることが必要である。即ち、話し手から提供されたり、勧められたりした行為を聞き手が受けやすくなるように、「いいえ」と言う機会に制限を加えることによって、肯定的結果が出るようにするのが丁寧である。

(107) 你不吃蛋糕吗？(ケーキを食べませんか)

は聞き手の利益になることを勧めるのに、否定疑問形を使うと、聞き手に「いいえ」と言える機会を作ってしまうことになり、気配りの原則に逆らっているのである。

中国語においては、「狭義の勧め文」と「勧誘文」では同じように否定形を使うと、話し手が勧め、勧誘していることが話し手の本気ではないように聞こえる。つまり、話し手が否定形で聞き手の代わりに結果を出したので、聞き手が更にその決定に反対しづらくなるのである。よって、聞き手が相手が喜んでいないことを無理に割り込むのは自分のフェイスはなくなり、誘いを断わる答えしか出せなくなってしまうのである。

3.5.4.3 勧め文における激励言葉

ここでは、激励言葉を「狭義の勧め文」だと見ている。中国語では決まり文句のような挨拶が少ない。形式的な意味というより、語彙的な意味を取るのが多い。励ましとか助言などの表現は必要な時だけ言う。相手に注意したり、提言したりする時も、ある前提のもとで発話するのである。つまり次のように分析することができる。

(108) 好好努力（加油！）。（頑張れ）—— 相手が努力していないのを含意する。

(109) 快跑。（早く走れ）—— 相手が走っているのが遅いのを含意する。

中国語では、「好好努力」（頑張れ）のような励まし言葉は、具体的な状況における発話であることが殆どである。この場合上下関係が問題になり、話し手と聞き手の関係により、失礼になる時がある。失礼だと見なす理由は、相手を励ます行為は聞き手にとって、利益と見なされるかもしれないが、励ますという実際の言語行為は話し手が聞き手より一層権威があるように見え、また、知識・経験・能力などにおいて、聞き手に勝ることを当然としているために、Leechの謙遜と是認の両方の原則に違反するということがあるからである²⁸⁾。中国語では、挨拶表現の使われる場面はとても限られている。例えば、(108)の表現を中国語で、後輩或いは同じ立場の同僚から言われたら、抵抗感が感じられるだろう。しかし、日本語はそれほどではないようである。

以上の分析を通して、中国語では、聞き手の利益のためになるなら、話し手からの一方的な勧めは丁寧になることが分かる。言語形式では、否定疑問形をあまり使わないのが特徴である。逆に、日本語の事情は「聞き手の私的領域」という要素を考慮するのが特徴で、聞き手の選択権・聞き手の意志に関わるものは聞き手が断わりやすい形にするのが丁寧だということである。勿論、気配りの原則に従い、聞き手の利益になるため、話し手の一方的な勧めが丁寧である場合もある。

3.5.5 勧め文と依頼文の相違及び連続性

勧め文は依頼文に隣接し、場面や文脈からすれば一部重なるところがあり、「依頼と勧めが表現

28) 競技の場合の「加油！」は慣用化され、失礼ではない。中国語で相手に励ます場合、相手によい結果になるよう願う祈念の性格が強いのに対し、日本語の場合は自明の事柄の陳述の型をとる傾向にあるということである。例えば、相手に励ます時、日本語の「頑張って！」に対して、中国語のほうは、「祝你成功！（成功を祈る！）」という挨拶するのが普通である。

上連続的である（沖1995:49）。利益関係から言うと、依頼は話し手の利益になるのが主であるが、勧めは殆ど聞き手の利益である。依頼文は聞き手の利益のためになる場合、たまたま依頼することは話し手の責任感がかかっていることが多い。依頼と勧めの連続性とは具体的に「勧誘文」と「勧め依頼文」に現われている。例えば、次の「勧誘文」は聞き手に話し手と一緒に行動するのを勧めると同時に、聞き手に一種の要求だと見なすことができる。

(110) 早く行こう。

「勧め依頼文」は勧めを含意する依頼文のことであって、相手に依頼すると同時に相手の利益にもなるのが特徴である。

(111) こちらのレジが空いてますので、どうぞこちらをお願いします。

3.5.6 勧め文と命令文の相違及び連続性

勧めと命令については言語によって多少違いがある。日本語では丁寧度から言うと「命令と勧めは連続しており、程度の差である。聞き手にある行動を取るように要求する点で同じであるが、勧めと命令とは、要求の仕方の丁寧さが違う。「すすめ」は丁寧な要求である」（仁田1991:160）。命令は聞き手に選択させる権利を与えないが、勧めは聞き手が話し手の要求に従う義務がないため、断わる・選択する権利を持っている。中国語では命令と勧めの違いは丁寧度、語形式から区別するのが無理なところがあり、発話の場に依存する可能性が大きい。

勧め文と命令文の隣接関係は具体的に「狭義の勧め文」と「相対的命令文」に現われている。例えば、(69)の例文。

(69) You choose.

は言語形式を中心に判断すれば、「相対的命令文」であるが、相手の利益になるという立場から観察するなら、「狭義の勧め文」になるのである。

3.6 まとめ

文の意味を考えるには、まず、形式の意味（主として主文末における意味）を整理しておくことが必要であるが、それだけでは不十分である。というのは、一つの形式でもその現われる環境によって、意味なり機能なりが違って来るからである。

日本語では、命令形の使用はほぼ命令文（「絶対的命令文」、「相対的命令文」）であることを約束するが、中国語や英語では命令形が命令文以外に、依頼文、勧め文などの発語内行為を遂行するにも使われている。

まず日本語の例を見る。

(112) どうでも好きなように書きなさい。

は命令文の形式であるが、相手の利になるのが特徴で、「相対的命令文」で、

(113) 帰れ！

は話し手の利益になるため、「絶対的命令文」である。日本語では、命令文と勧め文が表現に連続的であることが言える。

中国語は動詞の活用変化がないため、形態から機能をはっきり決められない。形態が同じで、命令文と勧め文両方である可能性があるが、それは文脈で判断するしかない。例えば、

親が子供に向かって、

(114) 吃！（食べなさい！）

という文は命令で、お客さんに向かって言うなら、

(114) 吃！（召し上がって）

は勧め文である。

英語は言語形態からいうと、命令文と勧め文は共に動詞そのままの形を使っているが、主語を省略することと、主語を省略しないこととは丁寧度が違うようである。

ある夫婦がどのレストランで食事をしようか思案している。夫が言う。

(69) You choose. (君、選べよ)

(69) は直接命令文であるが、ここでは語用論的に考えれば、Leech (1983) の言うところの話し手にとって有益なものであるから、「通常完全にポライトであると見なされ」(Thomas 1995: 訳書170ページ)、相対的命令文である。

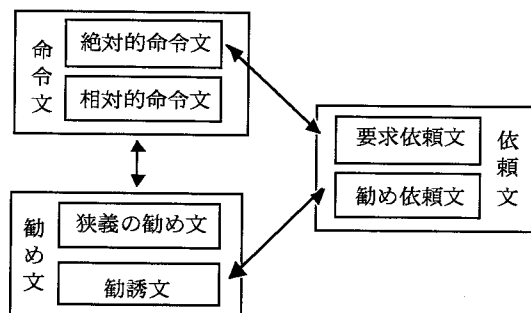
(115) Go away! (帰れ！)

(116) Bugger off! (失せろ！)

(115)、(116) は命令文で、英語の命令文は主語を顕在化させない。

以上の分析に基づいて、命令・依頼表現の相違関係を次の図にまとめる。

図<3-6>



以上は命令・依頼表現のそれぞれの分類からお互いに表現上連続的であることを指摘した。命令・依頼表現の間の境界は曖昧だと言われているが、その曖昧さというのは命令・依頼表現の間は連続的であることによるものである。また、命令文、依頼文、勧め文の内在的段階差にもよるのである。それぞれ以上で見たように言語形式の語彙的本来の意味と、実際の場面における発話の意味としての行為要求の種別は必ずしも一致しない。行為要求の種別と形式の本来的な意味とは別次元の事柄だと考えたほうがいい。

§4 対人関係による命令・依頼表現の分析

4.1 先行研究

4.1.1 語用論的原則——Leechの丁寧さの原則

Leech は協調の原理と丁寧さの原則について、次のようにまとめている。「われわれが何を言うかについて調節を行い、それによって何らかの想定されている発話内行為的、ないしは、談話についてのゴールに貢献するという機能を有する。しかしながら、丁寧さの原則の方がこれよりも高次の調節的機能を有していると論じることができよう。つまり、社会的な均衡と友好的な関係を維持するという機能であって、そもそもわれわれが自分の対話者が協調的に振る舞っていることを前提にできるのもそのことの故なのである」(Leech 1983: 訳書114ページ)と言っているが、なぜ丁寧さの原則は社会的な均衡と友好的な関係を維持するという機能を持っているのか疑問である。Leech の丁寧さの原則は、言語事象を理解するための理論的出発点としては、多少問題がある。

次は、Leech の丁寧さの原則の中の気配りの原則と寛大性の原則 (Leech 1983: 訳書190ページ) について考えてみる。

4.1.1.1 気配りの原則

- (a) 他者に対する負担を最小限にせよ。 [(b) 他者に対する利益を最大限にせよ.]

気配りの原則に関しては、相手に同じ依頼に対し、発話状況によって表現が丁寧であろうと無愛

想であろうと相手にかかる負担は変わらない。丁寧な言葉遣いをしたほうが無愛想に話すより相手の負担が小さくなるとは必ずしも言えないのである。例えば、知らない人に

(117) すみませんが、財布を盗まれたので、千円を貸してください。

(118) すみませんが、財布を盗まれたので、千円を貸していただけませんか。

のような依頼は相手にかかる負担は表現の丁寧さとはあまり関係がないようである。

相手に依頼する行為（かける負担）は丁寧さとの間にどんな関連性があるか根本から説明しておく必要がある。

4.1.1.2 寛大性の原則

(a) 自己に対する利益を最小限にせよ。 [(b) 自己に対する負担を最大限にせよ。]

寛大性の原則は話し手のみに焦点を置き、話し手が利益損失、犠牲にしている印象が強い。もし、話し手と聞き手の間のやりとりで、いつも自己への負担を求めているような人がいるとしたら、その人はすぐに退屈になるし、長く相手との付き合いは続かないだろう。そして、現実的に特別に変わっている人でない限り、このような人間はいないはずである。しかし、現実のコミュニケーションと発話では、大体 Leech の丁寧さの原則が守られている。そうすると話し手のほうは利益ばかりを損することになるため、人間の本能に反することになる。Leech の主張はただ人間の普遍性に注目し、人間の言語行動の理想的な状態だけを述べているのである。丁寧さの原則を根本から説明する必要がある。

Leech の丁寧さの原則について、ここで強調したいのは、物にしても、人間にしても、表と裏の両面を持っていて、話し手と聞き手の利益関係の比重がやりとりの前と後と同じでないといけないということである。つまり話し手と聞き手の利益の相互的な立場から考えるべきである。話し手の犠牲する部分を一方的に強調するだけでなく、同時に話し手の得た利益の面も論じなければいけない。本論文は基本的に Leech の主張に賛同するが、ただし、なぜわれわれは丁寧さの原則を必要とするか、なぜ皆それを守るかについて表面だけでなく、もっと広く社会的・心理的な配慮を取り入れた形で適用してみる必要があると考えている。

4.1.1.3 語用論的尺度

Leech (1983: 訳書178ページ) はある一定の発話状況にとって、適切と思われる気配りの程度と関連して、三つの尺度を考案した。

i. 負担・利益の尺度

この尺度では、提示された行為 A が話し手または聞き手にとってどれ程の負担または利益をもたらすかが評価される。

ii. 選択性の尺度

この尺度では、話し手が聞き手に対して許す選択の余地の量に応じて、発話内行為が配列される。

iii. 間接性の尺度

この尺度では、発話内行為を発話内行為のゴールに結び付ける（手段・目的解析による）経路の長さに関して、話し手の観点から、発話内行為が配列される。

ここでは主に i の負担・利益の尺度について考える。負担・利益の尺度について Leech は次のように説明している。

負担・利益の尺度の具体的な意味は、話し手にとっての負担／利益と聞き手にとっての負担／利益の二つの値は反比例して変化するということである。つまり一方にとって肯定的な立場は、必然的に他方にとっては否定的な立場を意味するからである。話し手にとって利益であるものはすべて聞き手にとって負担であり、話し手にとって負担であるものはすべて聞き手にとって利益である (Leech 1983: 訳書179-180ページ) という。

表から見れば、こういう話はプラスとマイナスのような話であるが、実はよく考えてみると奇妙な感じする。つまり人間は本能的に自分に有利なことを選び、自分に負担をもたらす行為を避けるのである。それでもなぜわれわれは丁寧さの原則を守るかについては疑問を持つ。

日常の買い物の場面を思い起こすと、必ずしも話し手は利益を受け、聞き手は損をするということではない。

(119) リンゴをください。

(120) 新宿までの切符一枚お願いします。

のような依頼文はどちらが損をしたか、どちらが利益を受けたかは判断しがたいだろう。話し手と聞き手がお互いに自分の欲することを手に入れ、それぞれの目的を達成し、満足したものと考えられる。

Leech は「負担・利益の尺度には話し手と聞き手の相対的な立場についての暗黙の賃借対照表が備わっており、均衡関係を維持することが望ましいという無言の仮定もまた存在しているように思われる。そうなれば、感謝や謝罪のような発話のゴールは、話し手と聞き手の均衡関係の回復、あるいは少なくとも不均衡関係の軽減であると考えることができる」（訳書18ページ）と述べているが、ここで言う負担・利益の尺度は Leech の丁寧さの原則との関連は明らかにしていない。

負担・利益の尺度を考える時、ただ表の現象に迷わされるのではなく、表と裏を両方考えなければならぬ。つまり、表で話し手にとって負担であることは裏では話し手にとって精神的な満足感²⁹⁾を与えることになる。逆に聞き手にとって表では利益をもたらすことは、裏では精神的な負担をもたらすことになるのである。こう考えれば話し手はただ一方的に負担をかけられたのではなく、

聞き手もただ利益を得たのではないということになる。お互いに自分が求めているものが手に入り、満足したのである。そうしたら表で聞き手は相手の依頼に応じて、負担がかかっても、精神的な満足感を得たので、文句はないし、話し手は自分の要求を達成したが、通常で利益を得た人は相手に感謝をしなければならないという社会的なルールに束縛されて、精神的な負担を負わされたのである。その結果、話し手と聞き手がやりとりをする前の利益関係とやりとりをした後の利益関係が均衡的に保たれている³⁰⁾。丁寧さの原則はあくまでも話し手は自分の目的を達成するためのストラテジーの一つであると言える。昔の実物交換と今の商業取引きの例でいうと、お互いに自分にとって利益があると認めないと商談が成立しない。Aさんにとって利益のある取引きは、必ずしも Bさんにとって損だと意味することはない。お互いに利害もなく、もとの利益関係の均衡が保たれ、納得の行った取引きだと考えられる。

4.1.2 Brown & Levinson (1978) による丁寧表現の分析

4.1.2.1 Brown & Levinson の丁寧さの方略

Brown & Levinson は Goffman (1967) の社会学に基づき、「face」(社会的に認められた自己イメージ) という概念を用いて、丁寧さの現象を分析した。「face」には積極的「face」と消極的「face」の二種類がある。積極的「face」とは自分のありかた、行為を積極的に他人に認められたいという願望であり、消極的「face」とは、自分のありかた、行為を他人に拘束されたくないという願望である。各個人は「他人から干渉を受けたくない」という願望 (negative face want) と「自分を相手に認めてもらいたい」という願望 (positive face want) とを持っており、これらの願望の実現を妨害するような行為 FTA を何らかの形でその妨害の力を緩和させる努力がなされるとする。そして、話し手が「face」を脅かすような行為をした場合、その人の「face」を守るために行う修復行為を「丁寧な行為」という。

Brown & Levinson は FTA の度合を左右するのは、社会的要因であると考え、次のように分類した。

- i. 話し手と聞き手の社会的距離 (D) (対称関係)
- ii. 話し手と聞き手の相対的権力 (P) (非対称関係)
- iii. 文化によって異なる押し付けがましさの程度 (R)

Brown & Levinson の理論の特徴は、丁寧な言語行為の動機が話者の「フェイス脅かす行為」にもあることに注目した点にある。この観点から見ると、丁寧語法が対人関係の調整であり、どのような社会にも普遍的に存在する要請に答えるための言語手段であると言える。

29) 物質的な利益を聞き手からもらうこともある。社会学では、こういうやりとりを通じて、人間関係を維持して行くのである。特に中国では日本と違って、相手に依頼事をしたり、相手に利益をもたらしてあげたりすることにより、人間のネットワークができて、社会が築かれているのである。

30) ここでの議論は話し手と聞き手とのやりとりが成立した場合の話であるが、もし、一方的に聞き手の負担になるならば、聞き手は断わる戦略を取るのが普通である。

また、Brown & Levinson の定義は、話し手が相手に負担・非難・反感などを喚起する行為を行ったら、これらの行為を相手の自己イメージと切り離し、別の仕方です「face」を救済する可能性を残しているという点で、丁寧な行為の本質をよりの確に捉えている。つまり、相手に負担をかけたら、謝罪したり、拒否の可能性を開くことで、相手の自己イメージを救済するのである。

「face」を脅かす行為をする際のストラテジー

Brown & Levinson によれば、話し手がFTAをすると決めたら、四つの可能性がある。

- ① 何も緩和策を講じずにむき出しのまま (bald-on-record) FTAをする
- ② 積極的ポライトネスを使って、表に出して (on record) FTAをする (積極的ポライトネス)
- ③ 消極ポライトネスを使って、表に出してFTAをする (消極的ポライトネス)
- ④ その行為をしていることをはっきりとは表にださないで置く (off-record)

もし、話し手がフェイスへの脅威の度合いがあまりにも大きいと判断すれば、その FAT を全然しない場合もある。

4.1.2.2 Brown & Levinson に対する批判

Thomas (1995: 訳書 192 - 193 ページ) は Brown & Levinson のポライトネス理論に対して、主に次のように批判する。

- a Brown & Levinson の説明では、ある行為が話し手または聞き手のどちらかのフェイスにとって脅威になると言うが、しかし、実際には、多くの行為は話し手と聞き手に同時にフェイスを脅かす可能性がある。
- b Brown & Levinson は、積極的ポライトネスと消極的ポライトネスは、相容れないものだと言っているが、現実には、一つの発話が同時に積極的フェイスと消極的フェイスの両方に向けられているということもある。
- c 相手のフェイスに対する脅威が大きくても、親しい友人の場合、様々な下位集団の中では直接的な言い方がされる例がある。

以上の指摘のほかに、Brown & Levinson は聞き手に影響を及ぼす行為 (命令、要求、奨励、脅迫、警告、挑戦など) を聞き手の消極的フェイスを脅かす行為というが、しかし、相手に要求する時、依頼する時必ずしも相手のフェイスを脅かす行為になるとは言えない。例えば、次の例。

(121) 先生の発想は面白いですね。ぜひその話を詳しく聞かせてください。

この例は聞き手のフェイスを脅かすというより、聞き手に精神的満足感を与え、聞き手を認める積極的フェイスであると言える。

また、相手の「フェイス」を脅かす行為をしたら、修復行為をする時としない時があるが、何を根拠に決めるのかは「丁寧な言語行為」と「フェイス脅かす行為」の間の関連付けがはっきりしない。

4.2 対人関係原則

ここでは Leech の利益・負担の尺度について、もう少し深く考えてみる。

人間が相手とやりとりをする時、普通は「付き合いの原則」を守っていると考えられる。

4.2.1 付き合いの原則

(122) 話し相手がやりとりをする時、最低としても、二人の間の最初の利益関係を維持しなければならぬ。

(121) の例は相手に課す負担が大きく見えるが、具体的に相手に指示している行為が存在せず、逆に相手への依存度の強さを示すところから、「頼み」とする相手の存在をより重く見る態度に繋がり、より丁寧な敬意の表明を表しているのである。一種の儀礼的な表現なので、最初の利益関係とのバランスをうまくとれたというか、或いは相手に最大の負担を見せかける反面、相手に最大の精神的な満足感を与えたので、相手との付き合いがうまく行ったのである。次の例は聞き手が学校の学生部長先生に用があり、会いに行ったら、学生部長が偶然二階にいたので、事務の人に二階のほうへ案内された時の発話である。

(123) すみません、ちょっと二階へ。

(123) の依頼は、話し手は聞き手に負担をかけた（一階ではなく、二階に上がってもらうこと）ので、最初の利益関係のバランスがくずれたのである。それを修復するため、話し手が表現上で、低い姿勢で、「すみません、ちょっと」のような謝罪する表現、相手の負担を軽減する表現を使って、補償行為を取るのである。聞き手が一階から二階へ上がらなければならないので、表の利益を損失したが、話し手から謝罪され、精神的な満足感をもらったので、バランスを保っている。逆に話し手が聞き手の負担を軽減する表現を使うため、労力がかかったが、相手に依頼する行為を成功させたのである。だから、聞き手にかける負担が大きければ、聞き手への満足感も大きく与えなければならない。また話し手は行為を成功させるために、表現上労力がかからなければならない。「付き合いの原則」とここでの議論は具体的に日本語と中国語の副詞の話になると、もっと分かりやすくなる。これについては、第五章を参照されたい。

相手に利益を与えるなら、話し手が表現上の労力をかける必要もなくなる。例えば、日本語の「頑張って!」「どうぞ、召し上がれ!」、英語の「help yourself!」、中国語の「吃!吃!」（食べて!）

食べて！)「加油！加油！」(頑張れ！頑張れ！)は直接的な命令文を使っている。中国語と英語は動詞の原形を使って利益関係を重視するが、日本語は利益関係を重視すると同時に社会的関係(上下関係、親疎関係)をも重視するため、人との関係を上下関係で捉える傾向があり、目上の人、よその人に尊敬語の命令形を使っているのである。

利益と負担の両面性を考えないと、Leechの気配り原則で以下の例を説明することができない。

- (124) 两位辛苦，我老婆头一回上市里去，路上多包涵。(お二方ご苦労様です、うちの女房は初めて街に行きます、道中どうぞよろしくお願いします)(浜田1995:73)

この「路上多包涵」(道中どうぞよろしくお願いします)は、話し手が相手に「市里」(町)へ行く途中、「女房」の世話をしてくれるように依頼しているのである。具体的な依頼行為まで指示していないが、当然万一何かがあったら、頼まれた人が責任を取らなければならず、実際に相手に負担をかけている。更にここでは副詞「多」(多いに)を使って、相手に対する負担を最大限にしている。この例は明らかにLeechの気配り原則に違反している。この例に対する解釈は中国語の話者の意図としては、「相手への依存度の強さを示すところから、『頼み』とする相手の存在をより重く見る態度に繋がり、より丁重な敬意の表明と受け取られる」(木村1987:63)のである。つまり、相手に最大の負担をかける反面、相手に最大の精神的な満足感を与え、相手に具体的な依頼事を指示していないため、裏利益³¹⁾のほうが相手にとってもっとも好都合である。

日本語でも同じような表現が見られる。例えば、日本語の案内文の中の一節である。

- (125) つきましては、きたる×月××日午前×時から、新校の校庭において上棟式を挙行したいと存じます。

御多忙中恐縮でございますが、なにとぞ御臨席くださいますよう、御案内申し上げます。

次は転任挨拶だが、

- (126) 幸い後任の会計課長××氏とは多年にわたる刎頸の交りで、常に私が尊敬と信頼をしており、豊富な経験と卓越した識見をお持ちのかたでありますので、なにとぞ私以上に御指導御鞭撻を賜りますようお願いします。

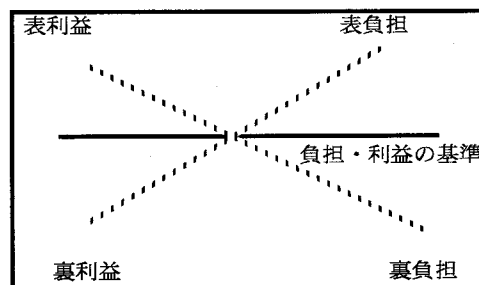
(125)と(126)の文は、ともに表現と意味的に相手に最大の負担をかけているのである。

(125)、(126)の説明は(124)と同じである。

話し手と聞き手の利益・負担の関連は次の図のように示すことができる。

31) 裏利益、裏負担の定義については、3.3.1.2を参照。

図<4-1>



上の図で言うと、話し手（聞き手）にとって、表利益である同時に、裏負担があつて、話し手（聞き手）にとって、表負担である同時に裏利益があるということを表すのである。このように話し手・聞き手が依頼する前と後と利益関係が最初の状態であるように保つというのは「利益関係の均衡性原則」と呼ぶ。この原則は、中国語と日本語のモダリティ副詞を解釈するのに役に立つ。

4.2.2 利益関係均衡性の修復

Goffman (1971) によれば、我々は聞き手にある種の危害（virtual offence）をもたらす行為を行った時（或いは行おうとする時）その行為によってもたらされる人間関係上のダメージを最小限にしたり、或いは自己に対する否定的評価を引き起こさないために、言語・非言語による修復行動を取るという。このような修復の言語・非言語上のやりとりは「修復のやりとり」（remedial interchange）と呼ばれ、修復は「詫び」・「依頼」・「説明」（account）の行為によって行われるという。実際の言語行動では、修復行動は単一の発話として現れる場合もあれば、やりとりの中で複数の発話として現れる場合もある。

4.2.2.1 依頼行為自体で関係を修復する

話し手と聞き手の間での依頼行為が発生する前の初期状態は、両者の間で何の利益関係も発生していない平衡関係であると想定できる（ただし、以前の出来事による潜在的な不均衡があることを除外する）。話し手が聞き手に依頼をしたら、聞き手との利害関係上の不均衡が生じる。つまり、依頼行為というのは話し手が聞き手に負担を与え、利益を得るという事態が発生する。しかし、話し手が自分の依頼を成功させるため、依頼表現自体に不均衡利益を修復する意図、心情を表明しなければならない。依頼行為のモデルは次のように想定することができる。

(127) 初期状態³²⁾ 依頼行為（指示³³⁾ 内容＋修復する意図、心情）

というのは、話し手が聞き手に依頼をすると同時に、お互いの均衡的な関係を強調しない限り、その依頼行為は成り立たないかもしれない。

32) ≡は「ほぼ等しい」を意味する。

33) 話し手が聞き手に要求をすることをここで「指示」という言い方をする。指示には話し手が聞き手に対する命令・依頼・勧めが含まれている。

例えば、電車の駅の改札口で、駅員さんに一万円札をくずしてもらう時、

(128) すみません、ちょっと両替してもらえませんか。

という依頼発話の下線のところは話し手の修復する意図、心情を表している。というのは駅員に両替してもらうことは、もともと駅員の義務ではないため、言葉で利益関係を修復する必要がある。しかし、表では、話し手のほうが利益を得たように見えるが、話し手が両替してもらうというのは、電車の切符を買うのだと考えられ、聞き手にも利益をもたらしたので、この依頼行為が話し手と聞き手の間で成立し、やりとりの後お互いに利益関係が均衡である。つまり、(128)の依頼に対して、お客は駅員に負担をかけたが、同時に電車会社に利益をもたらしたのだと思えば、依頼する前の利益関係と依頼した後の利益関係はもとの状態に回復したため、改めて依頼した後にお礼或いはお詫びする必要がない。しかし、挨拶・儀礼・人間関係重視の日本では、このタイプの修復関係が少ないのに対して、中国では、多く見られるようである。依頼後の修復手段について、次の4.2.2.2で論じることにする。

4.2.2.2 依頼行為の後に修復関係を強調する

森山卓郎 (1999a: 78 - 79) は不均衡処理による関係修復モデルを次のように規定する。

初期状態→利害を含む事態→関係修復（顕在化）→応答（否定）→回復状態				
話し手：0	-X	-X	-X	(0)
言語行動：		「不均衡」	↑ 「否定」	
聞き手：0	+X	+X	+X	(0)

(+-はそれぞれ利害関係を表し、Xは利害の事態内容を表す。森山1999a: 79)

つまり、森山はお礼とお詫びの立場から、その修復関係を規定するのである。依頼行為の立場から考えれば、(127)のモデルになるが、普通、実際の利益関係（実際得た利益と害のこと）がよく目立ち、よく重視されるため、その実際の利益を得た側がお礼なり、お詫び行為をするのが普通である（これはまた、個人・文化・親疎関係によって、お礼とお詫びの行動を取るかどうかは違う）。例えば、謙遜な人と傲慢な人の行動は違う。中国と日本という文化が違う国の場合、それぞれ行動も違うと思われる）。よって、(127)のモデルを次のように拡張することができる。

(129) 初期状態≡[依頼行為（指示内容+修復する意図、心情）+関係修復（お礼かお詫び）]

先ほど(128)の依頼行為に対して、話し手側のほうが得た利益が目立つため、話し手がお礼を言う場合もある。

(130) 客：すみません、ちょっと両替してもらえませんか。

駅員：（お金を渡す）

客：ありがとう。

挨拶表現を重視する日本の場合は、表ではお客が利益を得たように見えるので、お客は「ありがとう」というお礼を言うのは普通だと思われる。これに対して、中国人は聞き手の義務内のことを要求すれば、改めてお礼を言わないのが日本人と違うところだと言えよう。

「依頼行為自体で関係を修復する」とことと「依頼行為の後に修復関係を強調する」ことは Goffman (1971) の「修復のやりとり」にまとめることができるが、この二つの違いは単一発話による「修復」と談話による「修復」というところの違いによるのである。

4.2.2.3 依頼行為の後の補償行為

話し手が聞き手から得た利益が大きいと思われる時、依頼行為の後に補償行為を行われるのが普通である。実際的な利益関係は顕在的で、認定しやすい。精神的な満足感は潜在的で、認定されにくい。両者の利益関係がその場で修復ができなければ、言葉的に両者の間の不均衡が解消されても、その利益関係の事実は残る場合、賠償やお返しといった補償行動を取らなければならない。ただし、その均衡関係が保たれることがすぐその場で実現できるというわけではない。いつまでにその均衡関係が回復できるか、その時間的にいろいろな差が認められ、中国語と日本語の間はかなりの相違があることに注意が必要である。日本では、均衡関係を回復させるために、言語的にも、物質利益的にも、明示的な手段を取るのに対し、中国では明示的、非明示的の二種類の方法を取るのが普通である。

日本人は必ず明示的に言葉か物質的な手段で短期間で均衡関係を修復する。修復手段に贈答品を与えたり、同情を示したり、特定の協力を申し出ることなどが考えられる。また、更に二段階に分けている。まず「即席的感謝」と言って、その場で、相手の恩恵行為に感謝する。二段階目は「効果的感謝」と言い、相手から受けた恩恵によって、自分にとってどのぐらいの利益があったか、その効果についてまた、再会する時、相手に報告し、感謝する。この二段階目の感謝はちょうど相手にとっても、気になることで、提供した行為が相手にどのぐらい効果をもたらしたか知りたいところである。このような日頃の「愛顧」や過去の好意に対する謝意表現については、日本語にはあるが、中国語にはない。これは日本人の人間関係が、これからの関係を作るという相互依存の状態に入ることを暗黙のうちに認めているのであり、その関係は過去から現在、そして未来へ続くものという暗黙の了解がある。つまり、この「効果的感謝」が「日本人の継続的な人間関係を象徴しており、いわば「人間関係円滑化の連結器」とでもいう機能を有しているのである」（阿部1999:102）。

「効果的感謝」は日本の社会では、義務づけられた習慣であり、その場で感謝の言葉がほしいというよりも、日本人としてはやはり過去に共有した時間について確認しあいたい気持ちがあり、互いの間の繋がりを確認し、その関係を損なわないことを優先するのが日本人の習慣である。このように日本では、言葉で表現するか、物を送って、お礼をするかの行為によって、明示的に不均衡的な

関係を修復するのである。

中国人は均衡関係を修復するには特に期間に関しては気にせず、その場で返すか、ずっと保留して、相手の必要な時に返すかということである。日本語の「効果的感謝」の段階はないが、もし明示的にしたら、別な意味が捉えられる。つまり、済んだことに対して、わざわざ改めて感謝するのは、相手から受けた恩恵が自分にとってどのぐらい重要かというのを強調し、暗黙にもっともっと提供してほしいという間接要求になるのである。中国の人間関係は、内容重視、テーマ重視であり、過去に言及する感謝や詫びの言い方はないのである。中国語の「即席的感謝」はその時その時で「精算」され、その後に再び言及されないのである。

丁寧な言語行為の動機が話し手と聞き手の間の利益の調整手段の一つだと言えよう。

以上のようになぜここで物事の両面を重視するかというと、もしこれを認めるならば、次の二つのメリットがある。一つは、「付き合いの原則」から、話し手が聞き手に依頼をする時、依頼行為を成功させる戦略的ストラテジーを考えることができる。二つ目は話し手の発話した表現が命令文であるか、依頼文であるか、一つの判断する基準になれるのである。

4.2.3 依頼の目的を達成するためのストラテジー

人に何かを頼むという依頼行為は、相手を動かして特定の行動をさせるという目的が達成されなくては意味がない。話し手はある状況で、自分の目標を達成するために、意図的に相応しい言い回しを選んだり、相手の顔を立てたり、会話を効果的に進める心理的な駆け引きをしたりする。また、話し手が聞き手に依頼をする時、絶えず人間関係や場に対する細かな配慮をするのである。

発話行為遂行実態を見てみると、我々は種々の表現を用いて、当該発話行為を遂行しようとしていることに気付く。ここでは、このような発話行為遂行に伴う表現上の工夫をストラテジーと呼ぶことにする。同じ頼みをするにも、効果的に行うためのやり方、即ちストラテジーはいろいろ有り得る。どのぐらい丁寧な言葉づかいをするか、どのような順序で話を進めるかなどのストラテジーは様々なレベルに及ぶ。まず、やり取りを成立させる状況を以下のように規定する。

- (131) お互いに自分自身に有利だと感じる時、或いは少なくとも自分の利益を損失することなく、お互いの均衡関係を保つことができる場合。

次はそれぞれ話し手が依頼の目的達成・対人配慮に関するストラテジーと聞き手の立場から考察する。

4.2.3.1 話し手の立場から

話し手が依頼の目的を効果的に達成し、そして相手への配慮を表すため、二人の間の利益のバランスが崩れないために適当な表現を選び、次のストラテジーを考慮する。

- ① 他者に対する利益を最大限にする。

- ② 話し手が依頼事の必要性を強調し、相手に最大の精神的満足感と優越感を与える。
- ③ 他者に対する負担を最小限にする。
- ④ 利益交換を明示（暗示）する。
- ⑤ 緩和策を講じて、相手の共感を得、信頼や親しみの気持ちを表す。
- ⑥ 自分の要求を曖昧にする。

以上の戦略は Leech と Brown & Levinson の考えも参考に、中国語と日本語の対人関係を考慮した上で提起した戦略である。次は語用論と統語論の立場から、上の戦略について検証する。

4.2.3.1.1 他者に対する利益を最大限にする（自分に対する利益を最小限にする）

①の戦略は Leech の気配りの原則と寛大性の原則に当てはまる。用例はよくコマーシャルとか、商品の宣伝の時に見られる。お客さんが得するという印象を強く訴えることによって、自分の商品をアピールするのである。例えば、次の例。

(132) 「旅の足」から「引っ越し」までレンタカー利用で得々生活。

4.2.3.1.2 話し手が依頼事の必要性を強調し、相手に最大の精神的満足感と優越感を与える

話し手が依頼事の必要性を強調する方法は次のようなものがある。「繰り返し頼む」、「事態の重大性を印象づける」、「恐縮の意を述べる」、「相手から受ける恩恵を明示する」などが挙げられる。

例えば、

(133) 隣の人が倒れたので、すぐ来てほしいので、頼みます。お願いします。

のように、下線のところで、依頼の働きかけを一度ならず、二度、三度と行くと、相手に与えるインパクトも強くなる。

(134) あなたがいないと生きていけないから、ぜひそばにいてほしい。

相手にそばにいてほしいという客観的は状況を述べるだけの場合より、その依頼の具体性と重要性を強調し、相手に自分の望む通りに行動を起こすよう訴えたと、効果が大きくなる。

また、話し手が自分の依頼事の重要性を強調することにより、相手に精神的な満足感を与えることにも繋がる。

(135) 你发发慈悲，可怜可怜我吧！我种的是潘大先生的田，田租还没有还呢！（奥様、お慈悲

を出して私を哀れんでください！私は潘大先生の田を耕していますが、子作料をまだ払ってないんですが）（豊1984）

上の例は、話し手が自分の地位を低め、哀れな自分を強調することにより、相手に優越感を与えるのである。日本語では副詞「どうか」によって、話し手の哀れな気持ちを表す用法がある。

(136) どうかこの子の命を助けてください。

恐縮の意を述べるという言い方は、日本語では「すみません」、「恐れ入ります」、「申し訳ありません」、「悪い」などのような謝る言葉が殆どである。中国語では、謝る言葉「对不起」（すみません）、相手に害をもたらすことを言及する言葉「打搅你」（お邪魔します）、「麻烦你」（ご迷惑をおかけします）などの言い方もあるし、「不好意思」（恥ずかしい）のような自分のフェイスに影響することを強調する言い方もある。

中国語で「给我〜」（私に〜してくれ）、「帮我〜」（私に〜手伝う）という動詞は日本語の授受表現に近く、これを使うことにより聞き手が恩恵を与えてくれることを明示的に表すことができる³⁴⁾。

(137) 请帮我买一张去西安的机票。（西安までのチケットを一枚お願いします）

(137) の「帮」の意味は手伝うの意味で、話し手が相手から恩恵を蒙ることを明示することによって、相手を立てることになる。

②の「話し手が依頼事の必要性を強調し、相手に 最大の精神的満足感と優越感を与える」についてよく見られるのは、話し手が聞き手に依頼をする時、できれば相手をたて、最大の精神的満足感と優越感を与えるということである。聞き手をたて、話し手より一層権威のある立場に置き、聞き手が知識、経験、または判断等において、話し手に勝つことを認め、聞き手が十分話し手の要求

34) 中国語の恩恵を明示する表現「给我〜、帮我〜」は話し手が聞き手から利益を蒙るところに視点があるが、日本語の場合は、話し手からの丁寧な要請（〜していただく）と聞き手から利益を蒙る表現（受給）（〜してくれる）がある。中国語での「给我〜、帮我〜」は命令・依頼表現で言語形式上必ずしも必須的な要素ではない。その代わりに、日本語の授受表現は命令・依頼表現で義務的で、それがなければ、依頼とならないのである。

(1) a 小李，帮咱买一张票。

b 小李，你去买一张票。

つまり、中国語では「给我〜、帮我〜」を使うことを通して、動作の方向性によって、依頼の意味を表すのである。「给我〜、帮我〜」は明示的に文の中に現われなくても、文の容認度は変わらない。ちなみに「给我〜」は話し手への利益、動作の方向性を強調することになっているため、依頼を表せると同時に、強い命令を表すこともできる。そのかわりに、「帮我〜」は話し手の行為を聞き手に手伝ってもらって、聞き手から恩恵を受けるという意味が組み込まれ、依頼として使われる時「给我〜」より丁寧度が高い。

しかし、日本語の授受表現は文の中に現われるのが義務的である。

(1) a 李先生，切符を買って给我せんか。

b* 李先生，切符を買いせんか。

に応じてくれる可能性があるのを表に出すということは表向きの機能で、それはまた、話し手の目的を達成する最終ゴールに通ずる予備的ゴールなのである。Brown & Levinson の理論によれば、発語内行為には、相手のフェイスを脅かす行為（face-threatening acts (FTAs)）がある。相手または自分自身のフェイスを傷つける可能性を少なくするために、話し手は何らかのストラテジーを用いることができる。われわれが誰かに話しかける時には、相手の積極的フェイスに働きかけ、積極的ポライトネス（相手の好かれたいとか、認められたいとかいう欲求に向けたポライトネス）を用いることがある（Thomas 1995: 訳書185-87ページ）。例えば、次は中国語の例である。

- (138) 刘五一就站起来握我的手, 说老兄公安局的人, 以后小弟有麻烦, 还望老兄照应。(朋1997: 122) (劉五一は立ち上がって、私の手を握って言った。兄貴は公安局の人で、これから弟の私が面倒なことがあれば、またよろしくお願いしますよ)

ここでの「老兄」という親しみのある敬称は、記述の対象になる人を話し手と分離し、上位に置くことによって相手を立てる効果がある。相手を話し手と分離することが丁寧な行為になるのは、相手を自分と対等の対話者と見なすことが失礼にあたるという気持ちを含意するからである。よって、相手に最大の精神的な満足感を与えることになる。話し手は同時に自分自身のことを「小弟」と謙遜的に名乗って、相手と距離をおいて、完全に相手が自分より実力があるのを認め、自分の依頼していることを相手が十分にやり遂げることを意味するのである。

以上のように、話し手が依頼を実現させるために、依頼の必要性を強調したり、聞き手の価値を認めたり、相手を自分より一段高い位置へ持ち上げたり、聞き手から利益を受けることを明示化することなどにより、よりよい感情的環境を作り上げ、常に聞き手を気分よくさせることを意図するのである。

4.2.3.1.3 他者に対する負担を最小限にする

③の他者に対する負担を最小限にするには、相手に依頼することを強制しないこと、依頼に応えなくてもよく、選択権を与えること、依頼の大きさを小さく見せることなどが挙げられる。統語的に中国語では「軽減」表現³⁵⁾などがある。

- (139) 王主任, 请您看看 (看一下) 这份文件。(王主任、この書類をちょっと見てください)

動詞の重ね型は、相手に曖昧な要求表現をするというのは、相手に選択権を与えることによって、相手に依頼する負担を軽減することになるのである。語用論的に中国語と日本語にはそれぞれ次の例が挙げられる。

- (140) 镜智客气地说: “我在这里住, 诸事劳烦你了。 斋饭随便做一些就行, 我吃不多的。”

35) 例えば「～一下」、動詞の重ね型などの用法。

(弁1997: 57) (鏡智は遠慮がちに言った。「ここに泊まらせていただいて、いろいろ迷惑をおかけしました。食事は簡単でいいです。私は少食です。たくさん食べられません」)

(140) の話し手「鏡智」は食事は何でもいい、また少食だということを明確に言うことによって、相手にかける負担の大きさを小さく見せるのを強調する。

日本語の依頼表現には「ちょっと」、「一つ」、「できましたら」、「一遍」などのような言葉を添えて、相手の都合を気にかけていることを示し、依頼そのものにブレーキをかけない用法がある。

(141) すみません、ちょっと静かにしていただけますか。

(142) ちょっと一つ聞いていいですか。

中国語でも日本語でも以上のように、相手にかける負担を小さく見せかけるということは、相手に自分の依頼を飲ませるためであって、依頼を成功させる戦略の一つだと言える。

4.2.3.1.4 利益交換を明示(暗示)する

④の用法は、特に中国語でよく見られる。話し手が依頼を成功させるため、聞き手に具体的な交換条件を提示する。話し手が依頼が叶えられることを条件に、贈答品を与えたり、同情を示したり、協力を申し出ることなどが挙げられる。或いは聞き手が話し手の依頼に応える代わりに、話し手に依頼をするのである。相手に利益を与える明示的な例は、次である。

(143) ~刘总问芦勇: “找我有事?” 芦勇把刘总叫到门外说: “想求你办一件事。” 就把要买内部职工股的事说了, 刘总说: “这好办, 我正想求你用一趟车, 你明天来找我一起办。” (藍1997: 48) (~劉さんは聞いた。「何か用事がある?」芦勇は劉さんを外に呼び出して、言った。「ちょっとお願いしたいことがあります」。それで、内部の社員の株を買いたいことを話した。劉さんは言った。「それなら簡単だ。私もちょうどあなたにお願いがあつて、車を貸してほしい。明日ここに来て、一緒に解決しましょう」)

話し手「刘总」は相手の依頼に応じると同時に、交換条件として相手にも依頼をする。ここでは「利益交換」と名付ける。

次の例は周克芹の小説『断代』(一代かぎり)(渡辺晴夫・劉静(編著)1997: 62-70)の中の一節である。死んだ主人公が現実の世界の生者に働きかけて、ただ自分の火葬の順番を早くするために「走后门」(コネを使う)の腕をふるまう話である。滑稽であるが、中国の現実社会の一面を反映し、利益交換を暗示する例である。

(144) “请把你们场长请来一下，麻烦你了……”

场长来了，一个老头。

“你好呀，老兄！”他向场长打招呼。

场长仔细看了看他的脸，不认识。

“怎么？认不得我啦？我可认得你呀！……你家那个么女子，现在工作怎么样？还满意吧？……哟，忘记啦？那一年你来求县委书记给你解决你么女儿的工作，我正好在大门口遇到你呢！记起来了么？……后来，书记交代下来，你么女儿的工作问题，还是我亲自跑的腿呢！把她分配到蔬菜公司。为那件事，我和商业局的人事科长吵了一架！哈哈……”

场长想起来了，会意地笑了笑。

“今天上午停电，一直到这会儿才来了电。”场长说“这阵正在‘处理’张副局长。快了，接着就轮到你……你们把车子退转去，走左边那条路，绕几步，后门在那边……”

他满意了。对于他，无处没有后门可走。（「どうかおたくの場長さんにちょっとお運び下さるよう頼んで下さい。お手数をかけますが……」

場長がやってきた。年寄りである。「やあやあ、先輩！」彼は場長さんにあいさつをした。

場長はしげしげと彼の顔を見たが、見覚えがなかった。

「どうしました？私がおわかりにならない？私の方がよく存じ上げていますよ。……おたくの、あの一番下のお嬢さん、今のお仕事はいかがです？けっこうご満足でしょう。……あれ、お忘れですか。あの年、あなたがお嬢さんの仕事を世話してほしいと、県委員会の委員長に頼みに来られた時、正門のところでちょうどお会いしたじゃありませんか！思い出してくださいましたか？……あのあと、委員長に言いつけられまして、お嬢さんの仕事の問題も、この私が自分でかけまわったんですよ！お嬢さんを野菜会社にはめこんだわけです。この件で私は、商業局の人事課長とひと喧嘩やらかしましてな！ハハ……」

場長が思い出して、わかったというように笑ってみせた。

「今日は午前中に停電がありまして、今ようやく回復したのです。」と場長は言った。

「今ちょうど張副局長を「処理して」（火葬する）いるところです。もうすぐです。つづいておたくの番になります。……あなたがたは車をバックさせて、左側のあの道を行って下さい。ちょっと回り道をしてもらおうと、裏口があちらにありますから……」

彼は満足した。彼にとって、裏口のない所などないのだ。

主人公は自分の目的を達成するため、昔「场长」（場長）に利益を与えたことを明示し、自分の依頼をかなえてもらうようと相手に暗示する。中国では、「利益交換」というやり方は、お互いに生存しあうための手段とも言える。主人公は「场长」と全く面識がないのにも関わらず、相手との

親しい関係を前提にし、相手との距離を縮め、親近感を作り出す。これは一種の積極的な戦略である。ここでの依頼は話し手が直接聞き手に自分の要求を明示的にするのではなく、「厚かましさ」を感じられない。これは3.4.6.2.2で述べた「場面的」依頼に当たるのである。以上の二例は話し手と聞き手の間の利益関係が均衡するからこそ、依頼が成功したのである。

浜田麻里(1995: 71)にも同じような指摘がある。「中国にいる知人への手紙の中で本を買ってほしいという依頼を述べた後に付け加えられた一文である。

- (145) 在東京有什么事, 望不要客气。(東京に何か用事がありましたら、ご遠慮なくお申しつけください)

自分の依頼に対する埋め合わせとして、聞き手の潜在的依頼を受け入れることを表明し「お互い様」ということを示している」。中国語では「互惠的行為(利益交換行為)が大きな役割を果たしているであろう。互いに頼み頼まれることで人間関係が強固になっていく」(浜田1995: 74)のである。しかし、相手に交換条件を出すという依頼の戦略は、日本人には馴染みにくいようである。

以上の戦略を考慮した上で、商業取引においても、話は成立する。つまり、裏ではお互いに自分にとって、利益があると思っているからこそ、取引が成立するのである。自分にとって、利益が大きいと思いながらも、表面上では相手にもたらした利益が大きいと見せかけるのが普通である。

長谷川真理子(1999: 172)によると、ゲーム理論が非常に大きな貢献をした分野の一つは、協力行動の進化であった。長谷川によれば、Trivers(1971)は非血縁者間の利他行動の進化の仮説を提出し、それは、半ば閉鎖的な集団で、互いどうしが何度もつきあいを繰り返す状況にある時、互いに時間をおいて利他行動をやりとりすることが生じるというもので、互惠的利他行動と呼ばれる。将来においても何度も同じ顔ぶれでつきあう可能性が高ければ、今日、AがBに利他行動をしてあげても、近い将来にBがAに同じことをしてあげるチャンスが回ってくるだろうから、そうすることは、両者にとっては利益となるはずであるという。④の戦略について、動物人間の行動は進化——互惠的利他行動からも説明がつくのである。

4.2.3.1.5 緩和策を講じて、相手と共通の場を持つことを強調し、信頼や親しみを表す

相手への配慮や敬意を表すというのは、信頼や親近感を示すBrown & Levinson(1987)のいうところのpositive politenessという方向である。例えば、依頼の用件を言う前に、敬意或いは親しみを込めた呼びかけを発話の中に折り込む戦略がある。日本では、年配の女性を「おばさん」ではなく、「お姉さん」と呼んだら喜ばしいそうである。逆に中国では、年齢通り、或いは実際の年齢以上に相手を呼ぶなら、敬意を表すことになる。

(144)の例では、主人公は全く知らず、初対面の間長を「先輩」と呼んでいて、自分が相手の仲間内であること、相手との親近感を強調し、相手との良好な関係を作ってから依頼に入るのである。

統語の場合も同じような用法が見られる。例えば、中国語の語気助詞「吧」と日本語の終助詞「ね」が挙げられる（第六章を参照）。

4.2.3.1.6 自分の要求を曖昧にする

相手に依頼、要求することは話し手のフェイスにかかわることで、明確な依頼より、曖昧な依頼は話し手のフェイスを救うことができるし、聞き手にも選択する余地を与えることになる。これは所謂「ぼかし表現」とも言う。統語的な用法としては中国語の動詞の重ね型が挙げられる（第三章を参照）。

(146) 请你帮我开开窗户。（窓を開けてもらえませんか）

動詞の重ね型によるストラテジーでは、話し手が自分の要求内容を最後まで相手にやり遂げてもらいたいとは言わず、途中まで言って、後は相手に察してもらおうと相手の *negative face* を保ちつつ自分の要求を満たそうとするのである。

4.2.3.2 聞き手の立場から

聞き手は相手の要望に応える時、以下のような認識過程を必要とする。

話し手からの依頼 → 聞き手が判断する

[自分にも有利 → 対応する。
	自分にも不利 → キャンセルする（相手の依頼を断わる）

聞き手が話し手の依頼に応えるかどうか、まず、自分の利益と比べ、自分にも有利であれば、話し手の要求に応える。つまり、話し手は自分の依頼を達成するために依頼し、聞き手は自分の目的を達成するために応えるのである。話し手の

(147) 十万円を貸してください。

の要求に応える場合なら、聞き手が十万円を貸してあげたら、また、返してくれるだろうという想定を前提に、まず自分は損をしないだろうと判断する。また、話し手との関係を配慮し、貸してあげたら、また、自分が何かの願いがある時、向こうも応じてくれるだろうという予測のもとで、依頼に応じるのである。逆に、もし、聞き手がまったく知らない人、或いはまったく利益関係がない人であれば、貸してあげないだろう。その時、相手の依頼を断わるのが普通である。普通お金を寄付するということも、表では経済的に損をしたように見えるが、実際は精神的な満足感と社会的名誉を得たのである。

人にもものを頼む場合、同じ話者だからといって、常に同じやり方をするわけではない。依頼の内容や相手との関係、その場の雰囲気などによって、様々なやり方を使い分けているのである。また、話し手が依頼をする時、個々の場において、いろいろな要因を意識的或いは無意識に踏まえながら、人は適切な依頼の仕方を判断する。数多くのストラテジーのレパートリーの中から、その時々

況や目的に合うと思われるものを選んで、取り合わせる。もちろん、ここで挙げたようなストラテジーは、そうしたレパートリーの一部に過ぎない。

以上は依頼を効果的かつ円滑に成功させるためにどのようなストラテジーが用いられ、中国語と日本語の違いについて考察した。

第三章

動詞をめぐる命令・依頼表現のアスペクト的・語用論的解釈

§ 0 はじめに

中国語の動詞の重ね型が命令・依頼表現に頻繁使われる。しかし、これについての研究は多いにも関わらず、殆ど辞書的・文法的な説明に止まっているばかりである。動詞の重ね型の基本的な意味は何か、なぜよく命令・依頼表現に使われるのかという根本的な疑問については、まだ解決していない。

命令・依頼表現は、述語の形式にその特徴が現われるが、中国語においては、動詞に命令法の意味を持つ特殊な語形がないと言ってもいい。とはいっても、中国語の命令・依頼表現には動詞を二回繰り返したもの——動詞の重ね型がよく使われている。

- (1) 先生請帮帮忙。(すみません、ちょっと手伝ってください)

動詞を繰り返して使う用法は、日本語にも見ることができる¹⁾。事象の生起は一回の生起が普通であって、反復は特殊現象であるという認識が働いているから、一回生起は意味的に無標で、複数生起は有標だと言える。言語学でこのようなアイコン的な用法は、類義的によく似ているところもあれば、全然違うメカニズムを持っているところもある。統語的と語彙的に日本語において中国語の動詞の重ね型とよく似ているものに、次のようなものが挙げられる²⁾。

- (2) 腕を振り振り歩く。

- (3) もう学校に遅れそうだから、走りに走った。

1) 動詞の動きの全体的な在り方を規定することによって、日本語の繰り返しについて、森山(1988: 166-167)は次のようにまとめている。繰り返しのよって、動きが固有に持っている素性とは無関係に繰り返しとしての過程が問題にされる。繰り返しの規定には二通りある。一つは「三回、何度も、いくたびか」のように、繰り返しとしての全体量を規定するものであり、もう一つは「いつも、しょっちゅう、つねづね」のように、習慣的な繰り返しを規定するものであると述べている。中国語の動詞の重ね型は以上の二つの特性をともに所有しているが、中国語と日本語の動詞の特徴が違うため、構文的な立場だけから比較するのは無理である。この論文では、語彙的な立場と構文的な立場と両方を考慮しながら動詞に関する繰り返しを考えていきたい。

2) アスペクト的に中国語の動詞の重ね型とよく似ているものに日本語には「反復継続態」(金田1976: 54-55)がある。「反復継続態」はある動作・作用が繰り返し行われることを表す態である(同上)。日本語の「反復継続態」の表し方は、「一つづける」、「一て来る」、「一て行く」などがあるが、中国語の動詞の重ね型と近いのが単独の形が反復継続態を表すもので、

字を書き書きする。

というような連用形を重ねたものに「する」をつけた形が挙げられる。しかし、日本語では、この形を取り得る動詞は限られており、また標準語ではあまり使われていないところから、ここでは省くことにする。

(4) 日本語で言ってみてください。

(2)、(3)はそれぞれ形態的に中国語の動詞の重ね型とよく似ており、(4)は意味的に中国語の動詞の重ね型とよく似ている。

動詞は「動きをあらわすから、アスペクトがある」(高橋1994:11)。動詞の話をするには、アスペクトの話は避けられない。本論文では命令・依頼表現に代表される中国語の動詞の重ね型を取り上げ、それが命令・依頼表現として使われると、なぜ「丁寧さ」を表せるのか、すなわち、その動機づけを考慮に入れなければならないということを論じてみたい。また、中国語の動詞の重ね型を、統語的及び意味的な立場から、日本語との相違を考慮しつつ、その間のメカニズムを明らかにする。

まず、それぞれの動詞の特徴、アスペクトの状況について次に述べる。

§1 中国語の動詞の特徴とアスペクト性

1.1 中国語の動詞の特徴

中国語の動詞について、宮島達夫(1994:427-428)は荒川清秀(1982)の研究を引用して、「中国語では、行為のみに重点を置く動詞が多いということが言えそうだ。中国語で、結果補語が発達している原因の一つは、この辺にあるのかもしれない」と述べている。そして、中国語の動詞は動作・行為のみを表し、結果性を持たないということは、次の文から伺うことができる。

(5) 张三杀了李四两次,李四都没死。(張三は李四を二回も殺したが、李四は死ななかった)

つまり、中国語には完成動詞というカテゴリーはないのである(宮島1994:424)。中国語の裸の動詞は日本語の動詞の原形と同じで、後に何かをつけないとその働きは分からない。

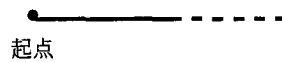
山梨正明(1995:246-247)は行為の境界性と非境界性について、「外部世界の対象を連続的にみていくか非連続的にみていくか、あるいはその対象を境界のある存在としてみていくか、境界のない無限定の存在としてみていくかは、外部世界を解釈するわれわれの視点に多分に左右される……

(中略)……この種の外部世界の主観的な認知のプロセスは、日常言語の動詞の用法にも反映されている。行為によっては、一回的に完結した可算可能な行為として把握される場合と、この種の限定ないしは完結をもたない行為として把握される場合が考えられる」と述べている。Vendler(1967)の分類に従えば、中国語の動詞は activity で、持続的な動作を表し、そこには単一的な完結性は認められない。つまり、その動詞は意味的に結果³⁾、或いは動作に関する量を持っておらず、次の図のように起点はあるが、終着点はなく、境界のない無限定の存在である⁴⁾。

3) ここでの「結果」という概念は動作・行為の完了、終了を意味する。

図<1-1>

跑 (走る)



動詞 (語彙的意味) は運動を表し、(文中の働き) 文の述語になることを第一の任務とし、(文中での形の取り方のシステム) そのことと結び付いて活用する単語グループである (高橋1994: 9)。動詞は運動を表す場合、運動は一定の時間位置で始まって、一定の時間位置で終わる。つまり始発の局面、終了の局面と、その間持続する動作の局面から成り立つ (高橋1994: 12)。中国語の動詞の表している運動には始発の局面はあるが、終了の局面はないため、動詞の後に終了の局面を表せる結果補語や、量的な表現を付け加えなければならない。そこで、中国語の動詞には結果補語、動詞の重ね型や、動量詞などが盛んに使われるのである。

また、言語の分類からいうと、中国語は「孤立語」 (isolating language) で、単語そのものは実質的意味のみを持ち、単語がまったく語形変化せず、文法的機能は語順によって果たされる言語である。しかし、日本語は「膠着語」 (agglutinate language) といい、実質的な意味を示す独立の単語に、文法的な意味を示す形態素が接着して、文法的機能が果たされる言語である。それに対して、英語は「屈折語」 (inflectional language) であり、単語の実質的な意味を示す部分 (語幹) と文法的な意味を示す部分 (語尾) とが、分離できないほど密接に結合して、単語そのものが文法的機能を果たす言語である。日本語は膠着的言語であるが、動詞の語尾変化があるところは屈折的言語と似ている。以上の比較からいうと、日本語と英語では、単語そのものが語尾変化によって、文法的な機能を果たすことができるが、中国語の動詞のようなものは、語尾にほかの要素を付加しないと、文法的な機能を果たせないという特徴を持っている。

しかし、命令・依頼表現における中国語の動詞には、いろいろな語彙的な制限があるようである。例えば、中国語には裸のままで命令文に使える動詞と使えない動詞 (袁1993: 18 - 19) がある。

A	B	C
吃! (食べなさい!)	* 舔! (嘗めなさい!)	舔一下! (ちょっと嘗めて!)
坐! (坐りなさい!)	* 站! (立て!)	站这儿! (ここに立て!)

同じ単音節の動詞なのに、Aは言えるのに対して、Bは言えない。袁はそれがなぜかについての説明はしていないが、それは言葉の習慣性・語用の選択の随意性 (arbitrary) だと言っている。以上の現象について、中国語の動詞の特徴について説明を行いたい。

一般的に言うと、言語形式の意味は他のいろいろな認知構造の文脈の中であって、はじめて理解することができる。すべての意味は物理的・社会的環境における人間の概念化を伴うのであるから、あ

4) ここで論じている重ねていない動詞の特徴は命令・依頼という発話状況における特徴だと考えていい。

る程度語用論的である。いかなる発話であっても、それを理解するために、聞き手／読み手による文脈に依存する解釈行為が要求されている。命令・依頼表現では、東郷雄二（1998）の談話モデル（詳しいは本論文の第四章の2.3.1を参照）の立場から考えれば、話し手が聞き手に指示している内容は現場指示が殆どである。例えば、ある単音節の動詞は現場指示の発話であれば、裸のままでも、命令文として成立するのである。つまり、「吃！」と言ったら、目の前にある物を指し、食べ物の量までも聞き手にとって明示的であるから、命令文として有効である。しかし、「舔！」は特定の対象があっても、普通はそれらを全部嘗めるとは考えられないので、言語的に「舔！」の量が明示される必要があるのである。同じように「坐！」と言ったら、「ひざを折り曲げ腰をおろして席につく」という意味にしか取れないので、言葉自体結果性を持っているが、「站！」と言われたら、どこの場所に「立」って動作を維持するか、或いは「立ち上がる」のか、たとえ現場指示であっても、「站！」に関する意味の可能性が複数あるため、動作の意味を特定する必要がある。以上のように、中国語の動詞に語尾変化がないため、命令・依頼表現においては、どういう動詞の形で聞き手に指示を出すかは、語用的な文脈は勿論、動詞自体の内部構造にも関連するようである。

中国語の動詞が命令文として適切かどうかは、認知構造にも関係がある。例えば、次の例、

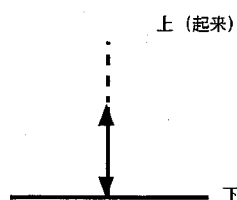
(6) 说下去！（続けて言って！）

(7) *说起来！（喋り出せ！）（袁1993：19）

「说下去！」なら、命令文として容認度が高いのに、「说起来！」では、容認度が低い。この現象については、袁は説明していないが、ここでスキーマというによって説明ができる。

認知的パラダイムにおけるメタファー研究の重要なテーマには、語形成におけるメタファーの役割、文法構造のメタファー的基盤、一方から他方への転用を容易にする提供側の領域との間の構造的平行性などがある。Lakoff（1987：271）とJohnson（1987）はともに、多くの経験領域はかなり数の限られたイメージ・スキーマによって、メタファーを介して構造を与えられているという可能性を探っている。Lakoffのこれらのイメージ・スキーマは日常の人間的経験に深く根差したものであり、いわば普遍的な前言語的認知構造を構成すると示唆している。これらのスキーマの多くは明らかにわれわれの経験の中でもっとも直接的な部分、つまり身体的経験に根差している。そこで挙げられているイメージ・スキーマの一つには上／下の方向付けがある。メタファー的転用は上／下スキーマを他の経験域に写像する概念メタファーによって可能となる。中国語には上／下スキーマを限度領域に写像する概念メタファーがある。それは「喋る」という領域に関しては、「下へは、限度があり、上へは限度がない」である。

図<1-2>



「说下去！」には、言いたいことを終わるまで話すという意味が読み取れるので、動作の限度、結果を持っているのである。「说起来！」⁵⁾はイメージ・スキーマ的に上へ行く方向性を持っているから、限度がなく、聞き手に指示する内容が不明瞭である。

以上を通して、中国語の動詞は如何に文脈に依存しているか、或いは動詞自体の内部構造に関連しているかがかなり明らかになったと言えよう。

1.2 中国語の動詞のアスペクトについて

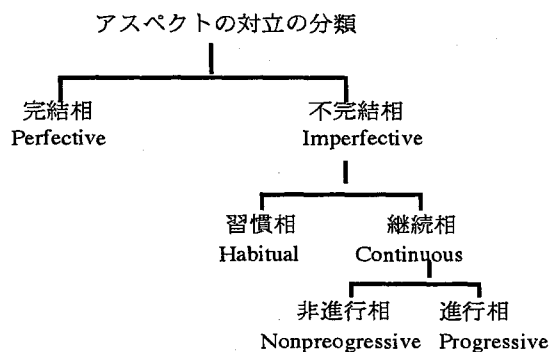
中国語の動詞の重ね型のアスペクトについて論じる前に、まず、アスペクトの定義について考えてみる。

1.2.1 アスペクトについての研究

アスペクトとは「動きの時間的な局面を問題にして、どの局面をどのように（動きとして、あるいは状態として）とらえるか、ということを表すカテゴリーである」（森山 1988: 30）。アスペクトが時間的な関係を示し、動きや在り方全体としての意味を表示するのである（森山 1988: 32 - 33）。アスペクトの形式は、その動きなり状態なりを構成するものとして、より中核的（動詞に近く）なところに位置している。高橋（1994）はアスペクトについて次のように述べている。「アスペクトは、動詞のあらわす過程をどのようにとらえるか、つまり、外がわから運動（動作または変化）をまるごとガバッとつかまえるか（完成相）、内がわから過程（運動過程または結果過程）を維持の途中（始発よりあと、終了より前）にあるものとしてとらえるか（継続相）をあらわしわけることについての文法的なカテゴリーである」（p. 239）。

Comrie（1976: 訳書43ページ）はアスペクトの対立分類を次のようにまとめている。

図<1-3>



完結相は場面を外側からながめて、その内部構造を区別だてするということはけっしてしない。不完結相は場面をうちがわからながめて、その内部構造に密接にかかわる（Comrie

5) 「起来」のもとの意味は「立ち上がる、始める」という意味で、スキーマ的に「上」だと考えている。しかし、もし、動詞と「起来」が意味的に終了点を持つならば、文法的に適切である。例えば、「唱起来」（歌い始めてください）、「跳起来」（踊り始めてください）は「歌」（歌）と「曲」（曲）が独立的で、それぞれ終わりを持っているから、「唱」と「跳」という動詞は「起来」と共起できる。動詞「说」（喋る）は意味的に終了点を持っていないため、「说起来」（喋り始めてください）の言い方はできない。

1976: 訳書13ページ)。完結相は、はじめ・なか・おわりを含む、ひとまとまりの (complete) 場面をさししめす (Comrie 1976: 訳書33ページ)。不完結相は場面の始まりをふりかえってみることもできるし、その終わりを見通すこともできるからである。そして、また、もし場面が始まりも終わりも持たずに、全時間を通してつづいているとすれば、その場面にもあてはめることができるからである (Comrie 1976: 訳書13ページ)。

1.2.2 中国語のアスペクトの研究の紹介

すべての言語がアスペクト表現のための何らかの手段を持っていると考えられる (山田1984)。だが、アスペクトそのものが多様である上にその表現手段は形態・統語・意味・語用の各レベルにわたっている。中国語のアスペクト問題は、非常に多くの研究者の関心を呼んできた。中国語のアスペクトは、今だに人によってその数がまちまちで、それぞれの研究者は各人各様のものを挙げている。

中国語の動詞の重ね型のアスペクト性について、代表的な研究者に呂叔湘 (1951) と王力 (1955) があり、動詞の重ね型を瞬時アスペクトと名付けている。呂 (1951: 31) は動詞の重複形 (動詞の重ね型) は、動詞と計数語との結合体であるとし、それは互いに異なる三種のアスペクトを表しているとしている。つまり、それは一回アスペクト (動詞が継続しない性格、弱化した性格を有することを表すところのもの)、暫時アスペクト、「試行」アスペクト (嘗試相) を表しうる。高名凱 (1951) は中国語に六種のアスペクトを認めているが、動詞の重ね型はその中の一種で、多回アスペクトであると見ている。

春木仁孝 (1992: 153 - 154) には次のような指摘がある。中国語はアスペクト中心の言語である。限定された (つまり計量された) 目的語があれば、完了を表す印がなくても完了として解釈される場合もあるほどであるという。また、中国語には、動詞にくっつく接尾辞がたくさんあって、それらがアスペクト的な価値、或いはアスペクト的な価値と時間との価値との組み合わせを言い表している (Comrie 1976: 訳書202 ページ) という指摘もある。ヤーホントフ (1957: 訳書122-123 ページ) は、アスペクトの範疇と関係があるのは、以下の四つであると主張する。

- a) 修飾形式
- b) 動詞接尾辞
- c) 動詞の重複形 (重ね型)
- d) 動詞の前に立つ *yi* (一)

つまり、アスペクト・テンスの指標に含まれるものには、接尾辞の *-zhe* (一着) 以外に、動詞の前におこる *yi* (一) があり、また、動詞語幹の重複形 (重ね型) も、一定の条件のもとではこれに含まれる (1957: 訳書124ページ) ということである。

本論文では、動詞の後に有標的な形式 (結果補語、限定された目的語など) を伴う文のアスペクトを「全体」と見なし、それは時間軸上に広がりを持つ事象の開始点から終結点までの時間帯を一まと

めに認識し、その内部構成には立ち入らない把握のしかたであると考え、一方、動詞の重ね型のアスペクトを「部分」と見なし、それは事象の生起時間帯内の特定の部分に關与するものだと考えることにする。

中国語の動詞の重ね型は、活動または出来事そのものが反復していることを表す。動詞をもう一回繰り返すことにより、その動詞に一定のアスペクトを与えることになり、動詞の内容に修正を加えることにもなる。つまり、重ねていない動詞は未完了と完了を表し、重ねている動詞は部分完了を表し、意味的にも形態的にもアスペクトの対立を示している。

§2 日本語の動詞の特徴とアスペクト性

日本語の動詞の特徴を説明するために、中国語と英語と一緒にまとめて考える。影山太郎（1996：2）は英語の動詞と日本語の動詞とを比較し、英語は結果状態を重視して表現する言語であり、日本語は動き・過程を重視する言語であることを指摘し、日本語の動詞は状態変化の途中過程を描写するのが特徴だとしている。

命令・依頼表現では、日本語は動詞の命令形で直接命令することができるのに対して、中国語の動詞は動作のみを表すから、後に動作の終了の局面を示す言葉をつけないと、相手に対する命令は成り立たないのである。次の例から分かるように、日本語は

(8) あの人を殺せ！

という言い方をするのに対して、中国語は

(8') 把那个人杀死。(あの人を殺して死なせろ)

という動作の動きと動作の結果を一緒に言わないといけな。影山の例でもう少し説明すると、

(9) a (授業の始めに先生が) Where are we now?

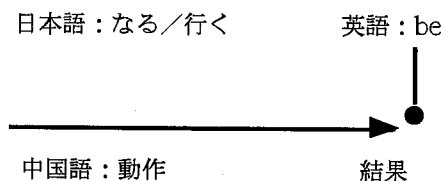
b 前はどこまで行きましたか? (影山 1996 : 10)

c 上次我们学到哪儿了?

「日本語の動詞が状態変化の途中過程を描写するのに対して、英語は be 動詞が使われていて、be 動詞は静止状態を表すから、変化の途中経過は抜きにして、結果状態という 1 点に着目していることになる」(影山 1996 : 10)。中国語は動作行為(学)プラス結果(到)という、英語と日本語の特徴を総合したものである。つまり、「英語の動詞は到達点志向性が強く<行為>+<結果の達成>を含

意する場合が多いのに対して、日本語はしばしば到達点志向性が弱く〈行為〉の表示にとどまる」（池上1981:268）のである。中国語のほうは行為と結果の両方を備えており、述語になるのである。影山（1996:10）の図の上に更に中国語の特徴を入れると、次の図になる。

図<2-1>



つまり、中国語の動詞は到達点を含意せず、述語は動作行為プラス結果からなるのである。

次は、日本語の動詞のアスペクト性について考える。

アスペクトの対立は、一般文法論の立場から言えば、完結相と不完結相の対立である（Comrie1976:訳書43ページ）。しかし、アスペクト的には、日本語の動詞は、運動過程をまるごとの姿で捕える完成相（走る、走った）と、持続過程をなす動作の中にある姿で捕える継続相（走っている、走っていた）とに分化する（高橋1994:12）。この対立は日本語のアスペクトの特徴の一つだが、一番大事な特徴は、日本語の動詞はその形態において、完成相と継続相に分化していること、つまり、日本語にアスペクトのカテゴリーがあるということである（高橋1994:239）。

§3 中国語の動詞の重ね型について

現代中国語における動詞の重ね型については、その表す意味や文法的機能、または重ね型にできる動詞の分類などを論じた論文は数多く、それぞれの説には違いが見られる。

3.1 先行研究

中国語の動詞の重ね型についての研究は数が多いが、主ないくつかを次のように紹介する。

3.1.1 王还1963「動詞重疊」『中国语文』第1期,23-25

王は動詞の重ね型の基本的な意味は「動作の一部を表し、少量的で永久に持続するのではないが、しばらく持続することを要求する」（p.24）と述べ、また、「重ねられる動詞の中に「～してみる」の意味を表す動詞が最も多く、何回もの行為を行うという意味を表す動詞はかなり少なく、一回きりの行為を表す動詞は一番少ない」（p.25）と述べている。

王は次の例のように「動詞が重ねられたら、もし目的語に数量詞があれば、指示代詞もなければならぬ。そうでないと、数量詞はつけられない」という指摘をしているが、それがなぜかについては説明されていない⁶⁾。

(10) a 我去换换这(一)件衣服。(この一着の服を着替えに行く)

b 我去换换衣服。(服を着替えに行く)

c* 我去换换一件衣服。(一着の服を着替えに行く)

3.1.2 李人鉴1964「关于动词重叠」『中国语文』第4期,255-263

李は動詞の重ね型の基本的な意味は「動作を行う時間が短いとか、動作を軽減したとか、或いは「～してみる」というような意味を表すのではなく、不定量を表す」(p.260)と主張する。李の考えは今までの研究と少し違い、進歩的であるが、しかし、動詞の重ね型の基本的な意義を「不定量」だけにとどめてしまうと、動詞の重ね型の派生的な用法については説明が不十分になる。

3.1.3 范方蓮1964「試論所謂“動詞重疊”」『中国语文』第4期,264-278

范は動詞の重ね型構造については、「動詞と量詞との組み合わせ」(p.264)だと主張する。

動詞の重ね型の意味——「V(一)V」の意味については、范は二分類し、次のように述べている(pp.274 - 275)。

i. 「V(一)V」は定量を表す、すなわち動作は「一回」の意味を表す

(11) 他要走一步,我不让他走;我要动一动,他也不许我动。(彼が一步を歩こうとしたが、私はそうさせなかった。私がちょっと体を動かそうとしたが、彼もそうさせてくれなかった)

ii. 「V(一)V」は不定量を表す。動作は一回ではない。動作の量を表す場合もあれば、時間の量を表す場合もある。

(12) 新鞋小一点儿没关系, 穿(一)穿就好了。(新しい靴はちょっときつくてもかまわない。しばらく履いたら、よくなるのだ)

(13) 你休息休息吧,我自己来。(あなたは休んでください。私自分でやるから) (朝1962: 122)

(12)の「穿(一)穿」は動詞「穿」の回数を表すのに対し、(13)の「休息休息」は動詞「休息」の短い時間を表している。

しかし、i.の「动一动」(ちょっと動く)は動作が「一回」の意味を表すという記述には疑問を感じる。動作が一回だという解釈は恐らく前の「他要走一步」(彼が一步を歩こうとする)の意味

6) 王(1963)の具体的な内容については、3.2.1の説明を参照されたい。

に対応していると思われる。だが、それはあくまでも個別的な文脈による解釈に過ぎない。また、i. と ii. の語形成は全く同じであるのに、正反対の意味を表すという解釈には納得できない。

動詞の重ね型はまた、次の場合にも使われていると指摘している。

iii. 「～してみる」を表す

(14) 你尝尝烫不烫? (熱いかどうかちょっと食べてみてください)

iv. 話し手が主観的にある行為が重要ではないと思っていることを表し、婉曲の語気を表す

(15) 那不过说说罢了, 你就相信? (それは言っただけで、本当に信じるの?)

v. ある期間内における動作・行為の反復を表し、経常性を表す

(16) 以后你就帮他抱抱孩子。(これからあなたは彼の子供の面倒をみるのを手伝ってください)

(17) 他抽抽烟, 搬开袖口看看表。(彼は煙草を吸ったり、腕時計を見たりした)

以上の動詞の重ね型の意味は辞書的な記述に過ぎず、その間の関連性は明確ではない。それら個々の意味は本論文の分析では、動詞の重ね型の本来の意味であるというより、コンテキストに依存する意味だと言えよう。

3.1.4 刘月华 1983「动词重叠的表达功能及可重叠动词的范围」『中国语文』第1期, 9 - 19

刘は動詞の重ね型の基本的な意味は「動作持続の時間、或いは行う回数が少ない」(p.9)と主張する。「もし動詞が持続性の動作を表すならば、重ねたら、動作が持続している時間が短い」(pp.9 - 10)、「動詞が非持続的で、反復を表す動詞であれば、重ねられると動作が行う回数が少ない」(p.10)という意味を表すと述べている。

3.1.5 王希杰・华玉明 1991「论双音节动词的重叠性及其语用制约性」『中国语文』第6期, 425-430

王、华(1991)には二音節の動詞を六分類し、その中のマイナス意味を表す動詞は重ねられないという指摘がある。また、動詞の重ね型の表している意味は「动词重叠表示动作行为的反复, 经常或持续~」(動詞の重ね型は動作行為の反復・持続を表す)(p.429)と述べている。

3.1.6 毛修敬 1985「动词重叠的语法性质语法意义和造句功能」『语文研究』第2期,34-41

毛は動詞の重ね型を使うかどうかは文の構造によって決まり、話し手の主観的な思いではないと主張する。また、動詞の重ね型の基本的な意味は「短い時間」、「少量」(p.34)だという説に対し、疑問を持ち、重ねられていない動詞は行為の始まりと進行を表し、重ねられた動詞はこの行為の始まりから終わりまでの段階的、動的な過程を表すが、話し手が着眼しているのは動的な過程が表している「情態」であり、この「情態」は「静態」的な描写であると述べている(p.35)。

毛の主張は完全にコンテキストを除外し、統語的な立場から動詞の重ね型について考えているが、解決できない例が多く、まだ問題が残っている。

以上のように、これまで、動詞の重ね型の表している意味について「～してみる」、「穏やかな命令」、「ちょっと、ひとつ……する」であるというような形式的な記述と意味的な記述はかなり試みられている。それぞれの説は様々で、しかも実際に使われているコンテキストや共起する成分の影響により、複雑な様相を呈している。本研究は統語論と意味論をもとに、語用論的な観点も取り入れて、中国語の動詞の重ね型の本質について明らかにしていくが、まず、研究の方針としてプロトタイプ的な考え方を取り入れたい。つまり、動詞の重ね型の典型的な意味は何か、そして動詞の重ね型の意味自体に連続性があることに注目する。

本論文は動詞の重ね型を「VV」、「V-V」、「V了V」、「V了-V」というの四つの形⁷⁾に絞って考察する。

3.2 動詞の重ね型の表している意味

3.2.1 動詞の重ね型の言語変化のプロセス —— 文法的マーカー

動詞の重ね型の意味を「動作の量」を表すという観点から捉える説がいくつかあるが、次のようにまとめる。

- ① 「少量」説：范(1964:274)、王(1963:24-25)、ヤーホントフ(1957訳書:175ページ)
- ② 「動作の強化」、「動作の弱化」説：ドラグウノーフ(1952:115-116)、王(1963:23-24)
- ③ 「動作が持続する時間が短い、行う回数が少ない」説：王(1963:23-25)、刘(1983a:9)、范(1964:264)
- ④ 「不定量」説：李(1964:258)

范(1964:276)は動詞の重ね型は「少量」を表すとし、取り上げている例は次である。

7) 動詞の重ね型にはどんな形式があるかというのはまだ決まった定説がない。例えば：李(1964:255)は「AA」(Aは動詞であることを意味する)と「ABAB」だけを動詞の重ね型だとみとめ、范(1964:264)、刘(1983:9)、王、华(1991:425)、毛(1985:34)は「VV」、「V-V」、「V了V」、「V了-V」の四つのタイプを動詞の重ね型だと言っている。本論文は後者の分類を採用し、動詞の重ね型は四つのタイプがあると考えているが、「VV」と「V-V」、「V了V」と「V了-V」の間に違いがあるのを認めながら、「VV」と「V了V」の二つの形に絞って考えてみる。

- (18) 人家打仗, 我们只能闻闻火药味。(ほかの人達は皆戦場で戦っているのに、私たちはここで、只火薬の匂いを嗅いでいるだけだ) (朝1962: 261)
- (19) 他们只不过提了点意见, 反映反映了问题。(彼は意見を出し、問題を提起したに過ぎなかった) (东1963: 165)

范はこの「闻闻」(匂いを嗅ぐ)は「微不足道」(ほんのわずか)の意味を表すと言う。ところが、同じ「闻闻」も(20)の場合なら、「微不足道」の意味は存在せず、むしろ強調の意味を表すという。

- (20) 这花真香, 让我好好闻闻!(この花がいい匂していますね。よく嗅がせてください)

(19)では「只不过」(～に過ぎない)という修飾語があるから、「微不足道」の意味が出ているのではないと思われる。

③の「動作が持続する時間が短い、行う回数が少ない」という例を以下のようなものを挙げる。

- (21) 你等等, 我给你拿水去。(ちょっと待って。水を持ってくるから) (王1963: 24)
- (22) (生宝) 使劲扯了扯衣襟边。(生宝は強く服の裾を引っ張った) (刘1983a: 10)

(21)は「等」(待つ)という動作の持続する時間が短く、(22)は「扯了扯」(引っばりに引っばる)という動作の回数が少ないという意味を表す例である。

以上の例から分かるように、③の主張も「少量」という意味を含意し、基本的に①と同じである。

④の李(1964:258)の「不定量」説は動作の持続又は反復を表すという。本論文は④の李(1964)の「不定量」という説に賛同し、それについてもう少し深く検討する。

しかし、一体中国語の動詞の重ね型は何だろうか。

まず中国語の動詞の重ね型の構文から考えてみる。中国語の動詞の重ね型では同じ動詞を二回繰り返すことは、語氣的に強調するというアイコン性の原則が働くので、「量」の多いことを表すはずである⁸⁾。通時的に見ると、上古中国語の動詞の重ね型の表している意味は「只表示动作的绵延、反复或久长」(動作の継続・反復或いは永久的な意味だけを表し)、「动作的短时和少量是唐以后才出现, 元明以后才发展开来的」(動作が短い時間、少量を表すという意味は唐時代以後に現われはじめ、元、明時代以後から発展してきたのである) (李

8) 日本語では言葉の反復は、その叙述の意味を強調するために使われている。例えば、「おおきな、おおきな、西瓜」。英語でも同じような現象が見られる。「The car went slower and slower」。しかし、日本語と英語の言葉の反復は語彙レベル的な問題で、反復性と意味の強さの間にアイコン的な同型性が認められる。中国語の動詞の重ね型はただの言葉の反復ではなく、その反復は文法的マーカーであって、抽象的な意味を表すのである。

1998 : 21)。つまり、最初の動詞の重ね型はアイコン性の原則を守り、だんだん時間が立つに連れ、動詞の意味特徴により「少量」という意味も現われるようになったのである。

- (23) 采采卷耳，不盈頃筐。^{いしみの と と ケイキヤウ また}（卷耳を採り採る、頃筐に盈ず）（周南・卷耳）
（高1980）

(23) の例は動詞の重ね型が出現した一番最初の文献で、高亨（1980:5）の説明では、「采采」は「采了又采」（摘みに摘んだ）の意味で、ここでは強調を表しているという。

中国語の動詞の重ね型は、本来は動詞の一部であるが、次第にアスペクト的な意味を担う動作の量（動量詞）を表す接尾辞に転化していくのである。次の例を参照されたい。

- (24) 看看書。（本を読みに読む）

$V_1 V_2$

V_1 の動詞「看」が本動詞で、具体的な動作を表す。これに対して、 V_2 は前の動詞に後続する表現として、 V_1 の量を表し、接辞的に使われ、アスペクト的な意味が強くなる。

しかし、現代の中国語では、昔の面影がまだ残りながら、「少量」も表すという主張があるが、よく考えてみると、「多量」と「少量」は意味的に矛盾することになるのではなかろうか。同じカテゴリーが全く正反対な意味を表すことは、ありえないことである。よって、②のドラグウノーフと王（1963 : 23 - 24）の説と①、③の説は成立しない⁹⁾。ここで、新たに中国語の動詞の重ね型の表している意味は「文脈の意味+動詞そのものの意味+ ∂ 」であると提案したい。 ∂ というのは動詞の重ね型が文法的なマーカーを表し、「不定量」で、前の動詞の補語として文法的な働きをすると考える。具体的な意味はまた、その文における具体的な文脈によって決まる。そこで、文脈と修飾語によって、動作の回数、動作の量が多かったり、少なかったりすることが可能になるのである。

3.2.2 動詞の重ね型のプロトタイプ的意味 —— 「不定量」で「部分完了」を表す

命令というのは、未来（話の時点より後）に現在と異なった動きが成立することを要求するものである。従って、現在よりのちにハジマルことが要求される。そのためには、はじめとおわりを持つウゴキを表す動詞であることが基本なのである（高橋1994:23）。中国語の動詞は「動作のみを表す」という特徴により、activityで、持続的な動作を表し、単一的な完結性は認められない。つまり、文脈によって規定されたり、動作・行為の結果が表されていない限り、量を持っておらず、境界のない無

9) ②については王（1963:24-25）の例を挙げる。

(1) 我很想多听听有关国际形势的报告。（私は国際状況についての講演を多く聞きたい）

ここで、王は重ねた動詞はその動作が多く反復するという意味を表すというが、それはまた修飾語「多」（多い）の意味に由来するのではないと思われる。

限定の存在である。しかし、相手に具体的な行為を指示する時には、その動作・行為を限定する必要がある。そこで、動詞の後に、結果補語をつけるか、量から動作・行為を限定するかという文法的な手段を取らなければならなくなるのである。

中国語の動詞の重ね型のプロトタイプの意味は「不定量」である。アスペクトの立場から言うと、動詞の重ね型は、動作の始発局面を持っているが、終了局面ははっきりしない。そして、始発と終了の間の動作の量は不定であるため、「部分完了」という特徴を持つことになる。「部分完了」とは、動作が部分的に行われ、行われている量は不定で、ある段階（終局点）までは終了するが、目標点（goal）¹⁰まで達したかどうかは、関与しないということである。言い替えると「部分完了」は事象の内部完了で、全体は不定の量を表す。つまり、重ねられた動詞は不定量の動作・行為を行う或いは行ったということを意味し、目標点まで達したかどうかは明示せず、少なくとも終局点まで達したのは事実である。というのは重ねられた動詞句の後に、更に目標点を明示する後続文が続くことができる。つまり、中国語の動詞句は動作・行為の完了、部分完了、未完了を問題にし、事象の目標点（goal）と分離しているのである。動詞句の構造は、少なくとも次のようなパターンを有する。

(a) 動作・行為（重ねない）→ 完了 → 目標点

(b) （動作・行為）（重ねる）→ 部分完了（終局点） → 目標点

(25) a 我看了¹¹他的论文，可是还没看完。（彼の論文を読んだが、まだ読み終わっていない）

b 我看了他的论文，看完了。（彼の論文を読んだが、読み終わった）

(26) a 我看了看他的论文，可是还没看完。（彼の論文を読み込んだが、まだ読み終わっていない）

b 我看了看他的论文，看完了。（彼の論文を読み込んだが、読み終わった）

例文（25）の用法がパターン(a)に当たり（「看」は動作・行為で、「了」は完了を表す。後続する文は目標点を表す）、（26）はパターン(b)に当たる（動詞の重ね型は一通りの動作を完了したとは明確せず、部分的終了を意味する）。

3.2.2.1 動詞の重ね型の意味は「不定量」を表す

動詞の重ね型が「不定量」であることは次の例文から裏付けることができる。

(27) *他看了看二本书。（彼は一冊の本を読み込んだ）

動詞の重ね型はすでに「不定量」を表しているため、（27）のように目的語に更に「定量」的な表

10) ここでの「目標点」と「終局点」は山田（1984:75）の観点を参考にしたもので、本論文での目標点とは、事象が完成したと言える点であるのに対して、終局点とは任意の点で動作を終わらせた場合の点である。

11) 「了」は動作・行為の完了、終了を表す助動詞である。よって、この「了」は前の動詞の結果を表す。

現「一本書」（一冊の本）をつけると意味的に矛盾することになる。つまり、動詞の重ね型の目的語は数量詞の修飾を受けることができないからである。

ここで次のような仮説を立てることができる。

(28) 動詞の重ね型と数量詞は共起できない

動作を行うためには、ある程度の時間の幅を要する。動詞の重ね型が「不定量」を表す以上、漠然とした時間副詞や反復的な時間副詞（「这几年」、「整天」など）とは共起できるが、限定した時間副詞とは共起できない。例えば、

(29) 星期天准备在家看看书, 打扫打扫卫生。（日曜日は家で本を読んだり、掃除をしたりするつもりです）

(30) *我用一个小时看看书, 打扫打扫卫生。（私は一時間で本を読んだり、掃除をしたりします）

漠然とした時間副詞「星期天」（日曜日）は動詞の重ね型と共起でき、限定した時間副詞「一个小时」（一時間）は動詞の重ね型と共起できない。

しかし、非文である(27)の文に対して、次のように動詞の重ね型の数量詞の前に指示代詞をつけると、また適格な文になる。

(31) 他看了看这一本书。（彼はこの一冊の本をちょっと読んだ）

よって、(28)の仮説の上で、次の仮説を立てることができる。

(32) 動詞の重ね型の目的語は数量詞の修飾を受けるならば、その目的語は「特定」（definite）でなければならない

王（1963:25）は「動詞を重ねたら、もし、目的語に数量詞があれば、指示代詞もなければならぬ。そうでないと、数量詞はつけられない」という指摘があるが、なぜそうなるかについて説明をしていない。

(33) a 我去换换这（一）件衣服。（この一枚の服を着替えに行く）

b 我去换换衣服。（服を着替えに行く）

c*我去换换一件衣服。（一枚の服を着替えに行く）

(34) a 咱们讨论讨论这两个问题。（私たちはこの二つの問題について議論しましょう）

b 咱们讨论讨论问题。(私たちは問題を議論しましょう)

c * 讨论讨论两个问题。(私たちは二つの問題について議論しましょう)

王が問題にしているのは、(33)のa、bと(34)のa、bのように数量詞、指示代詞が両方ある場合と、両方ない場合は言えるのに、なぜ(33)のcと(34)のcのように数量詞だけがあって、指示代詞がない場合は言えないのかである。

しかし、現実には動詞の重ね型の後に「数量詞」があって、「指示代詞」がない文も存在する。

(35) 你们可怜可怜我吧！你们可怜可怜一个心都碎了的人吧！（私を哀れんでください。一人の心の砕けた人を哀れんでください）（李1964：262）

(36) 看看身上的破衣，再看看身后的三匹脱毛的骆驼，他笑了笑。（体のぼろぼろの服を見て、また、後ろの三匹の毛のないらくだを見て、彼は笑った。）（同上）

王の疑問は、仮説(28)と(32)によって解決できる。つまり、動詞の重ね型はもともと「量」の概念を表すから、後に更に「数量」を表す言葉は直接つけられない。つまり、(33)のa、bと(34)のa、bの場合は動詞の重ね型の後に直接数量表現がないため、文は適格である。逆に、cは前の指示代詞がないことによって、数量表現は直接動詞の重ね型の後続くことになり、文は不適格となる。(35)、(36)は動詞の重ね型の後に数量詞が直接続いているように見えるが、しかし、この数量詞「一个」（一人）、「三匹」（三匹）は、前の言葉「我」（私）、「身上的破衣」（体のぼろぼろの服）と後の言葉「心都碎了的人」（心の砕けた人）、「身后的」（後ろの）の修飾を受け、目的語は個別化され、特定化されている。つまり、この目的語は definite であるので、適格な文なのである。

仮説を検証するために、動詞の重ね型と「把」構文¹²⁾との関連について少し考えてみる。

「把」の目的語は、従来から「特定」でなければならないと言われてきた。(33)、(34)の文を「把」構文に変えると、

(37) a 我把这（一）件衣服换换。（この一枚の服を着替える）

b 我把衣服换换。（服を着替える）

c * 我把一件衣服换换。（一枚の服を着替える）

(38) a 咱们把这两个问题讨论讨论。（私たちはこの二つの問題を議論しましょう）

b 咱们把问题讨论讨论。（私たちは問題を議論しましょう）

c * 把两个问题讨论讨论。（私たちは二つの問題を議論しましょう）

12) 「把」構文とは、「把」により動詞の前に出された名詞に何らかの処置を加えるというのを表す。名詞は動詞の表す動作の対象である（『中日辞典』）。「把」で目的語を倒置できる動詞は後置成分をつけて、どんな結果を生じたかどんな新しい関係に入ったかを具体的に表現しなければならない。

動詞の重ね型の文とまったく同じことが言える。

以上、「把」構文の特徴は仮説(32)を支持していると言える。

3.2.2.2 動詞の重ね型は「部分完了」である

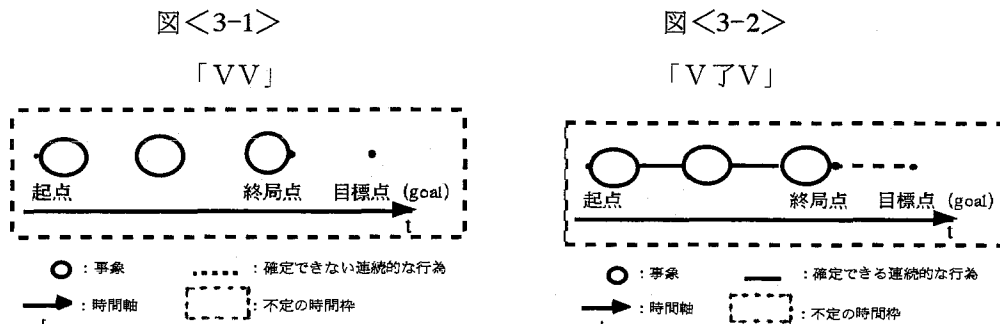
鵜殿倫次(1977: 27)は「動詞重畳と意図」の観点から動詞の重ね型はアスペクト的で、継続的で、不完了的であると指摘している。ここで最も問題になっているのは「不完了」である。鵜殿は「不完了」についてComrieの説に基づいて次のように述べている。「Comrieは、ほぼ、完了perfectiveを、動作全体として見る、不完了imperfectiveを動作の一部を内側から見る、としている。動詞重畳の前記の特徴は、不完了的である」。鵜殿の挙げている英語の「不完了、進行相」の例を見ると、

Bill is going to throw himself off the cliff.

つまり、鵜殿がここで意味している「不完了」とは動作が継続的で、完成していないということである。

しかし、中国語の動詞の重ね型は「不完了」の意味を表すというより、「部分完了」を表すと言ったほうが適切である。「部分完了」とは、動作は部分的に行われ、行われている量は不定で、ある段階(終局点)まで終了するが、目標点(goal)まで達したかどうかは、関与しないということである。

動詞の重ね型の「VV」と「V了V」が部分完了を表すことをそれぞれ次の図で説明しておこう。



図<3-1>では動詞の動作・行為をどこまで(終局点か目標点か)行うかは、話し手の意志に強く関与している。図<3-2>の「V了V」は過去形で、動作の主体の行為が終局点まで達したのは確かであるが、目標点まで行っているかどうかについては関与しない。つまり、たまたま目標点と終局点が重なり合う場合もあるし、そうでない場合の可能性も十分ある。

動詞の重ね型は目標点まで関与することはない。つまり、結果を明確に表せないのである。次の例で示すことができる。

(39) a 电视机我修了修, 修好了。(テレビは私が修理しましたが、直りました)

b 电视机我修了修, 没修好。(テレビは私が修理しましたが、直りませんでした)

「V了V」によって表されている動作は文脈により、aのように目標点まで達している場合とbの

ように目標点まで達していない場合があるが、動作自体を一段落とすると、部分的に完了したこと、つまり「修理」という動作がある段階まで終了したということは確かである。

動詞の重ね型の終局点は動作・行為の実行者の主観によるものであると考えられる。動詞の重ね型は主体の意志・感情的心理を示す(鵜殿1977: 26)。つまり、動作の行われる量はその動作・行為を行う人の意志によって決まるのである。以下はその例である。

(40) 我太累了, 想好好休息休息。(とても疲れた。よく休みたい)

一人称の意図的動作については、話し手はその始まりから終わりまで自覚的に遂行しているはずだから、一人称であれば、話し手に動作・行為の一部始終についての知識があることを意味する。

(41) 麻烦你帮我看看行李。(お手数ですが、ちょっと荷物を見てくれますか)

二人称に動詞の重ね型で依頼するならば、動作・行為を行う最大の選択権(動作・行為をどこまで進行するか)を相手に渡すことになり、丁寧な依頼になる。

(42) 他向四周看了看…。(彼は周りを見回した)(李1964: 255)

三人称の「看了看」の動作・行為をどこまで行うかは、「他」の意志・主観によって決まると言える。

動詞の重ね型は「不定量」、「部分完了」を表すというプロトタイプの意味から派生して、次のような意味を表すこともできる。

3.2.2.3 動詞の重ね型の派生的用法

3.2.2.3.1 動作・行為の反復を表す

動詞の重ね型は動詞を二回繰り返すことによって、その動作・行為は反復され、非限定複数の行為であるということを意味する。

反復と言っても、事象のどの部分に反復が認められるのかという点について、山田小枝(1984: 139)は次のようにまとめている。

- (a) 行為の主体が交代する
- (b) 客体が交代する
- (c) 活動またはできごとそのものが反復する

中国語の動詞の重ね型の反復は(b)、(c)の現象が見られる。それぞれの例を挙げる。

① 非限定複数の目的語による動作・行為の反復

$$V(O_1 + O_2 + O_3 + \dots + O_n) \rightarrow VO_1 + VO_2 + VO_3 + \dots + VO_n$$

この用法は山田の分類(b)客体が交代するに相当する。

- (43) 他没事的时候, 常去果园帮工人摘摘果子。(彼は暇な時、よく果樹園へ行って、果物を摘むのを手伝います) (王1963: 24)

ここでの主体は同一人物だが、その人物が扱っている対象(果子)は複数であり、不定であるため、行為も複数回行われ、動作・行為が反復していることになるのである。

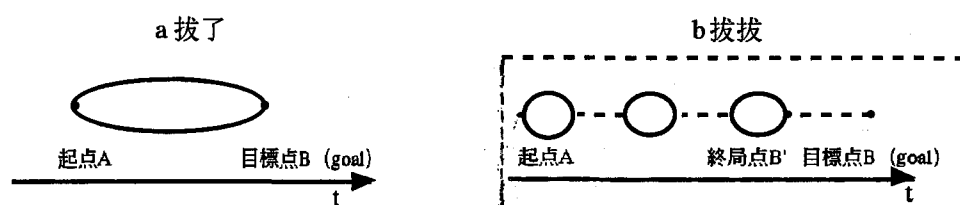
- ② 目的語が特定され、動作・行為自体による反復

$$(V_1 + V_2 + V_3 + \dots + V_n) O \rightarrow V_1 O + V_2 O + V_3 O + \dots + V_n O$$

次の例は、対象が非限定複数であるのではなく、動作・行為自体が何回も繰り返されることによって、反復の意を表す場合である。

- (44) a 你把那棵草拔了。(あなたはその一本の草を抜いてください)
 b 这棵草怎么也拔不动, 你来拔拔。(この草はどうしても抜けません、あなたが抜いてください)

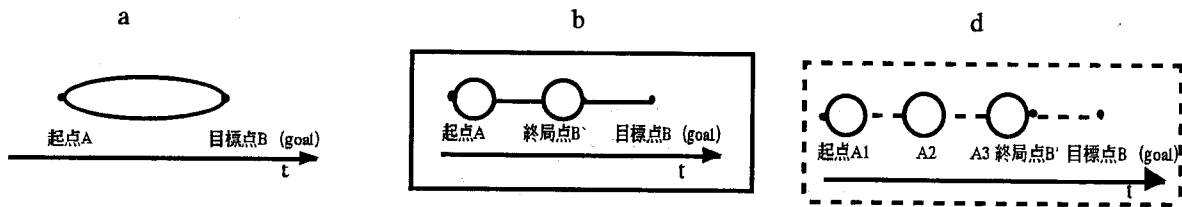
図<3-3>



(44) のa は「拔」(抜く)の動作が一回で完了し、目標点Bに達することを含意するのに対して、b は目標点Bまで達するかどうかには関与せず、「拔拔」の動作は終局点B'まで達しており、その間に「拔」の動作が何回か部分的に完了されているのである。次の文も同じことが言える。

- (45) a 我送你回家吧。(家まで送りましょう)
 b 我送你吧。(送りましょう)
 c *我送送你回家吧。(家まで送りに送りましょう)
 d 我送送你吧。(送りに送りましょう)

図<3-4>



(45) のaは動詞と目的語の組み合わせにより、相手を目標点Bまで送るという意味が明示されており、目標点Bに焦点がある。そこで、いったん目標点Bまで指定されたら、動作が一回に限定されてしまうので、もはや同じ行為を再度繰り返すことができない。bは目標点Bが明示されない限り、話し手の意志に焦点があり、どこまで送るかはについては二つの可能性が考えられる。つまり、途中までの終局点B'か、或いは目標点Bまでかである。どちらかと言うと、目標点Bまでの意味に取られやすい。dの「送送」は、たまたま目標点Bまで送る場合もあるが、主に途中までの任意の点、B'の意味に一番取られやすい。つまり、焦点は終局点B'にあり、「送」の動作の一部を完了した意味になるのである。「送」は継続性を持っている動詞で、例えば、相手をA₁というところまで送ったら、もう少し送ろうということで、A₂まで送って、また、もう少し送ろうということで、A₃まで送るという可能性が十分あるので、結局「送る」という動作は終局点B'までに、いくつかの部分的に完了した動作「送る」が存在すると考えることができる。

(44) のb、(45) のdのように、動詞の重ね型は動作が部分的に順次完了するという意味において、部分完了であるからこそ、同じような動作を反復することが可能になるのである。

③ 活動またはできごとそのものが反復する

これは山田の分類の(c)に相当する。

(46) a *昨天去街上看了看电影，就回来了。（昨日町へ映画を見に行って帰ってきた）

b 最近就看看电影，没干什么。（最近映画を見るだけで何もしていない）

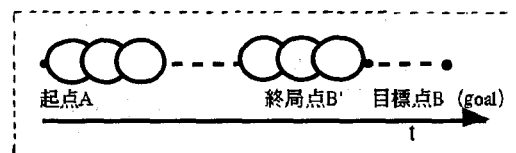
(46) のaはもともと重ねられないが、修飾語「最近」（最近）の意味によって、「看电影」（映画を見る）というできごとは非限定複数になり、反復することができる。

3.2.2.3.2 動作・行為が持続である場合

継続する行為を表す動詞を重ねると、それは「短い時間」を表している（范1964：274 - 275）という指摘があるが、本論文の主張で説明すれば、時間を表すというより、やはりその動作が部分的に持続する動作の量を表すと考えることができよう。例えば、

(47) 你休息休息吧，我自己来。（あなたは休んでください。わたしが自分でやります）（朝1962：122）

図<3-5>



(47) のように「休息」を重ねると、個別的な動作というよりも連続的にみえ、持続性が目立つのである。

動詞の重ね型の「部分完了」の意味が具体的にどう解釈されるかは、動詞の語彙的意味の性格によって異なっている。動詞には状態や継続する行為を表す継続動詞と、一回的な行為を表す瞬間動詞とが存在するが、それらについては、次のような特徴が見られる。

重ねた動詞	[瞬間動詞：動作の反復
		継続動詞：動作の持続

動詞だけを問題にするならば、動詞が瞬間的か継続的かの違いにより、重ね型の表す意味は違うのである。

アスペクト的には、行為の持続は心理的にいくつかの時間単位でそれを区切ることが可能で、意味的に「反復」と繋がっている。反復すること自体は継続的であって、この点では基本的意味と共通している。個々の「部分完了」した動作・行為が複数回反復されることにより、いわば点が複数個集まって、線になるといった形で持続的な状況を生じることができるのである。これは事象の反復によってもたらされた持続である。繰り返し行われる行為だけを取り上げた時、不均等な間隔は捨象され、全体としては連続した線の概念で捉えられる。持続は反復によって持続の性質を得ており、小さい動作・行為の集合によって全体の「過程」的な動作・行為が成り立っているのである。

中国語の動詞の重ね型は「不完了」であるようにみえるが、実は Comrie の言っている「不完了」とまた違う性格を持っているため、ここでは、「部分完了」と名付けた。「部分完了」は動作全体の中の一部を完成するのがもともとの意味で、終局点までの持続や反復を表す。また、反復とは限界づけられた事象の外部への延長であるため、「部分完了」と意味的に融合するのである。「部分完了」は事象の内部完了で、全体としては不定の量を表す。ただし、話し手の意志、或いは文脈により、たまたま (39) a のように、goal まで完成することも有り得る。だが、それは動詞の重ね型の基本的な意味ではなく、「部分完了」と矛盾しない。

3.2.2.4 非重ね型と文レベルの違い

中国語の動詞述語が重ねられていない時、場合によっては、完結相の意味を持っており、その内的な構成にはふれずにさしだされているのだから、それぞれがひとまとまりの出来事であっても、それらが継起的にあらわれていると、出来事の連続を差し示すことになる。重ねられている動詞はひとま

とまりの出来事を示さず、継起的にあらわれてくるのではなく、連続性を持たないのである。

動詞の重ね型の表す基本的な意味の一つは、動詞の表す動作・行為全体の一部を表すと述べたが、この意味は拡張されうる。つまり、われわれは日常の出来事を認知する際、それを時間軸にそった連続的でダイナミックな動きとして捉える場合と、時間的なプロセスの側面を取捨し、非連続的に捉える場合とがある。前者の場合は重ね型でない動詞の述語文で、後者は重ね型の述語文で表される。よって、次の例のように、重ね型は漠然とした時間枠の中で、その部分を表し、いくつかの重ねられた動詞は断片的・非連続的で、ひとまとまりの動作の中のいくつかの固まりを表すという意味を派生することができる。

重ねている動詞：漠然とした時間枠において、ひとまとまりの動作の部分的なところを表す

(48) 说你再也出不了门，做不得事，只会在家里抽两口烟，喝会子茶，玩玩鸽子，画画画，恍惚了这一辈子。（あなたはもう外に出られなくて、ろくなこともできなく、ただ家でたばこを吸ったり、お茶を飲んだり、鳩で遊んだり、絵を書いたりして、ぼんやりとこの一生を過ごしたのだと言っているのだ）（曹1955：362）

(49) 整天不做一点儿事情，到处逛逛，海水里浸浸，然后听听音乐，看看戏和电影什么的，一天便过去了。（一日中何もしない。あっちこっちぶらぶらしたり、海に入ったりする。それから、音楽を聞いたり、劇や映画を見たりして、一日が過ぎ去ってしまう）（火1961：104）

(50) 年纪大了，作饲养员还是可以的。不就是锄锄草，喂喂牲口嘛。（年をとったといっても、飼育員ぐらいならしてもいいでしょう。草を刈ったり、家畜に餌をやったりするだけではないですか）（王1963：23）

(48)、(49)の動詞の重ね型は一生とか一日とかの大きな時間の枠組の中の一部の活動を表している。(48)は「一辈子」（一生）の中では、いろいろなことをやったにも関わらず、断片的に「玩玩鸽子，画画画」（鳩を遊んだり、絵を描いたり）という動作だけを取り出している。(49)は一日中でやったことの中から、「到处逛逛，海水里浸浸，然后听听音乐，看看戏和电影」（あっちこっちぶらぶらしたり、海に入ったりする。それから、音楽を聞いたり、劇と映画を見たりして）という典型的ないくつかの動作の固まりを取り出して、非連続的に並べている。というのは、「逛逛」と「海水里浸浸」という出来事の間に、ほかのことをやった可能性が十分あるからである。(50)の「锄锄草」（草を刈ったり）、「喂喂牲口」（家畜に餌をやったり）は「饲养员」（飼育員）の一日の仕事の中から、部分的に二つの行為だけを取りだしており、また、この二つの行為の間には連続性がなく、部分列举であるということが出来る。

重ねていない動詞：ひとまとまりの動作の全体を表す

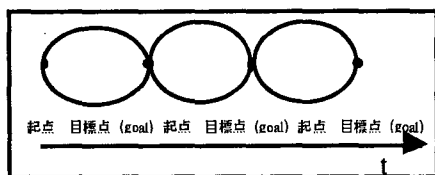
これと対照的に、重ねていない動詞は目的語を伴って、完了的で、一つの決まった時間枠における

ひとまとまりの動作の全体を表す。

- (51) 她急忙爬起来，刷牙，洗脸，梳辫子，然后把被褥和书籍都包裹好。（彼女は急いで起きて、歯を磨いて、顔を洗って、髪をおさげに結って、それから布団と本を包んだ）
(李1964：258)

上述の(51)はある時間内で、動詞を重ねずに、主人公が行っている行為の全てを述べ、動作と動作の間は連続的で、場面を単一のひとまとまりの全体としてとらえている。(51)は全部列挙であるのに対し、(48)、(49)、(50)は一部列挙である。(51) (図<3-6>)を図で表すと、次のようになる。

図<3-6>

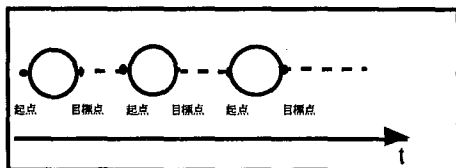


動詞を重ねていないほうの(51)はそれぞれがひとまとまりの出来事であって、動作が一定の時間内で、時間軸に沿って、継起的に現われている。動作を行われた順序に述べるのが特徴である。

しかし、重ねていない動詞は(52)のように一定の時間帯の枠組の中で、話し手は出来事の順序には関心を示さずに、ただ単にその期間内の動作全体を眺めて、記録する場合もある。

- (52) 临到娶的那几天，更加忙了：请朋友，唤亲戚，搭彩棚，扫院子，搬桌椅板凳…(嫁ぐ日に近づいたその何日かは更に忙しくなってきた：友達を招待したり、親戚を呼んだり、棚を作ったり、庭を掃除したり、テーブル、椅子、ベンチを運んだりして…)

図<3-7>



(48)、(49)、(50)の重ねられている動詞は動作全体の中の一部を表すため、個々の動作の間は時間的な制限に縛られておらず、順序性もなく、時間順にも沿っていないのが特徴である。

3.2.2.5 コンテキストにおける他の派生的な意味

中国語の動詞の重ね型の構文には、必ずしも「少量」の意味は含まれておらず、語彙や文脈によりさまざまな意味が醸し出される。つまり、動詞の重ね型のプロトタイプ的な意味は「不定量」、「部分完了」から「反復」、「持続」という意味が派生されるだけでなく、また、コンテキストによりほかのいろいろな意味も派生されるのである。ここでは異議のあるいくつかの意味について考えてみる。

3.2.2.5.1 動詞の重ね型と「～看、～试试」（～してみる）

森田良行（1989：1104）によれば、「～してみる」は意志性の動詞と結び付けば、「実験的試みの意図」を表す。つまり、動詞を二回繰り返すこと自体に意志性が潜んでいて、「～してみる」があれば、「試す」を意味するのである。「～看、～试试」が使われる時、動作を一回で完成させるのではなく、途中で失敗して、同じような動作が何回か繰り返されることが予想されている。「～看、～试试」はその動作を一回で成功させ、終わらせる意味を持っていない。或いは、最初から動作を完成させるとは言わないのである。動詞の重ね型の持つ反復と部分完了という意味は「～看、～试试」の表している意味と矛盾しない。そこで、動詞の重ね型は「～看、～试试」と意味的に互いに相いれる関係にあるため、動詞の重ね型の後にもし「～看」と「～试试」をつけると、「～してみる」の意味が出てくるのである。

当然、動詞の重ね型はすべて必ずしも「～してみる」の意味を表すというわけではない。

(53) 我送送你。（私はあなたを送りましょう）

(54) 你摔摔看，这个杯子结实不结实。（あなたは投げてみてください。このコップが丈夫かどうか）

(53) の「送送」（送る）はその動作がいくつかの終局点を持つことが可能なことと、(54) の「摔摔」（投げる）は何回か投げられる可能性があるということで、両方とも「反復」の意味を表す。ただし、(53) には「～してみる」の意味がないが、(54) にはある。つまり「～してみる」の意味を表すために、動詞の重ね型の後に「～看、～试试」を付けるのである。逆から言えば、動詞の重ね型の後に「～看、～试试」がつけられる文は「～してみる」の意味を表すのである。

では、動詞の重ね型と「～看、～试试」との関連について、もう少し考えてみよう。

動詞の重ね型は事態の結果に焦点を当てず、結果がどうかについては、動作・行為を行う主体の意志に任せているのである。だから、動詞の重ね型は動作の起点は持っているが、目標点は持っていない、行われる事態は結果までは含意しない。もし、話し手自身或いは聞き手に事態の結果を確認する必要があると話者がそう思えば、動詞の重ね型の後に「～看、～试试」を付けるのである¹³⁾（例文(54)）。そうでなければ、「～看、～试试」をつけない（(53) の文）。

動詞の重ね型の後に「～看、～试试」がある時、確認したい事態は主体にとって、望ましい場合と

13) ここでの話は文脈に基づく場合の話である。というのは文脈により、「～看、～试试」は省略されることがありうるからである。

望ましくない場合の二つがあると考えられる。望ましい場合は動作・行為の実行を要求するが、望ましくない時は、事態の実現が不可能か、或いは事態の実行を要求するのは主体の本音ではないというのを意味する。次の例文を参照されたい。

- (55) 你走走试试，看这双鞋合脚不？（歩いてみてください。その靴は足に合うかどうか）
(56) 你叫他生生孩子，他就知道做母亲的甘苦了。（彼に子供を作らせてみる。そうしたら母親の苦勞が分かってくれるだろう）（刘1983a: 18）
(57) 这个门你敢进？你进进，不把你轰出来！（この玄関に入る勇氣があるの？入ってみろ！追い出されるに違いない）（刘1983a: 18）

(55) の例は「靴が足に合うかどうか」という結果を知るために、聞き手に「履いて、試す」という行為の実行を要求するのである。(56) は実行不可能なことを相手に要求することにより、脅しの効果が出る。(57) は相手に実行してもらふ行為は本当はその実現を望んでいず、もしこういう行為を実行すれば、こんな悪い結果を引き起こすと警告・脅しの効果を狙っているのである。

(55) は普通の命令・依頼表現であるが、(56)、(57) をここで仮に「假定命令」¹⁴⁾ と名付ける。「假定命令」は日本語の「～してみろ」と似ている。

3.2.2.5.2 「经常性」（習慣性 habitual）

時間的に十分引き伸ばすことが可能な場面、或いは長い期間にわたってかなりの回数繰り返すことの可能な場面は習慣的なものとして表現することができる。習慣性は、原則として引き伸ばされたり、繰り返されたりする場面を表現するのにふさわしい。また、この特性はさまざまな意味論的なアスペクトの価値と結び付くことができる（Comrie 1976: 訳書51ページ）。習慣性が反復を含み込んでいるような場合においては、その習慣性をほかのアスペクト的な価値と結び付けることによって、繰り返し起こってくる、いちいちの場面のアスペクト的な性格をはっきりと示すことができる。これらの場面が一緒になって、習慣相の形式によって、さしだされる、性格（表記、出典のママ）な場面を組み立てているのである（Comrie 1976: 訳書52ページ）。

中国語の動詞の重ね型が「经常性」を表すという指摘がある。范（1964）と刘（1983）などは「有些动词重叠，表示经常性的反复进行的动作」（ある重ねられた動詞は經常的、反復的に行われる動作を表す）と説明する。范が挙げている例は次である。

- (58) 以后你就帮他抱抱孩子。（これからあなたは彼の子供の世話を^{抱く}見てあげてください）（范1964: 276）
(59) 他编编荆条筐，看看书报，也满够打发日子的。（彼はイバラで籠を編んだり、新聞、雑誌を読んだりして、十分に生活することができる）（东1963: 11）

14) 「假定命令」についての詳しい議論は6.2.4を参照。

確かに、(58)はこれから毎日「抱孩子」（子供の世話をする）ということをしなくてはならないので、「经常性」が出てくるのであり、(59)は毎日「编编荆条筐，看看书报」をして、生活しているから、「经常性」がある。しかし、同じような動詞で、文脈が違うと「经常性」がなくなることがある。

(60) 请你帮我抱抱孩子，我上个厕所就来。（子供をちょっと見てくれない？お手洗いに رفتてくるから）

(61) 明天星期天，他准备在家编编荆条筐，看看书报，（明日日曜日、彼は家でイバラで籠を編んだり、新聞、雑誌を読んだりして、過ごすつもりです）

(60)は話し手がトイレへ行くために、今ちょっと子供の世話をしてもらふことと、(61)は一日だけ家で「编编荆条筐，看看书报」（イバラで籠を編んだり、新聞、雑誌を読んだりする）をするから、動作・行為の「反復」の意味はあるが、「经常性」の意味は読み取れない。つまり、(58)、(59)はただ単に動詞の重ね型が「经常性」の意味を表すのではなく、「以后」などのような副詞の語句によって、文全体が「经常性」を表しているのである。その「经常性」は「動詞の周りの状語の修飾により、文脈から推論された意味である。つまり、中国語の習慣性は「平常」、「会」などの他の要素の助けも借りて、表されている」（鶴殿1977：27）のである。

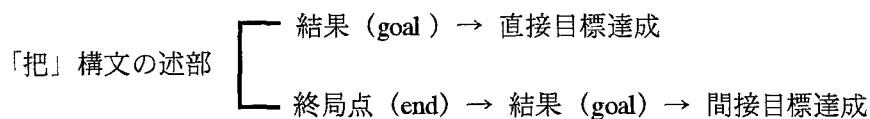
3.3 動詞の重ね型と「把」構文について

動詞の重ね型と「把」構文は、文法的な共通点が多い。この節では、その異同について考えてみる。

3.3.1 動詞の重ね型の意味と「把」構文の述部における必要条件

「把」構文とは処置や影響を表すものである以上、処置や影響を与える動作を表す動詞の他に、処置や影響を被った結果を表すものが必要である（刘等1996：629-630）。結果が表せるものには数量補語（動量補語、時量補語）などもあって、動詞の重ね型は動量補語の一種だと見てもいい。

また、「把」構文の述部における必要条件は「限界点を有する行為」だと考えられている（安井1999：162）。限界点については、安井二美子（1999：162）は更に次のように説明をしている。「空間的、時間的、或いは定量、不定量に違いはあるが、すべて動詞に量的な限界点を設ける表現である。結果補語などによる結果状態は、動詞がその状態に至るという限界点を示している」という。刘の言っている「結果」と安井の言っている「限界点」は二つの状況を意味する。つまり、動作・行為が直接目標点まで達する場合と、先行文でまず動作・行為が一段落終了した（「終局点」に達した）ことが示され、後続文の意味によって、その動作・行為が目標点まで達したかどうかが決まる場合とに分けられる。ここでは、前者を「直接目標達成」と、後者を「間接目標達成」と名付ける。



次の例を参照されたい。

(62) 我把钥匙找到了。(私は鍵を見つけた)

(63) a 他把这件衣服洗了(洗), 洗干净了。(彼がこの服を洗って、きれいになった)

b 他把这件衣服洗了(洗), 没洗干净。(彼がこの服を洗ったが、きれいにならなかった)

(62) は「直接目標達成」で、(63) は「間接目標達成」である。a と b の先行文はともに「動作・行為の終局点」を得ることができたが、後続文の意味により、それぞれ違う結果になったが、目標まで達したことは間違いはない。

動詞の重ね型は「把」構文の述部とよく似たような性質を持っているが、結果状態が明示されず、「終局点」の状況しか存在しない。動詞の重ね型が不定量を表すというのは、結果の状況をはっきりさせないということである。「直接目標達成」という意味が表せないということは、次の例から明らかである。

(64) *我找到了找到钥匙。(私は鍵を見つけに見つけた)

動詞の重ね型は「終局点」を含意する時は、動詞に「量の限界点」(不定量)を設けることができ、結果の状況をはっきりさせず、「把」の構文に適合する。

(65) 你把张家的电费收收。(あなたは張宅の電気代をもらってください)

もし、動詞の重ね型が「終局点」を含意しなければ、その動詞自体重ねられないし、「把」構文とも共起できない。

(66) *把娘子打发打发。(奥さんをなんとかして) (史 1994: 27)

(67) 你拿一点儿钱, 把上头人打发打发。(お金で上の人を何とかして)

史有为 (1994: 27) は (66) の例は言わないという。しかし、もし、(67) のようにすると、文が適格となる。つまり、(66) は文脈がないため、「打发打发」は「終局点」を持ちにくい。

(67) のほうは「上の人に邪魔させないようにする」という終局点の意味を持っているため、「把」構文と共起できる。

3.3.2 動詞の重ね型と「把」構文の内部構造

動詞の重ね型と「把」構文はよく似ているところが多く、しばしば置き換えられることがある。

(68) 我看了看这篇文章。(私は読みに読んだこの文章を)

(69) 我把这篇文章看了看。(私はこの文章を読みに読んだ)

しかし、動詞の重ね型と「把」構文はいつも置き換えられるというわけではない。

(70) 今天晚上我看看电视去。(今晚私はテレビを見に行く)

(71) *今天晚上我把电视看看。(今晚私はテレビを見に見る)

では、どこが違うのかというのを説明するために、次は動詞の重ね型の内部構造から分析する。

「把」構文の成立する条件としては、その目的語は特定化されたものでなければならない。動詞の重ね型は不定量で、反復を表し、その目的語を分析すると、具体的に以下のいくつかのタイプに分類することができる(3.2.2.3.1を参照)。

i. 非限定複数の目的語による動作・行為の反復

目的語が非限定複数である時、特定される場合と特定されない場合の二種類がある。もし、その目的語が特定できなければ、「把」構文に置き換えることはできず、特定できるなら、置き換えられる。

(72) a 我去地里拔拔草。(私は畑に行って草を抜きます)

b 我去把地里的草拔拔。(私は畑の草を抜きに行きます)

(73) a 你来给我们跳跳舞。(私たちに踊りを踊ってください)

b * 你来给我们把舞跳跳。(私たちに踊りを踊ってください)

「草」といったら、一本ではなく、非限定複数であるが、「地里」(畑)という修飾語があるため、特定のになり、「把」構文との共起もできる。(73)の「舞」(踊り)は非限定複数なものであるが、特定できないため、「把」構文との共起も認めない。

ii. 目的語が特定され、動作・行為自体による反復

目的語が特定されたら、動詞の重ね型と「把」構文の置き換えが可能である。

(74) a 他点了点头。(彼は頷いた)

b 他把头点了点。(彼は頭で頷いた)

ii. は同一個体の動作・行為の反復であるため、目的語であるその個体は殆ど特定されるので、「把」構文との共起は認められる。

§ 4 命令・依頼表現における動詞の重ね型

4.1 先行研究の紹介と問題の提起

命令・依頼表現における動詞の重ね型の意味については、多く論じられている。例えば、「重叠的动词常用于祈使句中」(重ねた動詞はよく命令・依頼表現に使われている)(李1964: 259)、「为了请求对方做一件事时, 常常用动词重叠这种格式」(相手に何かを頼む時、よく動詞の重ね型を使う)(范1964: 276)、「重叠动词的主语是第二人称时(祈使句), 动词重叠具有缓和语气的作用, 是汉语中委婉地, 有礼貌地表示命令或请求的重要手段。」(重ねる動詞の主語は第二人称である時、動詞の重ね型は語気を緩和する働きを持っていて、中国語で婉曲的に礼儀正しく命令或いは依頼を表す重要な手段である)(刘1983a: 10)とされている。しかし、このような観点を語用論的な立場から検証すると、説明できない文がある。

(75) 你睁开眼看看! 是我们赢了, 还是你们赢了?(あなたは目を開けて見なさい。私たちが勝ったのか、あなたたちが勝ったのか?)

もし(75)を敵に向かって言っている場合なら、明らかに、「穏やかな命令」という意味には取れない。

次の文は恐らく話し手が相手に丁寧に自分の意思を伝えようと思っているつもりで発話した文であるが、これも非文である。

(76) *老大爷, 让我来开开吧¹⁵⁾。(お爺さん、私が開けてみましょう)

しかし、また、なぜ命令・依頼表現には動詞の重ね型がよく使われるのか、なぜ動詞の重ね型が丁寧さを表せるのかについては十分に説明されていない。よって言語学の観点から言葉の形式と意味の動機に基づく体系的な規定が必要である。本論文は以上の動詞の重ね型の意味分析に基づいて、語用論の立場から命令・依頼表現における動詞の重ね型について改めて考える。

15) この文は1996日本中国語学会第46回全国大会で、山崎直樹の「(大学の) 教養的教育の中国語学習における到達目標設定の試み」という発表の中から引用したものである。この文は次の状況で発話したのである。

「汽車の中で、見知らぬ老人(男性)が窓をあけようとしているが、窓が重く、なかなか開かず難儀をしている。あなたはそれを見て、かわりに開けてあげようと思った。そう申し出よ。」

4.2 動詞の重ね型はなぜ「少量」が表せるのか

事象の生起は一回の生起が普通であって、反復は特殊現象であるという認識が働いているから、一回生起は意味的に無標、複数生起は有標だと言える。アイコン性の観点から、動詞を二回繰り返すということは、つまり表現効果のために反復し、反復による強調が聞き手を驚かしたり、印象づけたり、あるいはその興味を掻き立てるといような何らかの修辭的価値を持つのである（Leech 1983: 95-96）。しかし、中国語の動詞の重ね型は「少量」を表すという言い方はもう周知の通りである。だが、何に対して「少量」であるかはまだ説明がなされていない。

アスペクトの観点から考えれば、重ねられていない動詞は動作の起点のみがあって、持続的で、もし継続を示す修飾表現や、動詞に結果や量を表す言葉がなければ、その動詞は量的には無限な存在になってしまうのである。重ねられた動詞は「部分完了」、「不定量」を表すが、主体の意志によって、「不定量」は「定量」に変わることが可能である。つまり、目標点まで着くかどうかは主体次第である。人間の物事に対する認知の仕方、人間の直感から言うと、重ねられていない動詞の持つ無限な量と比べ、相対的で有限な量のほうが少ないはずである。もともと動詞と動詞の間に「一」があって¹⁶⁾、最小限の数だということを表し、「少量」と意味的に繋がりやすい。また、アイコン性の観点から考えると、言葉の重複は「強調」という特徴を持っているので、動詞の重ね型はまた「動作の強化」とも理解されやすい。しかし、それらはすべて人間の思い込みで、動詞の重ね型は「少量」でもないし、「動作の強化」でもなく、現代中国語で文法的なマーカーの一つに過ぎないと言えよう。

言葉の形式と意味は、外部世界の知覚や認識に基づいて作られている認識モデルによって動機づけられている。よって、重ねられていない動詞の表す「無限の量」と比べれば、重ねられた動詞の「不定量」のほうが、量的に少ないことにより、語用論的な立場から、依頼表現における動詞の重ね型を説明することが可能である。

4.3 語用論の観点から見た動詞の重ね型

前節での議論をふまえて、以上であげた(76)の例がなぜ容認度が低いのかについて考えみよう。もし、(76)の言い方を(77)のように変えたら、自然な文になる。

(77) 老大爷，让我来开吧。（お爺さん、私が開けてあげましょう。）

なぜかという、対人関係における丁寧さの原則には「他者に対する利益を最大限にせよ」というLeech（1983: 訳書190ページ）の気配りの原則に従えば、相手に利益のあることを提供することは、目標点までの責任ある実行を含意する。ところが、重ね型は「部分完了」であり、目標点までの実行を含意しないので、相手に最大の利益を提供しないことは丁寧さの原則に違反する。(77)のように

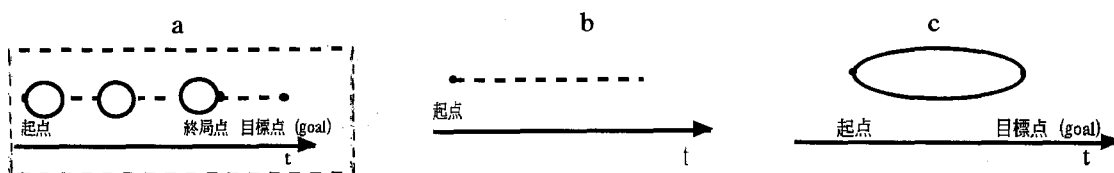
16) 「VV」、「V-V」は意味的に違いがあると思うが、ここではそれを論じないことにする。文法的には同じような働きを持っていると考えている。

動詞を重ねずに、完全にゴールまで利益を提供するのが常識である。

相手に依頼をする時、動詞の重ね型がよく使われている理由は、同じ語用論の観点から解釈が可能である。次の例を参照されたい。

- (78) a 先生, 请你帮我开开窗户。(すみません、窓を開けてもらえますか)
b ? 先生, 请你帮我开窗户。(すみません、窓を開けてもらいます)
c 先生, 请你帮我把窗户打开。(すみません、窓を開けてもらえますか)

図 < 4-1 >



中国語では、相手に動作・行為を依頼する時、どこまでやってもらうかを具体的に指示しなければならない。語用論的にいうと、同じく「他者に対する負担を最小限にせよ」(同上)という気配りの原則から、(78)のaは相手に依頼している行為をゴールまでしてもらうのではなく、相手のできるところまでよいということで、押し付けがましくないような言い方である。相手に行為を実行する選択の余地を与えることにより、丁寧さがあり、依頼文でよく使われているのである。bの「开窗户」は動作の「开」という行為だけを表して、終局点がないため、相手に依頼している動作がずっと永遠に続くということになる。これは気配りの原則に違反し、日常的にはまずこのような頼み方はしないと考えられる。もし、cのように完全に開けるまでしてもらうように明確に指示したら、言える。しかし、目標点まで相手に行為を要求するということは、要求内容をストレートに述べているため、相手にかかる負担が大きく、しつこい依頼と受け取られるのである。aは言葉で明示的に相手に目標点までの行為を要求していず、依頼していることをどこまでしてくれるかは、相手に任せる態度で、相手に最大の選択を与え、cより相手にかかる負担が小さく、丁寧度が高いのである。

bの「开窗户」という動作に目標点がないということは、次の例文から証明できる。

- (79) 我开了窗户, 可是没开开¹⁷⁾。(私は窓を開けたが、開かなかった)

動詞の重ね型が依頼文で使われる例をもう一つ見よう。

- (80) a 我来杀杀这头猪。(私がこの豚を殺そう)

17) 一番最後の「开」は前の動詞の「开」の繰り返しではなく、「开」の結果を表す結果補語である。ここでたまたま動作を表す動詞と結果を表す動詞が同じ漢字であるが、意味的には違いがある。ここでの「开开」は「打开」に言い替えてもいい。

- (80) a 我来杀这头猪。(私がこの豚を殺そう)
 b* 我来杀杀这头猪。(私がこの豚をちょっと殺そう)
 c 我来杀杀这头猪试试。(私がこの豚を殺してみる)
 d 请你帮我杀杀这头猪。(豚を殺すのをちょっと手伝ってください)

(80) のa の「杀猪」は動詞「杀」と目的語が一緒になって一通りの動作・行為を表す。つまり、「猪」を殺し、内臓を取り出し、きれいに片付けるまでの一通りの動作だと思われる。豚が一頭である場合、bのように「杀」を重ねたら、「猪」を半殺しにするか、或いは「杀猪」の一通りの動作を完成しないという意味を表すことになる。当然このような行為は考えられないので、bは非文である。もし、本当に「杀猪」という行為を完成するかどうかは別として、ただやってみるというつもりなら、cは言える。dのように相手をお願いする時、かける負担を小さくするため、動詞を繰り返し、どこまでやってもらうかは相手に任せ、ゴールまで行為をしてもらうという意をはっきりに出さず、相手に強制する意がなく、最大の選択権を与えるのである。このような依頼は丁寧な依頼である。(78) のa、(80) のdの文は、動詞の重ね型で話し手が自分の要求を直接に言わず、ぼかした表現で頼むため、間接的な表現になり、結果的に語調緩和の効果が得られるのである。

命令・依頼表現における動詞の重ね型の機能については、人称の違いによって、動詞を重ねるかどうか少し違って来る。

- (81) a 你来帮帮忙。(ちょっと手伝ってくれ)
 b* 我来帮帮忙。(私がちょっと手伝いましょう)
 c 我来帮忙。(私が手伝いましょう)

つまり、相手に依頼をする時、相手にかける負担を最小限にするため、動詞を重ねるのである。相手のために何かをしてあげる時、最大の利益をあげなければならない時、動詞を重ねないのが普通である¹⁸⁾。

4.4 まとめ

命令というのは、未来(話の時点より後)に現在と異なった動きが成立することを要求するものである。したがって、現在よりのちにハジマルことが要求される。そのためには、はじめとおわりを持つ動きを表す動詞であることが基本的なのである(高橋1994: 23)。しかし、中国語では相手に丁寧に命令する時、要求している動詞の動きは「はじめ」があって、「おわり」を持っていない。話し手

18) 相手の利のために何かをしてあげる時、その動詞を重ねてはいけないということはない。もし、相手にしてあげることが明確に一通りの動作であれば、その動詞を重ねないのが普通である(例文(1))。逆に話し手のほうが、聞き手のために最後までやり遂げる自信がなく、「～してみる」の意を表す場合なら、その動詞を重ねる(例文(2))。

- (1) 我来帮你开窗户。(窓を開けるのを手伝いましょう)
 (2) 我来帮你开开看。(開けてみます)

は出さず、「おわり」の部分を決める権利を相手に与え、相手にかける負担を軽減することで、丁寧さを増すのである。動詞の重ね型は、「はじめ」と「おわり」を持つ動詞の依頼文と比べれば、終わりでまでやってもらうという意図をはっきりと言語表現上で明示しないため、相手にかける負担が量的に少なくなるので、丁寧さの原則に従い、相手に依頼する時の一つの戦略として、よく使われる。はっきりした動作の量ではなく、漠然とした依頼は結果的に間接的な依頼であって、丁寧さの効果が出るのである。中国語で動詞の重ね型を用いて自分の「欲」を表に出さずに、しかも相手に最大の選択権を与えるのは、中国語の丁寧な依頼文の一つの特徴だと言えよう。

以上のように、丁寧さが中国語の構文操作に深くかかわっている。

§5 動詞と動詞の重ね型について

動詞がどんな時重ねられるかは、語用論に大きく依存する問題でもあって、一義的に決めることができない。中国語ではすべての動詞が重ねられるというわけではない。どのような動詞が重ねられないかについては、多くの研究があるが、以下のようにまとめることができる。

5.1 重ねられる動詞と重ねられない動詞

李（1964:260）は「不定量」を表す動詞なら重ねられるが、結果の意味がある動詞、心理を表す動詞は重ねられないと指摘した。具体的に言うと、次のような動詞である。

①結果を持っている動詞

看见（見える）、遇到（出会う）、获得（獲得する）、毕业（卒業する）、死（死ぬ）、牺牲（犠牲にする）

②心理活動を表す動詞

感动（感動する）、佩服（感心する）、厌恶（嫌悪する）、害羞（恥ずかしがる）、后悔（後悔する）、失望（失望する）

③ある動詞は重ねられないが、その動詞の同義詞は重ねられる¹⁹⁾

考试（考）（テストする）、记录（记）（記録する）、等待（等）（待つ）、印刷（印）（印刷する）、赠送（送）（送る）

李は動詞の重ね型をコンテキストから切り離し、動詞の分類から動詞が重ねられるかどうかを考えているが、不備なところがある。

范（1964:268）はどんな動詞が重ねられるか重ねられないかについては、重ねられない具体的な動詞を挙げたほかに、「能願動詞（会（できる）、能（可能））、趨向動詞（来（来

19) 例えば、「考试、记录、等待、印刷、赠送」は重ねられないが、「考、记、等、印、送」は重ねられる。

る)、去(行く))、判断動詞(是(～です))」などは重ねられないと述べている。また、単音節の動詞は二音節の動詞より重ねやすいと言う。

刘1983aによれば、動作動詞だけが重ねられる。非動作動詞、例えば、関係動詞(是(～です)、成为(～になる))、趨向動詞、心理状態を表す動詞(愛(愛する)、恨(恨む)、害羞(恥ずかしがる))、及び変化を表す動詞(死(死ぬ))、非持続性動詞(杀(殺す))、反復性のない動詞(结婚(結婚する))、一回性の動作を表す動詞(*寄寄这封信(この一通の手紙を出す))、人間のコントロールできない動詞(病(病気になる)、作梦(夢を見る))などは重ねられない(p.15)と指摘するが、もし「～してみる」の意味を表す文の場合なら、非持続性動詞、反復性のない動詞、趨向動詞、心理状態を表す動詞も重ねられるようになり、使役文では非動作動詞・心理状態を表す動詞も重ねられるのだと述べている。動作動詞の場合は次の二つの条件を備えなければならないと言う(pp.15-16)。

(a) 重ねられる動作は持続(看、笑、等、歇、想)か、反復的な動作(拍、揺、眨巴、跳)でなければならない。持続できない或いは反復を表せない動作動詞(杀、摔、扑、取消、撞、结婚等)は重ねられない²⁰⁾。

(b) その動作は話し手が主観的にコントロールできなければならない。

ほかに、次の指摘がある(p.18)。

i. 「～してみる」という意味を表す文なら、ある非持続性、或いは非反復性の動作動詞、心理状態、趨向動詞も重ねられるようになる。

(82) 杀鸡并不难, 不信你杀杀试试。(鶏を殺すのは難しくはない。信じなければ殺して見てください)

ii. 使役文においては、重ねられるのは典型的な非動作動詞が多い。例えば、心理状態を表す動詞「知道(知っている)、了解(知っている)、害怕(怖がる)」なども重ねられる。

以上の事実は、刘1983aによって指摘されているが、どのような場合にそれが実現するのかについての詳しい考察はなされていない。

20) ここで挙げている中国語の動詞の意味はそれぞれ次のように解釈する。

持続を表す動詞: 看(見る)、笑(笑う)、等(待つ)、歇(休む、休憩する)、想(考える)

反復を表す動詞: 拍(叩く)、揺(揺らす)、眨巴(瞬く)、跳(跳ねる)

瞬間を表す動詞: 杀(殺す)、摔(投げる)、扑(飛びかかる)、取消(取り消す)、撞(ぶつかる)、结婚(結婚する)

だが、以上の動詞の分類はすべてがうまく当てはまるというわけではない。というのは、動詞のそれぞれの意味には既に一定のアスペクト機能が割り当てられているわけだが、一緒に用いられる副詞や目的語との関係、或いは文脈などにより、基本的なアスペクト機能が強化されたり、変化したりすることもある。後ほど改めて触れるが、例えば、実際もともと重ねられない「趨向動詞」は一定の条件のもとで、重ねられる時があるのである。

動詞を分類し、動詞だけを取り上げ、それが重ねられるかどうかを論じるのはあまり意味がない。本来、動詞は他の成分との関連によって、初めてその意味が実現されるものである。動詞が重ねられるかどうかを考察する時、動詞の語彙的意味を考えることは重要なことであるが、しかし、それだけでは不十分で、それ以外の要素、例えば、副詞・目的語・名詞句など文全体の構成要素、更には発話の場・文脈など一文を越えたレベルの要素も考察しなければならない。動詞とその他の要素の相互干渉の結果によって動詞が重ねられるかどうかを決めるのである。

ヤーホントフ（1957：訳書265 - 266ページ）は中国語の動詞は、それぞれ結果アスペクトか一般アスペクトのどちらかを持つと主張する。結果アスペクトを持つ動詞は結果動詞で、二つの要素からなっている。その中の第二要素が、第一要素の意味する動作の結果を示す動詞であるが、多くは虚詞的な意味を持つようになっている。例えば、

(83) 吃饱。(お腹一杯食べる)

の「吃」は動詞で、「饱」は結果補語である。

ヤーホントフは結果動詞以外の動詞をすべて一般アスペクト動詞だと見なし、そこから無数の結果アスペクト動詞が作られると述べている。

中国語の動詞の重ね型は動詞とは一体どんな関係を持っているだろうか。次は今までの研究と違った面から考察してみるが、まず、重ねられる動詞の必要条件を以下の二つに絞る。

- (84) a 非結果動詞
- b 意図性動詞

つまり、最低条件として、動詞は以上の二つの条件を満たせば、重ねられるのである。以下、第5.2節で動詞の非結果性と重ね型の関係について論じ、第5.3節で動詞の意図と重ね型の関係について論じる。

5.2 アスペクトによる動詞分類 —— 結果動詞と非結果動詞

本論文ではヤーホントフ（1957）の説を取り上げ、動詞の語彙的意味から言うと、結果性を持っている結果動詞（结婚（結婚）、看见（見える）、消灭（滅ぼす））は重ねられず、動作が達成されず、結果まで含意していない非結果動詞（杀（殺す）、看（見る）、修理（修理す

達成されず、結果まで含意していない非結果動詞（杀（殺す）、看（見る）、修理（修理する））は重ねられることを主張する。

山田（1984：74 - 77）は Garey（1957）の研究を引用して、動詞に目標点の含意があるかないかを問題にし、目標点を持つ活動を示す動詞を目標動詞（結果動詞）（telic verbs）、持たないものを非目標動詞（非結果動詞）（atelic verbs）と名付けている。そして、目標動詞、非目標動詞が文脈によってアスペクト意味を変えることにも着目し、動詞そのものが目標点を含意していなくても、他の文成分によってそれが付け加えられれば目標動詞になると主張した。つまり、動詞プラス目的語（verb-plus-object）が telic であるとか、動詞の補語は atelic というように部分的に説明されていたものを総括して、叙述全体が telic であるか atelic であるかを見るべきだと主張している。本論文はこの説を支持し、動詞が重ねられるかどうかは動詞の語彙的意味だけでは決まらず、修飾語・動詞句（動詞の後ろにほかの単語が結び付いたもの）まで考える必要があることを指摘する。

そこで、重ねられる動詞については、以下の仮説を立てる。

- (85) a 叙述全体が atelic で、動作・行為が完了していない場合（目標点を持たない場合）
- b 話し手が聞き手に依頼をする時点で、動作・行為の完了を明示しない場合
- c 「～看、～试试」（～してみる）の意味がある場合
- d 「～したい」という話し手の願望を表す場合（我想～）

次は以上の仮説に基づいて分析する。

5.2.1 叙述全体についての分析

叙述全体が atelic であるかどうかは、以下の要素と関連する。

動詞句（動詞と目的語、動詞と補語）

動詞と修飾語

まず、動詞句について考える。

5.2.1.1 動詞句

動詞は目的語を持たない時、その動詞に持続性があれば、重ねられる。

- (86) 你先坐坐，我马上就来。（しばらくここにいて、すぐ戻ってくるから）

(86) の動詞は継続動詞で、重ねたらその動作が持続するという意味を表す。動詞は持続性がなければ、次の文の b のように重ねられない。

- (87) a 他死了。（彼は死んだ）

また、動詞句（動詞と目的語）が表している動作・行為が完了する場合であれば、その動詞は重ねられず、不完了であれば、重ねられる。次は目的語のある動詞の重ね型について考える。

5.2.1.1.1 動詞と目的語

まず、動詞の重ね型そのものの仕組²¹⁾については、

- (a) 非限定複数目的語による動作・行為の反復
- (b) 目的語が特定され、動作・行為自体による反復

が区別されうる。(a)は非限定複数個の対象に及ぼされる動詞の重ね型である。(b)は動作作用の及ぼされる対象は同じで、しかも一つであり、動詞そのものの持続或いは反復を表すものである。

つまり、その動詞が重ねられるかどうかについては、動詞と目的語の関係からいうなれば、(a)或いは(b)のどちらかであれば、その動詞は重ねられる。

中国語の動詞は目的語を伴った時に、完了アスペクトを表す場合がある。目的語が単数で、一回きの動作で、動作・行為を完成することができる場合には、その動詞は重ねることができない。もし、文中の目的語が非限定複数形であれば、その動詞は同じような動作を何回も繰り返すことができるので、重ねられる。目的語が非限定複数個の対象である場合には、行為の主体及び行為そのものは同一であるが、作用の及ぶ対象は変わっていくのである。

刘(1996:140)は「持続不可能な動作を表す動詞は試行の意味を表すのでない限り、一般に重ね型で用いられない」と指摘したが、次の例文のように、目的語が非限定複数形であれば、動作も持続可能になって、重ねられるのである。

- (88) 他收了收各家的电费。(彼は各家の電気代をもらった)
- (89) 我明天到地里去拔拔草。(明日畑へ行って、草を抜きに行きます)

(88)は「収」(もらう)という動詞に非限定複数目的語(「何軒の電気代」)がつくと、何回も「收电费」の動作を繰り返すことができる。(89)の「地里」(畑)の「草」といえば、一本ではないから、「拔」の動作は何回も繰り返すことができる。

単数の目的語は動詞と一緒に事象に限界を与えることができる。もし、動詞と後続する目的語が一緒になって動作・行為の完了を含意する(表している動作が一回で完了する)なら、重ねられない。

- (90) a 他收了张家的电费。(彼は張宅の電気代をもらった)

21) 詳しい議論は3.2.2.2.1と3.3.2を参照。

(90) a 他收了张家的电费。(彼は張宅の電気代をもらった)

b * 他收了收张家的电费。(彼は張宅の電気代をもらいにもらった)

(91) a 昨天我演了戏。(昨日私は劇に出演しました)

b * 昨天我演了演戏。(昨日私は劇に出演に出演しました)

「收张家的电费」(張宅の電気代をもらう)と「昨天演戏」(昨日芝居をする)の対象語はそれぞれ一つで、述語と一緒にになって動作の完了を表す。一回で終わる動作だから、二回以上繰り返すことは許されない。

もし、動詞句が「完了」という意味を表すにも関わらず、その文全体が文脈により、「完了」の意味を表さなければ、動詞の繰り返しは可能である。

(92) a * 昨天我演了演戏。(昨日私は劇に出演に出演しました)

b 昨天我演了演戏, 觉得自己不行了。(昨日私は劇に出演に出演したが、自分がもうだめだと感じた)

(92) の a のように後続文がない時には、動詞と目的語は一回きりの動作を表すことになるので、動詞の繰り返しを許さないが、b のように結果を表す文が続くと、ただ動作だけを表すことになり、その動作を何回かやってみて、そういう結果になったということを表すのである。

范(1964)には「趨向动词」は重ねられないという指摘がある。というのは「趨向动词」は普通、目的地と一緒に提示され、移動したものは動作の結果として移動先に存在する(三原1997)ので、終了目標点があり、結果動詞になるから、重ねられないのである。

しかし、「趨向动词」に動作の達成・結果という完了的特徴の標示がなければ、つまり、目的地を明示しないなら、結果性がなくなり、重ねられる場合もある。

(93) a 你在这儿等着, 我去去就来。(ここで待っていて、すぐ行ってくるから)

b * 你在这儿等着, 我去去学校就来。(ここで待っていて、学校へすぐ行ってくるから)

(93) の a は目的地が明示されず、終局点をいくつか持つ可能性があるため、重ねられる。b は「学校」という目的地を提示したので、重ねられない。

同じ「趨向动词」と言っても、「来」(来る)は「去」(行く)と違って、普通重ねられない。

(94) a 我去去就来。(すぐ行ってくる)

b * 我来来就来。(すぐ来るに来る)

というのは、意味的に「去」は今の場所から、前へ向かっていくから、永遠に続くことができ、目

所はつまり「来」の目標点にもなり、目的地がすでに含意されているため、「来」の動作を繰り返すことができないからである。

次には(b)の動作・行為自体による反復の例を見ることにしよう。

- (95) 他笑着摇摇头。(彼は笑って、首を横に振った)
- (96) 这个药丸太大, 我吞了吞, 没吞下去。(この薬が大きすぎて、私は飲んでみたが、飲み込めませんでした) (刘1983a: 15)
- (97) 你把房子打扫打扫。(あなたは部屋を掃除してください)
- (98) 让我看看你刚买的那件大衣。(さき買ったあのコートをちょっと見せてください)

以上は同一個体の動作自体の繰り返し或いは持続をその内容としている例である。(95)の「摇摇头」(首を横に振りに振る)、(96)の「吞了吞」(飲み込みに飲んだ)、(97)の「打扫打扫」(掃除に掃除する)は動作の繰り返しによる反復であり、(98)の「看看」(見に見る)は動作自体の持続による反復である。

以上のをまとめると、動詞と目的語が表しているイベントが非特定の量 (unspecified quantity of X) であれば、持続または反復アスペクトが可能だが、特定の量 (specified quantity of X) であれば、非持続になり、動詞は重ねられない。というのは計量されたイベント、特に限定複数数量詞 (plural quantifier) を持つイベントは限界性を示し、イベントに数量の限定を加えると、不定の反復と持続が不可能になるからである。

- (99) John is building some houses.
- (100) *他收了收隔壁三家的电费。(彼は隣の三軒の電気代をもらいにもらった)

非限界性・継続動詞が非限定複数名詞を目的語とした場合は持続アスペクトが得られる((99))。動詞の重ね型は不定量を表すため、一般に限定されたイベントは動詞の重ね型とは相容れない関係にある。特に動詞と目的語が一つのイベントを表す時、或いは規定・計量されたもの、限定複数数量詞 (plural quantifier) がついた目的語が動詞と一緒にある時、動作・行為のある一定の完了・終了を表すようになるため、その動詞は重ねられない((100))。

5.2.1.1.2 動詞と補語

動詞の後の補語が結果・数量・方向(目標点)などを表す時、その動詞は完了性を持ち、重ねることができない。

- (101) *你把作业写写完。(あなたは宿題を書き終わりに終わってください) (結果補語)

語)

(102) * 你把他的话重复重复三遍。(あなたは彼の言葉を一回繰り返しに繰り返してください) (数量補語)

(103) * 明天我去去京都太学。(明日私は京都大学に行きに行きます) (方向補語)

つまり、動詞の重ね型はもともと前の動詞の量化表現として働き、動詞の結果・数量・方向を表す補語とは同じような働きを持つから、相容れない関係にあるのである。

5.2.1.2 動詞と修飾語

修飾語の意味により、動詞が非限定複数の動作・行為を表す場合もある。

(104) 最近几年我就演演戏, 没干别的。(最近の何年間私は劇を演じたりして、ほかのことはしていなかった) (刘1983a: 15)

(104) は「最近几年」(最近の何年間)という修飾語があるから、「戏」(劇)は一つではないため、「演」(演じる)の動作も何回か行う必要が出てくる。

以上から、非限定複数個の対象に及ぼされる反復には二つのタイプが考えられる。

- ・ 目的語が非限定複数である
- ・ 時間修飾語によって、目的語が非限定複数になる

5.2.2 話し手が聞き手に依頼をする時点で、動作の完了・終了を明示しない場合

先ほど、動詞句が動作・行為の完了・終了を含意する時、完了・終了したという意味を持つ場合の動詞は重ねられないと述べたが、依頼文であれば、重ねられる。

(105) 你去收收张家的电费。(あなたは張宅の電気代をもらいに行ってください)

(105) の依頼文では、一回で動作を完了しようと相手に強制していないので、どこまでやってくれるかは相手次第だという意味を表すため、繰り返すことができる。

しかし、「V+O」の動作が継続的でなく、しかも目的語と一緒に一回でその動作を完了するという意味が強い時は、依頼文でも重ねることができない。

(106) * 小马你把那个球给我递递。(馬さんそのボールを私に渡しに渡してください)

5.2.3 「～看、～试试」(～してみる)の意味がある場合

(～看、～试试)のつけられる文の場合なら、繰り返すことができる。つまり、試すということ

(107) 这出戏你来演演看。(この劇はあなたは出演してみてください)

(108) 这只鸡怎么也杀不死, 你来杀杀看。(この一匹の鶏はどう殺しても死にませんでした。あなたは殺してみてください)

(107)、(108)は「看」をつけたら、試すために同じ動作を何回も繰り返すことが許され、重ねられるのである。

5.2.4 話し手の願望を表す形式——「～したい」(我想～)

願望を表す形式「～したい」は動きの主体が人間でなければならない。

(109) 我想吃饭你做的饭。(私はあなたが作った御飯を食べてみたい)

「～したい」があれば、全体として願望という非現実モードになるので、動作の具体的な発生は問題にならない。そのため、この非現実モードでは、「～してみる」、「～しておく」などが生じることが多い(森山1988:214)のである。つまり、「～したい」の場合は主体のその動きは現実的なことでなくてもよいということにより、もくろみという意味と繋がる。もともと一通り完了する動作を表す「吃饭」は重ねられないが、「～したい」との共起によって、もくろみという意味が生まれて、重ねられるようになるのである。また、「～したい」が話し手の願望を表すという意味は「～してみる」の意味に近いと思われる。

日本語の「～てみたい」については、森山が「動作の成立が偶然によるものと共起することができる」(p.214)と指摘している。

(110) 若いうちに立派な先生と出会ってみたい。

しかし、「～したい」は日本語のいわゆる学校文法では、助動詞で、用法の性格としては感情形容詞と共通している。よって、日本語話者の意識の中では、感情は話者自身のみが感じるものなので、感情形容詞をそのままむきだしに三人称に用いることはできない。そこで、日本語の「～てみたい」の主体は一人称であるという制約があるが、中国語にはない。だから、次の文は中国語では言えるが、日本語では言えない。

(111) 他想吃饭你做的饭。

(111')*彼はあなたが作った御飯を食べてみたい。

5.3 意図性のある動詞²²⁾

5.3 意図性のある動詞²²⁾

重ねられる動詞は意図性のある動詞でなければならないというのは、もうすでに多数の議論で指摘されている。重ねられる動詞の意図性については、鵜殿（1977：22）が次のように述べている。動作をするもの（動作者）は意味論的特徴として、「有生（animate）」「能力」を持って、動作者と動詞の関係はcausativeであるという。しかし、非意図性の動詞は本当に重ねられないのだろうか。ここで、非意図性の動詞と動詞の重ね型について問題にしたい。

ヤーホントフ（1957：訳書124 - 128ページ）は中国語の動詞はアスペクトとアスペクト・テンスの指標との結合能力の違いによって、二つのグループに分けられると述べている。それは、動作を意味する動詞と動作を意味しない動詞（非動作動詞）である。非動作動詞には動作や状態を表さない動詞が含まれ、その中には思惟動詞・感覚動詞（知道（知っている）、忘了（忘れた）、信（信じる））、法動詞（能（できる）、会（できる）、得（～しなければならない）、要（～ほしい）、想（～したい））、繫合詞的な意味を有する多くの動詞（叫（～という）、姓（名字は～）、像（～のようだ））などが挙げられる。これらの動詞の全てに見られる特徴として、これらの動詞の表す関係や感覚が主体の意のままにならないものということが挙げられる。つまり、主体が自らの意志によって、この関係を作り上げたり、廃止したりすることはできない。非動作動詞の文法特性はいろいろあるが、時間的に不変なものと感得されるものを表すため、動詞の重ね型によって作られるアスペクト形を持つことはできないと述べられている。

思惟動詞・感覚動詞である心理動詞は人間の客観的な心理活動を表し、非意図性の動詞であり、よって、重ねられないという指摘はほかにもある（例えば、李 1964、刘 1983a）が、しかし、もし心理動詞が以下の条件を満たしたら、重ねられるようになるのである。

5.3.1 非意図性の動詞と使役文

使役というのは、外なる力が相手にある働きを及ぼす他動現象で、その点では全体で一つ他動詞と同じ働きをしていると言うことができる。井上和子（1976: 136-137）は変形文法（標準理論）の立場から、動作主文脈（動作主の意味を与える要素を持つ文脈）として、いくつかの特徴を挙げているが、主に本節と関連があるものには次のようなものがある。

「～てみる」を持つ文 「に - 使役文」 命令文

このようにいくつかのテストフレームを設定して、分析している。この分析はちょうど中国語の動詞の重ね型に当てはまる。しかし、久野璋（1973：86）の使役の接辞サセは「+自制的」動詞にしかつかないとする分析には問題がある。以上を裏付けるために、次は中国語の動詞の重ね型における非意図性について考察する。

22) ここで言う意図性のある動詞というのは、語彙意味（語そのものが持つ意味）ではなく、文脈意味（語が具体的な言語表現におかれて、その語彙の意味にさまざまな情報が付与されることにより、文脈によって異なった意味であるようにとらえる）（大塚1996）を指している。

置詞の違いにより、使役文の表している意味も違っている。使役前置詞の「让、叫」は「譲る（許す）、言いつける」という意味の動詞から派生したものであって、動詞としての語彙的特徴をその文法機能の中にとどめている。譲る（許す）という意味の動詞「让」は「許容使役」、「言いつける」という意味の動詞「叫」は主に「指示使役」を表す傾向にある。「让、叫」のある使役文は使役者が被使役者に対して、動作・行為を行わせているので、意図的な動詞が要求される。そのため、非意図性の心理動詞を使役文に使うと、話者が相手にそうさせるという意図性がでてくるので、それらの動詞も重ねられるようになる。使役形式を含む動きが全体として対象に対する働きかけの意味を持ちうるものだからである。

(112) a *他知道知道我的厉害。（彼は私の恐さが分かっている）

b 让他知道知道我的厉害。（彼に私の恐さを分からせてやろう）

非意図性の動詞はもともと重ねられないのに、なぜ使役文にしたら重ねられるかという点、「使役態が基本的な用法でつかわれるばあい（主語が指示者をしめすばあい）は、その動作は意志的な動作（動作主体によってコントロールされる動作）である。動作主体は動作を意志的に起こす」（高橋1994：146）からである。つまり、もともと非意図性の動詞は使役文にすることによって、意図性を持ち、重ねられるようになるのである。

日本語では「無意志動詞をむりに使役の基本的な用法につかうと、演技をさせることになる」（高橋1994：146）。高橋の用例を引用すると、

(113) 監督はそのばめんで役者を牛の声におどろかせた。

つまり、日本語の「非自制的」動詞でも使役文にすることは可能である。中国語の使役文における非意図性動詞の重ね型の用法は、高橋の指摘している日本語の用法とよく似ているが、ただし、日本語のこの用法は「演技」の場合にだけ限られるのではない。例えば、

(114) 彼に私の恐さを分からせてやろう。

の言い方も成立する。ほかにどんな場合でこの用法が使えるかは、更に検討する余地がある。

非意図性の心理動詞以外に、ほかの非意図性の動詞にも同じような用法が見られる。

(115) a *他病病。（彼は病気になりになる）

b 让他病病，他就知道生病的滋味了。（彼に病気にならせよ。そうしたら、彼は病気になったらどういうことか分かるだろう。）

5.3.2 非意図性の動詞と「～看、～试试」(～してみる)

「感情的な動きは、有情物が主語にくるが、一般に無意志的である」(森山1988:221)。それに対し、重ねられる動詞は意図性を持たなければならない。一方、「～看、～试试」(～してみる)は「主体の意志的なもくろみを表す。もとの意味は、試行動作としてある動作をやって、その結果を「見る」という意味が基本であろうが、試行(もくろみ)には、精神活動が前提となる」(森山1988:209)。

- (116) 你爱爱她试试, 有你受的。(あなたは彼女を愛してみて。その辛さをたっぷり味わえる)

(116)の非意図性の動詞「爱」は反復性の意味を持つ「～看、～试试」をつけることにより、重ねられるのである。「爱」は感情が外的に発露する意味で、その意味で意志的な行為として使うことが可能である。また、「爱」という動詞の動きは感情をある程度コントロールできることを前提としていて、「愛そう」と努力すれば、できないことはないだろう。つまり、「～看、～试试」によって、主体は意図的に動作を行うことになり、前の動詞が非意図性の動詞であっても、「～看、～试试」を後続することにより、意図的になるのである。高橋(1994:22-23)は日本語で無意志動詞の命令形が、演出者による演技の命令になったり、話し手の希望を表したりするというのは動詞がウゴキを表すからであると指摘する。次はその挙げた例である。

- (117) ここで、もっとおどろけ。

- (118) 雨よ、降れ。風よ、ふけ。

(116)の「爱」はもともと動作性が弱いが、重ねたら(117)と同じように動作性が強調されるのである。

以上から動詞自身が意図性を持たなくても、周囲の成分により、意図性が含意されると動詞は重ねられるようになることが分かる。

§6 日本語における「動詞の重ね型」と中国語の動詞の重ね型の対照について

言語というものは形(form)と意味(meaning)の二つの側面が揃って成り立つのである。中国語と日本語の対照研究を考える時、形(つまり統語構造)を無視して意味だけを考察することは有意義ではない。意味構造を考える際に、意味的直感だけに頼って考えるのではなく、統語的ないし形態的な裏付けに基づいて考察を進めていくことが大切である。中国語の

本語にもあるが、ここでは形態的・意味的に中国語の動詞の重ね型に近い日本語のいくつかの表現について考察する。

6.1 重複構文「VにV」について

形態的に中国語の動詞の重ね型に近いのは、日本語の「VV」と「VにV」である。日本語の「動詞の重ね型」についての研究は数が少なく、ここで挙げられるのは Okamoto (1994) の研究と影山 (1993, 1996) の研究である。

6.1.1 文法構造における中国語と日本語の違い

日本語には繰り返しの構造が多く、動詞・名詞句、或いは結合項が繰り返しを必要とするというのは日本語における一つの特殊な文法構造であると言える (Okamoto 1994: 381)。日本語の「VにV」のような繰り返しは「確実に概念形成の増大の類像表現として解釈できる。形成上の増加は行為或いは過程の増加を反映する」という (Okamoto 1994: 385)。文法的に日本語の動詞の重ね型はアイコン性の原則を守っているのである。しかし、中国語の動詞の重ね型は文法的な働きを持つ用法で、アイコン性の原則から逸脱したものと見られる。

6.1.2 統語と語彙的な違い

影山 (1993: 89-90) は日本語の「VV」と「VにV」について、統語的と語彙的な立場から、分析する。「VV」と「VにV」は語に特有の形態的緊密性を備えている。重複された部分には「ひた隠しに隠し」、「ひら謝りに謝る」、「おおもめにもめる」のように接頭辞がつくことができる。また、影山は次の重複規則を挙げている。

$$(119) \quad [\mu]_v \rightarrow [\mu - ni \cdot \mu]_v : \mu \text{ (モーラ)} \geq 2$$

形態的に日本語の動詞重複形は中国語の動詞の重ね型とよく似ているが、しかし、構文機能が違うのである。

まず、日本語の重複の基礎となる動詞基体は2モーラ以上でなければならないという音韻的条件が伴うようである。単一モーラの基体は重複できない。

$$(120) \quad \begin{aligned} \text{見(る)} &\rightarrow * \text{見に見る}, \text{す(る)} \rightarrow * \text{しにしに} \\ \text{来(る)} &\rightarrow * \text{来に来た}, \text{出(る)} \rightarrow * \text{出に出た} \end{aligned}$$

しかし、中国語の動詞の重ね型にはこのような音韻的な条件の制約がない。単一モーラでも、二音節モーラでも、重複することができるが、強いて言えば日本語と逆の傾向があって、単音節のほうが重ねやすい。

看→看看（見に見る）

研究→研究研究（研究に研究する）

また、日本語の動詞の重複形は形態的緊密性を備えている。

(121) * 飲みにサエ飲む。

のような副助詞の介入や、

(122) * 飲みに、課長は酒を飲んだ。

のような統語的移動が不可能である（影山1993:89）。これに対して、中国語の動詞の重ね型は動詞と動詞の間に数詞「一」と助動詞「了」を挿入することが可能である。

看看 → 看一看（見に見る）

→ 看了看（見に見た）

以上は日本語と中国語の異なる点であるが、実際、日本語の「VV」と「VにV」には中国語の動詞の重ね型と似たような意味と文法的な制限もある。

まず、意味的には「行為・動作の反復ないし継続を表す」という機能は中国語と同じである。また、文法的に動詞重複形は継続相を表す状態動詞に限定され、完了相を表す到達動詞（achievement verbs）や達成動詞（accomplishment verbs）と意味的に整合しないという点でも同じである。影山の例を引用する。

(123) a* 客が旅館に着きに着いた。

a' 彼は運がつきについている。

しかし、中国語の動詞の重ね型と日本語の動詞重複形の根本的な違いは「意図性」の問題である。中国語のほうは、人間が何かの目的のために意図的に動詞を重ねるのであるから、その動詞は意図性を持たなくてはならない。だから、(123) のa'の文を中国語に訳したら、非文になる。

(123') a* 他正走运走运。

しかし、日本語の重ね型は何かの目的というより、物事、或いは主体の状態・状況を表すのであるから、意図性がなくても、動作・行為の反復、状態の継続性を表せば、動詞の重複形を使うことができる（例えば、(123) のa'の文）。こういう特徴のため、日本語の動詞重複形が命令・依頼

表現に使われないのである。

もう一つ統語面で起こる違いを見る。

日本語は統語的に派生される形式 —— 「受け身形」、「使役形」 —— が重複を受けることができる。

(124) a 容疑者はなぐられになぐられた。(影山1993:89)

b 子供に本を読ませに読ませた。(同上)

だが、中国語は「受け身形」が派生された後に重複することができない。

(125) a 他洗了洗衣服。(彼は服を洗った)

b* 衣服被他洗了洗。(服は彼に洗われに洗われた)

(126) a 他昨天到医院来看了看我。(彼は昨日病院まで見舞に来てくれた)

b* 我被他到医院来看了看。(私は彼に病院に見舞に來られに來られた)

というのは受け身の形にしたら、重ねた行為が主語の行為でなくなり、意図性もないからである。

しかし、「使役形」にはこの制限がないようである。

(127) a 他扫地。(彼が掃除をする)

b 我让他扫扫地。(私は彼に掃除をさせる)

使役構文はもともと意図性を持っているため、動詞の重ね型と適合するものと思われる。

以上の比較を通じて、日本語の動詞重複形が統語的・意味的に中国語の動詞の重ね型と似ているところもあれば、違っているところもあることが分かった。日本語の動詞重複形はアイコン性原則を守り、文字通り「程度の増加」を表すが、中国語の動詞の重ね型は動詞の特徴によって、アイコン性がなくなり、文法的なマーカーの一つである。日本語は意味的な必要性によって動詞重複形を使うかどうかを決めるが、中国語は意味との関連もあるが、多くの場合文法的な必要性に応じて決められているのである。また、命令・依頼表現に頻繁に使われている現象は日本語にはないのである。

以上は文法的・形態的に中国語の動詞の重ね型に近い日本語の動詞の重複形「VにV」について少し触れた。次は意味的に中国語の動詞の重ね型にもっとも近い日本語の「動詞の重ね型」「～してみる」について考える。

6.2 日本語の「～してみる」と中国語の動詞の重ね型及び「～看、～试试」について

中国語の動詞の重ね型と意味的に²³⁾ もっとも近いのは日本語の「～してみる」である。日本語の「～してみる」の研究について、まず、高橋(1976)の研究が挙げられる。高橋は「～してみる」のような構文を「もくろみ動詞」だと言っており、「もくろみ」とは「動詞の表す動作がなんのためにおこなわれるかを表す文法的な意味をもくろみとい」い、「もくろみ動詞」とは、「もくろみを表す形式」のことであると言う。「もくろみ動詞」には「～してみる」、「～してみせる」、「～しておく」、「～してやる」、「～してしまう」などが挙げられる(pp.141-142)。また、「もくろみ動詞」の基本的な用法は、ふつう意志動詞が使われる。その場合、無意志動詞であっても、意志動詞化される(p.142)と述べている。「～してみる」の意味については、「ためしにする動作を表す」としている。ほかにもいろいろな用法を挙げているが、ここでは省略する。

次に挙げられるのは森山(1988)の研究である。森山は「～してみる」について、次のように述べている。

「～してみる」は主体の意志的なもくろみを表す。試行には、精神活動が前提となる。主体は洞察力のある人間でなくてはならないが、

(128) 一度宝くじを当ててみたいなあ。

のような願望文、

(129) 明日になってみなければわからない。

のような、現実として生起することが前提となっていない文脈では、非意志的な動作でも「～してみる」が使える(森山1988:209)という。

また、「～してみる」は(130)のように自然現象にも使えると指摘した。

(130) 春になると赤い花が咲くはずだった。しかし、実際に春になってみると青い花が咲いた。

しかし、ここの「みる」はやはり補助動詞ではなく、「認知的な用法を持つ。実質動詞的に「～して、それを『見る』」といった意味を表すと森山(1988:212)は指摘する。(130)の「～てみると」は接続助詞「と」の意味制約を受けており、「～してみる」と違って、意味特徴については、構文的に考えなければならない²⁴⁾。

23) 意味的と構文的に日本語の「～してみる」と対応する中国語の形式は次の二種類が挙げられる。

- i. 「動詞の重ね型または動量詞や期間を表す語を伴った動詞の後に」(中日辞典1992:773)「～看、～试试」をつける。
你尝尝看这个菜怎么样?(あなたはこの料理の味をみてください)
- ii. 結果動詞の後に「～看看、～试试」をつける。
你把那个包打开看看。(その鞆を開けてみてください)

24) 「～てみると」に対応する中国語の形式は「～一看」である。

的な動作とは共起できない。(130)の「～してみる」が非意図的な動詞と共起できていることは、接続助詞の用法に依存して、共起できたのである。

次に、吉川の論文を紹介するが、吉川(1975:39-40)は「～してみる」の意味を大きく二つに分けている。

I. あることを知るためにある動作をすること

(131) お前さんだって私の話を聞いてみる気があったから、迎えの車に乗ったんだろう。

II. ある動作をした結果の状態を知るためにその動作をすること

(132) 早速話をしてみるが、それにしても五隻は無理だ。

I.では意志動詞しか現われないが、II.では無意志動詞でも可であるということである。

更に、以上の二つの意味の他に、

III. ある情報をもたらす、または、結果を生みだすことになる動作を表す

という用法も指摘されている。この場合は「～てみると、～てみたら」という形で使われる(p.40)という。

(133) 朝はやく庭に出てみたら、小さいめがでていました。

以上の指摘をもとに、日本語の「～してみる」、「～してみると」の意味と構文を考え、また中国語の「～看、～试试」、「～一看」と比較し、日本語と中国語の「嘗試」²⁵⁾についての認知的な違いを次に明らかにしていく。

6.2.1 「～してみる」の意味と用法及び中国語の「～看、～试试」との比較

日本語の「～してみる」の意味・用法を考える前に、まず、「見る」の意味について簡単に触れておく。

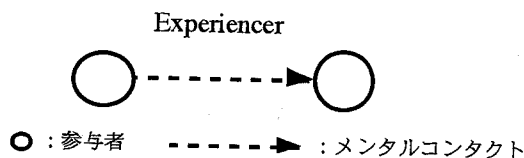
6.2.1.1 「見る」

認知意味論における語彙の研究では、語は何か核となる意味を持ち、語意は少しずつずれても、互いに関連し合い、一つの言葉で表されるような意味のネットワークを構成している。「見る」の基本

25) 日本語の「～てみる」については、春日氏の命名によれば、「嘗試」で、「動作を試みることを表す」ものという(佐久間1983:181)。

いに関連し合い、一つの言葉で表されるような意味のネットワークを構成している。「見る」の基本義は「＜視覚＞によって、対象を＜認知＞する」（田中1996:122）ことである。感覚動詞の「みる」は、目的語が視覚的な対象であるだけでなく、味覚、聴覚、触覚などの他の感覚が目的語にくる場合も使われる（山梨1995:67）。ただの「見る」というのは、人間の知覚経験であり、経験者（Experiencer）がその対象物にエネルギーを伝達することではなく、その対象物には変化も起こらないのである。「見る」の知覚経験を表すモデルは次の図のように、経験者から対象物へのメンタルコンタクト（mental contact）が点線矢印によって表される²⁶⁾。

図<7-1>



この場合のメンタルコンタクト自体は、その対象物に変化をもたらすのではなく、参加者から他方の参加者への「非対称的關係」であると考えることができる（河上1996:120）。

また、「心は体である」というメタファーに基づいて、「何かを見ることは、それを考慮する」（河上1996:99）という派生義を生み出すことができるように、人間は視覚以外の知覚によっても、対象物を認知することができる。

「見る」は経験者が「見る」行為をするが、その対象物に変化をもたらさないのが特徴である。それに対して、「～してみる」は動詞を前接することにより、動作・行為を通して「みる」のが特徴で、もともとの「見る」の用法の意味が視覚的な意味から更に抽象化し、「「試す／試みる」の意味での補助動詞としての用法にも拡張されている」（山梨1995:68）。

人間は未知のことに対して、ある結果を求めるために、意図的に動作・行為を行う。その動作・行為の結果に対して、予想ができない、或いは成功するかどうか、自信がない時、「試す」ということになる。よって、「～してみる」の使用条件として以下のものがある。

6.2.1.2 「～してみる」の使用条件

- i. 一人称か一人称に準じる動作主を主語にとる。

(134) 私（私たち）はそのドアを開けてみた。

26) 河上（1996:118）によると、他動的事態には少なくとも二つの参加者が関与するが、その一方が動作主（Agent）、他方が被動作主（Patient）という意味役割を担い、動作主がエネルギーを被動作主に与えることでその位置・状態を変化させる場合がプロトタイプと考えているということである。河上（1996:118-120）はHopper and Thompson（1980:252）の「他動性のプロトタイプ」を参考に、山梨（1995:236）の観点を取り入れ、他動性と文法関係に関するプロトタイプを次のようにまとめる。

- a. 他動性のプロトタイプ：動作主・被動作主の2者が関与し、動作主からエネルギーによって被動作主が位置・状態の変化を起こす。
- b. 主語のプロトタイプ：動作主
- c. 目的語のプロトタイプ：被動作主

しかし、図<7-1>の「見る」のモデルは、河上（1996:120）はプロトタイプからやや外れた他動的事態だと考えている。

(136) ??山田がぼくの送った箱を開けてみた。(田中1996:2)

「日本語では、報告の際に、直接知ったこと、または話し手が直接決定できることと、そうでないことを文の形式上で区別しなければならない」(金水1989:123)。また、日本語では、「他人の心的状態を直接知ることとはできない」(同上)。「～してみる」は話し手が結果を知るために、意識的に行為を起こすのであるから、心的状態に関わる補助動詞である。よって、主語に人称の制約が課せられるのである。(135)、(136)のような日常的対話では、話し手が聞き手にある状況を知らせる行為を表すから、「ぼく」は語り手(一人称)の視点をとっており、動作主は「田中」または「山田」である。そうすると語り手と動作主とが一致しないことになり、「～してみる」が使えないのである。しかし、「小説や昔話などの地の文では、誰の心理状態をでも自由に描写できるのであるから、始めから人称制限というものが存在しない」(金水1989:123)ということに従えば、動作主が三人称であっても、「～してみる」の使用が可能である。例えば、次の文は、主語が三人称の「男」であるが、「～してみる」を容認する。

(137) 村の衆の手をかりながら、男、足で梯子をさぐってみる。(吉川1975:42)

つまり、作者は「男」に対して、物語の主人公としての役割と、それを描き出す語り手という二重の役割を同時に演じさせていると言える。「男」は、言わば、自分の演技を自ら撮影する自作自演の映画作家のごとき立場に置かれているわけである。

しかし、中国語では、日本語のように形容詞或いは動詞に人称の制約を与えることがないので、

i.の使用条件は中国語に存在しないのである。

(135) 我旁边的田中把箱子打开看了看。

中国語では語り手と動作主が一致しなくても、非文にはならない。ただし、動作主の意図性がはっきり分からない場合は、中国語の「～看看」の使用が不適切になる。

(138) *我旁边的田中把箱子打开看看。(ぼくの隣にいた田中さんはその箱を開けてみる)

動作主の意図性がはっきり分かる場合は、勿論第三人称でも、「～看看」との共起が可能である。

(139) 我旁边的田中想把箱子打开看看。(ぼくの隣にいた田中さんはその箱を開けてみたい)

中国語でも日本語でも相手に「試す」という行為を要求する時、

中国語でも日本語でも相手に「試す」という行為を要求する時、

(140) 今日買ってきた服を着てみてください。

のようにこの用法は依頼文としてよく使われる。

ii. 動作・行為は意図的なものでなければならない

(141) *無意識のうちにその餃子を食べてみた。

(142) ?先生に強制されて、薬を飲んでみた。

(143) ?昨日、男湯と間違えて、女湯に入ってみた。

結果を知るために、行為を起こす場合、意図性がなければならない。意図的、積極的な動作・行為・努力を経た後「みる」ことができ、結果を知ることができるのである。(141)は「無意識」ということで、「～してみる」と相容れない。(142)は「先生に強制されて」薬を飲んだので、話し手自身の意志でないことが分かる。(143)も「女湯に入る」のは意図的な意志によるのではなく、「間違って」入ったのである。

また、動作主が動作・行為の結果を知ろうとする意図がなければ、「～してみる」が使えない。

(144) ?昨日、給食で、ヨーグルトを食ってみた。

「ヨーグルト」を食べたのは、意図的に味見するなどのためではなく、たまたま給食に出たので、「食べる」行為をしただけであり、意図性と結び付きにくい。意図性のある動詞でないと、「～してみる」と共起できないのは、中国語の「～看、～试试」の用法と一致する。

また、人間が対象を認知する方法から、「～してみる」の用法をまとめることができる。

6.2.1.3 「～してみる」の使用方法

人間が対象をよく「見る」ために、まず、自分の体の部分でその対象に接触することにより、五感を通して、その物体を認知することもある。

① 体（知覚）で接触することによって、対象を認知する

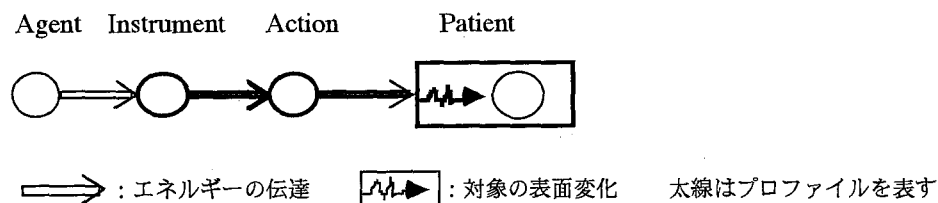
(145) 水の中に指をつっけてみる。

(146) それから、瓶の栓を抜き、鼻にあてて嗅いでみる。(吉川1975: 41)

「見ることは触ること」というメタファーによれば、知覚器官で触ることは「見る」ということに

合を表している²⁷⁾。

図<7-2>



(145) では、Agent を主語とするが、この場合は省略されている。Agent が「指」という体の一部を通じて、「つける」という動作によって、エネルギーを対象 Patient (水) の表面へ伝達するという action chain²⁸⁾ の全体をスコープとしているのである。つまり、Instrument は「指」で、「つける」という行為を経て、Patient である対象 (水) の表面にエネルギーを伝達することによって、その本質を認知するのである。ここでは、「指」、「つける」をプロフィールする。

対象に直接触れなくても、間接的に知覚器官で認知することもできる。

(147) やかんを振ってみる。(吉川1975: 43)

は知覚器官で直接やかんの中の液体に触ることができなくても、間接的に知ることができることを示す例である。

以上は対象が目に見える物に限って、人間が知覚器官を働かせ、対象を認知している場合であるが、次の例は具体的に目に見えない抽象的な対象を知覚・認知活動を通して、認知する場合である。

(148) 調べてみますから、暫くお待ちください。(吉川1975: 42)

(149) あなたが土地を売りたいというなら、香月さんに話をしてみましょう。(吉川1975: 43)

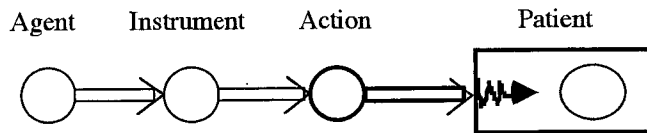
② 対象の外側の邪魔ものを取り除いて「みる」

(150) 男、片膝をつき、注意深くめくってみる。(吉川1975: 41)

27) Langacker (1990) は私たちの周りで起こる出来事を文として表す時、「行為」と「状態」の二種類があると考えられる。また、事態の構成を理解するには不可欠な要素が二つ存在する。一つは事態の参与者 (participants) で、もう一つは、それらの参与者の間に存在する関係である (relations)。更に外界での事態を認知的に捉える一つのモデルとしては、ビリヤードボール・モデルが挙げられる。次の図<7-2>のモデルは、Langacker のモデルを参考にしたものである。

28) action chain とは Langacker (1990) で提唱されたビリヤードボール・モデルの一側面に相当する事態認知モデルである。物体が相互にエネルギー伝達を行うことで形成されるネットワークの中で、特に一方方向的なエネルギーの流れを指す。この action chain を用いることにより、エネルギー伝達に関わる事態がどのような参与者を含み、どのような種類の関係から成立しているかを表示することができ、文や動詞など事態に関わる現象の分析に有効である (河上1996: 203)。

図<7-3>



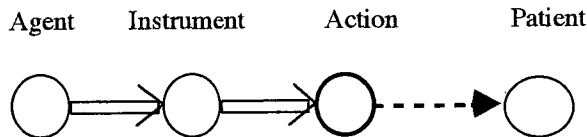
ここでは、「めくる」をプロファイルする。

③ 対象に近づいたりして、よく「見る」

(151) 外の騒ぐ音を聞いて、庭から出てみた。

(152) 今日授業があるかどうかを確かめるために学校へ行ってみる。

図<7-4>



③は Agent が直接 Patient にエネルギーを伝達するのではなく、その対象物に近づいたりして、認識し、従ってその対象物の変化も起こらない。

以上のように、いずれにしても、「～してみる」は人間が物事を認知するために、物事に働きかけたり、近づいたりする過程に焦点を合わせているのである。

6.2.2 「～してみると」と中国語の「～一看」

「～してみると」は物事の結果に焦点を当てる表現である。この場合の「～してみると」の用法は主に接続助詞「～と」²⁹⁾の用法に依存している。

① 意図的な行為

(153) スープを嘗めてみると、おいしかった。

もともと「～してみる」には何らかの目的のために動作を試みるという意味があり、したがって、そうした動作の結果を確認するということが次に求められるという意味合いを持っている。「～してみると」は、意図的にある動作・行為を行うことにより、対象の「結果」を知ることができた場合に用いるが、その「結果」と動作・行為の間には必然的な関係はない。よって、その未知の結果を知るために、意図的に動作・行為を起こし、その結果に焦点を合わせているのである。しかも、その結果

29) 「と」とは話し手が対象の変化を客観的な観察者の視点で語るような表現上の特性を持っている(蓮沼1993: 84)。前件、後件が無意志的な動作や対象の変化を表すような場合が多いのである。

は人間の影響で変化するのではなく、実質には結果はずっと前から存在していたが、意図的に動作・行為を起こしたことによって、人間に発見されるのである。このように考えると、次のbはaに比べて行為と結果との間の偶然さが弱いと言えよう。

(154) a だれだろうと思って覗いてみると、佐吉であった。

b だれだろうと思って覗いてみた。佐吉であった。

日本語の「～してみると」の用法は、中国語の「～一看」とよく似ている。中国語の「看」も主体が人間で、人間が意志的に結果を「みる」のである。中国語も日本語の①とよく似たような用法がある。つまり「～一看」の「看」は意図的な動詞（実質動詞³⁰⁾）であって、話し手が意図的に「看」という動作を行い、「結果」を見るのである。ここでも行為と結果の間の関係は必然的でない。

(154) 我以为是誰呢，偷偷一看，原来是佐吉。

② 非意図的な行為

意図的・積極的に「みる」行為を起こさないと、「結果」を知ることにはできない。しかし、「～してみると」が非意図的な動詞に後続することができるのは、「～と」の用法によるものである。

(155) a 目が覚めてみると、もう朝だった。

b* 目が覚めてみた。もう朝だった。

森田（1989：1104）によれば、「目がさめてみると」のように非意志的な「人間の行為・動作に付く場合は無意識のうちにおこった結果の状況」を表すというのであるが、しかし、やはりその認知・判断を担っているのが「みる」の部分である。「みる」が前の動詞の補助成分として使われるなら、前の動作・行為が意志的なものでなければならない。例えば、(155)のbの用例がそうである。aのような「と」のある条件構文の中では、「みる」が非意志性の動作・行為の補助成分として使われるのではなく、実質動詞として使われているのである。aにおいてもbにおいても、人間が意図的に「み」なければ、結果を認知・判断することができない。人間が無意識のうちに周りに起こった結果の状況、或いはずっとそのままの状況を人間の視覚に投影し、人間が「見る」行為によってある意識を喚起するのである。

中国語も同じことが言える。「～一看」の前の動詞が非意図的な動詞でもよいが、「看」（見る）は実質動詞でなければならない。

(155') a 睁开眼睛一看，已经是早上了。

30) この用語は森山（1988：212）のを参照する。

(155') a 睁开眼睛一看, 已经是早上了。

b* 睁开眼睛看了, 已经是早上了。

(156) a ホテルに着いてみると, 嵐のような騒ぎだった。

b? ホテルに着いてみると, 嵐のような騒ぎが起こった。

(155)、(156)の文は意味的に「発見」という意味を表す。「発見」する行為は実質動詞「みる」によって実現する。無意識的な動作を受ける「～してみると」が成り立つのは、「と」の機能に依存するからである。「と」があるから、「前件が発見の契機となる行為を表し、後件ではその行為によって発見される対象の存在やその状態の記述、或いはその認知行為などが表現される」(蓮沼1993:78)のである。ただし、(156)のbのような場合は、後件の文は発見される対象の存在ではないから、文の容認度が低い。

③ 自然現象

(157) a 十年たってみないと, 分からない。

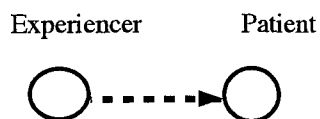
b* 十年たってみないと, 分からない。

(158) a 春になると赤い花が咲くはずだった。しかし、実際に春になってみると青い花が咲いた。(森山1988:212)

b? 春になると赤い花が咲くはずだった。しかし、実際に春になってみた。青い花が咲いた。

(157)のbが言えないのに対して、(158)のbは少し容認度が上がる。なぜなら、「～と」という条件句を外すと、「みた」が前の動詞の補助的な成分として使われ、無意志動詞との共起ができないという点は同じだが、「みる」の前の事態が自然現象である場合、人間の意図性と完全に関係がないとは言え、自然現象を「みる」主体としての人間はより感じられるからである。よって、この場合の「みる」は実質動詞に近い。もし、そうでなければ、どんな結果になるかは、それを認知する必要性が生じないのである。

図<7-5>



自然現象を表す動詞句につく「～してみると」は時間の経過と「見る」動作がプロファイルされる。つまり、ここの「見る」はやはり河上(1996:120)の言う知覚経験は他動性のプロトタイプからの拡張とみなされる。中国語では、ここでの「みる」が、実質動詞であることがもっと明らかである。

(158) a 到了春天应该是开红花, 可是真正到了春天一看, 开的是蓝花。

b * 到了春天应该是开红花, 可是真正到了春天看了看。开的是蓝花。

であって、日本語と同じように「～してみる」(看看)は非意図的な行為に後続することができないのである(bの文)。自然現象と共起できるのは「～してみると」(一看)であって、その「看」(みる)は実質動詞であり、「～してみると」(一看)は話し手が何も手を加えずに、物事の変化を見守るという特徴を持っている。

④ 「～してみると」は命令・依頼表現と共起できない

「と」が使われている条件文では、「後件には基本的に事実の叙述や「だろう」のような判断の表現のみが許され、意志・命令・依頼・提案といった「策動的」なムードの表現が使用できない」(蓮沼1993:90)。よって、「～してみると」も命令・依頼表現と一緒に使うことができない。

(159) * 本当のことを言ってみなさいと……。

中国語の「～一看」も命令・依頼表現と共起できない。

(159') * 你说说一看事实。

中国語の「～一看」の前の動詞は重ねられない。つまり、形式上反復を表す動詞は「～一看」と共起できないのである。というのは動詞の重ね型は意図的な行為を表すため、自然現象と相性のよい「～一看」と相容れないからである。

6.2.3 「～してみる」と「～してみると」

「～してみる」が拡張的に補助動詞として使われる時、意図的に「試しに行う」ということによって、結果のほうを期待するのである。「～してみると」は人間の意図的な動作・行為を実行したり、或いは非意図的な動作・行為が進行したり、自然現象が変化したりするうちに、主体が「みる」ことによって、その対象の存在や、状態を認知し、発見するのである。この場合の「みる」は実質動詞に近い。しかし、両方とも「みる」の主体は人間でなければならない。また、「～してみる」は試行動作として、ある動作を実行し、人間の五感で対象に接触したり、働きかけたりすることによって、対象を認知し、その結果を知るのであるが、「～してみると」は意図的な動作・行為、或いは非意図的な動作・行為、自然現象などを通して、人間は「みる」行為によって、その対象の存在・状態を発見するのである。

「～してみる」は話し手自身が動作をコントロールし、焦点を行為或いは動作に向ける作用をする。

「～してみる」は話し手自身が動作をコントロールし、焦点を行為或いは動作に向ける作用をする。つまり、ある結果を知るために、意志的に動作・行為を行うのであって、動作を意図的に行うことにより、結果のほうを期待するという意味である。人間はある動作・行為を行って、「目」で確認、確かめてから、「結果」のほうに導かれ、その「結果」を知るのであるが、結果に焦点があるのではなく、行為自体に焦点が置かれている。表現上「結果」まで言及しなくてもよいのである。「～してみると」は接続助詞「と」の意味と関連があって、主体の置かれた状況の外側に視点があるのである。

「～してみると」が非意図的な人間の動作・行為に付く場合は、物事がずっと変化している事態に対する主体の認識を表すのである。つまり、「～と」があることにより、必ずある「結果」が導かれるのである。そして、その「結果」と人間の行為との間には主観的な繋がりがなく、客観的な出来事・状況の自然な成り行きを表している。

(160) 箱を開けてみた。ミカンが入っていた。

(161) 箱を開けてみると、ミカンが入っていた。

「～してみる」には普通意志動詞が使われる。無意志動詞であっても意志動詞化される。次に、命令形の「～してみる」について考察する。

6.2.4 中国語と日本語の命令・依頼表現における「～してみる」の用法

6.2.4.1 日本語の「～してみる」

命令形の「～してみろ」については、ここで二つの用法に分けることにする。

(a) 命令を表す

(162) 田中さんが来るかどうか、電話をかけてみる。

(163) 箱の中に何が入っているか、開けてみる。

上の二つの文はただ普通の命令文である。

(b) 仮定命令³¹⁾を表す

「～してみろ」が仮定命令を表す時には、(a)とは意味的にも、構文的にも異なっている。まず、構文から言うと、仮定命令を表す時、大抵後件が続くことが特徴である³²⁾。

(164) ばくら放校にでもなってみろ、もうすべておしまいだ。

31) 仮定命令とは、話し手が聞き手に命令する内容が聞き手によって、実際に実行してもらえない時の命令のことである。

(164) ぼくら放校にでもなってみろ、もうすべておしまいだ。

次は主に意味的な立場から「～してみろ」について検討する。

6.2.4.1.1 先行研究

長野ゆり (1995: 658-661) は「～しろ」と「～してみろ」について次のように述べている。

「～しろ」と「～してみろ」の基本的な相違は「～しろ」は命令と同時に仮定をも表せる用法があるが、命令を表さず仮定だけを表すという用法はない。それに対して「～してみろ」は命令を表さず仮定だけを表すという用法があるという (p.658)。「Vてみる」が命令を表さず、仮定だけを表わしえるのは、Vについて命令文の用件が成立しない場合である。次のような場合における「～してみろ」は「～しろ」に置き換えることはできないが、条件表現には置き換えることができる。

① 無意志動詞、及び意志動詞の受け身

(165) a 錯を打ち込んだところを見つかってみい、敵機が飛んでくるのに一時間とはかからんだろう。

(=錯を打ち込んだところを見つかったら、敵機が飛んでくるのに一時間とはかからんだろう)

b* 錯を打ち込んだところを見つかれ、敵機が飛んでくるのに一時間とはかからんだろう。

(166) a 裁判になって販売経路の調査でもされてみる、ぼくが売り飛ばしたことがバレてしまうじゃないか。

(=裁判になって販売経路の調査でもされたら、ぼくが売り飛ばしたことがバレてしまうじゃないか。)

b* 裁判になって販売経路の調査でもされろ、ぼくが売り飛ばしたことがバレてしまうじゃないか。

② 意志動詞

i. 動作主が話し手

(167) なあに、俺が乗り出してみろ、話はすぐにまとまる。

ii. 動作主が第三者

(168) あいつが一言しゃべってみろ、すべてはおしまいだ。

iii. 動作主が聞き手であり、かつ、「話し手がその動作の実現を望んでいない」と考えられる場合

(a) 警告・脅し

(169) それ以上言ってみろ、死ぬほど後悔することになる。

(b) 悲観的見通し

(170) 今お前が出ていってみろ、俺たちみんな殺されてしまう。

長野 (1995: 657) は「～してみろ」は「形の上では命令形であるが、命令の意味を失い、仮定だけを表している」と述べている。ここでは長野の以上の研究を認めるが、もう少し深く追及する価値があると思う。

6.2.4.1.2 「～してみろ」の用法

「～してみろ」という形式はすべて「仮定命令」を表すというわけではない。まず、次の例は仮定命令ではなく、普通の命令文である。

(171) 明日行くかどうか、よく考えてみる。

普通命令文の場合、話し手が本気で相手に命令し、行為を実行するようにと望んでいる以上、動作主が聞き手でなければならない。。

「～してみろ」が「仮定命令」を表す場合、動作主が一人称、二人称、三人称の場合であっても、「みる」行為をするのは殆ど聞き手である。一人称、三人称が聞き手に強制的に「みる」行為を要求するというのは、聞き手の利益のために、望ましくない結果にならないようにと、無理なことをやめたほうが良いというように強く主張し、注意するのである。望ましくないことの結果は後件の文に普通示されている（省略される場合もある）。つまり、「仮定命令文」は「仮定だけを表すのではなく」、命令形の働きを利用し、話し手の強い願望を表すのである。

(172) やれるもんならやってみいっ。

(172) のような後件のない「～してみろ」の表現もある。それは慣用句である場合が多い。慣用句の場合は結果としての不快な状況を体験するという意味を持つ。相手の置かれた状況を相手によって、認知するという意味を表し、相手に「ばかげた立場に置かれた自分を認識しろ」および「当然予想されたはずのひどいありさまを認識しろ」ということで、相手に動作を強制することになり、「命令」の機能が十分に働いているのである。

以上の分析によって、「假定命令」を表す「～してみろ」は「假定」を表す同時に、「命令」の働きも十分に果たしていることが分かる。もし、完全に「命令」の機能がなければ、わざわざ命令形を用いる必要もないのではなかろうか。

「～してみろ」の使用は人称の制約を受けている。「～してみろ」が「假定命令」を表す時、次の公式(173)を守っている。

(X＝一人称、二人称、三人称の動作・行為、Y=Xによって導き出された結果)

(173) Xの行為によって、次の結果Yをあなたがみる。

Xの人称の違いにより、Yの意味が決められる。ただし、「みる」の行為は殆ど聞き手によって実行される。よって「みる」の命令形で相手に事柄の重大さを認識させているのである。Xが一人称、三人称の場合、その動作・行為は聞き手が直接行ったわけではないため、聞き手と直接的な利益関係がなく、Yは大体聞き手の予想外のこととか、思い当たらないことを表す。もし、Xの人称が二人称である場合、聞き手の動作・行為によって、導き出された結果は直接聞き手自身の利益関係と関連があり、聞き手（話し手を含めた「私たち」）に危害を加える可能性が高いということを意味する。強制的な意味を表す命令形は利益関係の面からいうと、一つは話し手自身の利益、もう一つは聞き手の利益になるという。この点については「～してみろ」によって立証される。聞き手の利益になる場合の命令は緊急事態以外に、「～してみろ」もそうである。「～してみろ」も一つの非常事態だと言える。

次は具体的な例を見て、(173)の公式を検証したい。まず、一人称、三人称の例を見る。

(174) 私がそんなことを言ってごらんなさい、どんなことになるか……。 (長野1995: 259)

(168) あいつが一言しゃべってみる、すべてはおしまいだ。 (同上)

上の例はそれぞれ聞き手自身の行為ではないが、「みる」のは聞き手（或いは話し手を含めた私たち）である。

次は二人称の例を見る。

(175) わたしに指一本ふれてみる！！まともなからだでかえれないようにしてやる。

(長野1995: 260)

(176) あなたがそんなことをしてごらんなさい、私の苦勞は水の泡だわ。 (同上)

(175)は相手への脅しである。(176)の「ごらん」は「見る」の尊敬の形で、(175)より、脅しの意味が弱い。

日本語の「～してみろ」の用法を次のようにまとめることができる。

日本語の「～してみろ」の用法を次のようにまとめることができる。

命 令：行為が実行されるのを望んでいる
～してみろ{
 假定命令：行為の実行を望んでおらず、事態の結果を強制的に認識させる

「假定命令」を表す時、話し手と聞き手の間は事態に対する認識のギャップが大きいため、前件のような事態が成立したら、どんな事態が発生するのか聞き手が十分に認識していないのに対して、話し手が強制的に認識させるということを表す。

6.2.4.2 中国語の「～VV+试试(看)」、～VV+看」

「～してみろ」に対応する中国語の形式は「～VV+试试(看)」、～VV+看」で、「看」の行為をするのは殆ど聞き手である。「みろ」の前の動作主は日本語と同じで、一人称、二人称、三人称である。中国語の「～VV+试试(看)」、～VV+看」も普通の命令・依頼文と「假定命令」を表す命令文との二つに分けることができる。

- (177) 老师您听听看，我这段课文读得对不对？（先生今読んでいるのが正しいかどうか、聞いていただけませんか）
- (178) 我要是把咱俩的事说出去的话你试试看，老师不批评你才怪呢。（もし、私が私たちのことをばらしたら、先生が絶対あなたを責めるのよ）
- (179) 你有本事摔摔看，看我不打你？（勇気があれば、投げてみろ。殴ってやるぞ）
- (180) 他要是再胡闹的话你看，警察总会把他抓进去的。（もし、彼がでたらめなことをするなら、警察は彼を捕まえるよ）

(177) は普通の命令・依頼表現で、(178) の動作主は一人称で、(179) は二人称で、(180) は三人称である。中国語は日本語と違って、語形から、文が命令であるかどうかを判断するのが難しい。語形というより、場面とか、意味から判断されるのである。もし、相手に対して「脅し」か「注意」を与えているならば、語気が強くなり、日本語の「～してみろ」に相当するが、そうでなければ、普通の依頼文である。例えば、(177) の例がそうである。語気を強くするのは、聞き手が言うことを聞かないという前提で、聞き手の注意を喚起し、また假定（「要是～」を伴うのが多い）という文脈によって、もし、こうすれば、こんな結果になるよと注意しているのである。よって、このような場合の重ね型は、望ましくないことが発生しないようにと話し手の強い願望を表す場合が多い。しかし、(180) のように動作主が三人称の場合、聞き手と直接の利益関係を結びにくいいため、中国語では命令文になりにくい。よって、中国語では命令であるかどうかは、意味から判断されるが、日本語では語形と人間関係で判断されるのが特徴である。

中国語の命令文は上下関係にも関係があるが、主に重視されるのが利益関係である。日本語の日常言語では、命令形の使用がとても限られている。「～してみろ」にしても、広く使われているとは言

§7 おわりに

ここでは、動詞の重ね型は「嘗試」、「短暫」、「穏やかな命令」などを表すという従来の論点に対して、改めて考えてきた。動詞の重ね型は、一つの形式でありながら、二つ以上の意味を持っている。基本的な意味 (basic meaning) はオリジナルな意味で、二次的な意味はオリジナルな意味の拡大として獲得されたものである。つまり、それは「不定量」で、反復的で、更に部分完了的な性質を持っているということを主張した。動詞の重ね型は動的な事態の時間的な展開における局面を表すもので、事態の過程・段階に焦点を当て、動作・行為の結果まで関与しない。また、動作が一部ずつ完了するということにより、「反復」することが可能になるのである。更に部分完了的であるゆえに、行われている動作の量が無限な量と比べれば、量的に「少なさ」を意味することになる。また、行為、出来事の実現以前の反復性を持っている「～看、～试试」とも意味的に整合している。動作の部分完了を表すので、依頼文で使われると相手に要求している動作・行為の量が無限ではなく、丁寧さが出てくる。だが、それらはあくまでも、派生的な意味に過ぎないのである。

また、以上の比較を通して、中国語と日本語の間に表現法、発想法の違いがあることが明らかになった。中国語の動詞の重ね型は命令・依頼を表すために使うのではなく、中国語の動詞の特徴によって、文法的な要請によって使われているのである。中国語の動詞は結果まで含意しないため、単純動詞の後の補助成分が非常に発達する。話し手が相手に指示を出す時、動作・行為に関する結果或いははっきりした量まで限定しないと、話し手の指示が不明になる。動作・行為に関する量的な表現がいろいろあるが、不定量を表す動詞の重ね型はその一つの用法である。

動詞の重ね型は中国語では主に命令・依頼表現に使われているが、日本語では逆に重ねられた動詞の形は命令・依頼表現においては使われず、言葉そのもののアイコン性が保たれている。この違いは中国語の動詞の特徴にもよるものであるが、中国語の動詞の重ね型は何かの意味を表すというより、一つの文法的な手段として使われているからであると考えられる。

中国人は面子を大事にし、自分の欲を表に出すのは恥ずかしいと考え、相手に依頼事をする時、動詞の重ね型を使うことによって、言葉では自分の要求を明確にせず、相手に最大の選択権を与えることになる。動詞の重ね型で控えめに要求するというのは、発話内行為の無礼さを最小限にとどめようとしているのである。そう考えると動詞の重ね型はある場合には、話し手の要求を「ぼかす」という働きを持ち、依頼文における一つの戦略であると言えよう。語用論的に中国語の動詞の重ね型は、話し手の要求を直接明示的に示さずに、「ぼかす」ことによって、話し手の面子を潰さずに済むことであるし、聞き手にも動作・行為を遂行する選択権を渡すことになるから、丁寧さが出るのである。

中国語の動詞の重ね型と意味的にもっとも近いのは日本語の「～してみる」、「～してみる

中国語の動詞の重ね型と意味的にもっとも近いのは日本語の「～してみる」、「～してみると」、「～してみろ」である。「みる」の前の動詞が意志性があるか否かに関わらず、いずれにしても、「みる」は意志性のある動詞でなければならない。また、「～してみろ」は命令を表す同時に「仮定命令」という用法もあり、命令機能の一つの拡張的な用法だと言える。

第四章

形容詞と命令・依頼表現

§0 はじめに

本節は中国語の形容詞と日本語の形容詞¹⁾の命令・依頼表現における用法を観察する。中国語の命令・依頼表現では、言語形式上、形容詞による命令文が多く見られる。よって形容詞の命令文だという印象が強い。中国語では、本当に形容詞だけで命令文になれるだろうか。形容詞を命令文の述語だとみて、「形容詞の命令文」が存在する立場を取っているのが、荒川清秀(1979)、袁毓林(1993)、将平(1984)²⁾である。彼らは中国語の形容詞が命令文になれるという観点を持ち、ともに統語論から中国語の形容詞の命令文についてまとめた。中国語の所謂「形容詞の命令文」は、次の例文のように、

- (1) 你老实一点儿。(おとなしくしなさい)
- (2) 今天早点儿回家。(今日早く帰ってきてください)
- (3) 你说慢一点儿。(ゆっくり話してください)

形態的に「～一点儿」(～一些)³⁾というマーカがあれば、形容詞だけで命令文が作れるということである。

しかし、これまでの研究は形容詞の命令文については、ともに適切な定義を与えていないし、問題点も残っている。

「形容詞の命令文」の話をする前に、まず、中国語の形容詞と日本語の形容詞の特徴について考えてみる。

一般に、形容詞と呼ばれるものは、意味的に、人や物の性質・形状・状態などを表す語類とされている。しかし、その品詞としての位置付けや文法的な振る舞いなどは、言語によって必ずしも同じではない。

0.1 品詞による違い

1) ここでいう形容詞は、「静かー」、「真面目ー」のような所謂形容動詞のものと、「おとなしー」、「賢ー」のような狭義の形容詞のことを指す。

2) 将は「形容詞の命令文」のことを「形容詞謂語祈使句」という言い方をする。

3) 「～一点儿」は形態的に「～点儿」、「～一点」の形式もあるが、意味的には違いはない。「～一点儿」、「～一些」は「不定の数量(わずかな量)を表す」(『中日辞典』:1714)という。

まず、品詞の判別から見ると、中国語は品詞の判別がしにくい言語に属する。中国語の形容詞は動詞と同じく、活用はしないが、統辞法上のある機能を動詞と共有する。形容詞と動詞は、意味的にも統語論的にも連続性が高く、両者の境界線は引きずらい。よって、形容詞の判別は形態論的基準、統辞論的基準、意味論的基準とを混合して行うことになる。他方、日本語の形容詞、形容動詞は、形態論的にも統辞論的にも極めて動詞に近い品詞であり、形態類でもあって、特定の形態部分を共有しているのであるが、日本語は品詞の判別がたやすい言語に属し、形態論的基準のみによって、その語彙大多數の語詞を品詞分類することができる。

0.2 活用形による違い

中国語の形容詞は活用形がない。中国語の形容詞は文の中で、自らの語形でモノの属性を表す。中国語では、形容詞が動詞のように振る舞うように見られるのは、少なくとも三つの在り方がある。

第一に、形容詞は印欧語のようにコピュラと共起しない。第二に、動詞と同じように、否定文で *bu* (不) という助詞が使われる。第三に、名詞を修飾する時、動詞と同じように、*de* という連体助詞がつく (松本1998: 21)。

他方、日本語の形容詞は動詞と一緒に用言というグループの中に入れられている。日本語の形容詞は活用形があり、動詞と同じように、連用形、連体形、終止形というような形態的カテゴリーによって活用する。高橋 (1994: 244) の研究によると、日本語の形容詞は (イ活用、ナ活用ともに) 曲用しないで、〈たかい一たかった〉〈きれいだ一きれいだった〉のように活用する。昔に遡れば、「たかくありき」「きれいにあり」などのコピュラ「あり」がもともとの形容詞にくっついたのだろうと言われ、現在では、これが語尾となり、形容詞が活用することになって、用言の仲間に入ることになったわけである。また、日本語の形容詞が、文中で果たす主要な機能は、規定語になることと述語になることであると言う。

日本語の形容詞が活用し、中国語の形容詞は活用しないということになると、両者はまったく異なるように見えるが、実は、文法の働きは非常によく似ている。形容詞の第一の働きは、規定語になって、名詞をかざることであり、第二の働きは述語になるということである。この点は両者に共通である。統語的に日本語と中国語の形容詞はともに動詞述語の連用修飾語になれるが、中国語の形容詞はまた、動詞述語の補語にもなれる。しかし、日本語の形容詞にはその用法はない⁴⁾。

0.3 意味による違い

また、意味から考えれば、日本語の形容詞、形容動詞は主として性質、状態を表す語である。西尾寅弥 (1972: 21) は形容詞を大きく二つに分ける。つまり、「感情形容詞」という主観的な性質・状態を表すものと、「属性形容詞」という客観的な性質・状態を表すものである。日本語の形容詞が、形態上ク活用とシク活用の二類に分けられる。この二類の意味の違いについて、山本俊英 (1955: 71-75) は古代語では、ク活用形容詞は状态的属性概念を表し、シク活用形容詞は心的な、情意的な

4) ここで言っているのは、意味的な違いではなく、形態による違いである。

概念を表す傾向が強いことを指摘した⁵⁾。しかし、中国語の形容詞は形態から意味の違いを区別する機能を持っていない。更に、日本語の形容詞は述語に立つ場合でも、連用修飾語に立つ場合でも対比的に用いられる場合もあれば、描写的に用いられる場合もある。他方、中国語の形容詞は、述語と連用修飾語に立つ場合、単独では対比的にしか働かない。例えば、

(4) a 这本书新。(この本は新しい)

b 这是一本新书。(これは一冊の新しい本です)

a, bはそれぞれ他の本は新しくないという意味が含意される。

以上は中国語の形容詞と日本語の形容詞の意味と機能などの違いについて少し概観した。

§1 中国語の「形容詞の命令文」についての分析と問題提起

次は荒川 (1979)、袁 (1993)、将 (1984) の研究を紹介する。

1.1 先行研究の紹介と疑問点

まず、荒川の議論を簡単にまとめると、荒川は形容詞が「単独で「一点儿」のついた形を形容詞の命令文と考える」(1979:38) ようである。形容詞の命令文の最低要件として、「一点儿」があれば、十分だと考え (1979:36)、形容詞が命令文になる場合には必ず「一点儿」を必要とし (1979:38)、「一点儿」がなくては命令文を作ることはいけない (1979:44) と述べている。袁も同じようなことを言っている。袁 (1993:117) は形容詞が普通単独で命令文になれないと言っているが、もし、形容詞の後に「一点儿」をつけたら、或いは形容詞及びその否定形の前に「別」という言葉をつけたら、形容詞を中心とする三種類の命令文を作ることができるという。袁は次のような例を挙げている。

(5) 谦虚一点儿。(谦虚してください)

(6) 别不谦虚。(谦虚しなくてははいけません)

(7) 别骄傲。(傲慢しないで)

また、袁の言うには「A+一点儿」は肯定的命令文のunmarked formであると述べている。形容詞の否定形の命令文についてはここで考慮しないが、形容詞の後に「一点儿」を必要とするという議論は荒川と袁は一致している。

将 (1984:579) はまず「祈使句」の定義については、「命令、禁止或いは依頼、忠告などの働きを持っている文は祈使句」だと述べている。また、「普通は祈使句の述語は動作・行為を表す動詞或

5) このような分類に関しては、ごく少数の例外があるが、基本的には極めて的確な指摘であると思われる。

いは動詞構造のもののみであるが、事実上多くの形容詞も祈使句の述語或いは述語「中心詞」になれる」と言って、「形式上からみれば、祈使句であれば、殆ど「还是～吧」（やはり～でしょう）、「请」（～してください）、「别」（～しないでください）という特定の言葉を付け加えることができる」と言う。「形谓祈使句」（「形容詞の命令文」）は「还是～吧」、「别」と共起できるから、「A+一点」と「太+A」の形式は形容詞が述語になれるというのを保証してくれたと述べている（p.584）。しかし、將の立てた前提条件はそもそも間違っている。將は命令文、依頼文、勧め文を「祈使句」に一括しており、もし、將の解釈に従えば、命令文、依頼文、勧め文であれば、「还是～吧」、「请」、「别」などの特定語句と共起できるということになる。でも、実際に「还是～吧」、「请」は一目瞭然に命令文とは共起ができない。よって、「还是～吧」、「请」との共起ができるかどうかを命令・依頼表現であるかどうかを判断する基準にするのは、何の根拠もないものである。

將（1984:584）は、「形容詞の命令文」は動詞を省略した述語命令文であると認めない理由を二つ挙げている。

- (a) 動詞を省略した後の「A+一点」は連用修飾語であるか、補語であるか分らない。例えば、「快点，划！」（はやく！漕げ！）は「快点划」（はやく！漕げ！）の意味か、「划快点」（漕ぐのを早くしなさい）の意味か分らない。
- (b) 具体的にどんな動詞を省略したか判断しにくい。例えば、宿舎で映画を見に行こうと相手を誘う時、「快点」というのがどういう動詞を省略したか言い難い。

しかしながら、以上の理由は説得力がない。実際の会話では、(a)、(b)の状況はありえないのである。もし、聞き手が話し手の意図を正確に理解できなかったら、話し手の発話、話し手の情報伝達は失敗であって、会話として、成り立たないのである。(a)と(b)の発話状況は現場指示で、談話理論からいうと、話し手と聞き手がともに了解済みという前提で、言葉の経済性という原理が働き、省略が多いのである。もし特別な事情でなければ、話し手が自分の意志を正確に相手に伝えられなければ、動詞を省略しないだろう。発話現場で、具体的な動詞をわざわざ言葉にしなくても、聞き手が話し手の意図を正確に読み取れ、(a)、(b)の所謂意味の曖昧性は、実際の発話現場では、問題にならないのである。

以上の先行研究をまとめると、「形容詞の命令文」というのは、形式的に、「（一）点儿」があるのが特徴である。しかし、ここで少し疑問に思うのは中国語の用言には語尾変化がないため、動詞命令文でも、そのマーカーとするものは存在していないのに、なぜ形容詞の命令文のほうが「一点儿」のマーカーを必要とするだろうか。

中国語にはもし動詞述語命令文以外に形容詞の命令文があるとするなら、名詞の命令文、副詞の命令文⁶⁾などもあるはずだが、なぜ普通あまり取り上げられていないだろうか。

次は主に荒川の研究を中心に「形容詞の命令文」が存在するのか、「形容詞の命令文」と「一点儿

6) 荒川（1979:35）の論文の中に、副詞の命令文にかかわる記述があるが、その是非については、ここで特別に言及しないことにする。

」の関連性は何かなどについて、具体的に分析し、問題点を見つきたい。

1.2 問題点の提起

1.2.1 「形容詞の命令文」は本当に存在するのか

荒川 (1979: 35) は形容詞が命令文になれるには、三つの条件が必要だと挙げている。

- (a) 形容詞に「着」をつける。「快着点儿」⁷⁾ (早くしてください)
- (b) 形容詞に「一点儿」(一些)」をつける。「快一点儿」(早くしてください)
- (c) 形容詞に「要」「应该」等の能願動詞をかぶせる。「要快」(早くしなければならない)

この三つの条件について荒川は (a) のタイプは (b) のタイプに吸収させ (1979: 36)、(c) のタイプは別に扱い (1979: 37)、命令文の条件として「仮説1」を立てた。

仮説1

形容詞が命令文になるには「一点儿」(一些)をつけなければならない。

文法形式には、荒川の挙げている「形容詞の命令文」の中の述語の部分は確かに殆ど「形容詞+一点儿」である。荒川 (1979: 38) は(仮説1)によって、中国語の形容詞をふるい分けると三つのグループがあると言う。

- i. (仮説1)を満足させるもの。
- ii. (仮説1)に、さらに他の条件を加えれば命令文になるもの。
- iii. (仮説1)が適用できないもの。つまり、「一点儿」をつけても命令文にならないもの。

ここで、荒川の仮説1が適用できる i., ii. グループの形容詞を分析すると、意味的に二つのタイプに分けられるということが分かる。

- ① 場面によって、具体的な動詞を補足できるもの
- ② 人間の品性、態度、思想、感情などに関わる形容詞で、「要」、「放」、「给我」⁸⁾ という動詞を補足できるもの。

7) 命令の働きをする形容詞はChao (1968: 669) は次のようなタイプがあるのを指摘する。

Forms with adjectives such as 快! and adjectives as commands are usually either in vivid reduplicated form, as in 好好的! (Be good, Be careful) or in comparative form, as in 小心点儿! (More careful-Be careful) and 慢着点儿! (Being more slowly-Take it easy!)

「A+一点儿」と「A+着一点儿」の違いについては、孟 (1963) は「慢着点儿」や「轻着点儿」は「着」を取り去っても文の意味には変わりはなく、「状態にいくぶん持続のニュアンスを帯びさせる」ことこそが、この「着」の真の働きだと言っているが、その両者の違いについては、もっと深く考えるべきである。ただし、「A+一点儿」は「A+着一点儿」より、言語的に一般化されているから、「A+着一点儿」についての議論はここで省略することにする。

つまり、荒川の言う「形容詞の命令文」は、殆ど動詞を省略した動詞述語命令文のことだと言える。この主張を検証するために、次は荒川の例を分析していく。

ここでいう①類の形容詞は文法形式では、動詞述語のない形容詞の命令文のように見えるが、実際に、もし、具体的な場面がなければ、意味的には聞き手に指示している内容が不明確になる。つまり、形態上では、動詞のない「形容詞の命令文」は現場依存性がとても強い。次の荒川（1979：38-39）の三つの例を見られたい。

(8) 把这些展品拿到展览室去，轻一点（拿），慢一点（拿）。（これらの展示品を展览室へ持っていけ。そっと、ゆっくりな）

(9) a 我们走啦。

b 好。崔晓，慢点（走）。（拿起台子上崔子川的衣服）起风了，给你哥哥送去。

（ちょっとまって。…風がでてきたからお兄さんにもっていってあげ）（荒川1979：39）

(10) 嘘，轻点（走）……。 （しっ、静かに）（荒川1979：39）

(10') 嘘，轻点（放）……。 （しっ、そっと）

以上の三つの文は、同じ「形容詞の命令文」を表すのに、(8)、(9)は前後の関係があるから、省略された動詞は文脈によって復元することができるが、(10')の「轻点」のように、前後の文脈がない場合、「そっと」という意味も表せる。つまり、「形容詞の命令文」では、動詞は形容詞の意味を限定する働きをし、動詞がなければ、形容詞の意味も確定できなくなる。

以上の例は、現場での発話であるから、動詞が省略されても、前後の文脈によって復元することができる。逆からいうと、もし、現場による発話、話し手と聞き手の共有知識による発話でなければ、動詞のない「形容詞の命令文」は、語用論的には聞き手に指示している意味内容が不明確になる。

②類の形容詞は人間の品性、態度、思想、感情などを表す形容詞で、形容詞の前に「要」、「放」「给我」というようなものがつけられる。この類の形容詞は実は荒川の挙げた形容詞が命令文になる三つの条件の中の(c)タイプ(1973：37)の形容詞と同じものである。つまり、(c)タイプの形容詞の後に「一点儿」をつけてもいい。逆に形容詞分類のi.グループ(1973:38)の形容詞の前に「要」をつけてもいいわけである。荒川は(c)を別に扱うが、(c)の用法とi.グループの用法はちょうど同じ人間の品性、態度、思想、感情などを表す形容詞で、ただ場面によって、文法的な用法が違っただけで、意味的に同じものだとも見ても差し支えがない。荒川は「形容詞の命令文」の形態上の特徴を根拠にするが、実際機能的に同じ類のものを区別視することは適切ではないのではないだろうか。これはまたこの類の形容詞の文法的な用法の二つの側面を物語っているので、本研究は荒川の言

8) 「要」は「～しなければならない」、「放」は「(自制してある行動を)とる、ふるまう(『中日辞典』小学館)」、「给我」は「～してくれ」という意味を表す。「放」はまた、命令文では「～しろ(せよ)、～させる」という意味も表す。

う人間の品性、態度、思想、感情などを表す「形容詞の命令文」のことを「要」などを省略した動詞述語命令文だと主張する。これを裏付けるために、まず荒川の言う形容詞が命令文になる三つ条件の中の(c)タイプ(荒川はこのタイプを別に扱う)の例を挙げる。

(11) a 嘴要勤。(口はまめに) (荒川1979: 37)

b 嘴(要)勤一点儿。(口はまめに)

(12) a 你先到他身边去。要坚强。(はやく側にいってあげなさい。気をしっかりもつんだよ)
(同上)

b 你先到他身边去。(要)坚强一点儿。(はやく側にいってあげなさい。気をしっかりもつんだよ)

(11)、(12)のaは荒川の例であるが、しかし、aをbのように言い替えてもいい。勿論「要～」と「(要)～一点儿」との間に、意味的に違いがある(5.1.1.3を参照)が、荒川の言う(c)タイプの形容詞はi.グループの中の人間の品性、態度、思想、感情などを表す形容詞と同じものだということが分かる。次は荒川の形容詞分類のi.グループの中の人間の品性、態度、思想、感情などを表す例を挙げる。

(13) a 别害怕，大胆点，我挺的住！(こわがるな、大胆に、ぼくは大丈夫だ) (荒川1979: 39)

b 别害怕，要大胆.....点，我挺的住！(こわがるな、大胆に、ぼくは大丈夫だ)

(14) a 发现敌情了吗？沉着些。(敵を発見したのか、落ち着け) (同上)

b 发现敌情了吗？要沉着.....些。(敵を発見したのか、落ち着け)

aの例は荒川の挙げた文であるが、aとbの言い方が互いに入れ替わることができる。上の四つの文について、「～一点儿」と「要～一点儿」は殆ど同じ意味として使われていると考えていい。

また、荒川はii.グループの用例

(15) 字大.....点。(字は大きく) (荒川1979: 40)

については、次のように述べている。

ただし、こうした場合でも、“字要大一点儿”のように“要”等の能願動詞をかぶせた方がより“完整”な言い方になる。i.グループに対し、ii.の単音節形容詞では「場」(口調も含め)に対する依存度が高く、能願動詞をかぶせた方がより安定した表現になるのである(1973: 40)。

そうしたら、ii.の用法は(c)タイプと同じになる。もともと(c)タイプの形容詞は荒川は別に

扱っていたのであるが、ここでは矛盾が生じたのである。

1.2.1 を簡単にまとめると、中国語の形容詞は単独で命令文になれるわけではない。殆ど動詞を省略した動詞述語命令文だと言える。

1.2.2 「一点儿」は形容詞を動词的化させているものであるか

形容詞の後になぜ「一点儿」をつけるかについて、荒川（1979: 44）は「形容詞＋一点儿が命令を表しているわけではなく、いわば形容詞を動词的化させているのである」という説明を行ったが、実は「形容詞＋一点儿」は比較を表すこともできる。だが、なぜ、形容詞の命令文の場合だけ、「一点儿」が形容詞を動词的化させるための条件を提供してくれ、比較の場合はそうではないだろうか。同じ形式なものはその間に必然的な関連性が潜んでいるに違いないが、比較を表す「形容詞＋一点儿」と命令を表す「形容詞＋一点儿」との間にどのようなメカニズムが働いているだろうか。

「形容詞＋一点儿」が形容詞を動词的化させて、「一点儿」は欠くことができない証拠として、荒川（1979: 44）次の例を挙げている。

- (16) 幸好你还跑得快，走慢.....点，可就全身湿透了。（もう少しゆっくり歩いていたら本当に体中ずぶぬれだよ）荒川（1973: 44）

しかし、この文は動詞「走」があるのに、なぜ「一点儿」で形容詞を改めて動词的化させなければならないのだろうか。

また、動詞述語命令文の場合でも「一点儿」が使われている。例えば、商売があまりうまく行かなかった弟に、

- (17) 你以后跟我学着.....点。（これから私について学びなさい）
(18) 你多吃.....点。（もう少し食べてください）

という言い方もある。ここでの「一点儿」は動詞の後についているが、動詞を動词的化させるということとは考えられない。

もし、荒川のいう「形容詞の命令文」を本当に動詞を省略したものだと考えれば、「形容詞の命令文」は必ずしも「一点儿」を必要としなくなる。というのは、荒川は「一点儿」は形容詞を動词的化させる働きを持つと考えている（1979: 44）からである。動詞が存在すれば、「一点儿」で形容詞を動词的化させる必要もなくなり、「一点儿」は「形容詞の命令文」にとって必要条件でなくなるが、実際、形容詞のある命令文では、殆ど「一点儿」が付けられている。そうすると、「一点儿」は形容詞を動词的化させる働きを持つという考えは成り立たない。「一点儿」の正体は何だろうか。

以上の二つの疑問点について本節の課題として考えてみよう。

§2 「形式上の形容詞の命令文」の研究・分析について

言語学の分野では、特に中国語の研究では、言葉の形式や構造にかかわる文法の問題を中心に研究が進められてきた。文法は単語、語句等の結び付きの体系的な記述を中心とする統語論とほぼ同じ意味で使われる。文法はあくまで、話し手や聞き手、文脈・場面などから独立した記号系として位置づけられ、一般的な説明ができない現象も広範に存在する（山梨1993：80）。しかし、日常言語は生きた文脈の中で使われる形式と意味の体系からなる記号系の一種である。話し手・聞き手、文脈・場面、言語外の知識等の要因を外して、言語現象を解釈するのは不可能である。たとえ発話の意味内容が同じで、しかも、これらの文脈に曖昧性（ambiguity）ファジー性（fuzzyness）や非字義性（non literality）がない場合でさえ、背景が異なる文脈においては異なる可能性がある（Vanderveken 1994：125）。本研究は語用論的な要因を考慮しながら、認知的な観点を入れ、統語論の立場から「形容詞の命令文」の用法をまとめ、「形容詞の命令文」について考えてみたい。

「形容詞の命令文」を論じる前に、この研究に対する筆者の観点を先に簡単に述べる。

2.1 形容詞と命令文との関連

高橋（1994：23）によれば、命令というのは、未来（話の時点より後）に現在と異なった動きが成立することを要求するものである。従って、現在よりのちにハジマルことが要求される。そのためには、はじめとおわりを持つウゴキを表す動詞であることが基本的なのであるという。形容詞は性質と状態を表すのが基本的であり、述語の働きと名詞の修飾語の働きをする。形容詞が述語になる文は、大体物と人間の特性を表すもので、形容詞で相手に命令することはできない。それによって、ここでは中国語と日本語の「形容詞の命令文」の存在を認めない立場を取る。

2.1.1 「形容詞の命令文」における形容詞の意味論的条件

中国語と日本語では、すべての形容詞が「形容詞の命令文」になれるわけではない。形容詞が命令文で使える条件としては、以下のようなものがある。

形容詞による動作の結果、或いは連用修飾は人間がコントロールできるものでなければならない。また、動作の結果として使われる時、その動作のプロセスに形容詞の属性が含まれなければならない。

話し手が聞き手に動作の結果から要求することや、連用修飾として使われる時、その行為自体は聞き手の意図性が込められ、聞き手がその行為をコントロールできなければならない。

(19) *你把孩子生大一点儿。

(19) *赤ちゃんを大きく生んでください。

赤ちゃんを大きく生むか小さく生むかということは、聞き手自身がコントロールできず、自由に選択できないため、中国語と日本語両方とも許容度が低い。つまり、「赤ちゃんが生まれる」という事態に「大きく、小さく」といった意図が介在し得ないからである。動作・行為の結果が聞き手がコントロールできるものであれば、許容度が上がる。

(20) 你把衣服做大一点儿。

(20') 服を大きく作ってください。

また、もし、話し手が聞き手に要求している動作の結果が動作のプロセスにその属性が含まれていなければ、その文は言わない。つまり、結果句の意味を動詞の意味から予測することが可能でなければならぬ。

(21) *你把毛衣织暖和一点儿。

(21') *セーターを暖かく編んでください。

セーターを編むという動作のプロセスにはサイズの大きさという属性が含まれているが、「暖かく」編むという属性が含まれていない。よって、(21)の文は中国語と日本語はともに言わない。

2.1.2 「形容詞の命令文」の分類

日本語には「形容詞の命令文」があるだろうか。高橋(1994:22)の指摘を引用すると「「さちおおかれといのる」などといういいかたはあるが、ふつうには形容詞には命令形はない」ということである。なぜかという、文章語の中では、「うつくしくあれ」などという言い方もできるが、普通には「美しくなれ」という言い方をする。つまり、形容詞を命令文にする時には、どうしても「動き」を表す動詞が使われてしまうのである(高橋1994:23)。命令形が動詞にあって形容詞にないのは、動きを表すか表さないかの違いであるという。日本語では、形容詞を命令文にする時、動詞が必要だというのはほかにも例がある。

(22) 静かに (してください)。

また、阪倉篤義(1974:204)は「形容詞には、命令して言い切る形はないのだから、命令形という活用もブランクになる」という指摘がある。日本語の形容詞には命令形がない。「形容詞の命令文」にするなら、「静かにしろ」のように「動詞化」⁹⁾しなければならない。

9) この用語は荒川(1979)のを引用する。

英語には似たような「形容詞の命令文」があるが、例えば「Be silent!」という文がある。高橋（1994:246）の指摘では、この「Be」は動詞ではなく、コピュラ、つまり補助的な単語の一つである。形容詞 *silent* のほうが主役であって、Beのほうが補いの言葉であるという。

本節では、中国語にも形容詞による命令文はないということを主張するが、形容詞という要素がある命令文のことを「形式上の形容詞の命令文」と名付ける。形態的には、以下のような分類があると規定する。

- i. 「A+一点儿」の形としての命令文（快一点儿跑（早く））
- ii. 動詞の連用修飾語としての命令文（快一点儿跑（早く走って）、要勇敢（勇敢に））
- iii. 動詞の補語としての命令文（跑快一点儿（早く走って）、瞄准（的の中心を狙いなさい））

i. は動詞を省略¹⁰⁾した「形式上の形容詞の命令文」で、それぞれii. かiii. に属する。よって、意味内容からいうと、ii. とiii. という二種類が存在することが分かる。

以上でも見たように、「形容詞の命令文」が日本語にはないというのは、形容詞は動詞と同じように用言に属するが、動詞なら語尾変化には命令形はあるが、形容詞の活用形には命令形というものは存在せず¹¹⁾、命令にはなれないということである。しかし、形容詞による命令文は日本語にもある。

(23) 静かに！

(24) 字を大きく書いてください。

(25) もう少し大きく。

以上のように、動詞を省略した形の命令文と形容詞が連用修飾語として使われる命令文などがある。

本節では、中国語にも日本語と同じように「形容詞の命令形」は存在せず、形態的な「形容詞の命令文」は動詞を省略した命令・依頼文であることを主張する。勿論、動詞を省略した形容詞のある命令文は、動詞述語命令文と違う振る舞いを持っていると考えられる。その間の違いは何か、日本語の形容詞のある命令・依頼文との間の異同点は何かについては考えてみるが、日本語は形態的に特徴が明らかであるため、論じる焦点を中国語の「形式上の形容詞の命令文」に置く。

形容詞のある命令文のことを一応「形式上の形容詞の命令文」と呼ぶことにするが、文法形式では、命令文の中に形容詞があるのをすべて考察範囲の中に入れることにする。「形式上の形容詞の命令文」は、基本的にその形容詞が述語の状語（連用修飾語）、或いは補語（結果補語）として使われている動詞述語命令文（動詞が省略した形もこの中に含めている）と形容詞そのものの命令文と二種類に分

10) 省略の定義については、蒲谷（1993:27）は次のように規定する。「省略とは、表現主体が、何らかの理由により、文話（文章・談話）のある部分を媒材化（音声・文字化）しないことであると規定する」。本節の省略とは、先行文脈で言及されたか或いは話し手の言おうとすることに対して、聞き手が了解ずみの場合による省略だと考えている。「形式上の形容詞の命令文」における省略の問題については、節を改めて論じることにする。

11) 近世、中世の時代には、形容詞には命令形はあったが、古語に関する形容詞の命令形については、ここでは、論じないことにする。

けられる。

2.2 形容詞と「一点儿」（一些儿）

荒川（1979）は「形容詞が命令文になる場合には必ず「一点儿」を必要とすると主張し、袁（1993）も「A+一点儿」は肯定的命令文の *unmarked form* だと言っている。形容詞の後になぜ「一点儿」（一些儿）をつけるかについては、ここでは意味論の立場から考える。

张国宪（1995）は形容詞の特徴から、なぜ「一点儿」を使うかについて間接的に説明する。張（1995：55）は「非定量形容詞」は明確な「度」と「閏節点」を持っていないため、肯定的な命令文と反問文の中で普通「A+（一）点儿」の形を取り、状態の適量を表すと説明する。

Chao（1968：503）は中国語の名詞を可算名詞（*individual nouns*）と質量名詞（*mass nouns*）などに分け、可算名詞なら可算量詞（*general individual classifier*）——「個」或いは少なくとも二つ、三つの他の可算量詞をつけることができるという。例えば、可算名詞「狗（犬）」は、次のような可算量詞をつけることができる。

二个狗、二条狗、二只狗

しかし、質量名詞は「個」或いは他の「可算量詞」をつけることができないが、いろいろな「量度量詞」（*a number of quantitative measures*）、例えば、質量量詞「水」の場合は、

一些水、二滴水、一杯水、一cc・水

などをつけることができると述べている。Chao（1968）の論点をまとめると、一方で可算名詞は具体的な量を表す量詞の修飾を受けることができるが、もう一方の質量名詞は「量度量詞」の修飾を受けることができる。この論点を更に広げると、動詞において動作の回数を表す動量詞は可算的なもので、動詞はその回数を表す「動量詞」の修飾をうけることができるが、形容詞は物とか、人の形状、性質などを表しているから、質量的なもので、「量度量詞」——「一点儿」（一些儿）をつけることになると考えられる。中川正之（1973：19）は中国語では「数量限定語がないと論理的に不明瞭である」と述べている。命令文における形容詞修飾語、形容詞補語のある動詞述語文は、話し手が聞き手にその動作の様態、結果になるようにと指示する時、まさにその明示性と具体性が必要なのである。後程改めて述べるが、ここでの形容詞の後の「一点儿」は、程度・様態の度合を表すこともできるが、「形式上の形容詞の命令文」においては、意味的（量が少ないこと）というより、文法的な働きをもって、文法化されたものであると考えられる。詳しい議論は3.2を参照されたい。

更に、中国語の「形式上の形容詞の命令文」の後に付けられる「一点儿」は比較を表す参照点マーカードと主張する。次は幾つかのセクションに分け、「形式上の形容詞の命令文」と「一点儿」を詳しく議論する。

2.3 発話状態の分析

「形式上の形容詞の命令文」における話し手と聞き手の発話状態について、次のように分析する。

2.3.1 関連研究の紹介

東郷雄二（1998：13 - 14）はメンタル・スペース理論に依拠して、談話の中で、「談話の指示物」DR（discourse referent）を登録する場として、話し手スペースと聞き手スペースとを想定する。また二つのスペースはコネクタで結合されているという。話し手のスペース内に存在するDRの対応物が聞き手のスペース内にすでに存在する場合は、聞き手はそのDRにたやすくアクセスすることができる。しかし、対応物が存在しない場合は、話し手が明示的にDRを談話に導入するか、聞き手に何らかの手段でその対応物にアクセスすることができるようにしなくてはならないと述べている。命令・依頼表現では、話し手は聞き手の知識状態をアセスメントしながら、適切な指示を出すのである。

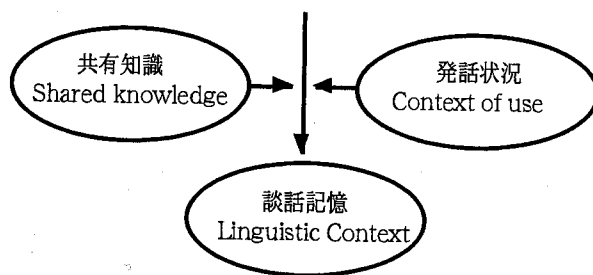
また、聞き手の知識状態を把握するために、東郷（1999：2）の談話モデルを参考にする。

東郷の定義によると、談話モデルとは、話し手と聞き手が相互行為によって談話を構築する際に発動する、心的モデルである。談話モデルは、次の下位領域からなる。

- i. 共有知識領域
- ii. 発話状況領域
- iii. 談話記憶領域

話し手と聞き手は、それぞれ自分の談話モデルを心的領域として保持する。談話の構築にあたっては、互いに相手の談話モデルの現在の状態を査定し、自分の談話モデルと比較するという。談話モデルは次の図のように示す。

図<2-1>



東郷（1999：3）

井上優（1993：334）は、（i）日本語の命令文の第一の機能は「話し手の意向が聞き手の知識に導入されるよう働きかける」ことにある、（ii）命令文の機能の決定には次の二つの要因

- ・「現在動作実行のタイミングにある」「現在動作実行のタイミングにない」のいずれを前提とするか（タイミング考慮／タイミング非考慮）
- ・「話し手の意向と矛盾することがらが存在する」「話し手の意向と矛盾することがらが存在しない」の

いずれを前提とするか（矛盾考慮／矛盾非考慮）

が関与する、ということを提案する。

本節では、以上の研究の意義を認めた上で、中国語の「形式上の形容詞の命令文」における話し手と聞き手の発話状態について分析してみる。

2.3.2 聞き手の認知状態

命令・依頼表現において、話し手が聞き手の知識状態をアセスメントしながら指示を出す。つまり、話し手は聞き手の動作実行の状況を参考にしながら、命令・指示を出すのである。しかし、人間はある事象を認識し、それを言語化する際に、話し手は必ずある時点を基準として、言語表現を行う。今、仮に、話し手が言語表現する際に、基準とする時点を「基準時点」と呼び、ここで聞き手の認知状態を次のように分類しておこう¹²⁾。

I 聞き手がある動作実行の最中であつたり、先行談話での明示的言及によって、聞き手スペース内にすでに登録されている場合。

I の状況は談話モデルの発話状況（Context of use）と談話記憶領域（Linguistic Context）に当たる。話し手と聞き手が発話の現場にいて、この時の指示に関して、また二つの可能性が考えられる。

- (i) 聞き手にすぐある動作にとりかかるように命令する。つまり、井上の「現在動作実行のタイミングにある」ことを前提にして、発せられた命令文（タイミング考慮の命令文）のことである。この時参照点マーカー「一点儿」を必要とする。
- (ii) 未然の行為を要求する。つまり、井上の「現在動作実行のタイミングにない」ことを前提にして、発せられた命令文（タイミング非考慮の命令文）のことである。この時恒常的に聞き手にある動作を維持してもらう時、要願動詞「要」が必要である。

II 聞き手がある動作実行の最中でない場合、或いは実行すべき動作の内容が先行談話では明示的に言及されず、聞き手の実行している動作と無関係な場合。

この時話し手が何を指示するかは実行すべき動作の内容が聞き手のスペースの中になく、話し手が明示的にその動作を導入しなければならない。

12) 井上は命令文を

(i) 「現在動作実行のタイミングにある」ことを前提にして発せられるか、(ii) 「現在動作実行のタイミングにない」ことを前提にして、発せられるかという視点から大きく二つのタイプに分類される。つまり、井上は話し手は聞き手に命令する時点に、聞き手の現在の動作の状況を考慮せず、聞き手にその動作を実行してもらうタイミングに焦点を置いてあるのである。本論文は「形式上の形容詞の命令文」について論じるため、「形式上の形容詞の命令文」は動詞述語文と違った所は動作の様態、状態と関わっているのも、聞き手の動作そのものの状況について把握する必要があると考えている。

Ⅲ 聞き手に指示することが、談話では初めて登場するが、話し手と聞き手の共有知識 (Shared Knowledge) から、聞き手がたやすく検索できる場合。この場合の形容詞は人間に関するもので、ほかの形容詞と違う特徴を示す。

以上の聞き手の認知状態を基に、「形式上の形容詞の命令文」におけるいくつかの問題について分析する。

§3 「形式上の形容詞の命令文」における「一点儿」についての考察

3.1 中国語の形容詞の分類と意味的特徴

3.1.1 中国語の形容詞の分類

朱德熙 (1997: 3 - 6) は中国語の形容詞を単形容詞と複形容詞に二分する。単形容詞は形容詞の基本形式で、単音節 (紅 (赤い)、二音節 (老实 (おとなしい)) の形容詞を含め、性質を表し、性質形容詞と言う。重ねた形容詞 (干干净净 (きれいに))、或いはいろいろな附加要素を付けた形容詞 (绿油油 (緑))、「冰凉」 (冷たい) などは状態と状況を表し、複形容詞という。単音節の形容詞は大体性質形容詞で、二音節のは大体状態形容詞であるという。

3.1.2 中国語と日本語の形容詞の意味的特徴

中国語の形容詞の意味と機能について、張 (1995: 62) は形容詞を量の概念から二分する。一つは「定量形容詞」 (例えば、雪白 (真っ白)、碧绿 (青緑)、漆黑 (真っ黒)) で、もう一つは「非定量形容詞」 (白 (白い)、緑 (緑)、黒 (黒い)) である。「非定量形容詞」は典型的な曖昧な集合 (模糊集合) であって、他のものと比較することによって、表している量を確定し、描写するのである。比較と言ったら、「参照物」が必要で、話し手がある事物の性質と状態を評価し、主観的に描写する時、心の中の基準を参照物とし、比較する。このような比較は非明示的なものである。例えば、次のような例である。

(26) 这孩子太聪明了。(この子は本当に賢いね)

(27) 9 舍的 2 1 2 房间很干净。(9 舍の 212 部屋はとてもきれいだ)

もし、話し手がある客観事物を参照し、もう一つの事物の性質或いは状態について描写する時、このような比較は明示的であって、比較する意味を持つ。ここで話し手が主に強調するのは、比較した後の性質、或いは状態である。例えば、次の例は明示的な比較文である。

(28) 这孩子比同龄人聪明。(この子は同年代の子より賢い)

(29) 2 1 2 房间比其它房间干净。(212の部屋は他の部屋よりきれいだ)

現代中国語では非定量形容詞が大半を占め、殆どの形容詞が参照物とともに現われ、潜在的な語用論的能力を持っていると述べている。

中国語の形容詞だけでなく、日本語の形容詞も同じような特徴を持っている。日本語の形容詞の意味解釈に関しては沖森卓也(1985: 36 - 37)によると、「塀が高い」の「高い」は「塀」に属する性質というのではなく、主体において意識された感覚である。つまり、知覚表象におけるその量を絶対評価的に「高い」と連合させるのではなく、各の主観性によって前もって措定されている、ある水準のようなものに照らし合わせて、更に言えば、その環境と相関して、所与の外延量を量的ばかりでなく、評価的に判断するのである。その意味で、「高い」は塀というものに属する性質であるというよりも、主体に属する解釈・評価であると言えるということである。つまり、沖森(1985)の論点をまとめると、形容詞の意味には、比較という操作が本質的に関わっていて、人間はある物について評価する時、評価するための基準が要るわけである。

ここで、日本語の例を一つ挙げる。

(30) 富士山は比叡山より高い。

において、富士山の高さは比叡山という具体的な比較の基準に照らして、「高い」と判断される。

(31) 比叡山は高い。

のように、比較ということがあらわになっていないが、何らかの潜在的な基準との比較の上での相対的な判断である。

3.2 「A+一点儿」についての機能分析

宮田一郎(1981a:10)は「热一点儿、～有一點儿热」の説明の中で、「热一点儿」について次のように説明している。

(32) 今天热一点儿。(今日はちょっと暑い)

「には比較の対象があり、……(中略)……比較の対象が省かれていても、話の場から、それを補うことができる。

(33) 今天比昨天热一点儿。(今日は昨日よりちょっと暑い)

「～一点儿」は多くの場合命令文になれる」と述べている。

(34)、(35)の例

(34) 快.....一点.....儿。(早く)

(35) 你讲得慢.....一点.....儿。(あなたはちょっとゆっくりめにしゃべってください)

は、命令・依頼表現として使われている。

しかし、なぜ「热一点儿」は比較するという意味を持つだろうか。

以上のいくつかの説をまとめると、次のようになる。

(36) 今天很热。(今日はとても暑い)

(37) 今天有点热。(今日はちょっと暑い)

の文は話し手が天気について主観的に描写、表現する時、心の中の基準を参照点とし、比較し、非明示的な比較文である。逆に次の文、

(38) 今天(比昨天)热一点儿。(今日は(昨日より)暑い)

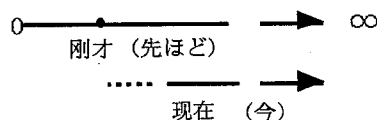
は比較を表す「比」を省略した比較文だということで、明示的な比較文だと言える。

形容詞の意味の背景には、ものごとの数量の、ゼロから無限大へ伸びる尺度を考えることができる¹³⁾。形容詞の比較文にもし、「一点儿」などの要素がなければ、その比較される量はどの辺までになるかは、確定できない。

(39) 他现在跑得比刚才快。(彼は今走っているのが先より早い)

という文は今先より早いということが分かったが、どのくらい早いかは量的に確定できない。図で表すと、次のようになる。

図<2-1>



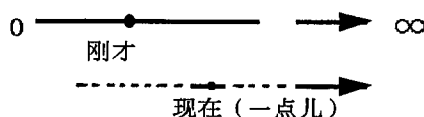
13) 形容詞そのものの自体は様々な場合を通じてある一定した条件持っているものもある。例えば、「快跑(早く走れ)」は人間が走るスピードの領域、境界はある幅を持って、一定し、ある程度の変動はあるけれども、無制限に変容するわけではない。しかし、相手に指示を出す時、「一点儿」などの要素がなければ、空間的量、動作の量が相対的に境界を持たない無限なものになる。

になる。

- (40) a 他现在跑得比刚才快得多。(彼は今走っているのが先ほどよりだいぶ早い)
b 他现在跑得比刚才快一点儿。(彼は今走っているのが先より少し早い)
c 他现在跑得比刚才快两倍。(彼は今走っているのが先より二倍早い)

例えば、bの文を図式にすれば、次のようになる。

図<2-2>



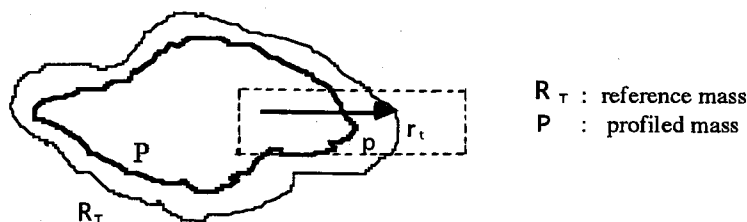
つまり、「得多」(～多い)、「一点儿」(少し)、「两倍」(二倍)などの要素によって、今は先よりどのくらい早いかは、把握することができるのである。

形容詞で空間的な量、動作に関係する量を相手に指示する時、「一点儿」などの要素によって、指示する内容が不明ではなく、相手が理解できるものになるのである。よって、相手に指示する内容を相手が分かるようにするために、「一点儿」などの要素は不可欠になる。

次は認知の観点から、「一点儿」の機能について、もう少し分析する。

人間の言語能力は広い意味で人間の認知能力の一部である。われわれの言語は認知能力の所産であるのだから、言語の本質を研究するには人間の認知能力を研究しなければならない。われわれは日常で、程度と量に関して述べる時、何らかの比較というメンタルプロセスがなければ、量が多い、少ない、程度がどれくらいであるなどの判断は不可能である。つまり、「程度性ということは、「比較」ということと深い関係がある」(西尾1972: 161)。Langacker (1991: 107-108)は英語の「most」について、次の図で説明している。

図<2-3>



例えば「most children」なら、 R_T である「children」のprofileされた部分 p が R_T と近接していることが表されている。

「A+一点儿」には比較というメンタルプロセスが含まれていると言える。もし文脈と発話背景がなければ、次の文は言えない。

(41) *今天热¹⁴。(今日は暑い)

なぜかという参照点がないため、その「熱」の程度を特定することができないからである。

(42) 今天热一点儿。(今日はちょっと暑い)

後ろに「一点儿」をつけることにより、昨日とか、一昨日とか、他の特定の日という参照点と比べて、今日はその特定の日より程度が「少し」上だという意味を表す。

命令文というのは話し手が聞き手に指示する内容が明確でなければならない。「形式上の形容詞の命令文」の場合、「一点儿」をつけると認知的なプロセスが働いていると言える。

(43) *跑快。(早く走れ)

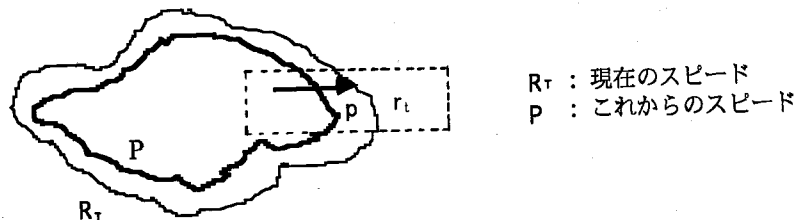
が言えないというのは、相手にどのくらい早く走ってもらうかの参照点がないため、今言っている「快」のスピードが確定できず、指示している内容が明確でないため、文の容認度が落ちるのである。

(44) 跑快一点儿。(ちょっと早く走れ)

が言えるというのは、認知的に今の走っている状態（参照点）と比較して、今よりこれからもう少し早く走ろうという意味を表すので、指示している内容が明示的になったのである。Langacker

(1991) の図でいうと、今のスピード R_t に対して、相手に指示するスピード P が比較され、「一点儿」によって指示する内容が相手理解できるものになったのである。

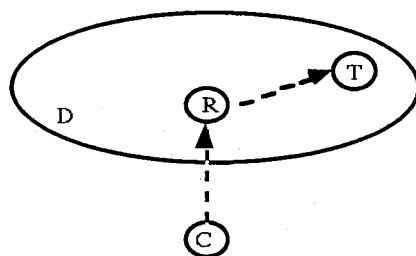
図<2-4>



同じ Langacker の理論であるが、ここで参照点の概念 (1993: 6) を取り上げる。

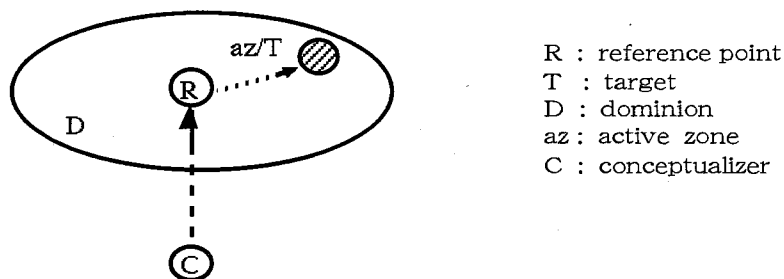
14) この文はもし対比という意味を表すなら、非文でなくなる。

図<2-5>



参照点は「認知的手掛かり」として target に mental contact を取るのが機能で、人間の基本的認知能力の一つを表しているのである。つまり (44) の例でいうと、今の「跑」の状態を言葉で表現しなくても、「一点儿」によって、今走っている状態を参照点だとすることが保証されたのである。「一点儿」によって参照点を認知的手掛かりとして、聞き手が話し手の指示を target へと心的アクセスすることができたのである。ここでの「一点儿」は target へのアクセスを保証する参照点マーカーなのである。そして、「形容詞＋一点儿」はその形容詞がどうかということではなく、活性化 (active zone)¹⁵⁾ された動作・行為の状態・様態などのことを言っているのである。

図<2-6>



「一点儿」が参照点マーカーだということは次の文からも証明することができる。例えば、慌てて走っていて、小石に躓き、転びそうな子供に対する母親の発話は、aのほうが自然である。

- (45) a 你慢着.....一点儿。(ちょっとゆっくりして)
b 你慢着。(ゆっくりして)

普段、自分のいうことをあまり聞いてくれない子供に、

- (46) a 你听着.....一点儿。(ちょっと聞いていてください)
b 你听着。(聞いていてください)

のような発話をするのである。(46)は動詞述語命令文で、「一点儿」がない場合 (b の文)、聞き

15) 名詞句によるプロフィールのうち、表された関係に直接関与していると思われる箇所を活性領域と言う (河上1996 : 138)。

手にこれからこういうことをしなさいという指示を出す時に使うが、「一点儿」がある場合（aの文）、子供が話を真面目に聞いていなかった時、出す命令である。つまり、相手にある動作の様態を開始するように命令する時は、比較する対象が要らず、「一点儿」がなくても命令できるが、もし、相手の進行している動作の様態に対して要求する場合なら、今の様態と比較してどうするかと「一点儿」が必要とされるのである。（45）は形容詞連用修飾語のある動詞述語命令文であるが、この場合は動詞が省略され、これも「一点儿」によって、気を付けていなかった子供に対して、命令を出しているのである。（45）の a は今走っている様態との比較として使われ、b は特に比較という意味はなく、これから注意するようという意味が込められている。

更に、荒川の次の例を引用する。

(47) 快去开门¹⁶⁾。快点儿！快！（早くドアを開けてください。早く、早く）

「快点儿」のほうの意味解釈については、荒川（1979:38）は「もう少しはやく」だと説明し、「「快点儿」と「快」とでは、語彙的な意味の差はなく、むしろ「語気のちがひ」（「快点儿」の方がやわらかい）としてとらえることができる」という。しかし、筆者の直感では、「快去开门」の方は、相手にこれから行動を開始するよう指示するのに対して、「快点儿」は相手がしている動作の最中に、今の動作の状態を参照点にし、指示を出すのである。つまり、両者の間は、語気の柔らかさという問題ではなく、指示を出す時、参照点があるかないかの違いであり、聞き手が動作・行為を実行する状況により、話し手が指示を出すのだと言える。

また、中川（1987:54）は次のような例を挙げる。「「快唱」は、「歌のテンポを速くしろ」という意味ではなく、「はやく歌いはじめろ」の意味である」。この例の解釈は以上の分析の結果と一致する。つまり、相手が動作を始める前に話し手が指示を出す時、行動を早く開始するよう催促する意味があるが、比較するという意味はない。これは、まさに荒川の「形容詞の命令文」の必要条件に対する反例になる。

話し手が聞き手に「何かについて伝える」時、伝えられる内容となるものは、できる限り特定化されているのが効率的である。「形式上の形容詞の命令文」では、話し手が相手に指示を特定するために、「一点儿」を用いられるのである。

日本語でも同じようなことが言える。例えば、相手が字を書いているのを見て、もうちょっと大きく書いてほしい時、

(48) *大きく！

とは言わずに、

16) この「快去开门」の「快」（早く）は副詞か、形容詞かは、論争があったが、荒川（1979:38）は単独で命令文になれる「快」を副詞、「一点儿」のついたのを「形容詞の命令文」だと考えている。本論文はやはり形容詞の後に「一点儿」がなくとも、その文を「形式上の形容詞の命令文」だと見ている。

(49) もうちょっと大きく。

と参照点マーカーの「もうちょっと」を入れることによって、相手に指示する内容を明確にするのである。

3.3 「形容詞の命令文」における「一点儿」の文法化

今までの議論をまとめると、中国語の「形式上の形容詞の命令文」の「一点儿」は動词的化させるものではなく、比較形容詞文と同じく、比較を表す参照点マーカーである。比較形容詞文の「一点儿」は形容詞のその様態の比較を表すのに対して、「形式上の形容詞の命令文」の「一点儿」は動作の様態の比較を表し、形容詞のない動詞述語命令文の動詞の後の「一点儿」¹⁷⁾は、動作の状態の比較を表すのである。

英語でもよく似たような表現がある。

(50) Please speak a little louder.

のように、参照点マーカー「a little」が必要である。

形容詞のある命令文の場合、動词的化させる傾向が英語に見られる。

(51) a* Quiet.

b Be quiet.

しかし、日本語の場合は、形容詞と形容動詞の後に動詞の省略が認められる。

(52) もう少し早く (書きなさい)。

(53) 静かに (してください)。

つまり、形容詞を動词的化させるために、英語は「Be」を使い、日本語と中国語は文脈と言語環境があれば、動詞の省略が認められているのである。その代りに、中国語は参照点マーカー「一点儿」を必要とするのに対して、日本語の形容詞は「もう少し」のような修飾語、形容動詞は「連用形」の「に」というようなマーカーが必要である。

以上の観察から言えることは、まず文法的と意味的に聞き手に指示する内容を確定するために、形容詞の後に量的な表現が必要とされる。また、語用論的な立場から言うと、相手に依頼をする時、負

17) 動詞の後に「一点儿」をつけるには、助動詞「着」が必要で、「～動詞+着+「一点儿」」の形を取る。動詞の後に名詞を修飾する「一点儿」と区別する。

担を最小限にするのが、ポライトネスである。「一点儿」は中国語で、最小限の量を表し、「形式上の形容詞の命令文」において、聞き手への依頼を軽減化する働きをしている。また、「一点儿」は確定した量ではなく、依頼文で相手に量から、最小限、漠然的に要求することで、相手に動作を実行してもらうこと自体に対して、最大の決定権を渡すことになる。

「形式上の形容詞の命令文」で使われる「一点儿」は文法化されたものとも言える。例えば、依頼文以外に、命令文でも「一点儿」は付けられるのである。

(54) 你给我放老实一点儿。(おとなしくしろ)

この場合の「一点儿」は意味機能に焦点を当てるといふより、「一点儿」の文法的な働きを重視するものである。

もし、日常生活の経験から、その形容詞の「到達点」(同じような議論は4.1.2.1を参照)のほうに焦点を当てやすい場合なら、話し手が聞き手に指示を出す時、「到達点」までするようにと意味的に明瞭な表現になるから、「一点儿」をつける必要がない。

(55) 你把话说清楚。(話を分かりやすく言いなさい)

この場合の「清楚」の「到達点」は相手が理解できるまでということである。もし、相手に「到達点」まで要求するという意味はなく、話している内容を「もう少し明確に話しなさい」という文脈であれば、「一点儿」が必要である。

(56) 你把话说清楚一点儿。(話をもう少し分かりやすく言いなさい)

以上から、「一点儿」は「形式上の形容詞の命令文」の必要条件ではなく、文法化されたもので、「一点儿」は付けられるかどうかは、形容詞の意味にもよるものだと言える。

§4 「形式上の形容詞の命令文」の形態的分類

中国語の「形式上の形容詞の命令文」は形態的に二分類できる。一つは形容詞が述語の状語(連用修飾語)、或いは補語として使われている場合(これを以下第一類と呼ぶ)と、もう一つは裸のままの「形式上の形容詞の命令文」(これを以下第二類と呼ぶ)である。次はこの二つの分類について、それぞれ分析する。

4.1 第一類 — 形容詞が述語の状語(連用修飾語)、補語として使われる場合

「形式上の形容詞の命令文」の第一分類においては、形態的に、形容詞が述語の状語（連用修飾語）、或いは補語として使われている二つのパターンがある。また、述語の状語（連用修飾語）、あるいは補語として使われている「形式上の形容詞の命令文」の中に、動詞述語が省略できるものと省略できないものがある。

しかし、日本語にはそのような形態的な分類がない。形容詞が連用形、すなわち「〜ク」をとり、動詞を修飾する構造しか持っていない。が、形容詞が表面的に動詞を修飾するが、機能的な働きは様々で、必ずしも意味的に動詞を修飾しているとは言えない。形容詞の修飾機能を考えるには、形容詞の種類と動詞の性質を考えなければならない。日本語の伝統的文法では、形容詞、形容動詞が連用形になった場合、副詞的修飾をしていると言われる。仁田（1983:18-19）は「副詞的修飾成分とは、動きや状態の実現のされ方に関わる諸相をあらわしたものである」と言う。また、「副詞成分に、結果の副詞、様態の副詞、評価づけの副詞、程度性の副詞、数量の副詞がある」と指摘する。本節は日本語の各形容詞の副詞的用法について分析するのではなく、中国語の「形式上の形容詞の命令文」における形容詞の用法を論じる同時に、日本語の形容詞の連用形と結果補語の機能についても簡単に考察する。

4.1.1 形容詞が連用修飾語である場合

形容詞が動詞の連用修飾語として働く時、次のような特徴を持つ。まず、賀阳（1996）は連用修飾語とは、普通動作の方式、情況などを表すが、性質形容詞が事物の属性、或いは品質を表しているために、連用修飾語になれず、なれるのはほんの一部だけであり、それが殆ど数量、時間、頻度、程度、範囲、情況、或いは方式などを表す形容詞だと言い、朱（1997:18）は連用修飾語が、「表示的是动作的方式或状态; 就性质来说, 这种状语是描写性的, 不是限制性的。」（動作の方式、或いは状態を表す。性質から言うと、このような状語は描写的で、限定的な意味を表すのではない）という。更に、刘月华（1996:172）は単音節の形容詞は普通単独で自由に状語（連用修飾語）になれないが、なれるのが「多（多い）、少（少ない）、早（早い）、晚（遅い）、迟（遅い）、快（速い）、慢（ゆっくり）、难（難しい）」しかない。二音節の形容詞も単独で状語になることは少ないと言っている。

日本語には、形容詞が動詞の連用修飾語として働く用法もある。日本語の形容詞が動詞を修飾するには、様々な機能を持つ。動詞の連用修飾語として、意味的に動詞を修飾する場合と、動詞の結果として働く場合もある。

形容詞の連用形という機能については、ここで、寺村秀夫（1983）の定義を引用する。寺村（1983:38）は連用修飾を全体的に「述語用言の表す動作・作用・変化・状態などを、時間的、空間的に特定したり、その程度、様態、理由、原因、条件を付け加えたりするものだ」と説明する。形容詞が動詞の連用形として使われる時、意味的に動詞を修飾していて、動作の様態、程度などを表すのである。

次は中国語と日本語を比較しながら、論を進めていきたい。

4.1.1.1 連用修飾語の形態的分類及び分析

中国語の命令・依頼表現において、形容詞が動詞の連用修飾語として使われる時、形態的に以下の

タイプがある。

- i. A+V
- ii. A+一点儿+ (V)
- iii. A+着+ (点儿)+ (V)
- iv. AA+地(的)+ (V)

次は、この四つのタイプについて検討してみる。

i. A+V

日常言語では、「A+V」の形で、使われるのは少ないようである。それは、単独の形容詞の内在的な性質と連用修飾語の性質が合わないからである。中国語の形容詞が単独で連用修飾語に立つ場合は制限が多い。形容詞は単独では描写性が欠如している。つまり、「事態を描く語としては不向きにできている」(中川1987:50)。しかし、連用修飾語というのは動作の有様を様々な側面から描くという意味で、描写性が強く要求されるが、形容詞自体にはその描写作用が弱く、動作の有様を修飾する語として、機能できていない。また、「連用は連用形という形において、動詞に寄り添い、動作の持つ時間的幅、過程といったものを分かち持つ」(中川1987:56)ので、「多(多い)、少(少ない)、早(早い)、晚(遅い)、迟(遅い)、快(速い)、慢(ゆっくり)、难(難しい)」のような形容詞しか使えないのである。

このタイプの命令文で、次のような文が挙げられる。

- (57) 慢走。(気をつけてください)
- (58) 轻放。(そっと、置きなさい)
- (59) 勤学苦练。(勤勉に学び、よく練習する)

「A+V」のような文は、意味的に簡潔であるが、文語である場合が多いという特徴があり、日常であまり使われず、「慢走」は挨拶表現、「轻放」は書面用語として使われている。

しかし、この用法において、形容詞「快」は日常用語で、よく使われる。

- (60) 快跑!(速く逃げて!)
- (61) 快唱!(速く歌って)

「快」はかなり自由に動詞の状語足りうるが、「慢」は結び付きが固定していて、「慢走」といっても、「慢爬」とはいえない(荒川1979:39)。また、朱(1956:95)は「快」+動詞に対応するものは、「慢」+動詞ではなく、むしろ「慢慢」(地)+動詞であろう。逆に「快快(地)」

は“慢慢（地）”ほど使われないが、これは、“快～”や“很快（地）～”がその部分を埋めているからである」という。以上の現象を説明するには、語用論の立場からしか説明ができない。つまり、緊急の時や、相手を催促する時は、時間を節約するため、如何に手短く、迅速に意思を相手に伝えることができるのか、とても重視されるので、言葉数が少ないほうの「快～」は「快快地～」より経済的だと考えられるからである。

ii. A+一点儿+(V)

「A+一点儿」は単独の形容詞より少し自由に動詞の連用修飾語になりうる。というのは、もともと描写作用が弱い形容詞が「A+一点儿」の形になると、比較するという機能を持ちながら、動作の有様を修飾・描写する機能が增強するからである。

(62) 快一点(走)。(早く行きなさい)

(63) 你今天晚一点回去可以吗?(今日ちょっと遅く帰ってもいいですか)

(64) 轻一点(放)。(そっとにして)

中国語の連用修飾語とは普通動作の方式、情況などを表すから、(62)は話し手が相手にその動作の方式について指示しているので、相手をせかす、催促する意味が読み取れる。ここで、もし文脈と発話の背景があれば、動詞「走」の省略が許される。

しかし、すべての形容詞の後に「一点儿」があれば、動詞の連用修飾語として使えるというわけではない。動作の有様を修飾・描写する機能を持たないと、使えない。

(65) *多一点儿吃。(多く食べてください)

「多一点儿」は普通「今天吃的比昨天多一点儿」のように比較した後の結果として使われているので、連用修飾の機能を持っていない。よって、(65)の文は非文である。

iii. A+着+点儿+(V)¹⁸⁾

iii.とii.の違いは「着」があることである。ここでの「着」の意味については、孟(1963)が「状態にいくぶん持続のニュアンスを帯びさせる」と説明する。

(66) 慢着一点, 别摔了。(もう少しゆっくり歩きなさい。転ばないように)

(67) 慢一点, 你急什么。(落ちついて、何を急ぐのだ)

18) 「A+着」の用法はとても限られている。挙げられるのは「慢着」だけであって、ここでは主に「A+着+点儿+(V)」について論じる。

(66) は相手が転ばないように、ゆっくり歩く状態を維持するという指示を出しているのである。
(67) は今だけゆっくりして、ずっとゆっくりする状態を維持する意味はない。

「A+着+点儿+(V)」の意味を説明するために、まず、「V+着+(点儿)」の意味から考えてみる。

動詞の「听着！」¹⁹⁾は話し手が聞き手に自分の話を聞いてもらおうと発話する場合と、自分の話中に耳を傾けてくれない聞き手に発話する場合と、意味的に二つの解釈ができる。「听着一点儿！」のほうは、先ほど自分の話を聞いたが、今聞いていない相手に対する発話である。つまり、「V+着+(点儿)」の一つの意味としては、相手の動作の始まりとは関係なく、相手の持続している動作の状態に対して、先ほどの状態と比較し、今のと違って、相手に注意するという意味を表す。

(68) 你注意听着点儿外面的动静。我去一下就来。(外の様子に気を付けて。すぐ行ってくる)

ここでの「听着一点儿」は、ずっと耳を傾けて外の音を聞くのではなく、間隔的にやればいいという意味も読み取れる。もし、「一点儿」がなければ、ずっとその状態を続けるという意味になる。

「A+着+点儿」は「A+点儿」とともに動詞の連用修飾語として使われるが、意味的な違いがある。つまり、「A+着+(点儿)」は相手の動作の進行中に話し手が命令するのに対し、「A+点儿」は相手が動作・行為進行中の場合でも、動作・行為の始めの時でも使われるという。

IV. AA+地(的)+(V)

中国語の形容詞は単独の場合、描写性に欠けているため、動詞の連用修飾語としての用法は少ないようである。逆に、中国語の形容詞の重ね型は、動作の有様を生き生きと描く機能を持つから、連用修飾語としてはよく使われている。呂(1980)は形容詞が動詞を修飾する時、いつも重ねの形で修飾すると言う。動詞の重ね型はその動詞の「量」(度合)を表すが、形容詞の重ねもその形容詞の量化的な表現だと考えられる。朱(1997:5)は重ねた形容詞の表している属性は一種の量、或いは話し

19) 従来、動詞や形容詞に後置する付属形式の「着」はアスペクト辞として扱われ、その文法的な意味は「動作が正に進行していることを表す」とか、「動作の(結果)持続を表す」などと記述されているが、説明できない文が指摘されている(村松1988)。ここでは、村松(1988:84)の「~着」に対する文法的な解釈の観点(「着」は話し手が、実或いは虚世界の事象、現象、心象を基準時点を含むある一定時間、等質的に連続する(した)出来事として認識していることを示す文法形式である)に賛同し、命令・依頼表現における「~着」の文法的意味を簡単に以下のようにまとめる。

「~着」は聞き手に一定時間内に、ある動作・行為を連続的に進行し、或いはその動作・行為の結果を一定時間内に保つことを要求する。聞き手に要求する動作・行為或いは、その動作・行為の結果は時間的に連続的で、一定の時間的幅を持った出来事ではない。

しかし、動詞と「着」との結合が有効であるかどうかは、動詞の語彙の意味だけを分析するでは不十分で、その時の文脈も合わせて考えないといけない。例えば、動詞「说」は単独の場合、「着」との結合が不適切である。

*说着!(しゃべっていて)

しかし、その「说」の動作に一定の時間の限定を与えると、容認度が高くなる。

你们先说着,我马上来。(先に話を続けてください。すぐ来ますから)

つまり、相手に無限にしゃべってもらうのではなく、今から「私」が来るまでの間に取り敢えずしゃべってくださいということを意味する。

手がこの属性に対する主観的評価と関連するという。形容詞は重ねの量化することによって、文法的により的確に相手に動作・行為の動きを伝えるのである。

ここではIV.の動詞が省略できる。荒川はこれを中心語としての動詞が脱落した状語用法だと考えている。荒川の文を二つ挙げる。

(69) 孩子, 好好的。(しっかりおし)

(70) 悄悄地! 可不能叫春河知道了, 他太累了。(そっと静かに。春河に気づかれてはいけ
ない。ひどく疲れてるんだから)

動詞の省略が可能なのは、その動詞が伝達において重要なものではないと荒川は考えているが、実際、動詞が重要かどうかというよりも、具体的な文脈において、話し手と聞き手にとって、もし了解済みのことであって、つまり旧情報であれば、省略が許されるのである。例えば、(69)の文は前後の文脈が分からなければ、「おとなしくしなさい」、「じっとしなさい」などの意味を表すこともできる。もし、話し手と聞き手が同じ現場における発話であれば、わざわざ動詞を改めて言う必要がない。

朱(1997:37)は形容詞の完全重ね型²⁰⁾は連用修飾語や補語として使われる時、加重、強調の意味を持っているという。形容詞の重ね型の意味はアイコン性の原則(他の条件がすべて同じならば、話し手がメッセージの様相を模倣するようにテキストを作成するよう誘うというもの)から説明でき、

「AA+地(的)」をアイコン性の高い表現として見ることができる。形容詞の反復性と意味の強さの間にアイコン性的な同型性が認められ、「表現効果のために反復し、反復による強調が聞き手を驚かしたり、印象づけたり、あるいはその興味を書き立てるといような何らかの修辭的価値を持つのである」(Leech 1983)。以上の文は何れも重ねた形容詞が動作・行為の動きを強調し、生き生きとした効果を生み出すので、動詞の連用修飾語として適するのである。

4.1.1.2 日本語の形容詞の連用修飾語との比較

以上の分析で見たように、中国語の形容詞自体は描写性を欠くため、連用修飾語になるにはいろいろな語彙的・形態的な制限があるが、日本語の形容詞は中国語ほど厳しくないようである。

命令・依頼表現における形容詞が、動詞の連用修飾語であるかどうかを判断するには、形態的に次のテストによって測定することができる。

(71) N+形容詞の連用形+動詞の命令形 → N+ノ+動詞の連用形+カタ+ヲ+形容詞の連用形+シテクダサイ²¹⁾

次は例文で検証すると、

20) 完全な重ね型は朱(1997:3)の説明によると、単音節の形容詞AはAAのように、二音節のABはAABBのように重ねることである。例えば、小(小さい)→小小儿、老实(おとなしい)→老老实实。

(72) 息を大きく吸ってください。→ 息ノ吸いカタヲ大きくシテクダサイ。

というように言い替えることができる。

上記の、「N+ノ+動詞の連用形+カタ+ヲ+形容詞の連用形+シテクダサイ」という形に変形された文が自然な文である場合、その基の文の形容詞が連用修飾語として、動詞を修飾することになると考えられる。つまり、その形容詞が表面的にも、意味的にも動詞を修飾することになるのである。

しかし、同じ形容詞でも動詞との組み合わせにより連用修飾語になれないものがある。例えば(73)の文。

(73) セーターを大きく編んでください。→ *セーターノ編みカタヲ大きくシテクダサイ。

(74) 服をきれいに洗ってください。→ *服ノ洗いカタヲきれいにシテクダサイ。

上の二つの形容詞はテストに合格できなかったのは、その形容詞は動詞の状態・様態を修飾していないからである。

以上の比較を通して、形容詞の連用修飾語になれるかどうかは、中国語は形容詞の語彙的、形態的から判断することができるが、日本語は主に形容詞と動詞の組み合わせの機能から判断するのである。だが、中国語にしても、日本語にしても、動作・行為の状態・様態を修飾すれば、連用修飾語であるところには同じである。

4.1.2 形容詞が動詞の補語である場合

補語は動詞または形容詞の後に置かれ、主に動詞または形容詞に対して補充説明を行う成分である。補語は中心語である動詞或いは形容詞の結果・行為の量（洗干净（きれいに洗う）、去一趟（一回行く））と、性状の程度（好得很（多いによい）、长多了（多いに長い））を表す。構造上、意味上の特徴に基づき、補語は次の六種類に分けられる。

結果補語

方向補語

可能補語

様態補語

数量補語

介詞フレーズ補語

本節では、結果補語と様態補語の用法、分析に絞る。

日本語にも結果補語があるが、「書き終わる」、「取り出す」のように、動詞で補語を表すのが殆どである。構文的には、日本語の形容詞は連用にのみ用いられ、中国語のように動詞の後につき、補

21) このテストは、次のロザリンド・ソーントン (1983: 65) が形容詞が動詞の連用修飾として使われるかどうかを判断するためのテストを参考にしたものである。

(i.) N+形容詞の連用形+動詞 → N+ノ+動詞の連用形+カタ+ガ+形容詞

(ii.) 形容詞の連用形+動詞 (句) の連用形+N → N+ノ+動詞の連用形+カタ+ガ+形容詞

語として使われる用法は存在しないが、意味から考えれば、動詞の結果を表す用法もあるのである。

日本語の形容詞が命令・依頼表現において、その連用形が動詞を修飾する時、動詞の結果補語であるかどうかは、意味から判断しなければならない。日本語の結果副詞については、仁田(1983:19)は、「動きが成り立つにあたっての動きのあり方を表したあり方の副詞の一つに、結果の副詞がある」と言う。また、西尾(1972)はものの属性を表す形容詞は連用形では、動作の結果の状態を表すことが多いと述べている。

繆锦安(1990)は助動詞「得」があるかどうかによって、中国語の補語を、二分類した。「得」のない補語は简单式補語で、「得」のある補語は複雑式補語だという。ここでは、前者のことを結果補語、後者のことを様態補語²²⁾だと決める。次は、繆の分類に従い、形容詞を補語に持つ文の命令文を分類し、考えてみる。

4.1.2.1 結果補語(简单式補語)について

荒川(1979:41)は、形容詞を結果補語にもつ文の命令文を五つのタイプに分類している。

- (a) V+A+了 (b) VV+A (c) V+A
- (d) V+A+ (一点儿) (e) 放+A+一点儿

形態的に(d)と(e)はよく似ていて、便宜上(c)、(d)、(e)を一つのタイプにまとめ²³⁾、(b)は標準的な言い方ではないため、ここから外すことにする²⁴⁾。そうすると、二種類にまとめることができる。ここでは、荒川の研究成果を踏まえた上で、次の二種類について、考察を進めてゆく。

a. V+A+ (一点儿)

b. V+A+ 了

22) 荒川(1979:42)はこの類を程度補語と名付けた。

23) 「放」は機能的に普通の動詞として使う場合、

- (1) 把绳子放长一点儿。(縄を長く緩めてください)

と

- (2) 放老实一点儿。(おとなしくしなさい)

のように人間の性格・性質に関して使う場合と、二つあると考えられる。でも、動詞であることによって、(d)と同じ類だと見る。

24) 「VV+A (AB)」の用例は次のようなものがある。

- (1) 你行行好, 就饶了我这一次吧。(勘弁してください。今回だけ見逃して)
- (2) 洗洗干净。(きれいきれいに洗ってください)

この形式の例文は少ないようであるが、(1)の言い方は普通で、(2)の言い方はChao(1968:439)の指摘によれば、これは標準的な言い方ではなく、方言だという。それで、もし(1)の「好」が形容詞であれば、到達点を表す形容詞だと推測できる。そうすると、もし、動詞「行」が重ねられた後に「到達点」を表す「好」がつくことになったら、文法的に矛盾することになる(王1997を参照)。でも、実際、ここの「好」は形容詞ではなく、「做好事」(『現代漢語規範詞典』)の意味として使われている。つまり「好」は補語ではなく、動詞「行」の目的語である。そこで、結論としては中国語の標準語には「VV+A (AB)」類の「形式上の形容詞の命令文」はないことが言える。

まず、aについて考えてみる。

a. V+A+ (一点儿)

ここでのa. は荒川の(c)タイプに当たるが、荒川の例でいうと、

(75) 大家坐好。(みんなちゃんと腰かけて)

(76) 同志，你说清楚。(さあ、はっきりいって)

の「好」と「清楚」は結果補語を表し、ともに「到達点」を示している(荒川1979:41)。

意味的に「到達点」を示す形容詞は、完全的な度合を表しているため、少量を表す「一点儿」と共起できない。「一点儿」がつけられる形容詞は、その内部に段階性が存在しているのが認められ、話し手が聞き手に今の程度、状態よりもう少し変更するようという意味が込められている。

動詞の重ね型も同じようなことが言える。

(77) a 我送你回家。(家まで送りましょう)

b* 我送送你回家。(家まで送りに送りましょう)

つまり、「到達点」を示す「回家」があれば、動詞を量的な表現として重ねることができないのである(王1997)。

荒川(1979:42)は「「清楚」については「V 清楚点儿」の形もみられ、「说清楚」が可能なのは「清楚」が二音節であることと何らかの関係があると思われる」と述べている。実はそれは「清楚」が語彙的に二つの属性を持つからである。形容詞「好」も同じく「到達点」属性と、程度の段階性を表す属性と両方を持っているため、「一点儿」をつけることもできるし、つけないこともできる。

(78) 你把字写好.....一点儿。(字をもうちょっときれいに書きなさい)

(79) 请你把字再写清楚.....一点儿。(字をもうちょっとはっきり書きなさい)

(78)の「好」(よい)、(79)の「清楚」(はっきりする)は段階性を表す属性を持っているため、「一点儿」をつけられるが、(75)、(76)のように「到達点」表す属性を持っている時、「一点儿」をつけない。

形容詞の後に「一点儿」がつけられるかどうかということに関しては、その形容詞には複数の段階の有無という要因が関わっていて、「一点儿」がつけられる形容詞は程度のスケールに基づく複数の段階が想定できる。

形容詞がどちらの属性を持つかは、動詞との組み合わせにも関係する。例えば、形容詞「好」は動

詞「坐」と一緒であれば、「到達点」の属性しか持たない。

(80) ?大家坐好一点儿。²⁵⁾ (みんなちょっとちゃんと腰かけて)

しかし、「書く」という動詞と組み合わせるなら、きれいな字とは何か、決まっている基準がなく、それを判断するには、個人差が認められる。一方姿勢よく「坐る」と言ったら、姿勢がいいかどうかは、判断する基準が挙げられる。

もし、述語動詞が目的語をとり、さらに形容詞(フレーズ)や動詞(フレーズ)からなる、目的語の様態を表す様態補語を伴う場合(但し述語動詞と様態補語の間に因果関係が存在しない場合)、

「把」構文が用いられる²⁶⁾(刘、潘、故1996: 訳書627ページ)。

(81) a 把衣裳拧干。(服の水を絞って)

b 把衣裳拧干一点儿。(服の水をもうちょっと絞って)

(82) a 把这堵墙涂黑。(この壁を黒く塗って)

b 把这堵墙涂黑一点儿。(この壁をもうちょっと黒く塗って)

(83) a 把老虎打死。(虎を殺して)

b* 把老虎打死一点儿。(虎をもうちょっと殺して)

(84) a 把衬衫撕碎。(シャツを破って)

b 把衬衫撕碎一点儿。(シャツをもうちょっと破って)

(85) a 把眼睛睁大。(目を大きく開けて)

b 把眼睛睁大一点儿。(目をもうちょっと大きく開けて)

(86) a* 把这条马路锄宽。(この通りを広く鋤いて)

b 把这条马路锄宽一点儿。(この通りをもうちょっと広く鋤いて)

ここのaの「干(干す)、黒(黒い)、死(死ぬ)、碎(砕く)、大(大きい)」という形容詞は前の動詞の結果を表し、動作、状態の「到達点」を表すことができる。また、「干、黒、碎」は段階性を表すこともできるから、今の様態を参照にし、それと比較する場合なら、bの言い方も可能である。しかし、「死」は「到達点」しか持っていないから、bの言い方はできない。(85)のaの「大」は「到達点」を表すことができないが、「目を大きく開く」というイベントに限界性があり、「到達点」を持つようになったのである。勿論「大」というスケールには段階性が存在するから、bの言い方も可能である。(86)の「宽」には境界線がないため、「鋤」の結果としては意味的に明瞭ではないから、言わない²⁷⁾。

25) 特殊な文脈と声調があれば、この文は言える場合もあるが、本論文では普通の用法としては認めない。

26) 「把」構文とは、「把」により動詞の前に出された名詞に、なんらかの処置を加えるという。名詞は動詞の表す動作の対象、また、「把」により動詞の前に出された名詞に、なんらかの状況や結果を表す別の動詞や形容詞を伴っている(『中日辞典』小学館)。「把」構文は主にその名詞に対するある結果を強調するため、形容詞による結果構文と適合する。

以上をまとめると、「到達点」を持つ形容詞なら、参照点マーカー「一点儿」が要らず、段階性の属性を持つ形容詞なら、「一点儿」がなければ、相手に指示する内容が不明瞭になることが分かった。形容詞が「到達点」の属性を持つか、段階性の属性を持つかは、動詞との組み合わせにも関係する。

b. V+A+了

b.は荒川の(a)タイプに当たるが、まず荒川の例文から見る。

(87) a 洗干净了。(きれいに洗ってね)

b 洗干净。(きれいに洗って)

荒川 (1979: 41) は、a. は動補構造の語組だけでは完結した表現になりにくいので、これらの主文の述語に用いられた場合は更に「了」を伴うのが普通だと言っている。しかし、荒川の挙げている例は動詞の後の形容詞がすべて「到達点」を示していて、動補構造の語組だけでも完結した表現になれるのである。それで「了」がなくても、bの言い方ができる。ここでの「了」は、実は完結を表す意味ではない。形容詞の後に「了」がつく場合、話し手の再確認、強調する意味を表し、聞き手との共有知識を背景に話し手が聞き手にある事態の変化を要求するのである²⁸⁾。

(88) 你把话说清楚(了)，到底是谁错了。(一体誰が間違ったのか、話をはっきりさせよう)

(89) 坐好(了)，我要开船了。(しっかりすわってね、船を出すぞ)

勿論ここでの「了」は省略ができるが、必ずしも Chao (1968: 439) の言うように「了」が必要だというわけではない。

以上、話し手が相手に「到達点」まで結果を要求するなら、必ずしも「了」が必要とすることではないことが分かった。ここでは、「了」が構文的に必須的な要素ではないことが言える。

4.1.2.2 様態補語 (複雑式補語)

複雑式補語 (様態補語) とは動詞と形容詞の間に「得」のあるもので、基本的には二種類がある。

i. V+得+A+一点儿

27) もし、文脈によって、道路をどこまで広くするかは暗黙の境界線があれば、aの言い方はする。

28) 「了」のある文というのは話し手が過去にあることを認識し、その過去に対して、今はどうするかという意味を表す。

a 这里可以抽烟吗？(ここは煙草を吸ってもいいですか)

b 这里可以抽烟了吗？(ここはもう煙草を吸ってもいいですか)

aはただ現在の状況についての質問で、bは昔はだめだったという背景に、今はどうだという質問である。聞き手に命令する時、話し手と聞き手にとって、ともに共有知識であれば、昔はべつの状態だが、今はこういう状態でいてほしいという意味を相手に伝えるのである。

- (90) 请你把问题提得具体一点儿。(どうかもう少し問題を具体的に出してくれませんか)

袁(1993:149)は具体的な場があり、もし動詞の表している動作が話し手と聞き手両方がともに分かっていることなら、その動詞と「得」を省略できると言っている。

- (91) a 走得快一点儿。(早く歩いて)

- b 快一点儿。(早く歩いて)

「V+得+A+一点儿」のような構文では、後半の「A+一点儿」は前の動詞の補語として解釈され、「把」構文と共起しやすい。

また、意味から考えれば、「V+得+A+一点儿」は、その動詞の様態を強調する意味を持っているため、相手の行なったことに対して、新に要求するという意味合いを表すことができる。例えば、子供が書いた字を見て、

- (92) 把字写得大一点儿。(字を大きく書いてください)

というように注意する時に使う。

動詞の後の補語は普通様態・程度を表し、その様態・程度には最大限(妙极了(すごくすばらしい)、好极了(すごくいい))と最小限の(高一点儿(ちょっと高く)、轻一点儿(ちょっと軽く))二種類がある(袁1993:148)。相手に命令する時、最大限の用法は命令文と共起できない。

- (93) *做得妙极了²⁹⁾。(すごくよくやりなさい)

なぜ最大限の程度は命令文と共起できないか、袁は説明していない。ここでの「妙极了」は話し手は聞き手が行なった後の動作についての評価を下した表現であり、過ぎたことを聞き手に命令することはできないので、命令文との共起は認められない。

相手に最大限に要求する場合は次のような言い方をする。

ii. V+得+AA的

- (94) 这回可得瞅好了, 瞄得准准的。(今度はしっかり見て、正確にねらうんだ)

- (95) 给我洗得干干净净的。(きれいに洗ってくれ)

- (96) 给我站得直直的。(真直ぐ立ってください)

29) 命令文ではなく、叙述文の場合なら言う。

この場合比較する意味がなく、最大の様態までしようと相手に要求するので、語用論の立場からいうと相手にかける負担が大きいため、命令文として使われている。構文的には、命令を表す「给我～」と共起しやすい（(95)、(96)の例）。

4.1.2.3 「V+A」と「V+得+A」の違いについて

この二つの構文はともに動詞述語の補語であるが、意味と文法的な働きが違う。その違いについて、吳之翰（1966:124）は「A+V」は一つのまとまりとして、その形容詞が動詞の一部で、状態或いは性質の変化を表すのに対し、「V+得+A」は二つの部分から構成され、動詞の結果を表す。前者は叙述を表し、命令文としても使われる。後者は話し手の判断を表し、命令文としては使えないと言う。吳が挙げている例は次である。

(97) 把水烧热。（水を熱くまで沸かしてください）

(98) 水烧得热。（水を熱く沸かした）

(97)は「沸かす」という動作を伴い、水の温度も上昇し、熱くない状態から熱くなるまで変化することを意味する。(98)は水を沸かした結果、水が熱くなったということを表す。つまり、「V+A」は前の動詞の結果を表すが、その結果は動作が行った後の結果ではなく、これから相手に変化させる結果である。「V+得+A」の中の形容詞も結果を表すが、その結果は動作を行い、物事の状態が変化した後の結果を表すため、命令文としては使えない。しかし、(91) aのような文であれば、命令文としては使える。それは「一点儿」という参照点マーカがあることにより、状態が変化した後の結果の意味から、これから聞き手に要求する程度・度合の意味に変わったと考えられる。次の文も同じである。

(99) 她把衣服洗得干干净净的。（彼女は服をきれいに洗った）

(100) 你把衣服洗得干干净净的。（あなたは服をきれいに洗いなさい）

(99)の文の形容詞は「洗」の動作の状態・結果を表し、叙述として使われ、(100)の文は命令文として使われている。二つの文の間は、ただ人称だけが違っているが、文法的な意味は全然違う。つまり、(99)の形容詞は動作の状態・結果を強調するのに対して、(100)は聞き手に要求する程度、度合の意味として使われ、命令文である。

しかし、次の例のように、もし、補語としての形容詞が量化（形容詞の後に「一点儿」をつけるか、形容詞を重ねかにする）されなかったら、叙述的な意味になり、命令文としての読みはしない。形容詞を量化することによって、話し手が指示する内容が明確になり、量化するとしての読みが強くなるのである。

(101) 你把衣服洗得（很）干净。（あなたは洗った服はきれいだ）

4.1.2.4 日本語の結果補語について

形容詞による結果補語とは動作が完了後の対象物のあり方を表すと解釈できる。ロザリンド・ソーントンは、日本語の形容詞の連用形による結果補語の特徴を形態的に解明しようとする。ソーントン(1983: 67-68)は文における形容詞がものの変化による結果の状態を表すかどうかをテストするために、次の変形のテストを用いた。

動詞が他動詞の場合

XガYヲ+形容詞の連用形+動詞 → XガYヲ動詞(テ)+ソレガ+形容詞の連用形+ナッタ。

動詞が自動詞である場合

Yガ+形容詞の連用形+動詞 → Yガ動詞(テ)+ソレガ+形容詞の連用形+ナッタ。

形容詞の連用形+動詞連体形+Y → Yガ+動詞のテ形+ソレガ+形容詞の連用形+ナッタ。

ロザリンド・ソーントンは、以上のテストにより変形した文が、日本語として自然な場合、その形容詞が「変質」した結果の状態を表すと考えるのである。

それでは、命令・依頼表現における形容詞の連用形が結果を表す時、どんな構文的な特徴を持っているだろうか。次のようなテストによって検証する。

(102) XガYヲ+形容詞の連用形+動詞の命令形 → XガYヲ動詞(テ)+ソレガ+形容詞の連用形+ナッタ。

(103) ズボンをきれいに洗ってください。 → ズボンを洗って、それがきれいになった。

もし、命令・依頼表現の中の形容詞が、以上のようなテストに合格したら、その形容詞は動詞の結果補語として使われると考えられる。

意味から考えれば、結果の機能を持つ形容詞の連用形は、その形容詞がものの属性を表すのが殆どである。

4.1.3 形容詞が連用修飾語である場合と結果補語である場合の違いについて

形容詞が連用修飾語になる時と結果補語になる時は、どのような違いがあるかについて考えてみよう。

人間は発話時点をはっきりさせて、その前後にいくつかのコトを並べて見せるという文法的な表現

技法を発達させた。いくつかのコトの表現を順序よく並べて、その順序でコトが起こったことを示すのである。

具体的な分析に入る前に、ここでは暫定的に次のような制約としておく。

- (104) 言葉の配置は時間の前後順序と関係する。時間的に動作の状態・様態は、動作・行為の先に現われるか、もしくは同時或いは後に現われるかである。結果補語は勿論動作・行為が終わった後に現われるものであり、動詞の後に配置するのが、自然である。

実際の談話例をもとに、上の主張の正当性を確認してみよう。

吳 (1966: 123) は、単音節の形容詞が動詞の補語として使われる場合は動詞を修飾する場合より容易であると述べている。吳は次のような例を挙げているが、説明を行っていない。

- (105) a 请你走近一点儿。(近くまで歩いて)
b* 请你近一点儿走。(近くように歩いて)

(105) の a は「走」(歩く)の動作が終わった後で、「近」(近い)かどうかという結果が分かるので、形容詞「近一点儿」(少し近く)は動詞の後に配置すべきである。そして、「近一点儿」は動作「走」の状態・様態として表せないのが、bのような言い方はできない。つまり、bの「近一点儿」は動詞の結果としては使えるが、動詞を修飾する状態としては使えない。

- (106) a 走快点儿! (もう少し早く歩きなさい)
b 快点儿走! (はやくいらっしゃい)
(107) 快点儿坐! (はやく座りなさい)
(108) a* 把衣服干净洗。(服をきれいに洗いなさい)
b 把衣服洗干净。(服をきれいに洗いなさい)

宮田 (1981b: 22) は (106) a の「走快点儿」(速度を早くさせる)は「走得快点儿」といってもいい。また、bは相手をせかす表現(早く出かけなさい)であるが、ときには「早く歩きなさい」と、「速度を早くさせる」の意味として用いられることもある。しかし、「来」、「去」或いは「坐」のような、一回でその動作がおわる動詞の場合は、「せかす」の意味しかならず、(107)は、すぐ腰をおろすよう促しているもので、坐るスピードを言っているのではない。逆に、(106)のaは「速度を早くさせる」の意味にしかないという。

(106) の a の発話は主に相手が歩いているのを見て、その結果に対して、相手に言い出す要求である。b は相手が歩く前に、歩くの様態について聞き手に要求するという意味を表すこともできるし、「歩く」という意味の代わりに、派生的に相手をせかすという意味を表すこともできる³⁰⁾。しかし、

(108) の a の形容詞「干浄」は、動作が終わった後に現われる結果であり、動作「洗う」の状態ではないため、動詞の後につくのが適格である。

「形式上の形容詞の命令文」の中の形容詞が状語になる時と補語になる時、どういう違いがあるか、どんな場合状語になれるのか、どんな場合補語になれるのかは、形容詞自身の問題だけではなく、動詞とも密接な関係があると思われる。形容詞が動詞の補語として使われる時、形容詞が動作の変化した結果として、新たな「モノの属性」を相手に要求する時、意味的な条件としては、動詞句で直接叙述される動作の一部として、属性の選択が行われることである。例えば、同じ状語で、同じ形容詞なのに動詞が違うと言える文と言えない文がある。

(109) *请你坐慢一点儿。(ゆっくり座って)

(110) 请你讲慢一点儿。(ゆっくり話して)

瞬間動詞「坐」(座る)の場合はスピードが早いか遅いかという属性は含まないため、このような属性は動詞の結果として、許容度が低い。これに対して、(110)の「讲」(話す)という動作には「早い、ゆっくり」という属性が含まれているから、許容されるのである。

4.2 第二類 — 裸の形容詞による命令文の場合

『日本語表現文献』(1983:4)は、人間の表現意図とは何かという問題について、次のように述べている。「表現意図とは、言語主体が文全体にこめるところの、いわゆる命令、質問、叙述、応答などの内容のことである。表現意図に、臨時的表現意図と一般的表現意図とを認めることができる。……(中略)……。一般的表現意図、すなわち、ことばの形式との対応が社会的習慣としてみとめられたものである」という。

「臨時表現意図」の場としては、発話状態の I の(i)(2.3.2を参照, p.163)に当たる。聞き手がある動作・行為を遂行する途中、話し手からその動作・行為に対する状態を指示する場合に、裸の形容詞を使う命令文が見られる。このことに関して、Chao (1968:669)は次のように言っている。

If someone is adjusting a picture and someone else says 「高！」Gau ! 'High !' it is ambiguous, meaning either (1) 「高点儿！」Gau. deal ! ' (Make it) higher !' or (2) 「高了」. Gau le. 'It is high now (high enough or too high).' 「誰かが絵をかけようとしている時、他の誰かが「高！」といったとすると、それは、(1)「高点儿！」(高くしろ)、或いは(2)「高了」(高すぎる)の両義性を持つ」ということである。

また、緊急事態の時、裸の形容詞を使って、命令表現を表す場合も、ここの「臨時表現意図」に当たると考えられる。

30) 動詞の連用修飾語と結果補語の両方になれるのは、「快(速い)、慢(ゆっくり)、早(早い)、晚(遅い)、多(多い)、少(少ない)」のような一音節の形容詞である。

(111) 烫! (熱い!)

(112) 小心! (気をつけて!)

しかし、動作・行為遂行中の発話にしても、緊急事態の場合の発話にしても、「場」に対する依存度が高く、強い現場依存性を持つという特徴がある。次は動作・行為遂行中における「形式上の形容詞の命令文」と緊急事態での「形式上の形容詞の命令文」について観察する。

4.2.1 動作・行為遂行中の「形式上の形容詞の命令文」

動作・行為遂行中の場合、その動作・行為の状態について指示する例としては、以下のようなものがある。

例えば、踊りを踊っている人に、テンポをゆっくりするよう指示する時、

(113) 慢! 慢! (ゆっくり! ゆっくり!)

というような発話ができる。また、走っている人に、もっと早く走れと応援する時、

(114) 快! 快! (早く! 早く!)

のような言い方も可能である。しかし、こういう用法は、日常では形容詞「快」、「慢」ぐらいであって、実に限られている。

4.2.1.1 「慢」(ゆっくり)、「快」(早い)

荒川(1979)、袁(1993:134)には形容詞が単独で命令文になれないという指摘がある。荒川は

(115) 慢! (待て!)

を副詞、袁は動詞だと見ている。また、

(116) 小心! (気をつけて)

(117) 安静! (静かに)

のような二音節形容詞について、荒川は「一点儿」なしで命令文になるのだからこれを動詞だと見ている。

ここで、「快、慢」などのような形容詞の品詞について議論するつもりはないが、少なくとも形容詞が裸のままで使われている場合の意味はもとの形容詞の意味と違うのは確かである。例えば、

(115) の「慢！」は本来の「遅い、のろい、ゆっくり」という意味がなくなり、「待て！」という相手の動作・行動を止める意味として使われている。そして、「慢」は語用論的に動詞述語命令文とはまた違っている。例えば、袁 (1993 : 159 - 160) は「慢！」について、その「慢」の後に普通相手の行動を止めたり、相手の提案を断わったりする原因・理由などを説明する文がついてしていると指摘する。

(118) a 我去把他叫来。(私は彼を呼んできます)

b 慢！你先去把事情了解清楚了再做出决定。(待て！事情をよく聞いてから決めなさい)

「快」も単独で使われる時、「早い」という意味を表すのではなく、「急いで」という催促する意味を表す。「快」の後に催促する理由を述べるのが普通である。

(119) 快！要不来不及了。(急いで、間に合わないよ)

中国語の形容詞は裸のままでは述語として使えない(対比の場合を除く)。聞き手に命令、指示する時、裸の形容詞が使えるというのは他に理由があると考えられ、少なくとも形容詞の意味範疇と性質から外れているのが確かである。

4.2.1.2 「快着！」、「慢着！」

袁 (1993 : 160 - 162) は、「快着！慢着！」は単独と反復で使われる二つの用法を持っていると主張する。まず、「快着！」は単独で使われる時、催促を表し、相手にある動作をし始めるよう要求する。反復として使われる時も催促の意味を表すが、相手にある動作のスピードを上げるのを要求するということである。

(120) 快着！都九点了还不动身。(早く、もうすぐ九時なのに、まだ行かないの)

(121) 快着！快着！一定要在下午五点钟以前把设计图纸搞出来。(早く早く、必ず午後五時までに設計図を仕上げなければ)

「慢着！」は単独として使われる時は、相手の行動を制止する意味があり、反復の形で使われる時は、相手にある動作をゆっくりするよう勧告、要求する意味を表すと言う。

(122) a 我马上去南京。(今すぐ南京へ行きます)

b 慢着！等他们来了电报再走。(待って、彼らの電報が来たら行きなさい)

(123) 慢着！慢着！地上滑得很呢。(気をつけて気をつけて、地面は滑りますよ)

「慢！」、「慢着！」は、動詞述語命令文の省略した形だとは考えにくい、袁 (1993) の言うよ

うに、場合によって後にその理由、事情を説明する必要がある。つまりここでは形容詞は本来の意味を失い、動詞的な働きを持つようになったのである。

日本語の形容詞「遅い、のろい」には、中国語の「慢!」、「慢着!」による命令文のような用法がない。つまり、中国語の「慢!」、「慢着!」の働きは、日本語の動詞に当たるのである。

動作・行為遂行中の形容詞による命令文は、日本語の場合は中国語と違うメカニズムを見せる。例えば、誰かが絵をかけようとする時、高くかけるようにと表現する場合、日本語は、

(124) 高く!

という表現をし、場所が高すぎるという意味を表す時は、

(125) 高い!

と言うのである。つまり、現場指示の場合、他者に働きかけようとする時は、形容詞の連用形で、形容詞の終止形は、描写的な働きを持つと同時に時には相手に働きかける力も持つのである。

4.2.2 緊急事態における「形式上の形容詞の命令文」

4.2.2.1 緊急事態における発話の特徴

人間は、「人の命令に盲目的に従うということはない。……(中略)……日常的ではない、かなり新しい考え方が提示された場合、私たちの頭脳はそれを慎重にチェックする。珍しいものに対しての反応は遅れるし、その時どきに適切な手段をとって、入ってきた情報やアイデアを“まとも”かどうか検証しようとする。」(Howell, 久米1992: 172)。つまり、人間は自分が納得したり、理解したりした場合に限り、すぐに行動に移すことが可能である。しかし、緊急事態の場合、どのように早く聞き手に行動に移してもらうかは重要なポイントである。聞き手にすぐ頭の中で浮かべられるイメージを提示すれば、聞き手が判断すると同時に行動に移すことが可能である。そうでなければ、聞き手が提供された情報をチェックし、理解する過程が必要で、案外時間がかかることになる。

例えば、

(126) 火事だ!

(127) 地震だ!

のような場合は、日常的な自然現象であり、どういう処置を取るかは、一般的知識として誰でも分かっているのだから、聞き手に命令する時、「逃げろ」という動作を指示するより、具体的な状況を提示したほうが、イメージと結び付きやすいし、効率的である。

同じように、熱い鍋に手で触ろうとする子供に対して、お母さんが

(128) 触るな！

と言ったら、好奇心の強い子供なら、更に手を出したくなるのである。それは、禁断の実はかえって食べてみたい衝動に駆られることがあるように、否定的な表現は意図したものと違って、逆効果になることがあるのである。聞き手に即座に判断してもらう時、否定的表現よりは、もっと理解しやすい表現のほうが効果的である。もし、

(129) 熱いよ！

と注意したら、その危険性を理解し、ついに手を出さない行動になるのだと考えられる。

逆に日常的でない現象は、聞き手に動作を要求するのが普通のようなのである。しかし、聞き手が自分の頭の中でまだ理解していない動作に対しては、やはりすぐに行動に移すのではなく、猶予するのがしばしばである。映画でもよく見られるシーンの一つであるが、爆弾を仕掛けられた車に座っている人に

(130) 逃げろ！

と叫んでいても、中にいた人はすぐ逃げ出すのではなくて、困惑した瞬間がある。

以上の説明の他に、もう一つ考えられる理由がある。というのは、緊急事態の時、経済的な面から考えると言葉が短ければ短いほど、効率性が高い。先の爆弾の話で、

(131) 車の中に爆弾がある！

のように状況提示すれば、理解しやすいが、言葉自体が長いから、「逃げろ！」を言うのが普通だろう。

4.2.2.2 緊急事態における「形式上の形容詞の命令文」の特徴

緊急事態の時、形容詞による「形式上の形容詞の命令文」は、普通裸のままの形容詞を使い、目の前にある事態の現状をそのまま述べることにより、他者への働きかけとして機能するのである。

(132) 危険！（危ない！）

(132) は信号を無視して、道路を渡っている者に注意を喚起する場合に用いられるのである。中国語では、緊急事態以外の場合、相手がある動作・行為を遂行する途中でない限り、この用法はないようである。例えば、音楽を聞いている人に、

(133) *大! (大きい!)

と言っても、音を小さくしてくれる期待はできない。もし、相手が音の調節をしている最中であれば、具体的な状況によって、「音を大きくしてください」と「音が大きすぎる」という二つの意味が読み取れる。なぜかという、と、「臨時表現意図」でない限り、「中国語の形容詞は事態を描く語としては、不向きにできている」(中川1987: 50)。裸の形容詞による「形式上の形容詞の命令文」の特殊的な用法は、中国語の形容詞の意味的特徴に関係する³¹⁾。

しかし、日本語にはこのような制限がなく、限定的に用いられる場合もあれば、描写的に用いられる場合もある。例えば、緊急事態の場合、形容詞そのまま、相手に働きかける機能を持つのである。

(134) 危ない!

(135) 熱いよ!

また、描写的に用いられる場合、例えば、音楽を聞いている人に

(136) 大きい!

と言ったら、音を小さくしてほしいということを意味する。

ここでの描写的用法は尾上圭介(1977)の「眼前描写表現」とよく似ている。眼前描写とは、眼前に現在ただいま遭遇している事態について、「その光景を評価、反省する余裕もなく、とりあえずその事態を事態としてことばにする」(尾上1977: 993)。つまり、直面する事態の状況をそのまま表現するのである。しかし、日本語のこのような「眼前描写表現」は、話し手がただ、対象を存在事態として言語化するだけでなく、尾上は論じていないが、聞き手に働きかける機能を持つ用法もある。「眼前描写表現」の具体的用法として、尾上は後程「感嘆文」³²⁾という項目にまとめている。形容詞による感嘆文は、次のようなものが挙げられている(尾上1986: 558 - 559)。

(イ) 属性形容詞によるもの

「四角い!」「青い!」「大きい!」

(ロ) 情意形容詞によるもの

31) 中国語の形容詞は単独で使われる時、限定的にしか働かない。中国語の形容詞の限定作用を排除するには、形容詞の前後に副詞などの要素を付けるのが普通である。

(1) 他今天很忙。(彼は今日とても忙しい)

(2) 他今天忙吗?(彼は今日忙しいですか?)

(1)では副詞「很」(とても)、(2)では語気助詞「吗」が、それぞれ形容詞「忙」の限定作用を排除する働きをする。

32) 感嘆文について、尾上(1986: 558)は「感情的経験の全体を表現する」とであると説明する。

「悲しい!」「うれしい!」「懐かしい!」

(ハ) 評価の形容詞によるもの

「かわいい!」「きたない!」

(二) 温度・痛覚などの形容詞によるもの

「熱い!」「痛い!」

尾上は感嘆文として最も存在しやすいのは(ハ)と(二)だと言う。「かわいい!」や「熱い!」という文は、何かを見た時、何かに触れた時の気持ちの動きや感覚を表すものとしている。

尾上は形容詞による感嘆文が、聞き手に働きかける機能を持つかどうかについては論じていない。勿論、以上のような話し手による感嘆文は間接発話として、聞き手に働きかける機能を持つかもしれないが、それを判断するには、文脈関係、個人差などの要素が大きく関わっているため、ここでは、敢えて議論するつもりはない。

中国語の童話の世界では、ある物、或いは人に対して、話し手の望む通りに変化してほしい時は、裸の形容詞による命令文が普通に使えるようである。例えば、『西遊記』の主人公孫悟空は、金棒に、

(137) 大! (大きくなれ!)

(138) 小! (小さくなれ!)

というように命令することができる。

しかし、日本語の場合は、形容詞そのままは使えず、形容詞の連用形か、後に動詞をつけなければならない。

(139) *大きい!

最後にまとめに入るが、日本語の一語文形容詞は「臨時表現意図」の場合(感嘆、緊急事態)、話し手の感じた事態をありのままに描くことができるだけでなく、他人への働きかける力も持つのである。しかし、これはあくまでも二次的な機能である。これと対照的に中国語の一語文形容詞は、緊急事態でない限り、そのまま使えないし、勿論事態を描写する機能と相手に働きかける機能を持たないのである。

§5 人間のカテゴリーに関する形容詞

精神的、社会的な存在である人間に特有の性質・態度・行動の様子などを表す形容詞がある。こういう人間に関する属性を表す形容詞は「形式上の形容詞の命令文」において、構文論的に大きな特徴

を持つもので、機能的にほかの形容詞と区別される。人間に関する形容詞は、普通の形容詞より特殊で、ここで、改めて項目を立てて考察する。考察範囲は主に動詞の結果補語に絞る。

5.1 述人形容詞 (human adjective)

普通の形容詞のカテゴリーは広く、含意する意味範疇はたくさんあるのに対して、人間に特有の性質・態度・行動の様子を表す形容詞のカテゴリーは狭く、含意する意味範疇が決まっている。

(140) 别害怕, 大胆点, 我挺得住! (こわがるな、大胆に、ぼくは大丈夫だ)

(141) 发现敌情了吗? 沉着些。(敵を発見したのか、落ち着け) (荒川1979: 39)

上の二つの例は、ともに具体的な動詞がなく、荒川はこの類の形容詞の特徴は「人間の動作、行為、態度（心的なものも含め）の状態を表し、かつ自らその状態になりうるもの（「自制可能」なもの——英語学でいうself-controllable）」（仮説2）（1979: 40）であると述べている。袁（1993: 118）はこの類の形容詞を、普通人間の性格、態度、感情などを表し、「述人形容詞 (human adjective)」と名付け、人間の性格、態度、感情などを表せない形容詞を「非述人形容詞 (non-human adjective)」と名付けている。「大胆」（大胆）、「沉着」（落ち着く）のような形容詞は、不可避的に人間の性情を表すことになっているので、具体的な動詞がなくてもいいわけである。しかし、この類の形容詞がそのままで命令文になれるわけではない。というのは殆ど要願動詞「要」（～しなければならない）、「放」（～しろ（せよ）、～させる）、「给我」（～してくれ）などの語がつけられる。よって、「述人形容詞」による「命令文」も「要」などを省略した動詞述語命令文の一種だと言える。

なぜ人間に関する形容詞に限って、具体的な動作・行為を表す動詞を必要としないのだろうか。それは人間は、言語表現に先立って予め範疇化され、カテゴリー化の理論、人間の優位性³³⁾から説明がつくと考えられる。人間の優位性とは、物はカテゴリー化される前に未知の段階で分類されていない状態に対して、人間はカテゴリー化される前にもうすでに存在している。人間は自然界の中心で、個体のプロトタイプであるという把握に基づいているから、特別視される。というのは、普通人間に対する認識は物より明確で、はっきりできているからである。「この意味で、人間は言語外的事物の中では、特権的地位を占めていると言えよう」（東郷1998: 51）。例えば、「认真」（真面目）という形容詞は、人間の性質の一部であることから、容易に理解できる。これは「认真」という語彙内容が喚起するフレームを利用したのである。つまり、「认真」→人間の性格という関係が成立するのである。

「述人形容詞」は、更に人間のコントロールできる形容詞とコントロールできない形容詞に分けることができる。コントロールできる形容詞を「自主述人形容詞 (volitional adjective)」と、できない形容詞を「非自主述人形容詞 (non-volitional adjective)」と名付ける（袁1993: 120）。

まず「自主述人形容詞」について考えてみる。

33) この論点は東郷の大学院講義によるものである。

5.1.1 自主述人形容詞

自主述人形容詞の用法は形態的に以下のようなタイプにまとめることができる。

5.1.1.1 相手（你）+A+一点儿（一些）

(142)、(143)の命令文は、聞き手の認知状態はⅠ（2.3.2を参照，p.163）に当たるが、ここでは具体的な動作がなく、聞き手にその場で、ある性格・精神状態を変えようと命令しているので、具体的な動作を表す動詞は必要としないが、意味内容の薄い動詞「要」、「放」などを補うことができる。

(142) 别害怕，放（要）大胆点儿，我挺的住！（こわがるな、大胆に、ぼくは大丈夫だ）

(143) 发现敌情了吗？放（要）沉着些。（敵を発見したのか、落ち着け）

次は、この類の形容詞の前に動詞要素のある「形式上の形容詞の命令文」について、意味的にまとめてみる。

5.1.1.2 相手（你）+要+A

(144) 你先到他身边去。要坚强。（はやく側にいってあげなさい。気をしっかりもつんだよ）

「要」はある状態について相手にこれからそうしてもらいたいという意味を表す。「要」がない時、現場の依存性が強く、相手の目の前の状況に密着して、今すぐある行動を起こすよう要求するのに対して、「要」がある時、現場依存性が弱く、「要」の使用が必要とする。これは聞き手が認識状態Ⅱ（2.3.2を参照，p.163）における発話である。

5.1.1.3 相手（你）+要+A+一点儿（一些）

(145) a 你要老实一点儿。（これからおとなしくしなさい）

「要～一点儿」と「～一点儿」は基本的に意味が同じであるが、「要」があるか否かによって、一時的な事態として捉えるか恒常的な状態として捉えるかという違いがある。「要」があるほうが相手に恒常的な性質・状態を要求し、「要」がなければ、一時的な性質・状態として捉える。また、「要」に「～一点儿」を付け加えることにより、相手がそうすべきなのに、そうでいていないということに対して、話し手が注意し、責める意味が入っている。つまり、参照点マーカー「一点儿」があることにより、今までの状態と比較するということを強調し、相手にこうすべきだと注意するのである。

5.1.1.4 给我+A+一点儿（一些）

(146) 给我老实一点儿。(一些)。(おとなしくしろ)

「给我」を日本語に直訳したら「私に」という意味になるが、後に動詞、形容詞をつければ、「～してくれ」という話し手が聞き手に対する強制的な命令を表すことになる。つまり、聞き手の現状を見て、これから、こういうように気をつけろという話し手の注意、脅しという意味を表す。相手に注意するというのは、何かと比較するというプロセスが働き、参照点「一点儿」を必要とする。

5.1.2 非自主述人形容詞

「非自主述人形容詞」は自制可能な形容詞ではないから、そのまま相手に命令することができない。

(147) *聪明一点儿。(賢け)

そこで、「放」は使役の働きを持っているため、人間の意図的にできない形容詞の場合は、「放」の使用によって、相手に命令することができる。形態的に次のような命令文がある。

放+A+一点儿(一些)

(148) 放聪明一点儿。(賢くしなさい)

(149) 放明白一点儿。(分かってください)

「放」は「给我」と一緒に使うこともできる。

(150) 你给我放明白一点儿。(分かってくれ)

「给我～」があれば、相手に命令する語気が更に強くなるのである。使役の働きを持つ「放」を使うことによって、非自主述人形容詞でも命令表現で使われるが、そのような形容詞は限られている。

5.2 述人形容詞と似たような働きを持つ形容詞

「述人形容詞」以外に、ある決まっている構文を持ち、「述人形容詞」と同じような働きを持っている形容詞がある。そのような形容詞自体は、人間の属性しか表せないという制約はなく、具体的な場面と状況、人間の体の具体的な部分と結び付けることにより、初めて人間の性質・属性を表すことができる。つまり、もし、形容詞の前に人間の体の一部か、或いは人間の行為・行動に関する名詞をつければ、その形容詞は「述人形容詞」と似たような働きを持つようになるのである。

人は静的な存在ではなく、活動性の豊かな存在である。人に関する属性を表す形容詞の主体になる

ものは、多面的であることが多いようである。例えば、人の性情や心の態度そのものは目に見えないものであるが、それが表情や動作などに表われると有形なものとして捉えられる。性情の持ち主である人間を主体にするだけでなく、そういう性情の表われた表情的な体の部分や動作なども主体にすることが多いようである（西尾1972:110）。ここで述べている形容詞は前の名詞の意味の限定により、人間の性質、人間の身体部位の一部であることを特定することができ、人間に関する述人形容詞になれるのである。しかし、この類の形容詞は、人そのものを主体にすることができず、人間の動作・態度などに関することを主体とするのである。

5.2.1 相手（你）+身体部位+A+一点儿（一些）

- (151) 你眼睛亮一点儿。（しっかり見て）
- (152) 你声音大一点儿。（声を大きくして）
- (153) 你行动快一点儿。（行動を早くしなさい）

「眼睛」と「声音」は人間の身体部分を表す語で、「行动」は人間のある行為の一面を表し、後の形容詞と一緒に、人間に対する叙述的な表現になることができる。命令表現において、その場で相手にある特定の様態を変えようと要求する時、具体的な動詞がつけられず、「述人形容詞」とよく似たような性質を持っている。次はこの類の形容詞に要願動詞と他に付けられる動詞について見ていく。

5.2.2 相手（你）+身体部位+要+A

- (154) 你眼睛要亮（しっかり見て）
- (155) 你行动要快（行動を早くしなさい）

「要」があれば、現場依存性が弱く、相手にすぐある行動を起こすようという意味を表す。

5.2.3 相手（你）+身体部位+要+A+一点儿（一些）

- (156) 你眼睛要亮一点儿。（しっかり見て）
- (157) 你行动要快一点儿。（行動を早くしなさい）

「相手（你）+身体部位+要+A+一点儿（一些）」は「相手（你）+身体部位+要+A」と基本的に意味が同じであるが、「相手（你）+身体部位+要+A+一点儿（一些）」のほうは、「～一点儿」があることにより、聞き手が今のやっていることと比べて、もう少し今の状態を変えてほしいという話し手の要望、注意する意味が入っている。

5.2.4 相手（你）＋身体部位＋放＋A＋一点儿（一些）

(158) 你腦子放聰明.....一点儿。（頭を賢くしなさい）

(159) 心放寬些。（心を広くしなさい）

(160) 你腿放勤.....一点儿。（足を勤勉にしてくれ）

(158)、(159) のような「非自主述人形容詞」の場合、話し手が相手に命令する時、やはり「放」が必要である。「自主述人形容詞」の場合でも「放」が使える（(160) の例）。

5.2.5 相手（你）＋身体部位＋给我＋放＋A＋一点儿（一些）

(161) 你腿给我放勤.....一点儿。（足を勤勉にしてくれ）

(162) 你腦子给我放聰明.....一点儿。（頭を賢くしてくれ）

「给我」があれば、話し手が聞き手に命令する口調が一層きつくなるのである。

5.3 まとめ

以上は人間の性格・属性に関する形容詞が命令・依頼表現において、ほかの形容詞と違うメカニズムを持つことが分かった。「述人形容詞」は人間の性質を表し、命令の形で聞き手に具体的に行動を指示することができる。また、一般性・抽象性の高い語であると言える。他方、述人形容詞と似たような働きを持つ形容詞は、具体的な場面と状況があってはじめてその動作のありかたを述べるという制約を持つのである。形容詞そのものは、人間の性格・属性とすぐ結び付く場合、具体的な動詞は要らず、人間に内在する属性をそのまま表すことができる。

日本語の人間の性格・属性に関する形容詞も、同じような現象がある。つまり、命令・依頼表現において、人間の性格・属性に関する形容詞は、具体的な動詞の代わりに、サ変動詞「する」をつけるのが多いという特徴が見られる。例えば、

(163) 真面目にしなさい。

(164) おとなしくしろ。

のような文は具体的な動詞を使わなくてもよい。

§6 「形式上の形容詞の命令文」における省略³⁴⁾の問題

この節では、聞き手の発話状態を参考に、「形式上の形容詞の命令文」の省略問題について、具体的に分析していく。

6.1 動詞述語が省略できる「形式上の形容詞の命令文」

ここで省略できるというのは、先ほどのⅠ(2.3.2を参照, p.163)の分析における状況である。即ち、話し手と聞き手がともに発話現場にいて、聞き手がある動作実行の最中である場合、或いは先行談話での明示的言及によって、聞き手スペース内にすでに登録されている場合である。福地肇(1985)の説によると、省略とは前の文脈で言った表現をそのまま繰り返すことから生じる冗長さを避ける手段の一つである。形はなくても省略された部分は旧情報を伝える表現と見なすことができる(福地1985:23-24)。人々の会話は簡潔な表現、不完全な文、そしてノンバーバル・コミュニケーション(非言語伝達)に依存しがちである。ここでいわゆる動詞述語が省略できる「形式上の形容詞の命令文」は、語用論的な原則に従い、協調の原則が働いていることを示唆している。

会話においては、できるだけ丁寧に省略なしで嘸んで含めるように答えるストラテジーと、できるだけ経済的に省略できるものはできるだけ省略してしまうストラテジーの二つがあり、「焦点以外は省略できるものはできるだけ省略せよ」という原則のため(久野1978:96)、中国語の「形式上の形容詞の命令文」は、結局聞き手が話し手のメッセージを復元する可能性があることを前提に話し手がその動詞を省略したのである。

聞き手が発話状態Ⅰの場合にいるなら、聞き手の認知状態とその形容詞の語彙的な意味に依存し、話し手が聞き手の行っている動作を改めていう必要がない。例えば、次の文は、

(165) a 到海门去, 开快点! (海門へ行け、スピードをあげて運転してくれ)

b 到海门去, 快点! (海門へ行け、スピードをあげて運転してくれ)

bは聞き手が運転している最中に話し手から出された指示だから、動詞「开」(運転する)の省略ができる。次の例aについて、荒川(1979:42)は「前の動詞が後の形容詞に具体的な場を与え、意味の幅を限定している」と述べているが、実は話し手の明示的な言及「谈谈」(話す)によって、「说」(言う)という動作はすでに聞き手のスペースの中に登録されたので、bのように「说」の省略が可能なのである。

(166) a 你们谈谈咱们的成就, ……说生动二点儿。(我々の成果を話すんだ。……生き生きとな)

b 你们谈谈咱们的成就, ……生动二点儿。(我々の成果を話すんだ。……生き生きとな)

34) ここに関する省略の問題は、主に言語行為を中心に考えてみるが、焦点を動詞に置いておく。

「形式上の形容詞の命令文」は文脈³⁵⁾依存性という特徴を積極的に活用するのである。文脈という時必ず同時に考えられるのは、「状況」(situation)である。「形式上の形容詞の命令文」では、以上のように状況に依存することは非常に多いし、またその特定の状況の中で動詞を省略しても、意味が通じればそれでよいわけである。また、緊急事態において、省略が起こりやすい。

6.2 動詞述語の省略ができない「形式上の形容詞の命令文」

形容詞の前の動詞が省略できない場合、荒川は「V+A+一点儿」という言語環境が命令文になる上での必須の存在条件で、前の動詞が後の形容詞に具体的な場を与え、意味の幅を限定していると述べている。しかし、どういう場合そうなるのかは説明していない。

動詞の省略ができないというのは聞き手の状態認知のⅡ(2.3.2を参照, p.163)に当る。つまり聞き手が動作の最中でない場合、話し手が指示する時、改めて動詞を言う必要があるからである。

またこういう時の指示に関して、二つの可能性が考えられる。

6.2.1 現在の動作の実行のタイミングにある時

この時話し手の指示することは聞き手のスペースの中に存在せず、話し手が新たに具体的な動詞を導入する必要がある。荒川の例を引用する。

(167) 只此一次，下不为例！你写简单点儿。（これっきりだぞ。簡単に書くんだ）

(168) 请站远点儿，我不想和你站在一起。（離れて立ってくれ、あなたと一緒にいたくないから）

(167)の「写」（書く）と(168)の「站」（立つ）の動作は聞き手が今やっている最中の動作ではないから、「写」と「站」まで言わないと、聞き手がその指示が分からないのである。

(169) 你把那后门关严实点儿。（お前、あの裏戸をしっかりしめるのだ）

(169)の「关」（閉める）の動作も相手にこれからやってもらう動作だから、動詞までを言う必要がある。

6.2.2 現在動作実行のタイミングにない時

ある動作をすぐ聞き手にしてもらわず、これから恒常的にその動作を維持するようにと聞き手に命令する時、「～しなければならない」、「～すべきだ」という意味を表す要願動詞「要」を付け加える必要がある。この用法は特に「述人形容詞」(5.1を参照)の場合でよく使われている。

35) 文脈とは、聞く人読む人だれであっても、一応皆に共通のものと理解する。

(170) 你以后要把后门关严实一点儿。(お前、これからあの裏戸をしっかりしめるのだ)

以上は聞き手の認知状態について、「形式上の形容詞の命令文」における動詞の省略を考察した。

6.3 省略の統語的条件と語用論的条件

われわれの言語表現において、省ける表現と省けない表現があるが、それは一体何によって決まるのか。また、省きたいのに省けない場合と、省きたくないのに、省かざるを得ない場合もある。省略という言語行為は絶対的なものではなく、話し手の意図性と個人差が考えられる。

省略の言語現象を最初に体系的に理論化したのは、久野暉(1978)である。表現が省けるかどうかについては、久野(1978:8)が機能言語学の立場から、省略の現象の汎言語的原則、制約の徹底的追及を目指して、省略の根本原則を次のように立てる。

(171) 省略されるべき要素は、言語的、あるいは非言語的文脈から復元可能でなければならない。

しかし、実際の言語生活では、話し手がいろいろな要素(例えば、対人関係、丁寧さ、表現効果など)³⁶⁾を考慮した上で、省略するかしないかは、話し手の表現意図によるものが多い。

話し手の意図性というのは、表現機能に関わるものである。具体的に言うと、省略する統語的条件が揃っても、話し手の意図により、省略しない場合が見られる。例えば、子供と一緒に歩く時、母親が、

(172) a 走快一点儿。(早く歩きなさい)

b 快一点儿。(早く)

という両方の発話はともに可能である。

日本語でも「形式上の形容詞の命令文」における動詞を省略した表現があるが、形容詞のある命令文の命令形は、ズバリ表現によって、相手に指示を出す。「早く寝なさい」と言った命令表現が普段は年齢や、立場の上の人から下の人に発せられるものである。しかし、動詞を省略した表現、例えば、「早く早く」などは、上下の関係なく用いられるのが特徴である。中国語では、動詞を省略するかしないかは、人間関係とは関係がなく、発話の状況によるものであるのが特徴である。

また、統語的な立場から考えれば、形容詞が動詞の連用修飾語として使われる時、動詞の状態・様態を表すのが殆どであって、その動詞を省略しやすい。なぜかという、性質と様態は動作との連続性が強いため、動詞を省略しても、動作との連想がしやすい。だが、この場合の省略は聞き手の認知

36) 対人関係、丁寧さの立場から、省略の問題を考察したのは、蒲谷(1993)の研究がある。また、「引き込みの表現効果」から日英を比較し、省略を観察したのは牧野(1993)が挙げられる。

状態 I (2.3.2を参照, p.163) でないといけない。

形容詞が動詞の結果補語として使われる時は、その動詞を省略しにくい。というのは、結果は動作・行為が終わった後の状態として、動作との間の連続性が弱いため、動詞が省略されたら、その動詞との連想が難しくなり、意味が不明確になる恐れがあるからである。例えば、

(173) a 把衣服洗干净。(服をきれいに洗いなさい)

b* 干净。(きれい)

(173) のaは言えるのに対して、bは言わない。また、(168)、(169)の形容詞はともに動詞の結果補語として使われているため、たとえ聞き手の認識状態 I においても、動詞の省略はできない。

(168') *请远点儿，我不想和你站在一起。(遠くしろ、あなたと一緒にいたくないから)

(169') *你把那后门严实点儿。(お前、あの裏戸をしっかりと)

しかし、以上のような省略に関する制約は日本語には通用しないようである。例えば、形容詞が結果補語であっても、聞き手が認識状態の I にあれば、動詞の省略が認める。

(174) a この服をきれいに洗ってください。

b この服をきれいにね。

§7 おわりに

中国語には「形容詞の命令文」は存在せず、形容詞のある動詞述語命令文は普通の動詞述語命令文と意味的と機能的に違う特徴を持っているため、「形式上の形容詞の命令文」と名付ける。「形式上の形容詞の命令文」には二つのタイプあると考えられる。まず一つは、形容詞が動詞述語命令文の状況語として使われるか、或いは補語として使われるかということである。もう一つは形容詞そのものが命令文になるが、その時の形容詞は、本来の意味からずれてしまうことが多い。

「形式上の形容詞の命令文」は、動詞が省略される時、構文上形容詞の命令文だと間違いやすい。それで、動詞が省略できる状況と省略できない状況について考察した。

話し手が聞き手に指示を出す時、聞き手の認知状態が三つあると想定できる。この三つの想定は動詞が省略できるかできないかを決める。もし、聞き手がある動作の最中で、その動作が話し手と聞き手にとって、旧情報であれば、省略が可能である。つまり、指示される動作のプロセス的事態が文脈から明白であったり、或いは容易に推論可能であれば、相手に指示する動作の様態・結果によって、

から明白であったり、或いは容易に推論可能であれば、相手に指示する動作の様態・結果によって、そのプロセス的事態を敢えて明示しなくても容認される。そうでない場合は動詞の省略を認めない。

「形式上の形容詞の命令文」と動詞述語命令文の違いは、状態・性質を表すか出来事を表すかである。形容詞は性質として、動詞は行為として叙述する。動詞述語命令文は相手にその動作の内容を指示するのに対し、「形式上の形容詞の命令文」は、相手に指示する焦点は動作そのものの自体ではなく、その動作の状態・方式・或いは結果のほうである。

形容詞の後の「一点儿」はもともと比較の意味を表し、命令文において、相手に今の状態・方式・或いは結果を基準にし、これからもう少しその状態・方式・或いは結果を変えようと要求する時の比較のマーカードと言える。

第五章

命令・依頼表現におけるモダリティ副詞

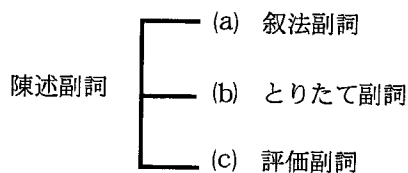
§0 はじめに

この章では、現代日本語と中国語の命令・依頼表現における陳述副詞——話し手が依頼する態度を表す副詞の分析を中心にしたものである。命令・依頼表現において、話し手の判断を主として担う認識的モダリティと関係づけることによって、中国語と日本語の副詞を捉えることを試みていきたい。

0.1 モダリティ副詞¹⁾

副詞は人間自身の感情や志向、欲望など“内に発するもの”を表すことができる言葉で、表現の重要な核である（岡田1985: 97）。「副詞」という文法カテゴリーは、いまだ決定的な定義に欠けており、これまでさまざまな角度から論じられてはいるが、明確に規定したものはない。本節はこれまでの研究成果に従い、「副詞とは何か」という本質的な議論にはあえて踏み込まないことにする。ただし、ここで取り上げている副詞は命令・依頼表現でどんな機能を持っているのかについて詳しく記述する必要があると考えている。

本節で取り上げる副詞は国語学でいう「陳述副詞」の中に含まれている。「陳述副詞」の議論については、山田孝雄（1936）、橋本進吉（1959）、渡辺実（1971, 1974）の研究が挙げられる。工藤浩（1982）は陳述副詞のカテゴリーの一部として、「叙法副詞」を設定し、この類の検討をしている。工藤（1982: 45-47）の叙法副詞は山田（1908）の「陳述副詞」の一部——ただし中核的な一部を占めるのである。工藤は「陳述性（predicativity）」という用語を「単語や単語の組み合わせを文として成り立たせる諸特性」と、仮に定めて用いることにし、この「陳述性」のもとに、副詞（的成分）にかかわりのあるものとしては、叙法（modality）、評価（emotionality）、とりたて（focusing）の三つがあると述べている。つまり、陳述副詞については、



のようにまとめることができるという。

しかし、「陳述副詞」は、主に否定、推量、仮定などの述語の陳述的な意味を補足強調し、述語の

1) この章で論じるモダリティ副詞は、命令・依頼表現における副詞のことを指し、狭義上のモダリティ副詞を意味する。モダリティ副詞についての詳しい議論は第一章の3.2を参照。

属性的な意味に連繫しているのである。「陳述」を「話者の心的態度」と捉えるのが一般的で、事柄に対する働きを持っているのである。日本語の副詞を機能から分析するには説得力があると考えている。日本語の副詞には、大凡次の三つの機能が認められる（畠1991: 45）。

- ① 動作・状態の様子を詳しく説明する機能
- ② 話し手の気持ち・態度を述べる機能
- ③ 次に述べたてる内容を何らかの形で示唆する誘導の機能

命令文の発語内効力標識が、その文のタイプに還元される場合、その字義通りの発話の発語内効力は、それぞれ指図の原始発語内効力である。しかしながら、基本文の発語内効力標識は、しばしばそれらの文のタイプを修飾する副詞（adverbs）などのような語句や統語的特徴を含む。そのような特徴の意味は新しい「発語内効力の」特別構成要素を追加したり、強さの度合を変更することによって、それらが生じる発話の完全な発語内効力を決定するのに寄与する（Vanderveken1994: 訳書53ページ）。人間は自分の目的を達成するために、相手にある行為をしてもらおうと頼む時、依頼の内容や相手に及ぼす影響、発話の場面、相手との利益関係などを常に配慮しつつ、適切な依頼表現を取る。しかも、話し手が以上の要素を配慮した結果、その依頼表現には程度の差が認められる。その差は話し手の心情、話し手の主観的な態度を表すモダリティ的な副詞で表すことができる。依頼表現は消極的な行為要求を意味する。相手に何かを頼み要請し、目的を達成する期待を含意するものだから、程度の差こそあれ、いろいろな程度の差を表す副詞と共起できる。

ここで副詞の分類については、これ以上深入りすることをさけ、本節の中心課題である「命令・依頼表現におけるある行為の実現に向かう話し手の態度を表すモダリティ副詞」についての考察に移りたい。

0.2 日本語のモダリティ副詞

本節ではある意味領域（命令・依頼表現）における類義的な副詞を比較しながら、記述を蓄積してゆくことは、副詞の体系的な記述のためにも必要であると考えられる。ここでは、命令・依頼表現に用いられる代表的な副詞「ぜひ」、「必ず」、「くれぐれも」、「どうか」、「何とか」の五つに絞って直接の対象とする。記述の際に留意したいのは、ある副詞についていくつかの用法が分析できる時に、その用法間の関連がどういうものとして捉えられるかという点である。一つの用法が別の用法に互る場合に、どういう理論によって、そのような広がりを与えられているのかということについて考える視点を確保したい。個々の副詞のレベルでの分析をすると同時に全体的なレベルでの分析も行う。

0.3 中国語のモダリティ副詞

張麟声・渡辺実（1983: 453 - 455）は「対象的な意義を全くと言ってよいほど表さず、ほとんど言語主体的意義を表すのみ」のようなものを「ムード副詞」と仮称する。「意義用法の記述の困難なムー

ド副詞は、日本語に少なからず存するが、……（中略）……中国語は英仏両語ほどではないにしてもムード副詞に乏しいようである」という指摘がある。本節で取り上げるこれらの副詞は命令や依頼、勧めを表す「働きかけ」²⁾において、どう使われているかを分析する。以上の五つの日本語の副詞と対応的に、中国語の副詞を「一定」、「千万」の二つを取り出して比較的に考えてみる。

§1 モダリティ副詞及び研究方法

1.1 依頼行為と依頼表現

命令・依頼を表す文は、相手にある行為をさせようという意図のもとに発せられる文である。モダリティ副詞を考える前に、まず依頼行為と依頼表現の間にどういう関係があるかを考えてみる。

話し手と聞き手の間の利益関係から出発し、依頼行為と依頼表現との間の関連を次のように仮定する。

仮説 (1)

話し手が相手に依頼行為をしたら、崩れた利益関係の均衡性を維持するため、話し手は言語表現及び行動行為による補償 (compensation) 手段を取らなければならない³⁾。

話し手が聞き手に依頼行為をすることによって、両者のもとの利益関係が崩れ、話し手がそれを維持するために、言語表現及び行動行為による補償手段が必要である。ここでは「利益関係の均衡性」⁴⁾の原則が働いていると考えられる。というのは、話し手が自分の利益のために依頼しているし、もし、一方的に相手に損害を与えることになったら、二人の間のやり取りは成立しないと考えているからである。

言語行為による補償行為はいろいろなタイプがある（例えば、表現上の丁寧さなど）が、ここで取り上げられている話し手の主観・態度を表すモダリティ副詞の使用はその一つである。

1.2 モダリティ副詞について

1.2.1 モダリティ副詞を使う背景的条件

モダリティ副詞について考える時、基本的に人間がモダリティ副詞を使用する必要性から考える。さきほどの仮説 (1) を具体的にすると、モダリティ副詞を適切に用いるために、次のような背景的な条件が考えられる。仮説 (2) を立てる。

2) 仁田 (1991) によれば、「働きかけ」とは、話し手が自身の要求実現を聞き手に働きかけ、訴えかけるという「発話・伝達態度」のあり方のことである。

3) ここでは言語表現による補償手段を中心に考えるが、行動行為修復手段については第二章の 4.2.2 を参照。

4) 「利益関係の均衡性」というのは、話し手と聞き手の間で利益関係を生じたら、もとの利益関係に回復しなければならないということを指している。

(2) 依頼する事態の実現の可能性が低いと感じられる時

仮説 (2) をもう少し具体的に説明すると、話し手は依頼内容の事態の実現する可能性の有無によって、モダリティ副詞を使用するか否かを判断する。話し手が自分の望み、要求が相手によって実現する可能性が低いと感じる時、モダリティ副詞で自分の意志を強調し、相手に働きかける必要があるのである。依頼内容の実現の可能性が100%である時、モダリティ副詞の使用は不適切である⁵⁾。

1.2.2 モダリティ副詞を使用する状況

ここで取り上げる話し手の主観性を表すモダリティ副詞の使用は、話し手が自分の目的を達成するために、相手とのもともとの利益関係を考慮しつつ、依頼内容の軽重や、相手の実力⁶⁾、発話状況の性格などによって、表現とともに自分の気持ちを相手に伝えるのである。ここでは主に話し手が自分の態度が依頼内容の軽重や、相手の実力との間の関連性とがどう関わるかを考えてみる。次の仮説 (3) を立てる。

- (3) a 相手にかかる負担が相手の実力と比べ重ければ、相手への負担を表現するまたは含意する信念の表現を最小限にしなければならない。強い態度で強調することができない⁷⁾。
- b 相手に依頼していることが聞き手のためになるなら、態度で強調することができる。
- c 話し手の依頼を態度で強調するのは相手の存在をより重く見る態度に繋がり、より丁寧な敬意の表明と受け取られる場合もある。

以上の仮説の陳述は便宜上単純化されている。厳密に言うと、次のように解釈すべきである。

a は話し手が依頼行為を成功させるため、依頼している内容を「軽減化」⁸⁾ したり、依頼する姿勢を低めたり、或いは相手に拒否 (refusal) を選択する余地 (option) を残しておくといった補償行為

5) 例えば、次の例が「絶対的命令文」の例である。

(1)*飛行機はすぐ離陸いたしますので、シートベルトを是非お締めください。

新聞を読んでいる夫が妻に

(2)*おい、お茶を是非持ってきてくれ!

というような発話はしない。というのは、話し手の発話に対して、聞き手が100%実行してくれるというのは前提になっているから、「ぜひ」で話し手の心情を強調する必要はない。

6) 実力というのは、ここで具体的にその依頼者、或いは非依頼者の体力的能力、社会的地位、権威などを指す。

7) もし、話し手が依頼する必要性和緊急性を強調すれば、強い態度での依頼は容認度が上がる場合がある。

8) ここでの「軽減化」は木村 (1987: 61) の用語を引用している。木村の説明を簡単にまとめると、「軽減化」とは、「ちょっと」みたいに、依頼表現で、丁寧度の引き上げに有効に働いていて、依頼内容の「軽減化」作用を果たしつつ依頼表現の成立に大きく与かっているのである。行為の軽減化が控えめの意識に繋がり、更に依頼の姿勢になじむというのである。

をすることによって多大な丁寧さ、ストラテジーが必要とされる。

b は話し手が聞き手の消極的丁寧さ（話し手が好意で聞き手に提供することを聞き手が断わる場合）を予期し、聞き手に強い態度で有益な行為を提供し、提供の積極的丁寧さを増すのである。

(4) この料理おいしいよ。ぜひおひとつ食べてください。（坂口1995: 46）

(4') 这个菜很好吃，请你一定尝尝。

(5) 盗難が多いので貴重品はぜひ身につけるようにしてください。

(5') 最近，偷窃案件很多贵重物品请一定随身携带。

(4)、(4') はともに、話し手が聞き手が断わると予期し、モダリティ副詞で話し手の気持ちを強調することができる。(5)、(5') は相手の利益になる行為を強調するのである。

c は依頼内容がなく、儀礼的な依頼の場合と依頼内容がある場合を指すのである。相手にかかる負担が儀礼的で、実際の内容がない時、儀礼的・慣用的であるだけに、依頼内容の行為も具体性・実質性を欠くことが一般的である。儀礼的な場面では言わば「あらたまり」の意識が働き、その意識が表現上の負担を大きくするが、実際には相手に何ら具体的な行為を依頼しておらず、相手の負担は実質的には増加されない。表現上の負担の増加は「相手への依存度の強さを示すところから、「頼み」とする相手の存在をより重く見る態度に繋がり、より丁重な敬意の表明と受け取られる」（木村1987: 63）のであるから、一種のストラテジーである。中国語と日本語の例をそれぞれ一つずつ挙げておく。

(6) 以后请多多指教。

(6') 何卒よろしくお願いします。

(6)、(6') はともに、儀礼的な依頼で、相手にかかる負担が何一つもない。

次の例は聞き手に負担をかけると同時に、相手を高く評価する行為とも繋がっている。例えば、ある有名な学者に

(7) 先生のあの研究はとても素晴らしいです。今回の学会でぜひ講演していただきませんか。

というような依頼は「先生」に負担をかけながら、先生への一種の丁重な敬意を表明する表現になると言える。

1.3 モダリティ副詞についての研究方法

次は以上の仮説に基づいて、語用論的に話し手と聞き手の利益関係の均衡性から出発し、モダリティ副詞のプロトタイプの意味について考察する。

研究手順としては、類語としての扱いを参考に、日本語と中国語の副詞を「ぜひ」、「必ず」と「一

定」、「くれぐれも」と「千万」、「どうか」⁹⁾と「なんとか」¹⁰⁾のように、三つのグループにまとめ、順に比較・分析する。日本語と中国語の副詞を一つ一つ見ていくと同時に、相互に比較しながら分析することで、語彙的意味と統語的現象の關係に注目しながら、語用論にかかわる要因を副詞の語彙的意味に求める。また、副詞の意味を分析する時、辞書的な意味にこだわらず、副詞の典型性条件 (typicality conditions) もしくはプロトタイプ (prototype) 属性によって規定する。副詞は統語的側面が制約されるため、談話レベルに目を向け、認知文法論・語用論的観点からも検討してみる。

§ 2 日本語の「ぜひ」、「必ず」と中国語の「一定」について

日本語の「ぜひ」、「必ず」と意味的に近い中国語の副詞は「一定」である。

2.1 「ぜひ」

2.1.1 「ぜひ」に関する先行研究

森田良行 (1977: 259) によると、「ぜひ」は「是が非でも、つまり良くても悪くても必ずの気持ち」を表し、依頼・希望・願望などの表現を伴うという。

坂口和寛 (1996: 3-4) は語彙的意味と統語的現象に注目しながら、統語的現象に関わる要因を副詞の語彙的意味に求める。「ぜひ」は依頼機能には現われるが、命令機能の働きかけ文には現われないと指摘する。「ぜひ」が依頼、勧め機能と共起するのは、事態実現を話し手が必要かつ望ましいものとみなす気持ちを表すためである。よって、事態実現の必要性を話し手が認めていれば、「ぜひ」が現われるということである。本人にも指摘しているように、統語的な研究には制約があり、語用論的観点からの検討も必要であるということである。

また、工藤 (1982: 77) は統語論の立場から「ぜひ」の意味特徴を「実現の必要性の強め」とされ、「ぜひ」と共起する文末形式を具体的に挙げている (p.61)。

依頼：～してください

命令：～しろ

勧誘、意志：～しよう、～する、
～するつもりだ

希求：～してほしい、～してもらいたい

希望：～したい

当為：～しなければならない、するといい、必要だ

ここで問題になっているのは、「ぜひ」と命令文との共起のことである。もともと命令機能という

9) 「どうか」を中国語に訳したら、「请」と「设法、想点办法」になる。「请」は動詞で、「设法、想点办法」は連語である。品詞の違い、そして「どうか」の中国語の訳は決まっている語彙がないため、対照研究をやっても無意味だと考えている。

10) 「何とか」の中国語訳は「设法、想点办法」である。語彙になっていないことによって、注9) と同じにここで対照研究を行わない。

のは相手に対する強制力がもっとも強く、要求された事態を聞き手が実現するかどうかという選択の自由度はない。つまり、相手に要求していることは相手が100%の確率で実行してくれるという前提になっているから、改めてモダリティ副詞で強調する必要はない。というのは Grice (1975) の様式 (Manners) の原則「簡潔に言え」がここで働いているからである。形式上命令文と共起できるのはそれは相手に行為自体を実行しようと命令するのではなく、ほかの観点からその理由を追及しなければならない¹¹⁾。例えば、同じ命令なのに、

(8) *ぜひ座れ。

は言えないことに対して、

(9) ぜひあの人に聞きなさい。

は言える。なぜ、同じ命令なのに、共起できる場合とできない場合があるのだろうか。ここでは、命令の機能と共起する動詞からその原因を追及する。

森本順子 (1994: 165) は「ぜひ」の現われる環境を二つのタイプに分けた。一つは命令文系統の文のように、話し手と聞き手の相互作用 (interaction) が重要になる場合、もう一つは聞き手に何かをさせようという意図はなく、話し手の希望や意志を表す場合である。また、「ぜひ」を使用するコンテキストは次のように条件づけられていると指摘している。

[1] 話し手は、受諾が当然のものと想定することができない。

[2] 求められる行為は聞き手を利する、または行為の遂行が聞き手の親切に委ねられている。

しかし、後の研究からも分かるように、「ぜひ」を使用するコンテキストは聞き手を利するだけではない。また、「ぜひ」についての説明が以上のようにいろいろあるが、「ぜひ」のプロトタイプ的な意味は何か、また、いろいろな派生的な意味との間の関連は何か、なぜ以上のような意味と用法が生じるのかというように、「ぜひ」の意味機能についてはまだはっきりしていないところがあり、更に研究する余地があると思われる。

「ぜひ」の用法は語用論的配慮によって決まる面もある。本節は意味論的と語用論的な立場から、「ぜひ」のプロトタイプで共起する意味を考えてみる。

2.1.2 「ぜひ」の基本的機能

「ぜひ」のプロトタイプ的な意味

11) 本論では、「命令」の内容によって、命令文を「絶対的命令文」と「相対的命令文」との二つに分けている。モダリティ副詞と共起できるのは「相対的命令文」である。「絶対的命令文」と「相対的命令文」の詳しい議論については、第二章の § 3を参照されたい。

当該事態の実現への主体の強い意欲、要求、願望¹²⁾を表す。

「ぜひ」の典型性条件

- (a) 話し手が自らの強い意欲・希望・願望を表す。
- (b) 相手への強要、相手への積極的な意志を期待することができ、それを正当化することが要求される。
- (c) 行為の程度性を含んだ表現と共起できる。

2.1.3 「ぜひ」についての具体的な分析 — 典型性条件についての検証

2.1.3.1 話し手が自らの強い願望を表す

話し手の希望・要求を表すコンテキストなら、「ぜひ」との共起ができ、「～したい」、「～してほしい」などの意志表現と結びつく。

- (10) ぜひアメリカへ行ってみたい。
- (11) ぜひ記録を更新したい。

話し手の強い願望を表すコンテキストがなければ、「ぜひ」が使えないようである。

- (12) *ぜひそこに参ります。(砂川 1998: 161)

しかし、中国語の「一定」は「想(～したい)」と一緒に、話し手の願望を表すことができない。

- (10') *我一定想去美国看看。

逆に話し手の願望を表す「想(～したい)」がなければ、意志¹³⁾を表すなら中国語の「一定」はまた使える。

- (10'') 我一定(要)去美国看看。

助動詞「要、得」(～しなければならない)と一緒になら、話し手の意志を表すことができる。

以上のように、話し手が自らの願望を述べるための表現類型を「願望表現」と呼んでおくと、話し

12) 益岡・田窪 (1992: 126) の定義を参考して、願望について次のように定義する。願望とは事態の実現を望んでいることを表すのである。願望には、話し手自分自身の動作・状態を望む「動詞連用形+「たい」」と、他人の動作・状態、或いはある事態の成立を望んでいることを表す「動詞テ形+「ほしい」」がある。

13) 意志とは、ある動作を行う意志を表すもので、動詞基本形、動詞意志形、「動詞意志形+「と思う」」、「動詞基本形+「つもりだ」」等で表される。話し手がある動作を行う意志を相手に告げる場合は、動詞基本形、「動詞意志形+「と思う」」、「動詞基本形+「つもりだ」」が用いられる(益岡・田窪1992: 124)。

手の願望を表すといった類型的意味・機能を持った表現は、主格に自称詞の名詞句しか取ることができない。

(13) *彼はぜひアメリカへ行ってみたい。

しかし、中国語では、日本語のように希望や願望に関する人称の制限がないため、話し手以外でも使うことができる。

(13') 他一定要去美国看看。

以上のように、主語が一人称である場合、日本語の「ぜひ」は話し手の願望を表す表現と共起できるが、中国語の「一定」はできず、話し手の意志を表す表現なら共起できる。

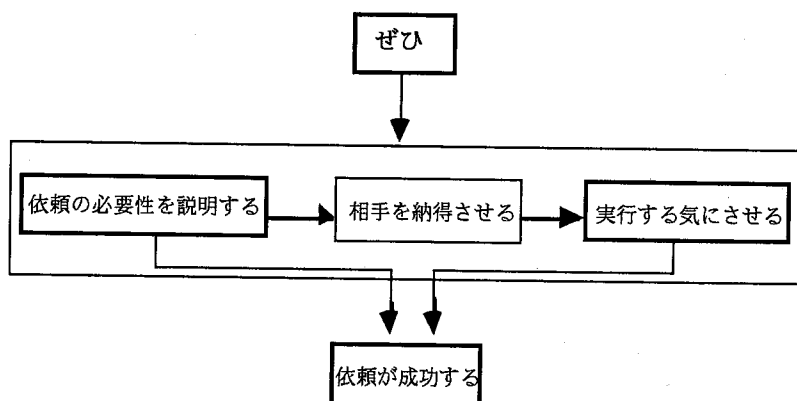
2.1.3.2 話し手が自分、或いは自分側の利益のため聞き手への強い要望を表す

「ぜひ」は話し手が聞き手に対する強い意欲・要望を表す。しかし、どんな場合でも強い要望が表せるとは限らない。「ぜひ」で強い要望が表せる必要条件として、次の二つが考えられる。

- ① 依頼していることが話し手の強い要望に相当する事柄でなければならない。
- ② 聞き手に強く依頼する理由づけが必要である。

理由づけとは、話し手が依頼の正当性・必要性、聞き手が依頼に応じる気があるかなどが考えられる。1.2.2の仮説(3)に基き、以上のような理由づけがあれば、聞き手にかける負担を小さく軽減することと繋がる。よって、話し手の利になる依頼文では、「ぜひ」で話し手の強い願望が表せる状況は、以下のような図式で表すことができる。

図<2-1>



まず、必要条件の①の話し手の依頼が強い要望に相当する事柄でなければならないのについて考える。例えば、次は奥さんがご主人に依頼する例である。

(14) ?明日会社に行く時に、ぜひこの葉書をポストに投函してください。

吉井健 (1998) の説明では、(14) は通常本人がやろうと思えば簡単にできることであって、さほど切実な必要や欲求にならないためだと解釈する。つまり、話し手が「ぜひ」を使用する時、「依頼の正当性・必要性」、或いは相手に要求するにあたっては、それ相応の「動機づけ」(理由、目的など)が必要であるという。(14) の例を次のように書き直してみる。

(15) a? 最近忙しいので、明日会社に行く時、ぜひこの葉書をポストに投函してください。

b? 最近足の具合がまた悪くなったので、明日会社に行く時、ぜひこの葉書をポストに投函してください。

c? 面倒だと思いますが、明日会社に行く時、ぜひこの葉書をポストに投函してください。

以上の a と b は話し手が聞き手に「依頼の正当性、必要性」と「動機づけ」を明示し、c は聞き手が話し手の要求に応じないようだと話し手が察し、「ぜひ」で自分の要求を強める文であるのにも拘わらず、三つの文はともに不自然である。というのは、(14)、(15) のような文はもともと話し手が切実に依頼する必要のない文であるため、②の条件に満たしても、依頼する内容と話し手の強い願望との間に意味的に相容れないことになるから、文の容認度が上がらないのである。

話し手が相手に要求できるのは、「依頼の正当性」、或いは聞き手が応諾する気があるという前提条件が必要である。だが、聞き手が応諾する気があるというのは、確実に話し手の依頼を実現してくれるとは限らない。もし、話し手が望んでいることが、聞き手の実力と比べ、その負担が小さければ、聞き手がもしかしたら、してあげる必要がないと思ひ込み、キャンセルする可能性がある。それによって、話し手から事態実現の必要性を強調する必要がある。言い替えれば、話し手が積極的に自分の要求・願望を表さないと、聞き手が話し手の望んでいる通りに応じてくれない可能性、或いは何かの理由で断わる可能性がある。相手にかける負担が小さいからこそ、話し手の強い意欲・要望を表す「ぜひ」との相性がよく、成功へ導くのである。

次は②の理由づけについて考えてみる。

(a) 依頼の正当性を提示する

1.2.2の仮説(3)の a によると、相手にかける負担が大きいと感ぜられるなら、依頼の正当性を強調し、低い姿勢で頼まなければならない。例えば、「～お願いします」のような丁寧な依頼表現を使うことにより、文の容認度が高くなる。

(16) 明日授業料納入の締切ですので、ぜひ十万円を貸して下さるようお願いします。

(16) は明らかに聞き手にかける負担が大きいため、話し手が依頼の正当性を強調すると同時に、

低い姿勢でお願いするのが特徴である。もし、依頼の正当性がなければ、いきなり「ぜひ」で相手に強く要求することは、相手に唐突感を与え、押し付けがましく不躰な感じになるのである。

(b) 聞き手が応じる気がなければならない

もし、「依頼の正当性、必要性」と「動機づけ」が明示されていなくても、聞き手のほうが依頼に応じる気があれば、「ぜひ」の使用が認められる。なぜかという、次の例で説明する。

(17) a: 家には処分しなければならない本がたくさんありますが、要りませんか。

b: ぜひください。

(17) は話し手が「ぜひ」で強調しないと、aは自分の要らない本は相手にとっても、多分価値がないだろうと推定し、本をあげないという可能性がある。

吉井(1998: 72)には似たような指摘がある。「話し手自身の利になることを頼む場合、相手の応諾が期待できるような文脈でなければ、「ぜひ」は用いることが難しい」。つまり、相手の方から申し出があるからこそ、当該の事態の依頼が応諾されるのは自明のこととすることができ、相手にかける負担も小さくなるのである。

(18) a: うちへ遊びにいらっしゃいませんか。

b: ええ、ぜひ。(森本1994: 167)

誘いというのは、話し手が相手に断わる余地を与えているのである。つまり、来なくてもよいという可能性がある。一方、常識からいうと、相手の家へ遊びに行くことはその家の人に迷惑をかけることになると考えられるので、aの文において発話者が相手が来ないだろうと予測し、いつでもキャンセル可能な状態にする。同じことで、bの文では発話者が相手が誘い気があるのを前提にし、自分のほうから強い意志を表明しないと、キャンセルされるかもしれない。つまり、話し手の要求が相手にとって、負担が小さい時、相手が行為を提供する気があるが、相手に確認し、話し手の方から自分の意志を強調しないと相手が行為の提供を中止する可能性があるから、「ぜひ」の使用が必要である。

(19) の例文は同じことが言える。

(19) a: 彼女の住所も要りますか。

b: ええ、ぜひ教えてください。(森本1994: 164)

相手が依頼に応じてくれる能力、可能性が明らかでない場合は、「ぜひ」の使用は不適切である。

(20) ? ぜひ十万円を貸してください。

しかし、相手にかかる負担が小さいと見えても、もし相手が応諾する気が明らかでなければ、文は自然でなくなる。ここでは吉井（1998: 69）の例文を引用する。

(21) ?コンタクトレンズが落ちたんです。ぜひいっしょに探してください。

(21) の依頼に対する聞き手の応諾が明らかでないため、話し手が聞き手に正当な権限を行使することができないのに、何らかの補償行為を行わず、更に聞き手に強く強要することはできないという理由によるものだと考えられる。

吉井は「依頼される事態の実現が話し手自身の希望である同時に、何らかの形で聞き手のためでもある」（1998: 72）という指摘がある。

「ぜひ」について、更に話し手と聞き手の利益関係から分析することも可能である。

(c) 利益関係の相互性

「利益関係の均衡性」からいうと、依頼行為を行う際、話し手と聞き手の利益関係は相互的である。つまり、話し手の利益になる依頼は、同時に多少聞き手の利にもなる。聞き手の利になる勧めは、話し手も多少自分の利にするようという条件のもとで勧めているのである。ここでは「利益関係の相互性」と名付ける。話し手と聞き手の間にこのような「利益関係の相互性」があるからこそ、「ぜひ」で話し手の気持ちを強調することができるのである。「利益関係の相互性」はこの「ぜひ」のプロトタイプ的な意味と矛盾しない。

外面的に、話し手の利になるように見えても、聞き手に何らかの利があると把握されている例は次である。

(22) そのことを絶対成功させなければならない。ぜひお名前を貸してください。

この場合の依頼は聞き手にかかる負担が小さく、しかも、聞き手に精神的な満足感を与えることができるから、「ぜひ」との共起が認められる。

吉井（1998: 80）は「ぜひ」の意味について、「発話主体が実現を望む事態が、同時に相手にとって実現が望ましいことであるという判断のもとに、相手に実現を依頼し勧告し勧誘する場合に用いられる副詞である」と述べているが、しかし、(22) の場合はもし、話し手が依頼していることが聞き手にとって利になることではなく、逆に迷惑になる場合なら、その依頼は必ずしも聞き手にとって望ましいこととは言えなくなる¹⁴⁾。

14) もし、ここの依頼が聞き手にとって、迷惑なことであれば、仮説の(3)のaによって解釈することができる。つまり、話し手の利益になると同時に、聞き手の利にもなるというのは、「利益関係の相互性」の出発点であるが、ここの例は「利益関係の相互性」に違反しているようにも見える。しかし、もし、話し手の利になるのが大きいのであれば、話し手は言語上の補償行為をすれば、それでもいいわけである。例えば、表現を丁寧化するか要求の必要性を強調するかである。このような状況は「利益関係の相互性」に違反したとは言えず、a、b、cの間は意味的にお互いに関連しているのである。

「ぜひ」を使っている依頼文は、話し手が聞き手に依頼している内容が、聞き手が十分に対応する能力を持っているため、その負担は小さくなると同時に、聞き手の利益損失も小さい。そのために話し手が自分の気持ちを強調する余地も出るのである。

(d) 間接的価値付与

仮説の(3)cで説明すると、相手の実力からいうと、話し手の依頼内容に対して、提供してくれる可能性が十分ある時、軽く相手に依頼したら、失礼に当たる場合もある。場合によって、態度で強く依頼し、話し手が依頼することの必要性を強調すれば、相手の価値を認めることにもなる。依頼の必要性を強調することにより聞き手に対する一種のポライトになる場合がある。例えば、有名なコックさんに「玉葱の皮を剥いて」のような依頼は、コックさんにとって多分いい気にならないだろう。

もし、次のような依頼をしたら、

(23) 先生：最近新しい本を出版しました。

学生：ぜひ読ませてください。

(24) 皆は先生の講演を聞きたがっています。ぜひお願いします。

先生にとって、負担というより喜ばしいことであろう。

以上の例文のように、聞き手の利益のために、命令、依頼していることは、特別な語用論的な効果がある。ここでは、「間接的価値付与」と名付け、それは話し手が聞き手に負担をかけると見せかけ、実はその負担は聞き手にとって利益になることであり、一方的に勧めることにより相手に与える選択余地が少なく、話し手の誠意が感じられる。相手の利になるような行為を強く勧めるというのは、相手に対する一種の完全なポライトであると見なされる。

「ぜひ」によって、相手に依頼をし、或いは話し手の希望を強調することは相手の価値を求め、地位を高めることになり、結局相手の利に繋がるのである。

話し手の希望以外に、聞き手に対する要求・望みがなければ、「ぜひ」の使用は不自然である。例えば、聞き手の能力・可能性・意志或いは許可を尋ねるコンテキストに関しては「ぜひ」の使用は不適当である。

ここでは坂口 (1991: 40) の用例をいくつか引用する。

(25) 今度の日曜日、私もぜひ一緒に連れて行ってくれませんか。

(26) ぼく、あなたのファンなんです。ぜひ握手していただけますか。

(27) *来週の授業、ぜひ発表できますか。

(28) *今度の結婚式での祝辞、ぜひお願いしていいでしょうか。

以上の例は殆ど疑問文であるが、(25)、(26)の発語内の力は丁寧な依頼表現である。(27)

は可能を表し、(28)は聞き手に許可を求めている表現で、相手に働きかける発語内の力はないことと、話し手の希望、望みを表すものでもないため、「ぜひ」との共起はできない。

2.1.3.2.2 聞き手の利益のために聞き手への強い要望を表す

話し手が望んでいること、聞き手に勧めていることが聞き手によって実現する可能性が低いと感じる時、「ぜひ」で聞き手に強く自分の気持ち・望みを訴えることができる。聞き手の利益になるから、表現自体の丁寧さにこだわらなくてもいい。

坂口(1996:3)は「ぜひ」、「どうか」はともに、依頼機能には現われるが、命令機能の働きかけ文には現われないという指摘がある。

(29) ぜひ／*どうかあの人に聞きなさい。

坂口の説明によると、(29)の文が言えるというのは、形の上では命令機能の働きかけ文と同じだが、命令より強制力が弱く、命令形の勧め機能を表しているということである。ここで、(29)の例を命令形の勧めだと考えるというより、命令文の内部の性質によるものだと考える¹⁵⁾。(29)が命令と共起できるのは、その命令文は「絶対的命令」ではなく、「相対的命令」¹⁶⁾を表すからである。「相対的命令」というのは聞き手が言われていることを実行してくれる可能性が低いと話し手が感じ、「ぜひ」で話し手の強い希望を表し、相手に「拒否」されないようにと強要するのである。次の例も同じである。

(30) a: 遠慮することはない。ぜひ来い。

b: うん。(森本1994:164)

話し手が相手が遠慮し、来ないだろうと察知し、それを防ぐため言葉で強要するのである。「来る」の結果のほうに焦点を合わせ、話し手の強い希望・意志を表す。ここの「来い」という命令形は話し手と聞き手の上下関係によって命令形を選んだのである。「来い」は「相対的命令」で、聞き手に今すぐある行為を実行してもらうのではなく、これからのある決まっている時間内に実行してもらうという特徴を持つ。

「ぜひ」で相手に勧める時、話し手の一方的な意志を表しながら聞き手の気持ちも考慮する必要がある。

(31) この餃子美味しいよ、ぜひ食べてみてください。

15) ここで坂口の説に反論するのではなく、命令文の内部機能の一つ——「相対的命令文」だと考えたほうが妥当であると思う。つまり、「相対的命令文」における勧め機能である。

16) 相対的命令における「ぜひ」の使用は、話し手の強制力に焦点があるのではなく、命令された行為の結果に焦点を当てるのである。第二章の§5-6を参照されたい。

相手の利になることはすべて「ぜひ」と共起するというわけではない。「ぜひ」と共起できる勧め文は次の条件を守らなければならない。

(32) 相手が断わる可能性があること、裁量する余地のあることでなければならない

つまり、話し手が「ぜひ」で一方向的に勧めることができて、勧められる事柄自体に選択余地の可能性があることでなければならない。相手に強く勧めることは、お互いに相当する理由づけが必要である。

「ぜひ」は話し手の強い気持ちを表しているが、絶対的ではなく、聞き手の意見を配慮し、聞き手にも選択する余地を与えなければならない。絶対的な勧めではないから、相手はその勧めに対して、断わる余裕もできたのである。逆に言うと、相手が断わる可能性があるからこそ、話し手が自分の勧めを実現させるために、強く勧めることができるのである。

(31) の文は「～みてください」という裁量の余地を相手に与えているから、自然な文であるが、もし、次のように書き直したら、容認度が落ちる。

(33) ? この餃子は美味しいですよ、ぜひ食べてください。

「ぜひ」は裁量の余地を残さない勧めと共起できないのは、次の例文からも伺うことができる。

(34) a: あの島へ行きます。

b: そうですか。

① あちらでは蛇に気をつけてください。

② ? あちらではぜひ蛇に気をつけてください。(森本1994: 171)

(35) ? あの人は危険人物ですよ。ぜひ気をつけてください。

ここでの「ぜひ」は不適格であるというのについて、森本(1994: 163)は次のように説明している。話し手の発話は「警告」で、「警告は「ぜひ」とは相い容れにくい。「ぜひ」は聞き手にとって肯定的ないいことをもたらすような行為とのほうが合いやすいようである」ということである。ここで考えられるのは「～に気をつけてください」という表現は、話し手が勧めていることは、話し手の利益を損失することではなく、常識から言うと聞き手が断われない勧めである。相手が断わる可能性のないこと、或いは断われないことを「ぜひ」で強調するのは不都合であると考えている¹⁷⁾。

鈴木睦(1997: 62)は「話し手の領域」に関する制限の段階性を示しているが、聞き手自身の行動について言及する場合、敬語化する必要があるという指摘がある。(33)は容認度が低いが、(36)のように、聞き手の行為「食べる」を敬語化にしたら、文脈によって容認度が高くなる場合がある。

(36) 甲：これを、私に？

乙：ええ、ぜひ召し上がってください。（森本1990：96）

(36) について森本の説明によると、「話し手の熱意を強調している」ということであるが、ここではやはり、「食べる」という聞き手の行為を敬語化することによって、聞き手自体の動作を尊重することになり、聞き手への要求は緩和されるようになるのである。聞き手への思いが込められるようになることによって、容認度が高くなるのである。

もし、相手に勧めていることが、話し手が言わないと、聞き手がある理由で実行してくれる可能性が低い場合、「ぜひ」の容認度が高くなる。

(37) これはあなたの研究に関係のある本だから、ぜひ読んでおきなさい。

(38) 先生、この薬は風邪にとっても効きますよ。ぜひ、お試しになってください。

(39) 暇な時、ぜひ家に遊びに来なさい。

(37)、(38) は話し手が勧めないと、聞き手が知らないため、その行為を実行しない可能性がある。両方とも聞き手の利になるので、「ぜひ」での強調は語用論的に認められている。(39) は話し手が「ぜひ」で自分の要望を強く強調しなければ、聞き手が遠慮のため、期待される行為がその通りに実行されないかもしれない。聞き手にその行為を実行するようという認識を促す発話なのである。以上の勧めは、理由づけで聞き手に強く勧めているため、容認度が高いからである。

相手の利益になる勧めであっても、場合によって、相手にかける負担が大きい時がある。こういう時は、相手の利益を優先し、勧めの正当性を説明すれば、文の容認度が高くなる。例えば、次の例、

(40) この論文は500ページもありますが、あなたの研究に役立ちますよ。ぜひ読んでください。

17) 意味的に考えれば、「～気をつける」という構文は、否定の意味を含意するのである。例えば、

*ぜひ体に気をつけてください。

は

体を壊さないでください。

という意味を含意し、

*ぜひ蛇に気をつけてください。

というのは

蛇に噛まれないように注意してください。。

というような否定の意味を含んでいるためである。また森本（1990：101）、坂口（1991：41）、吉井（1998：66-67）、小林（1992：8）の指摘では、「ぜひ」は否定の表現と共起できないという理由によって、「ぜひ」は「～気をつける」と相容れない関係にあることが納得できる。中国語の「一定」は否定表現との共起は認められているので、「请注意～」（～気をつけてください）と一緒に使える。

500ページの論文を読むのは、普通大きな負担だと感じるが、でもこの場合は勧めの正当性を説明すれば、相手への利益を優先することになる。

中国語の「一定」は日本語の「ぜひ」の用法と基本的に同じようなことが言える。しかし、当然のこと、当り前のことで、聞き手がある理由でその行為を実行しない場合、話し手の好意のつもりで、聞き手に勧めることは許せる。

例えば、

(34)、(35)の例は日本語では容認度が低いが、中国語では適切な文である。

(34') 请一定注意蛇。

(35') 那个人很危险，请一定注意。

つまり、日本語では選択の余地を与えることによって、勧めによる影響を緩和することである。しかし、中国語のポライトネスの概念の中ではそうではない。相手の利益になる行為を選択の余地を与えずに勧めることは、相手の意志を配慮しなくても、失礼なことではない。

「ぜひ」は話し手が聞き手の利になる場合、相手の遠慮を察知し、そうした遠慮を前もって取り除き、相手が積極的に当該の行動を取るよう促しているといったニュアンスがある。また、一方「ぜひ」は話し手の強い願望を表すから、自分の強い願望を相手に向ける時、何かの正当な理由がなければ、相手に唐突な感じを与えることになる。

2.1.3.3 行為の程度性を含んだ表現との共起

命令するということは、もし聞き手に強制的に話し手の要求を実行してもらう場合なら、相手に有無を言わず、その行為を遂行させる。話し手の絶対的要求と強い願望とは意味的に相容れないため、「ぜひ」の使用は容認されない。例えば、飛行機のアナウンサーが

(41) a 飛行機がまもなく離陸します。シートベルトをお締めください。

b? 飛行機がまもなく離陸します。シートベルトをぜひお締めください。

の言い方は不自然である。つまり「ぜひ」は程度性のある依頼文・勧め文・相対的命令文との共起はできるが、絶対的命令文¹⁸⁾は程度性を持っていないため、共起ができない。「ぜひ」で相手に勧めていることは、話し手の意志・願望を強く相手に訴えるため、相手に押し付けているが、多少の選択権を与えている。

「ぜひ」と共起できないのは、まとめて具体的に以下の状況が考えられる。

① 義務づけられていること

18) 絶対的命令文とは、話し手と聞き手の絶対的な力関係を強調し、話し手の強制力は最も強く、要求された事態を聞き手が実現するかどうかという選択の自由度は極めて低いものを指す。第二章の§3を参照されたい。

義務づけられていることとは、話し手のほうから特別に要請しなくても、聞き手が事態の実現を100%してくれることを保証するということで、「ぜひ」を使用する余地がない。話し手が依頼していることが聞き手にとって、義務づけられているというのは絶対的命令文のことである。

(42) *ぜひ出て行け。

中国語も同じことが言える。

(42') *一定滾!

命令文は強制力が強く、聞き手の選択自由度は究めて低い。命令は事態実現の確率が保証されているので、「ぜひ」、「一定」により実現の必要性を強めて、事態実現を図る必要がない。

② 習慣的・常識的なこと

聞き手が行為を行う可能性から言うと、習慣的なこと、常識的なことであれば、話し手が言わなくても、聞き手がその行為を行う意志があるかどうかは別として、行う可能性が100%に近いと考えられる。そうすれば、話し手の願望を表す「ぜひ」で相手にその希望を訴える必要はなくなる。例えば、雨が降っている時、次のような発話はしない。

(43) *ぜひ傘をさしてください。

(43)' *一定把傘打上。

(44) a: 子供がおぼれています。

① 助けるのを手伝ってください。

②? ぜひ助けるのを手伝ってください。

b: はい、今すぐ行きます。(森本1994: 163)

雨が降れば、傘をさすのが常識で、改めて言う必要がない。(44)は子供がおぼれている状況で、今すぐ迅速に助けるのは、人間としての普通の常識である。つまり、この場合では助けるのを手伝うのは余程の理由がなければ、義務付けられていることである。常識のこと・当り前のことを相手に強く要求するのは、逆に言うと相手に対して不信感を表し、失礼な行為になるかもしれない。

③ 当り前のこと・当然のこと

当り前のこと・当然のこと或いはある集団のルールが決まりごとであれば、話し手の方から指示がなくても、相手が絶対そうするというに決まっている。集団のルールとか、決まりなどは話し手の個人的な意志とは関係なく、話し手の心情を表すモダリティ副詞と相性が悪い。だから、話し手が

自分の願望、望みとして、相手に要求することができない。これはまた「ぜひ」が程度性を表せない表現との共起ができないことと関連している。

(45) a 日本人は毎日お風呂に入らなければならない。

b? 日本人は毎日ぜひお風呂に入らなければならない。

「～なければならない」というのは義務を表すから、「ぜひ」との共起はできない。

また、当り前のことというのは、次の場面が想定できる。パーティーの始まりに料理が供された場で、主人が客に

(46) ?ぜひ、召し上がってください。

というのは不自然である(吉井1998:67)。ここで、相手の「食べる」行為が敬語化されたにも関わらず、語用論的な制約が強く働いている。つまり、パーティーに呼ばれたら、その場において、食べる行為が当然と見なされているからである。

2.1.3.4 まとめ

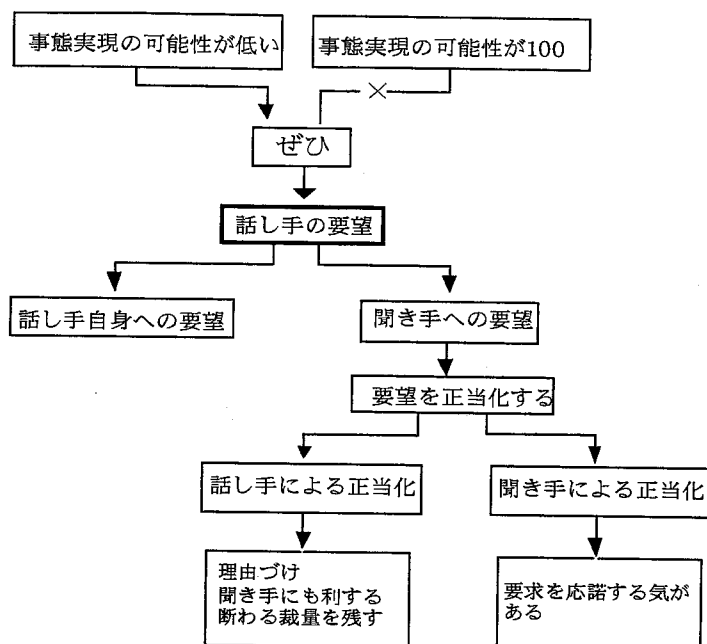
人間は依頼をする時、どういう言葉を選ぶかは、相手との利益関係などを基準にする。依頼する前の利益関係と依頼した後の利益関係が同じレベルでなければならない。つまりお互いの利益の均衡性を保つために、言語表現では、表現の丁寧さと、モダリティ副詞によって調節し、勿論依頼後の補修行為も含まれている。モダリティ副詞を使うかどうかは、話し手の側から、事態の実現可能性から判断する。実現可能性が低い時、「ぜひ」で話し手の気持ちを強調し、実現可能性が100%である時、

「ぜひ」で強調することはできない。というのは事態の実現可能性が100%であれば、話し手が依頼していること、勧めていることは聞き手にとって、断われないこと、裁量の余地を残さないことになるためである。「ぜひ」のプロトタイプの意味は、話し手の希望・願望を強調することである。話し手自身の希望を表すと同時に聞き手の応諾を望む話し手の希望・気持ちを強調することもできる。しかし、話し手が一方的に自分の要求を聞き手にぶつけること、決断することができず、自分の要望を正当化する必要がある。希望を表明して、聞き手に対して行為を促すために使われるのである。

言語表現では、強調に相当する依頼文でなければならないことと、強調する理由づけがなければならないという二つの条件が必要である。

「ぜひ」には派生的な用法として、基本的には二つある。まず、依頼文の場合、話し手が依頼の必要性・正当性を強調することにより、聞き手に働きかけるのである。次は段階性のある行為との共起ができる。この用法は1.2.2の仮説(2)と一致する。「ぜひ」の使用状況を次の図にまとめる。

図<2-1>



全体像を通してみると、話し手が自分の目的を達成するため、「ぜひ」で願望を表すことを通して、相手に働きかけると同時に、自分の強い要望を正当化が必要がある。というのは「ぜひ」を使う状況は事態実現可能性が低いため、話し手が熱意を持って強調する必要があるが、「相手にかける負担を小さくせよ」という語用論的規則に従い、事態実現するかどうかの裁量の余地を残し、選択する余地を与えなければならないのである。

2.2 「必ず」¹⁹⁾

ここでは「必ず」の意味を述べながら「ぜひ」と比較する。

2.2.1 「必ず」の先行研究

「必ず」についての研究は多いが、ここで関連する研究成果をいくつか挙げる。

2.2.1.1 坂口和寛 1996「副詞の語彙的意味が統語的現象に与える影響——働きかけ文での共起関係を中心に——」『日本語教育』91号、1-12

「必ず」は「100%の事態実現」、つまり「事態が100%の確実さで実現する」ことを表す。そのため命令機能ではいっそうその強制力を強め、依頼機能ではより確実な事態実現を図る。しかし勧め機能での弱い強制力と「必ず」の確実さは反発し、勧めには現われない (p.7) という。

以上の引用において、問題点だと感じるのは「事態が100%の確実さで実現する」ということである。この点については、後程改めて論じる。

2.2.1.2 森本順子1994『話し手の主観を表す副詞について』くろしお出版

19) 「必ず」は事態の実現する確実が高いというのを表すことにより、主に相手に働きかける機能を持つ「ぜひ」とは違い、モダリティ副詞である性格が弱い。しかし、中国語の「一定」と同じである面が多いため、一緒に比較することにする。

森本は「必ず」の意味については、次のようにまとめている (pp.74-75)。

- ① 「必ず」は習慣性にかかわっている。
- ② 「必ず」は推量の意味を表す。
- ③ 習慣的な読みは複数の行為を表す文に、また推量的な読みは単一の行為を表す文に現われる傾向があるようだ。

「必ず」の意味について、①と②の間の関連性が何かははっきりしていない。

次は以上の問題に触れながら、そこから「必ず」のプロトタイプの意味をより詳細に分析する。

2.2.2 「必ず」のプロトタイプの意味

事態の実現の度合を表し、主観的な態度で、物事の実現の確率・物事の結果の確実性は100%に近い²⁰⁾ という意味を表す。

2.2.3 具体的な用法

2.2.3.1 事態の実現を100%に近くしようとする話し手の決心・決断を表す

(47) a: 今度の試合は自信がありますか。

b: え、必ず勝ってみせます。

(48) 帰ったら、必ず母に申し伝えます。(現短10:161)

20) ここで、「100%に近い」、「ほぼ100%」だという言い方を使うというのは、「必ず」の意味は絶対的な確率を表すのではなく、相対的に理想的なゴールに近いという意味を表す。というのは「必ず」で表しているのは話し手の望み、思い込みが多く、少々主観的な要素を持っているから、絶対的な確率を表すということがありえない。次の例から、この論拠を裏付けることができる。

?3×2は必ず6になる。

*地球が必ず太陽を回る。

*春になると、必ず桜の花が咲く。

上の例は、自然法則、当り前のこと、絶対的な事実については、「必ず」の容認度が低いことを示す。つまり、当り前のことについては、余計な情報を付け加えることは余程の語用論的な理由がない限り、認められないのである。

雨が降ったら、必ず腰が痛くなる。

のように、人間の主観性が多少入ったら、文が自然になる。

3から2を引くと必ず1だ

は言えるというのは、「推論の過程」が含まれているということである。「推論の過程」はあくまでも、人間の思い込み、人間の思考が入っていることと同じである。つまり「必ず」は絶対的な客観性を表せないものである。事態の実現の可能性が100%であれば、モダリティ副詞、「必ず」の使用は認めない。「必ず」の用法は仮説(2)と一致する。

太陽は必ず東から昇る。

という文が言えるのは、やはりこの文は絶対的な真理ではなく、「太陽は必ず東から昇る」という知識を持っていない人間がいる可能性があるし、太陽が時期によって、「東」からではなく、「西」よりの「東」から昇るという事実に対して、その絶対性がなくなるのである。つまり、「必ず」は絶対的命題との共起は不可能である。

話し手の決心・決断を表すというのは、決心・決断していること自体はまだ実現されず、話し手の主観的な意志に過ぎないから、実現しない可能性も十分あるということによって、確率が100%であるとは言えない。

もし、物事が100%の確率で断言できるならば、「必ず」の使用は許されない。

(49) *私は必ず中国人だ。

「必ず」は話し手の希望・望みを表すことができない。

(50) *私は必ずアメリカへ行きたい。

「必ず」は話し手の希望・望みを表せないというのは「～タイは実現の確率が100%保証されていないから、それを願望するという表現であり、これは「必ず」の意味とは矛盾することになる」(小林1992:6)。これに関して「ぜひ」の用法とは違う。「ぜひ」は話し手の希望・望みを表すことができる。

(50') 私はぜひアメリカへ行きたい。

話し手の意志を表す場合、中国語の「一定」は日本語の「必ず」と同じである。

次は聞き手に働きかける場合、「必ず」によって、事態の実現の確率を100%近く聞き手に求めることができる。

2.2.3.2 100%に近い確率で、事態の実現を聞き手に求める

もし、事態の実現の可能性が100%でなければ、話し手が「必ず」で聞き手に事態の実現の結果を要求することができる。「絶対的命令文」の場合は、話し手が聞き手に行為の実現を命令し、その強制力が強く、要求された事態を聞き手が実現するかどうかという選択の自由を与えない。「必ず」と共起できるのは「絶対的命令文」ではなく、「相対的命令文」である。

しかし、小林(1992:13)は「必ず」は命令文との共起ができるということを主張し、次の例を挙げている。

(51) a: あの女を必ず殺せ。

b: 分かりました。(小林1992:11)

小林の説明によると、「これは a の b に対する強い命令であり、100%の確率で「殺す」という行為を b に成し遂げさせるものである」ということである。小林の説明は間違っていない。形式では、

「必ず」は確かに命令文と共起できるように見えるが、実際に話し手が相手に命令しているのは「殺す」という行為自体ではなく、「100%の確率」で行為が結果に達するよう要求しているのである。

(52) 東京についたら、必ずお母さんに電話しなさい。

(52) の例も同じように確実に「電話をする」という結果の方に焦点を当てているのである。というのは話し手は聞き手が自分の言うことに従わない可能性、或いは100%で受け入れる可能性がないのを感じて、結果のほうを強調するのである。

2.2.3.3 ある条件が整えば、常に結果がほぼ100%の確率で成立する

(53) この特効薬を飲めば、必ず治る。

(54) 雨が降ったら、必ず腰が痛くなる。

「この特効薬を飲む」という条件があれば、「治る」の可能性が100%か100%に近いと保障しているが、しかし、ここでの発話は主観的で、薬が同じであっても、人によって効かない場合もあるかもしれないので、絶対的な条件文ではない。

(54) も同じで、客観的な事実に基づいて、述べているように見えるが、痛みを感じるのは人間だから、人間の思い込みがあり、厳密的にいうと多少人間の主観性が含まれている。主観性があるからこそ、「必ず」の使用が許されるのである。

「ぜひ」は主観的な意味が強く、主観性を表す事柄が弱ければ、「ぜひ」の使用は不自然である。

(54') *雨が降ったら、ぜひ腰が痛くなる。

2.2.3.4 人間の常識・習慣・風習を表す語用論的条件のもとで、ほぼ100%の確率で決まった結果を生じる

小林 (1992: 15) は「必ず」の意義特徴について、次のようにまとめている。

必ず:

- ・ 確率がほぼ100%であるという意味である。
- ・ 繰り返し起こる可能性のあることについて言う。(過去の一度限りのできごとには言わない)
- ・ 変化の意味を持つ動詞に係る。(形容詞や名詞のような状態性の文では言わない)

小林の「繰り返し起こる可能性のあること」とは、ここでいうと、人間の「習慣・風習」的なことに当たる。「習慣・風習」的なことは、「繰り返し起こる可能性のあること」との内包が同じだと考えてよい。「過去の一度限りのできごとには言わない」だけでなく、話し手の決心を表さない限

り、現在の陳述的な文についても、「習慣的・風習的」なことでなければいけない。つまり、陳述文においては、テンスの過去形、現在形に関わらず、繰り返起こる可能性のあることでなければ、「必ず」との共起はできないということである。まず、小林の用例を引用すると、

(55) 私は必ず父の帰りを門の前で待ったものだ。(小林1992:6)

は過去の習慣の出来事で、

(56) 茂吉は、講演するとき、「はなし」が一くぎりすると、ほとんど、必ず、舌を、ちょっと、出す「くせ」がある。(現短2:111)

はいま現在の習慣である。

以上をまとめると、現在形でも、過去形でも、確率がほぼ100%に近く、習慣的なことを指す場合、必ず繰り返しの出来事を含意する。テンスという要素に関係なく、習慣的なことであれば、「必ず」との共起ができる。また、森本(1994)のまとめた意味①(2.2.1.2を参照)と一致する。

話し手側の決心を表す時、習慣的・或いは繰り返起こる可能性のあることでなくても、「必ず」の使用が可能である。というのは事態の実現する確率が100%に近く、可能性が高ければ、「必ず」との共起ができるからである²¹⁾。

(57) 今度の試合で必ず勝って見せる。

個別的なことについて、話し手が聞き手に要求する時、繰り返起こるという意味がない。

(58) 明日必ず来るのだ。

は「来る」の確率を100%であるよう聞き手に要求するのである。

2.2.3.5 「ぜひ」と「必ず」の違いについて

「ぜひ」のプロトタイプ的な意味によって当該事態の実現への主体の強い意欲・要求・願望を表すことから、話し手が自分の希望・望みを聞き手に訴え、事態の実現を望んでいる意味を表す。聞き手に事態の実現を強制する意味はない。「必ず」と同じように、「絶対的命令」と共起できないが、「相対的命令」と共起できる。しかし、「ぜひ」は「相対的命令」の「結果」の方を強調するのではなく、相手に命令に従わせるように、自分の強い希望で相手に働きかけるのである。よって、(51')のaは非文である。

21) 話し手の決心や推測を表す時、確率が100%に近いというのは「繰り返しの出来事」と意味的に関連性がある。というのは「確率」は「その現象がある範囲内で何回起こるかという割合」(新明解国語辞典1982:185)という意味を表すからである。

(51') a: * あの女をぜひ殺せ。

b: 分かりました。

(59) 辛いことがあったら、ぜひ帰ってこい。(小林 1992 : 13)

(60) 新しい家に引っ越ししましたから、ぜひ遊びに来てください。

(61) 新しい家に引っ越ししましたから、必ず遊びに来てください。

しかし、(59)の文は聞き手に行為の結果を成し遂げようと強調するというより、話し手の強い願望を表すと言える。もし、行為の結果に焦点を当て、聞き手にその行為を成し遂げようと強調する時には、(61)のように「必ず」と相性がよい。というのは、「必ず」は結果を100%まで達するという意を持つからである。

(51) a: あの女を必ず殺せ。

b: 分かりました。

「ぜひ」は話し手の強い望みを表すことによって、聞き手に働きかけると同時に、聞き手の意志も配慮し、聞き手に選択する余地を与える。「必ず」は話し手の一方的な決心・決断・相手への強制を表し、聞き手の意志を配慮せず、選択する余地を与えないが、話し手の主観的な思い込みが入っているから、相手が拒否する余地が多少残っている。「必ず」に関しては、話し手と聞き手の間の力関係から言うと、聞き手がその行為を実行する義務がないし、必ずしも話し手に従う理由もないので、絶対的命令文と区別する。次の例は学校の掲示物である。

(62) a お願い。講義終了後、黒板は次の講義のため、必ず消してください。

b* お願い。講義終了後、黒板は次の講義のため、ぜひ消してください。

(62)のお願いは相手に「黒板を消してもらおう」という結果に焦点を置いてあるが、聞き手が必ずしも話し手の言う通りに従うことはない。「必ず」は依頼表現と共起できる。しかし、「黒板を消してもらおう」という結果に焦点があるから、bのように話し手の強い願望のみを表す表現はふさわしくない。

小林(1992: 13)は「必ず」と「ぜひ」の違いについて、次の例を挙げた。

(63) 必ず遊びに行きます。

(64) ぜひ遊びに行きます。

上の二つの例の違いについては、小林は行為の遂行の決定力の強さに違いがあると述べている。話

し手の掌中に一番強く決定力があるのが「必ず」で、次に「ぜひ」だということである。しかし、「必ず」は「ぜひ」と違うレベルの意味を持っていると考えられる。つまり、「必ず」は物事の結果を重視し、「ぜひ」はただ話し手の願望を表すだけで、結果まではこだわらないのである²²⁾。具体的にいうと、(63) はただ話し手の願望だけではなく、話し手が決心した結果のほうを強調しているのである。(64) は話し手の願望を表し、別に行かなくてもよいのである。相手に勧める時、その違いはもっとはっきり分かる。

- (65) 医者：この薬を飲み続けなければ死んでしまいますから、(必ず?ぜひ飲んでください)
患者：はい。分かりました。(必ず?ぜひ) 飲みます。(小林 1992: 13)

つまり、「必ず」で相手に勧めるというのは相手に選択する余地を与えず、一方的な話し手の決断を相手に押し付け、医者としての立場にふさわしい。「ぜひ」が不自然だというのは、話し手の願望を表し、あとは患者に任せるという態度で、医者としての責任を果たしていない。患者も願望だけではなく、自分の命に関わることだから、決断と決心をしなければならないので、「必ず」の使用が自然である。

- (66) a* ぜひそこに参ります。
b 必ずそこに参ります。

(66) の a は意味的に「そこ」という目標地があるから、行為の結果性が強調される。だから、願望を表さない限り「ぜひ」の使用は不都合である。

- (67) a 今の仕事をぜひやらせてください。
b 今の仕事を必ずやらせてください。

「ぜひ」は話し手の希望を通して、相手に働きかけ、依頼の実現を求める。「必ず」は話し手の強い決断を表すから、強制的に相手に従わせる「結果」の方に焦点を当てているが、相手に働きかける機能は持っていない。

2.2.4 まとめ

22) 谷部弘子 (1986: 64-65) によれば、「一般に文に、描写の対象となる客観的事態を表す部分とそれをとらえて表現する言語主体の態度を表す部分とに大きく分けられる」。特に副詞に関しては、「客観的事態を表す部分を「コト」とすれば、情態副詞・程度副詞がコトの内容を詳述的な役割を果たすのに対して、いわゆる陳述副詞はコトの内容と直接の関係を持たずムードに関係する、というように両者にまたがるからである。さらに、「もちろん・あいにく・無論」など、「評価副詞・注釈副詞・文副詞」などいわゆる語群がある」という。ここでの「必ず」と「ぜひ」の違いはまさにコトの内容を詳述するものとコトの外にあって、文全体のムードを表すものの違いだと考えられる。「必ず」はコトの内容を詳述する役割を果たす、構文機能の上でコトの内部の要素として働く。「ぜひ」は話し手の主観的態度を表すのである。

「必ず」は「ぜひ」より主観性がそれほど強くないため、命令・依頼表現における用法は少ないようである。「必ず」は主に事態の実現の度合についての副詞であるため、「ぜひ」と違って、モダリティ、語用論のカテゴリーではない。命令・依頼表現においては、「ぜひ」は話し手の強い願望を通して、相手に働きかけ、相手に選択する余地を与えるのに対して、「必ず」は話し手が一方的に自分の決断を相手に押し付け、強制的に相手に従わせる意味を持っている。

2.3 「一定」

中国語では「祈使句」（命令・依頼表現）におけるモダリティ副詞の研究はまだ少ない。中国語の副詞は日本語と比べれば、少ないということが一つの特徴である。ここでは中国語の副詞「一定」を日本語の「ぜひ」、「必ず」と比較する。

2.3.1 「一定」に関する先行研究

呂叔湘（1992:392）の中国語の『用例辞典』によれば、「一定」の意味は次のようにまとめることができる。

- ① 意志の固いことを表す。第1人称に用いることが多い。第2、第3人称に使う時、多くは他人に必ずやる遂げるよう要求することを表す。動詞や助動詞「要、得」²³⁾の前に用いる。

(68) 我一定照办。（必ず言われた通りにやります）

(69) 你明天一定来啊！（君、明日必ず来なさい）

- ② 「一定不」は第1人称にのみ使う。第2、3人称には「一定+別（不要、不能）」を用いる。

(70) 我一定不忘记你的嘱咐。（あなたの言いつけは絶対に忘れません）

(71) 叫他一定别说出去。（彼に絶対しゃべらないようにいいなさい）

以上のように呂叔湘は統語論の立場から、「一定」の意味について論じた。

2.3.2 「一定」の定義

「一定」は「ぜひ」、「必ず」と同じように、事態の実現する可能性が低い時、話し手が使用するのである。次のように定義する。

話し手の固い意志を表し、相手にある行為を必ずやり遂げるように要求することを表す。

23) 「要」の意味は「助動詞、～しなければならない、すべきである、～する必要がある。必要、義務を表す」（『中日辞典』1992:1698）である。「得」は「助動詞、～しなければならない」（『中日辞典』1992:302）という意味を表す。

2.3.3 「一定」の用法

2.3.3.1 話し手の強い意志・固い決断を表す

話し手の強い意志・固い決断という意味を表す場合は、統語的・意味的に二つの用法に分けられる。一つは、話し手の強い意志を強調するということである。

(72) 你说的我一定照办。(必ず言われた通りにやります)

二つ目は話し手の決断を表すが、呂は第2、第3人称の場合、動詞や助動詞「要、得」の前に「一定」を用いると言っている。しかし、実は二人称、三人称だけでなく、一人称の場合でも、動詞、助動詞「要、得」は使える。「要」を使う時は、話し手の意志を強調し、「得」を使う時は話し手の決断「～しなければならない」を表すのである。

(73) 我一定要找到他。(私は必ず彼を見付け出す)

(74) 明天的会我一定得去吗?(明日の会議私必ず行かなければならないのですか)

この場合の「一定」の用法は、意味的に日本語の「必ず」と同じで、両者とも話し手の願望を表す表現と共起できない。

(75) *我一定想去美国。(私は必ずアメリカへ行きたい)

2.3.3.2 聞き手に対する強い要求を表す

話し手が依頼したことを聞き手が実行してくれる可能性が低いと話し手を感じた時、聞き手にそうしてほしい時、「一定」で話し手の強い意志を表すことができる。更に、相手と妥協しない姿勢を見せ、依頼していることが聞き手の義務であるように強調し、「一定」の後に、動詞と助動詞「要、得」を用いることができる。

(76) 你一定得把这杯酒喝了。(あなたは必ずこの一杯のお酒を飲まなければならない)

(77) 今天的会议,你一定得参加。(今日の会議あなたは必ず参加しなければならない)

(78) 这件事你一定要办成。(このことではあなたは必ず成功しなければならない。)

以上の例文は、聞き手に依頼していることが話し手の利益になるか聞き手の利益になるかに関わらず、聞き手の義務内のことであるように強調すれば、話し手のほうから強く要求することができる。

もし、話し手が要求していることが聞き手の義務内のことであるように強調すれば、聞き手に妥協しないという点では、命令文の中に現われることができる。しかし、この用法は「必ず」と同じで、聞き手に動作・行為自体を命令するのではなく、行為の結果²⁴⁾に係っているのである。

(79) 一定把这碗汤喝了。(このスープを必ず飲んでください)

(51) a: あの女を必ず殺せ。

b: 分かりました。(小林 1992: 11)

(51') a: 一定要把那个女的杀了。

b: 明白了。

もし、依頼していることが聞き手の義務でないと想定すれば、更に聞き手に負担をかける場合なら、「一定」で聞き手に強要することができない。

(80) *请你一定借给我十万日元。(十万元必ず貸してください)

相手にかける負担がそれほど小さくなく、また、表現自体が丁寧であれば、「一定」の使用が認められる。

(81) 请你一定帮帮我这个忙。(ぜひこの件のことを手伝ってください)

相手に要求していることが相手の義務であると想定し、つまり助動詞「要、得」を使って、相手に行為の結果に焦点を当て、実現を強く要求することができる。この場合の表現自体は意味的に強い口調を表すため、相手に命令する時((51'))や相手の利になる時に使われる((83)、(84))。これはちょうど日本語の「必ず」の用法に当たる。もし、相手に裁量する余地を与え、話し手の強い願望を表すなら、「要、得」を伴う必要がない((60')、(82)、の例)。これはまた、日本語の「ぜひ」の用法に当たる。

(60') 我们搬了新家, 请一定来玩。(私たちは引っ越しました。ぜひ遊びに来てください)

(82) 届时务祈赏光, 一定, 一定。(その際は何とぞご光臨願います。是非是非)

(83) 明天一定来啊。(明日必ず来なさいよ)²⁵⁾

24) 命令文と言っても、「一定」と「必ず」と共起のできる命令文は意味的に限られている。例えば、次の命令文は不自然である。

*必ず待て! (*一定站住!)

*必ず出で行け! (*一定滚出去!)

動作・行為の結果性を強調する命令文(相対的命令文)なら、「一定」と「必ず」は同じような機能を持つ。つまり、動作の結果に焦点を当てているのである。

必ず洗濯を全部済ませろ! (一定要把衣服全部洗完!)

日本語では言語形式から、結果性というのを判断するには明確な形式がないが、中国語では「把」構文による命令文が結果性を表すのが多いようである。

25) この例文は助動詞「要、得」を省略したものだと考えられる。

- (84) 这是我的心意，你一定得收下。（これはほんの少しの気持ちですから、必ず受け取ってください）

2.3.3.3 話し手の推測を表し、物事の実現の確率が高いということを表す

この用法は「必ず」とよく似ている。ただし、中国語の「一定」は、推測の確率が高いという意味を表す場合、有標（marked）であって、助動詞「会」の使用が必要である。

- (85) 他一定会来的。（彼は必ず来る）

以上の例文から、こういう結論が得られる。つまり、日本語では、相手に勧める時、聞き手の意志を考慮すれば、「ぜひ」で、聞き手の意志を考慮しなければ、「必ず」になるが、中国語の「一定」は日本語の「ぜひ」と「必ず」と両方に対応している。使い分けは動詞、助動詞の「要、得」というマーカがあるかどうかである。「要、得」があれば、日本語の「必ず」、なければ日本語の「ぜひ」である²⁶⁾。また、「必ず」は推測を表すことができるが、中国語の「一定」は推測・推量を表す時、「会」というマーカが必要である。

2.3.3.4 聞き手に利となる用法に関する「一定」と「ぜひ」、「必ず」の違い

2.3.3.2 では聞き手の利する用法に少し触れたが、ここでは聞き手に利となる場合、中国語と日本語の違いについて少し観察する。

i. 勧め文における違い

- (86) 你一个人去了日本以后，一定要注意身体。（日本に行ってから、必ず体に気をつけてください）

「体に気をつける」ことは、人間の常識のこと、或いは相手が断われないことで、(86)は「一定」との共起はできるが、日本語の「ぜひ」は不適切である。

中国語の勧めでは、相手の利益になるなら、相手のことを配慮する必要はなく、一方的な勧めはポライトネスである。というのは、もし、話し手から強要しないと、聞き手が勧めをキャンセルする可能性があるからである。語用論的に「一定」の使用はここで許されるのである²⁷⁾。「一定」は相手

26) ここで言っているのはただ統語的な現象だけでなく、コンテキストの要因も考慮している。と言うのは、文脈によって、「要、得」を省略する場合がある。ただ「要、得」があるかないかによって、「一定」の意味を判断することは厳密的ではない。例えば、

明天一定来啊。（明日必ず来なさいよ）

という文に、語気助詞「啊」があるから、話し手の要望が強くなるのであって、「一定」は「必ず」の意味に当たる。

27) ここでは文化による要因も考えられる。中国では、食事に招待されたら、遠慮して、あまり食べない振りをし、料理を少し残すのが礼儀的である。少しくらい残したら、相手のもてなしが話し手にとって十分すぎだということをほのめかすのである。よって、食事の時、ご主人に勧められながら、食べるのが習慣である。逆に日本では美味しく食べるのが礼儀で、出された料理を全部食べ終わるのが常識であるから、勧めてもらう必要がない。中国では普通お土産をもらう時も最初は断わるのが常識である。つまり、中国では相手から恩恵を蒙る時、積極的に自ら申し出るのが、行儀悪いとされる。

に裁量する余地を与えない動詞との共起ができる²⁸⁾。

(33') 这饺子很好吃, 你一定多吃一点。

ii. 否定命令文——禁止表現における違い

中国語では、話し手の望ましくないことにならないようにと、話し手が相手に念を押すために「一定」を禁止表現²⁹⁾と一緒に使うことができる。

(87) 你一定不要忘了。(絶対に忘れてはいけないよ)

(88) 叫他一定别生气。(絶対に怒らないように彼に言ってやりなさい)

(89) 我一定不后悔(私は絶対後悔しません)

禁止表現との共起は日本語の「ぜひ」、「必ず」には適合しない。

(90) *ぜひ忘れないでください。

(91) *必ず忘れないでください。

禁止表現と共起する時、日本語では「絶対」、「くれぐれも」が多用されるようである。

2.3.4 まとめ

以上の比較から、「一定」は日本語の「必ず」の用法に近いことが分かった。時には「ぜひ」の用法とも重なっているが、それは「要、得」というマーカーがない時である。中国語の「一定」は話し手の願望を表す表現「想～」とは共起できないが、日本語の「ぜひ」は「～したい」と共起できる。

「一定」はまた、禁止表現との共起もできる。禁止表現と共起する時、日本語の「絶対」に相当する。中国語の「一定」の意味は日本語のいくつかの副詞の意味と重なっていることは、中国語の副詞が日本語より少ないことを一面的に物語っているのである。

中国語の「一定」と日本語の副詞の機能に関する対応関係を以下の表にまとめる。

28) (33) の日本語を中国語に直訳すると、

*这饺子很好吃, 你一定吃。

は非文になるが、これは「一定」が動詞「吃」と共起できないということではなく、中国語の動詞の特徴によるものである。つまり、相手に指示している動作の量を限定する必要があるということである。正しくは

这饺子很好吃, 你一定多吃一点儿。

である。

29) 禁止表現と一緒に使う時、中国語は統語的に以下のような特徴が見られる。

一人称の場合は「一定不～」を使い、二人称、三人称の場合は「一定+別(不要、不能)～」(中国語用例辞典、1992: 392)という形を使うのである。

図<2-1>

中国語	一 定		
	(一定) 会	(一定) 得、要	一定 *一定想～
日本語	必ず (強い確信)	必ず (強い意志)	ぜひ ぜひ～したい

§3 「くれぐれも」と「千万」

中国語の「千万」の「千」は、多いことをたとえて用いられる。「万」と「百」と呼応して用いられることが多い。「千万」は文字通りで数量を表しているが、副詞として使われる時、数量的な用法はなくなる。数量の多いことを借りて、話し手の気持ちを強調する働きをする。日本語の「くれぐれも」は何度も繰り返して言いふくめるような念の入った指示や忠告、頼みごとの場合に用いられる。中国語の「千万」と日本語の「くれぐれも」とは機能的に似ているところが多く、ここで、一緒に分析する。

3.1 「くれぐれも」と「千万」のプロトタイプ的な意味

未来の具体的な依頼事に対して、重ねて念を入れるという意味を表す。

3.2 「くれぐれも」と「千万」の典型性条件

- i. 時間が経つにつれ、聞き手が話し手の依頼を忘れたり、或いは自分自身のことに不注意になるおそれがある場合
- ii. 発話現場における行為ではなく、これから行われる行為についての場合
- iii. 話し手が念を押す内容が具体的である場合

3.3 「くれぐれも」と「千万」の典型性条件についての検証

以上の典型性条件を検証しながら、「くれぐれも」を使用するコンテキストについて分析する。

3.3.1 相手に念を押す場合

時間が経つにつれ、聞き手が話し手の依頼を忘れたり、或いは自分自身のことに気をつけないおそれがある時、それを防ぐには、話し手が念を押す形で相手に注意する時、「くれぐれも」と「千万」を使う。

相手に念を押す場合、肯定式の構文と否定式の構文と二つを持っている。

中国語では、「勸め文」として相手に注意したり、提言したりする時、よく使われる。

- (92) 我知道什么也阻止不了她的复仇计划，我只是喃喃地说：千万要小心！小心！（なんでも彼女の復讐計画を阻止できないと分かっていた。私はただ呟いて、くれぐれも気をつけて！気をつけて！）（梦醒东京七）
- (93) 你一个人去了日本以后，可千万要注意身体。（一人で日本に行ったら、くれぐれもお体に気をつけてください）

「一定」も同じような働きを持っているが、「千万」ほど話し手の気持ちを強く表していない。

- (94) 你一个人去了日本以后，可一定要注意身体。（一人で日本に行ったら、くれぐれもお体に気をつけてください）

日本語の例は、次である。

- (95) お前は人の言うことをすぐ鵜呑みにする方だから、悪い奴に騙されないように、くれぐれも気をつけるんだよ。

肯定式による中国語と日本語の用法はともに少ないようである。

「くれぐれも」と「千万」は聞き手がある事を忘れたり、気をつけなかったりするのを話し手の方から注意するために使うのだから、統語的に否定依頼文・否定勧め文と共起しやすい。

- (96) は話し手は自分の望ましくないことが発生しないようにと相手に念を押す。

- (96) くれぐれも火を消すのを忘れないでください。

話し手は聞き手の利益のために、聞き手の行為が望んでいない方向へ行かないように、相手に注意・提言する場合でも、「くれぐれも」を使うのである。形態的に文末表現の「～しないように」とか「～しないでください」、「～ようにしてください」などと呼応する。

- (97) くれぐれも油断をなさらぬよう。
- (98) くれぐれも高圧電線には触らないでください。

自分にとって望ましくない状態にならないようにそれを防ぐため、中国語の「千万」は禁止表現「不要」と「別」と一緒に使うことができる。「千万」で話し手の願望を懇ろに念を押したり、言い聞かせたりするのである。

- (99) 明天的会议很重要, 请千万不要迟到了。(明日の会議はとても重要です。くれぐれも遅刻しないように)
- (100) 请千万不要忘了我告诉你的那句话。(私があなたに言ったことをくれぐれも忘れないでください)
- (101) 你千万不要忘了。(是非忘れないでください)
- (102) 叫他千万别说出去。(彼に絶対に誰にも言わないように)

3.3.2 発話時点の依頼に対して、「くれぐれも」と「千万」は適応しない

- (103) * もう時間がないから、くれぐれも早くしてください。
- (104) * 先生、この問題はどうしても分からない、くれぐれも教えてください。
- (105) * くれぐれもお茶をお飲み下さい。

現場における発話で、相手にすぐある行為を実行してもらいたい場合、相手が依頼されたことを忘れるという可能性はまず考えられないし、念を押す必要もなくなり、「くれぐれも」の使用は不適格である。

- (106) すみませんが、あのことをくれぐれもよろしくお願いします。
- (107) 皆様にくれぐれもよろしくお伝えください。

以上の二つの例は、すぐ相手にある行為を実行してもらうのではなく、念を押す意味として使うのである。

- (108) * 你站在那儿我们看不见, 请千万坐下来。(あなたがそこに立っていて、私たちが何も見えないから、くれぐれも座ってください)
- (109) * 我想给他写封信, 请你千万告诉我他的地址。(彼に手紙を出したいが、くれぐれも彼の住所を教えてください)

中国語の「千万」も相手にすぐある動作をしてもらうようという要求行為をするには、念を押す働きをする「千万」との共起はできない。この点において、日本語の「くれぐれも」と同じである。

3.3.3 談話的には初出の文、「儀礼的依頼文」には用いられない

話し手が依頼事を頼んでから、また、念のために相手が忘れないようにと、もう一回確認する時、「くれぐれも」と「千万」を使うのである。談話的には初出の文には用いられない。つまり、依頼し

ていることについては、相手がすでに了解しなければならない。例えば、初対面の人に自己紹介をするとき、いきなり

(110) *くれぐれもよろしくお願いします。

(111) *请千万多多关照。(くれぐれもよろしくお願いします)

のような言い方はしない。というのは話し手が相手に実際に依頼する内容がないのに、押しつける形で強調することは、不自然である。

また、(110)、(111)のような依頼内容がない挨拶的・儀礼的依頼文には「くれぐれも」と「千万」が使えないのである。

3.3.4 「くれぐれも」と「千万」は話し手自身に関する物事の場合は使わない

(112) *私はくれぐれも体を大事にする。

(113) *我千万要把这些练习作完，哪怕星期日少休息半天呢。(私はこれらの宿題をどうしてもやってしまいます。たとえ日曜日半日休まなくても)

念を押すというのは、相手が要求されたこと、言われたことを忘れるだろうと想定し、それを防ぐために発話するのだから、話し手自身のことについては使わない。

3.3.5 命令・依頼表現における用法

命令文は、聞き手が言われたことに従うのが絶対的だと話し手が信じて、聞き手も話し手の言うことに絶対的に従うという前提があるから、更に「くれぐれも」と「千万」で相手に依頼・懇願する必要はない。「くれぐれも」と「千万」は命令文との共起はできない。

(114) *くれぐれも行くな。

(115) *千万滚出去。(くれぐれも出ていけ)

話し手の願望を表す時、話し手の利益になる場合だけではなく、相手の利益になる場合も使うことができる。単純に話し手のための利益なら、時には厚かましさが感じられるが、しかし、話し手が利益を得るような振りをしながら、聞き手の利益にもなる時、「見せ効果」があって、相手を立てることになる。

(116) 到我们开幕的时候，您千万来看看，提提意见。(私たちが開店する時にはぜひとも見に来て、お気付の点をおっしゃってください。)

3.4 まとめ

以上の内容をまとめると、「くれぐれも」と「千万」は話し手の望んでいない方向へ行かないようにと、聞き手に強く注意し、念を押すという働きを持っている。また、話し手は聞き手が当該の行動をとるべきことを忘れるかもしれない、或いはそれに十分に積極的でないとといったことに対する話し手の懸念があり、こうした状況認識に基づいて、聞き手に指示内容に対する認識を促す発話行為なのである。

中国語の「一定」は「千万」と違って、話し手の願望・意志を表すことができる。自分の行為については絶対そうするという決意を表すこともできる。「千万」は話し手が相手に依頼・勧めていることをどうしても相手に実行してほしいという気持ちが強い。「千万」と「一定」とを比較すると、「千万」は「一定」より相手に念を押す度合、強調している度合が高い。

例えば、禁止表現において、「絶対そうしてはいけない」という意味を表す時、「一定」より「千万」を使うほうが適切である。というのは「千万」は相手に妥協する余裕を与えないが、「一定」は多少相手に余裕を与えているからである。

(117) a* 这是高压电, 一定不要用手动。(これは高電圧です。必ず手で触れないこと。)

b 这是高压电, 千万不要用手动。(これは高電圧です。絶対手で触れないこと。)

§4 「どうか」と「何とか」

日本語の「どうか」と同一の意味・機能を持つ中国語の副詞はないと言える。ここでは日本語の「どうか」と「何とか」について分析する。

4.1 「どうか」

4.1.1 「どうか」に関する先行研究

「どうか」については、森田(1977:317)が「無理難題を承知で、そこをなんとかと頼む気持ち」が強く、「自己のために、あるプラスの状況が実現することを希望する」ものとしている。

森本(1994:152)は話し手が、聞き手に対して自分が権威を持たないと想定するような文脈においてのみ生じるという指摘がある。

吉井(1998)は依頼の文に用いられる副詞「ぜひ」を主に「どうか」と比較しながら意味用法の記述を行った。「どうか」について「「どうか」は、基本的に発話主体の側に切実な必要や欲求が存在する場合に、相手に負担をかけることであっても依頼することができ」(p.70)、「相手の状態を顧慮せずに、とりもあえず依頼する」(p.79)という。

坂口(1995: 46-47)は統語的特徴に関わる「ぜひ」、「どうか」の意味を分析した。「どうか」についての分析は以下である。

聞き手に対する働きかけが「懇願」の意味を持つことを表す。「ぜひ」のように話し手の希望的的心情部分ではなく、むしろ話し手の要求態度に焦点を当てる。そのため、働きかけ文の肯定・否定といった差には制限されない。また、「懇願」という意味を表すことから依頼機能の働きかけ文にしか現われない。

また、坂口は「「ぜひ」とは異なり、「どうか」は勧め機能の働きかけには現われない。勧め機能の性質上「懇願」を表せず、「どうか」の現われ余地がないためである」という指摘があるが、この点については反例があるが、後程分析する。

4.1.2 「どうか」のプロトタイプ的な意味

話し手が丁重に自分の希望がかなうように望む様子を表す。

4.1.3 「どうか」の典型性条件

「どうか」というモダリティ副詞を使うか否かは、1.2.1の仮説(2)によって判断できる。聞き手が話し手の頼みを実現してくれる可能性があれば、「どうか」の使用は必要としない。実現してくれる可能性が低ければ、「どうか」で懇願することができる。

次は「どうか」の典型性条件について考えてみる。

- i. 話し手と聞き手の関係が「疎」³⁰⁾であって、聞き手が話し手より力関係において有力である³¹⁾。
- ii. 依頼している行為を実行するかどうかは、聞き手に任せる。

30) ここでの「疎」の意味は話し手が聞き手に依頼をする時、聞き手から離れ、その間に距離をおき、聞き手を立てて、お願いをするのが特徴である。例えば、神様にお願いするなど。

31) 力関係において、聞き手が話し手より有力である状況というのが次のように想定できる。

- 1 話し手が自分の自らの力でやり遂げることができず、非力だと感じ、聞き手に頼るしかない。
- 2 聞き手が話し手の依頼に応える能力を十分持っているが、実行してくれる様子が明確ではない。

以上の二つの状況があるからこそ、話し手が衰れっぽく聞き手に依頼することが想像できる。1の用例は(118)、(119)を参照。2の例は森本(1994: 157)のを引用する。

S: あなたと話す気はありません。

H: そんなことは言わないで、

- a. ドアを開けてください。
- b. どうかドアを開けてください。

集金と募金の呼びかけも「どうか」の使用が可能である。

戦車の向こうで苦しんでいる子供たちに、どうかみなさまのお力添えをお願いいたします。

iii. 話し手と聞き手の両者の利益になれる³²⁾。

4.1.4 「どうか」の典型性条件についての検証

4.1.4.1 話し手の能力・権威が非力であることを表す場合

話し手の能力・権威が非力であるというのは、話し手が自らの力で自分の望み・願い・目的を達成することができず、相手に頼るしかないということである。

(118) 先生のおっしゃる通り何でもいたしますから、どうかこの子の病気を直してください。

(119) おれが死んだら、どうか御母さんを大事にして遣ってくれ。

(118) の話し手は先生ではないから、当然子供の病気を見ることができず、先生に頼らざるを得ない。(119) の話し手が亡くなったら、勿論お母さんの面倒を見ることができなくなり、話し手の無力を表す。

「どうか」は話し手が聞き手への要求態度を表すから、話し手自身の希望・意志を表す場合は「どうか」には現われない。

(120) * どうか中国へ行きたい。

もし、相手が頼みを実行してくれる可能性が明確である時、話し手が「どうか」で依頼・懇願する必要がなくなる。

(121) a: この机はどこに置きましょうか。

b: ① その隅へ置いてください。

②? どうかその隅へ置いてください。(森本1994: 158)

聞き手が机を運ぶという話し手の要求に対応することがもうすでに明らかになっているから、改めて聞き手に懇願して頼む必要がない。

4.1.4.2 話し手が依頼を実行するかどうかは聞き手に任せる

「どうか」の場合、聞き手が話し手の依頼に応じる能力を持っているが、二人の間の利益と負担の

32) 「利益」には、話し手の利益、聞き手の利益、そして、第三者の利益があると考えられるが、ここでは、話し手と聞き手の立場から考慮し、話し手(話し手側)の利益、聞き手(聞き手側)の利益という二分類に分け、第三者を文脈により、どちらかに入れることにする。例えば、

すみませんが、どうか、聡子さんの相談にのってやってください。

あの人のために、どうか私にやらせてください。(坂口1995: 46)

はともに話し手の利益になると考えている。

バランスから考えると、聞き手にかける負担が相対的に重くなる。力関係では話し手に不利である。相手にかける負担が重ければ、相手に断わる余地を十分に与えると同時に、精神的な満足感を与えたり、低い姿勢でお願いしたりするストラテジーが必要とする。よって、「どうか」は話し手の依頼を聞き手の判断に委ねているため、選択余地を十分に与えている。また、「どうか」の使用は話し手の「哀れっぽいトーンを伴い」（森本1994:158）、話し手の非力を強調し、反面に聞き手の有力を認め、聞き手に精神的な満足感を与えることになるのである。

(122) 一生懸命にやりますから、どうか私にこの仕事をやらせてください。

「どうか」は話し手が聞き手に行為を依頼する時、多少無理だと感じ、「何とか」と同様困難な状況を承知の上で、自分が切にお願いをし、懸命に頼む・懇願する意を表す。目的が達成できるかどうかは聞き手に任せるということである。つまり、話し手の依頼を実行してくれるかどうかの決定権は聞き手にあるのである。例えば、神様へのお願い、

(123) どうか、今度の入試がうまくいきますように。

「どうか」は話し手の能力が弱く、無理に依頼していることを表すため、聞き手に十分な選択権を与えなければならないので、話し手の一方的な命令・依頼は「どうか」とは共起しない。

(124) *どうか来い。

「どうか」で依頼している行為を実行するかどうかは、聞き手に依存するから、話し手はそれについて発言する権利を持っていない。

(125) *中国はとてもいい国ですよ。どうか一度行くべきです。

このような勧めを坂口（1996:4）は「当為系」と名付け、「「当為系」は“そうすべきだ、そうあるべきだ”、という話し手の当為判断を表す形式を用いた勧めである」と述べている。

4.1.4.3 話し手と聞き手の両方の利益になれる

森本（1994:158）、坂口（1995:45）は「どうか」の使用は、「話し手を利すること」という指摘があるが、次の例は反例になる。

(126) 先生、どうかお体をお大事になさってください。

(127) 貴方は、どうか生涯その心掛を忘れずにいてください。その心掛は、貴方の宝ですよ。

「どうか」の依頼していることは、話し手と聞き手の両方の利益になれる。上述の意味は相手や他人の身の上を案じ、相手や他人の利を願うことになる。

4.1.5 まとめ

「どうか」の現われる文脈は、話し手と聞き手の力関係で制限される。二人の力関係がもともと相手のほうが有利であるため、話し手が依頼をしたら、話し手と聞き手の間の利益の不均衡を生じる恐れがあり、話し手は自分の非力を感じ、或いは聞き手が自分の要求を簡単に応じてくれないだろうという想定で、無理を承知で頼むのである。

4.2 「何とか」

「何とか」は相手によって、事態の実現可能性が低いと話し手が感じる場合に依頼文と一緒に使うことができる。

4.2.1 「何とか」のプロトタイプの意味

話し手がある目標を達成したいという気持ちが強く、困難を承知の上で懇願するという意味を表す。

4.2.2 「何とか」の具体的な用法

「何とか」が使える条件としては、話し手の目的が具体的で、明確でなければならない。またその目的を実現するために、いろいろ工夫する必要がある。つまり、「何とか」は話し手がいろいろな方法を考え、あらゆる手段を尽くし、場合によって無理を承知の上で相手をお願いをするのである。話し手が目的に達しようという強い気持ちを表す。具体的な用法は以下のようにまとめられる。

4.2.2.1 話し手の強い意志・願望を表す

話し手は目的を達成するため、自分の強い意志を表すことができる。

(128) 「誰かうちの息子の嫁に来てくれる人はいないもんかねえ」「よし、おれがなんとか見つけてやろう」(飛田・浅田 1994: 417)

(129) この子の命をなんとか助けてやりたい。(飛田・浅田 1994: 418)

上の二つの文は話し手があらゆる手段を尽くして希望を満たしたいという強い気持ちを表す。

4.2.2.2 相手に依頼・懇願するという意味を表す

「何とか」で相手に依頼をする時、話し手が自分の具体的な要求・望みを提示し、相手に実現してもらいたいという気持ちが強い。

(130) 早くなんとか手を打たないと、大変なことになりますよ。

(131) お忙しいことは承知していますが、何とか明日までに仕上げていただけないでしょうか。

(132) a: あしたまでに仕上げるのはちょっと無理ですね。

b: そこを何とかできないでしょうか。何とかお願いしますよ。(砂川 1998: 419)

以上の例文のように、「何とか」の後に手段を講じて、何かをするという意味の動詞を従えて、「何らかの手段を尽くして」という意味を表す。

「何とか」は「実質的依頼文」(第二章の 3.4.6 を参照)としか共起できない。話し手が目的を実現したいというのは、具体的な依頼内容がなければならない。よって、儀礼的・慣用的な表現としては使えない。例えば、挨拶表現は「何とか」と相性が悪い。

(133) *何とかよろしくお願いします。

ある目的を達成するために、もし、その行為の実行が簡単で、単純であれば、「何とか」は使えない。

(134) *何とかお茶を入れてください。

「何とか」はある行為を実行するために、いろいろな工夫をしたり、いろいろな方法を考えたりする必要がある。例えば、電気とガスのないところで、お茶を飲みたい時、薪を集めたり、火を起こしたりしないと、お茶が入れられない時、次の文の容認度が高くなる。

(135) 何とかお茶を入れてください。

話し手は自分の目標に焦点を当て、それを達成するために、あらゆる可能性を探って、相手に自分の要求に答えてほしいという強い願望があるから、「どうか」と違って、神様にお願いする時は使わない。

(136) ? (合格祈願) 何とか第一志望に受かりますように。

「なんとか」は話し手の懇願を表す時、「どうか」と同じように命令文との共起はできない。

(137) *なんとかあっちへ行け。

4.2.2.3 目的が明確でなければならない

話し手が相手に自分の要求をいろいろな手段を尽くして実現してもらいたい場合は、その目的が具体的でないといけない。

例えば、

(138) *何とか、お体をお大事に。

の「お体をお大事に」は具体的な目的とは言えない。つまり、目的が漠然としていて、それを実現する手段・方法も具体性がなくなる。(138)の文を次のように直したら、言える。

(139) 何とか風邪を治してください。

4.3 「どうか」と「何とか」の違いについて

「どうか」と「何とか」の共通点、相違点を中心に見ていこう。

4.3.1 話し手が懇願する時の態度に違いがある

「どうか」は相手に強く懇願しているが、相手が行為を実行するかどうか相手次第であって、消極的な依頼である。つまり、依頼が成功するかどうかは、相手に任せるという形をとる。

(140) どうか、早く戦争が終わりますように。

(141) どうか、父と母が無事でいますように。

「どうか」は消極的な依頼だからこそ、依頼している相手が自分の望みを実現してくれるかどうかは全く自信がない。神様などに自分の望みを祈願するとき、「どうか……ますように（お願いします）」のような言い方をする。もちろん、神様などに祈願する時、神様はそうしてくれる可能性もないし、自己の希望が必ず叶うとはだれもが保障してくれないのである。(140)、(141)の例はともに話し手の希望を表している。

「何とか」は、どうしても目的を実現したく、相手の助けが必要で、あらゆる手段を尽くし、相手に動作・行為を実行してくれるよう強く依頼する。積極的な依頼であって、依頼が成功するようにと相手に迫るのである。

(142) a おじちゃん、どうか、お願いだから、ぼくをここから家へ連れてってください。

b* おじちゃん、何とか、お願いだから、ぼくをここから家へ連れてってください。

c おじちゃん、何とか、ぼくをここから家へ連れてってください。

「どうか」は低い姿勢で相手に依頼するから、「お願いだから」と相性がいい。「何とか」は目的を達成したいところに焦点があるから、相手の気持ちを考慮する表現「お願いだから」とは相容れな

い関係にある。

(143) 何とかこの車を向こうへ移動して。

(144) ?何とか今度の入試がうまくいきますように。

(145) ?何とか早く戦争が終わりますように。

(146) ?何とか父と母が無事でいますように。

「何とか」は相手が自分の望みを実現してくれる可能性が低いからこそ、積極的に依頼しているので、神様に祈願する時、「どうか」と比べて「何とか」のほうが適応性が低い。

4.3.2 依頼していること自体に話し手が無力である

(147) a 先生何とかこの子を助けてください。

b 先生どうかこの子を助けてください。

「どうか」と「何とか」のある依頼文は、話し手の依頼していること自体に話し手が無力であるところが同じである。

4.3.3 話し手の意志を表すには違いがある

「どうか」は「～したい」、つまり、話し手の希望・望みを表す表現と共起できない（(148)のa）。というのは「どうか」は話し手が相手に懇願するだけで、後は行為の実行は全部相手に任せるという意味を表すから、話し手自身の希望・望みと相容れない。しかし、「何とか」は相手にいろいろ手段を尽くして、行為の実行を要求する場合でも、話し手自身が行為の実現を図る場合でも使える（(148)のb）。

(148) a 私は何とか彼を助けてやりたい。

b*私はどうか彼を助けてやりたい。

同じに話し手の意志と関わりのある表現「～しなければならない」は「何とか」と共起できるが、「どうか」とは共起できない。

(149) a 何とかこの作品を完成しなければならない。

b*どうかこの作品を完成しなければならない。

4.3.4 相手に依頼する内容に違いがある

また、「どうか」は消極的な依頼副詞として使われているため、相手に依頼する時、具体的な手段・方法まで言わなくてもいい。「何とか」は逆に積極的に相手に具体的な内容のある依頼をするので、具体的な手段・方法までをいうのが普通である。例えば、次の文。

(150) a 日本に三年いるつもりですが、この三年間どうかよろしくお願いします。

b *日本に三年いるつもりですが、この三年間何とかよろしくお願いします。

4.4 まとめ

依頼を実現させるメカニズムでは「どうか」と「何とか」の間には相違がある。話し手と聞き手の利益関係から言うと、話し手が無力であるため、ともに相手にかかる負担が大きく、その利益の均衡性を保たなければならない。依頼する前の利益関係に戻るために、相手に依頼による相対的負担は種々の要因により、増減することができる。「どうか」は話し手が聞き手から一方的に離れ、その間に距離をおいて、自分の無力を強調し、聞き手を立てながら、懇願するのが特徴である。つまり、相手に満足感を与えることによって、相手にかかる相対的負担を軽減することができる。「何とか」は話し手が依頼の必要性を強調し、依頼の必要性が高ければ、相対的に負担が小さくなる。例えば、緊急事態の時の必要性がもっとも高ければ、その替りに相手にかかる相対的負担の大きさが薄れていく。一口に言えば、「どうか」と「何とか」における話し手の現状が同じで、目的を実現するためには使用する手段が違うのである。

§5 おわりに

ここでは、以上の五つのモダリティ副詞の全体像を描いてみる。

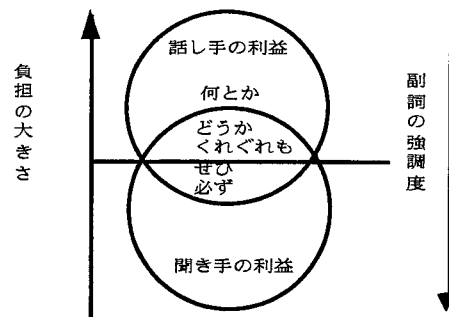
まず、話し手の依頼とモダリティ副詞の間の関連性を明らかにする。

話し手が自分の目的を達成するために、いろいろな方法・手段を考える。自分の依頼内容、相手にかかる負担の大きさによって、モダリティ副詞を使い分けている³³⁾。相手にかかる負担の大きさに、対応している副詞³⁴⁾は以下のようにまとめることができる。

33) 負担とモダリティ副詞の間の相対的な関係を求めるために、人間はどんなモダリティ副詞を使うかは、負担の大きさの要因以外に、ほかにもあると思うが、ここで省くことにする。

34) ここでの「副詞の強調度」とは直感的に並べただけである。

<図5-1>



相手にかかる負担の大きさの違いで、副詞を選択することができる。「何とか」と「どうか」は相手にかかる負担が割合大きい、「何とか」は話し手だけの利益、「どうか」は話し手と聞き手の両方の利益のために使うことができる。「必ず」、「ぜひ」は話し手の要求・希望を強く表す副詞だから、相手にかかる負担が小さければ、相対的命令文と共起することができる。「くれぐれも」は重ねの形で、基本的にある望ましくない事態を発生しないようにと相手に懇願するのが特徴である。

中国語の「一定」、「千万」は話し手の利益にもなれるし、聞き手の利益にもなれる。「千万」と「一定」は共通するところが多いが、「千万」は「一定」より強調度が高いため、否定依頼・勧め文に使われるのが普通である。

この研究から分かったことは、相手に依頼する時、話し手の心情を表す副詞表現が日本語のほうが遥かに中国語より優先的である。この違いを説明するには、多分日本語と中国語という言語の本来の特徴から幾分説明がつくかもしれない。ここで糸井通浩（1982：56-64）の観点「現代社会、つまり都市型の人間関係におけるコミュニケーション社会では、文末をあいまいにしたものいいは通用しなくなっている。文末に述語（成分）が位置することは、日本語にとって短所にもなりかねない。そうした短所を克服する工夫の一端が、副詞（特に陳述副詞）の発達であったといえよう。いわば文頭において文末で実現するはずの表出主体の立場や意図の「予告」をすることが副詞——副詞的表現の働きであるといえるからである」を引用すれば、日本語と中国語の違いが少し見えてくるだろうか。

第六章

中国語の語気助詞「吧」¹⁾と日本語の終助詞「ね」

§ 0 はじめに

中国語の命令文には元来特殊な形式がなく、多くは語気に依存していたものと考えられる。そこで、文の場や、語気が重要な条件となる（内田1960:39）。日本語が文末に話し手の主観性や聞き手への伝達態度を表す形式を高度に発達させている。中国語では、日本語のように、敬語体系がないため、相手に依頼をする時、「丁寧さ」を表すには語彙レベルの手段を取るのが、一つの方法である。この章では、話し手の丁寧な気持ちを表す語気助詞「吧」について考察する。日本語の中で、当面の問題に關与的であると思われるのは、終助詞「ね」である²⁾。本論文は中国語の「吧」を日本語の「ね」と対照し、それぞれの言語での命令・依頼表現における一つの側面——情報の伝達について些か検討を加えてみたい。

§ 1 中国語の語気助詞「吧」

1.1 今までの研究成果と問題点の提起

中国語の語気助詞³⁾をめぐっては、その構文論的位置付けと品詞としての語気助詞の定義と分類といったことが中心に議論されてきた。そして、中国語の「吧」についてはこれまで相談、提案、要求、命令、賛成または承知、疑問や推量の意（『中日辞典』）を表すと言った説明がなされてきた。このように「吧」はさまざまな意味を担っている。しかし、「吧」がそれらの意味を担うのは全くの偶然ではなく、人間にとって有意義な動機に支えられているのである。ここでは「吧」の基本的意味と派生的な意味が体系的に関連づけられていると考えられる。本稿は「吧」の基本的意味を考え、その意味の在り方を語用論的な観点から分析し、そのコミュニケーションの在り方に關与した

1) 中国語では命令・依頼を表せる語気助詞には「吧」と「嘛」が挙げられるが、使用の頻度から考慮すれば、代表的な「吧」を取り上げることにする。

2) 木村、森山（1991:19）は「確定情報における聞き手情報依存」という論文の中で、「日本語の「ね」、「だろう」、「じゃないか」に中国語相当するものとして、中国語の「吧」、「吗」がある」と指摘し、それぞれの違いについて、対照研究を行ったが、本論文は命令・依頼表現を中心に、発話の伝達機能から、「ね」と「吧」について対照してみたい。「だろう」は意味的に（推量）「吧」と重ねるところがあるが、命令・依頼するという対人機能を持っていないため、本論文の考察から外すことにする。

3) 語気詞という言い方もあるが、ここの語気助詞と同じものを指している。

文法分析を試みたい。

「吧」についての研究は次のように挙げられる。胡明扬 (1981: 416) は文に「吧」を付け加えることにより、もともと (1) の a の断定の文は、非断定の文 b に変わるという指摘をしている。

- (1) a 您听错了。(あなたは聞き間違った。)
b 您听错了吧。(あなたは聞き間違ったでしょう。)

李宇明、唐志东 (1991) は「吧」が婉曲的な依頼を表すと述べている。そうすると聞き手に懇願する時には、丁寧な表現を使うのが普通で、「吧」が使えるはずだが、次の文はやや容認度が低い。

- (2) a? 我求求你别叫他们杀我吧。(彼等に私を殺さないようにお願いしましょう)
b 我求求你别叫他们杀我。(彼等に私を殺さないようにお願いします) (张1987: 668)

他に、『中日辞典』には「吧」に対して、多くの意味が挙げられているが、それらの意味を選んで挙げる基準は必ずしも明らかでなく、それぞれの意味相互の関係も明確ではない。

「聞き手情報配慮と文末形式」という観点から、木村・森山 (1991: 10) は日中両語の終助詞の対照研究を試みた。確定情報文の「吧」それ自身の文法的意味としては、「真偽の判定の保留もしくは断定の回避」だということ、聞き手の情報に依存しない性格の確定内容の場合、断定を避けた形で表現されることによって、話し手個人の「推量」の表現と理解され、一方、聞き手の情報に依存する性格の確定内容の場合は判定を半ば保留する形で、聞き手に持ちかけることによって、聞き手をもコトの認定に巻き込む効果が生じ、そのことが「同意の促し」もしくは「確認の要求」と言った読みに繋がることを説明した。また、「吧」は命令文に用いられ、口調を和らげる効果を持つが、それは断定の回避と言った意味から説明可能であると述べている。

木村・森山の分析は最も説得力があると思われるが、今回は日本語の「ね」と比較するのを念頭において、違う観点から「吧」について改めて考えてみる。

1.2 本稿の主張

本稿では次のような主張を行う。

「吧」の基本的意味と必須条件:

- i. 話し手が物事を部分的に把握し、確定的な結論に至っていないため、ほかの要素も同時に存在することをほのめかす。
- ii. 「吧」を伴う発話は必ず物事の両面、或いは話し手と聞き手両者の判断が共に共存しなければならない。
- iii. 疑問文との共起はできない。

実際の談話例をもとに、次に以下の節で上の主張の正当性を確認してみよう。

1.3 語気助詞「吧」の機能についての分析

1.3.1 話し手の部分的把握

「吧」は話し手がそこで述べられている内容に対し、完全に把握できず、確実な答えが出せないため、把握が部分的であることを表す。つまり例文 (3) のように

(3) a 明天天气怎么样? (明日の天気はどうでしょう)

b 明天下雨吧。(たぶん、雨が降るでしょう)

図<1-1>



話し手はaの質問に対して、部分的な把握「下雨吧」を取り上げつつも、それに矛盾対立する内容「不下雨吧」も成立する可能性があることを暗示する。「不下雨吧」ということを許す余地を残すのである。話し手の発話「下雨吧」は前景化され、残った選択余地は背景化されるのである。ここで述べている「吧」の意味は、森山(1992:47-48)の「だろう」の推量の理論的な意味に一致している。つまり「推量の表現とは、ある内容を述べるとともに、それに矛盾対立する内容も成立する可能性があることを暗示する」ということである。「断定の回避」とも繋がっている(木村・森山1991:16)。

1.3.2 話し手と聞き手の相互関与

会話において、「吧」を使う時に、必ず話し手と聞き手両者が関与するのでなければならない。「吧」のある文は話し手と聞き手が共同活動、共同決定するマーカ―でもある。或いは言い替えると「吧」は話し手が聞き手の存在を認定し、配慮しながら発話していることを示すのである。つまり、話し手が一人で独断で決定するのではなく、聞き手にも発言する、断わる余地を与えているので、それが場合によっては、謙虚な印象を作り出すのである。

(4) 我还是当个小兵吧。(私はやはり普通の兵士になりましょう。)

(5) 你还是留下吧。(あなたはやはり残ってください。)

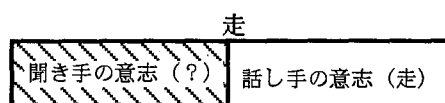
主語が「我」又は「你」のどちらか一方であっても、(4)は「小兵」(兵士)になるかどうか、(5)は「留下」(残る)かどうかは、話し手一人で決めるのではなく、聞き手の意見も尊重し、二人で相談しようという意味が現われている。

誘いかけとは、聞き手に対して話し手と同一行動をとるよう頼むことであり、本論文では勧め表現

の一種だと見ているが、機能から言うならば、正確に依頼表現と勧め表現の間の表現だと言える。ここで、仮に依頼表現だと見れば、やはりそれなりの控えめな態度が求められることになる。

(6) 時候不早了、咱们走吧。(もう遅いから、私たちは行きましょう)

図<1-2>



(6) の「走」という行動は二人で決めることより、話し手は聞き手の存在を意識し、自分一人で決定せずに、聞き手にも決定する権利を与えつつ、提案している意図が読み取れる。聞き手にも判断を委ねようとしていることは、聞き手の意志を尊重することに繋がり、丁寧さがでてくる。もし、「吧」がなければ、話し手が自分の意見を聞き手に押し付けることになり、自分の提案に対する聞き手の意見の入り込む余地が全くなく、強引な感じがする。

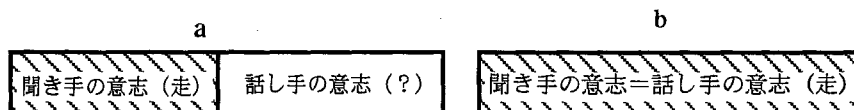
(4)、(5)、(6) はいずれも「吧」を用いて、丁寧な意味を表すのに成功しているのだが、それは図に示したような構造から引き出されたあくまでも派生的な意味に過ぎない。この二つに分割された構造は、物事を話し手が独断で、一方的な意志として決定する印象を与えず、聞き手にも決定したり、断わったりする余地を与えていることに繋がっているのである。

また、この構造は、次のような丁寧ではなく、言外の意味をほのめかす表現を説明するにも適している。

(7) a 你要走你就走吧。(行きたいなら、行きなさいよ)

b 你要走你就走。(行きたいなら、行きなさい)

図<1-3>



(7) のaは「吧」があれば、聞き手の意志を考慮して言っているのだが、話し手の意志は別にあってもいいということが表現できる。言い替えれば、話し手の部分的な同意を示し、本当は聞き手に行ってもらいたいのは自分のすべての気持ちではなく、行ってもらいたくない気持ちがあることをほのめかしている。逆にbは「吧」がなければ、話し手の意志は聞き手の意志と同じで、聞き手を引き留める気持ちはないのである。

以上のような「吧」の持つ構造は、以下のような構文、場面での「吧」の使い方を説明することができる。以下に「吧」の使われる代表的状況を見ていく。

1.3.2.1 使役文と「吧」

使役の意味を表す「让～」構文は話し手が「相手（客語）に影響を与えてそれを動かそうとする意味を含」（藤堂1979:82）むため、両者の存在がはっきりしている。そこで、「让～」構文は「吧」と相性がよい。この時、聞き手の立場を考慮すべきかどうかはやはり「吧」を使用するかしないかで決める。

- (8) a 你让我走吧！（私を行かせてください）
b 你让我走！（私を行かせて）
(9) a 老师您就让我去吧。（先生、私に行かせてください）
b? 老师您就让我去。（先生、私に行かせて。）

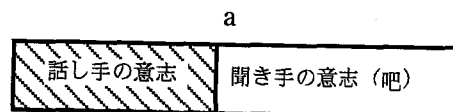
(8) のbは話し手の一方的な意志を表すため、語気が強いので、「吧」がなくてもいいが、(9) のbは「吧」がなかったら不自然な感じがする。つまり(8) のbは相手の存在を考慮しなくてもいいのに対して、(9) のbの発話相手が先生だから、「吧」がないと、不適當である。

1.3.2.2 「吧」と応答表現

会話では話し手が聞き手の言うことに対して、返事をする時も「吧」を使うことができる。ここでの順序は聞き手の判断が先にあるのであり、先ほどの順序とは逆になる。

- (10) a 好吧，我答应你。（いいでしょう。引き受けましょう）
b 好，我答应你。（よし、引き受けます）

図<1-4>



(10) は話し手が聞き手の要求を引き受ける時の発話で、aは聞き手の存在を考慮しながら、話し手の部分的な同意を表し、bは話し手の一方的な意志で、話し手のすべての気持ちを表している。つまり、aは話し手が聞き手のために、仕方なく承認したので、無理にそうしているという意味になるため、話し手の喜ばしくない気持ちが表れる。その要求を引き受けるのは話し手のすべての気持ちではないということに繋がっている。逆にbは話し手自身の独断で決めたことであるから、聞き手の要求をためらいなく引き受けたという意味が読み取れる。

また、同じ使い方としての「吧」は文脈の違いにより話し手の喜ばしくない気持ちではなく、話し手がこの依頼をやり遂げるかどうか自信がないという意味を表す時もある。

- (11) 林育英说：“好吧，我尽力而为吧。”（林育英は答えた：分かりました。私はできるだ

けやってみます)

(11) は偉い「毛澤東」に頼まれたことに対して、「林育英」は自分がこの使命を果たせるかどうか、部分的にしか自信がないことを「吧」を使って表している。

次の文は文脈の意味と部分的な同意を表す「吧」が合わない文である。

(12) a 白灵热烈地响应到: “好, 先让咱的烟囱冒出烟来!” (白靈は熱烈に応じて, “いいよ、先にわれわれの煙突から煙を出そう”)

b? 白灵热烈地响应到: “好吧, 先让咱的烟囱冒出烟来!” (白靈は熱烈に応じて, “いいでしょう、先にわれわれの煙突から煙を出そう”) (白)

というのはここで、「吧」を使うと「白灵」の躊躇する態度は「热烈地响应到」(熱烈に応じて)と意味的に整合しなくなるからである。

このように考えると、次の応答も聞き手の意見を参照した上で、聞き手にそう言われたら、仕方がなく応じたという意味を表す「吧」であると説明できる。

(13) 服务员: 这样包装不行, 请换个木盒吧! (このような包装はだめです。木の箱に替えてください)

田 中: 好吧! (いいでしょう)

1.3.2.3 「吧」と助動詞「要」、「得」、「应该」⁴⁾の共起

「要」、「得」、「应该」という助動詞は「当為」を表し、「ある事態が望ましいとか、必要だ」というように事態の可否を述べる」(益岡・田窪1992: 122)ものである。話し手がある事態に対する自分の意見を述べたり、望ましい事態を述べて聞き手にその事態を実現すべく行動することを促す場合などに使われる。話し手が聞き手に要求・提案することが話し手のすべての気持ちであり、強い意志として使われる場合が多い。話し手の一方的な強い気持ちとして使われるので、ほかの要素を配慮することができないため、「吧」との共起が認められない。

(14) *明天的会议你应该去吧。(明日の会議はあなたは行くべきでしょう)

(15) *你要好好学习吧。(よく勉強すべきでしょう)

(16) *这个药你得吃吧。(この薬はあなたは飲まなければならないでしょう)

1.3.2.4 「吧」と独り言

「吧」は物事の両面、又は話し手と聞き手両者の判断がともに共存しなければならない。独り言は

4) 「要」、「得」と「应该」はともに助動詞で、「～べきである」、「～しなければならない」という意味を表す。

話し手の心的情報処理活動を表すもの（森山1998:4）で、聞き手が存在していないのである。だから、一人で決定する時、(17) aのように言うべきで、「吧」を用いたbのような言い方はしない。

(17) a 好，我明天去趟北京。（よし、私は明日ペキンへ行く）

b*好吧，我明天去趟北京。（いいでしょう、私は明日ペキンへ行く）

ただし、(17')のように二つ、或いは二つ以上の事柄の間でその選択を考えている場合なら使える。

(17') 我还是明天去趟北京吧。（私は明日やはりペキンに行こうかしら）

次の文もそれぞれ話し手の独り言で、(18)、(19)は一つを選択を選びながら、ほかの可能性もいくつかあると暗示している。(20)、(21)は話し手の推測を表している。

(18) 庄之蝶～心動着现在去吧，又觉得天色太晚，恐怕周敏也已在家，遂快快回双仁府来。（庄之蝶は～今行くなら、もう遅い。周敏も家にいるかもしれないと思って、しょんぼりと家に帰ってきた）（費：72）

(19) 龚小乙～心想，～如今烟价一日高出一日，到了将来实在没钱了再换烟抽吧。（龚小乙は～心で思った。今の麻薬の値段はますます高くなってきて、将来どうしてもお金がないとき、麻薬を買うために売しましょう）（費：283）

(20) “木兰”一直骑到了尚俭路，他才清醒阿灿已于丈夫离婚了，是不会住在那窄小的房子里。今日去送阿兰到精神病院，多半还是在病院里没回来吧！（“木兰”バイクに乗って、ずっと尚俭路まで来た。彼は急に阿灿はもう離婚したので、その狭い家に住んでいるわけではないと気がついた。今日は阿蘭を精神病院に送りに行く日だから、多分まだ病院にいて、帰ってきていないだろう）（費：300）

(21) 它又想，～直到现在，它们也不知在满天繁星的夜里从田野走回栏圈的路上还在如何议论它，嫉妒它，在耕作或推磨的休息时间里又是怎样地想象城市的繁华美妙吧！

（牛はまた思った。今になっても、彼等は星満天の夜に畑から小屋に帰る途中、自分の噂をどれだけ言っているのか、どれだけ妬いているのかを知らない。畑を耕したり、臼井を回して休んだりしている間に如何ほど都市の賑やかさと素晴らしさを想像しているだろうか分からない）（費：348）

1.3.3 「吧」と命令・依頼表現 —— 語用論の観点から

話し手が聞き手に行為を命令・依頼・勧めをする時も「吧」がよく使われる。従来、命令表現における「吧」は婉曲的で、丁寧だという主張があるが、実は語用論の観点から分析すれば必ずしもそう

であるとは限らない。

1.3.3.1 「吧」と命令文

命令文は話し手からの一方的な要求を表すのである。「吧」のない命令文は決定権が話し手にあることを示す表現になってしまうため、それを避け、決定権が相手にあるという表現意図を「吧」を示すと少し丁寧になる。「吧」の使える命令文は相対的的命令文である。絶対的的命令文は「吧」との共起はできない。

(22) *给我出去吧。(出ていけ)

(23) a 有什么话,你说吧!(言いたいことがあれば、言ってください)

b 有什么话,你说!(言いたいことがあれば、言いなさい)

(24) a 少说一点吧!(口を出さないで)

b 少说一点!(口を出すな)

(22) は絶対的的命令文で、「吧」との共起はできず、(23)、(24) は聞き手に命令する口調であるが、「吧」があるなら、二人で決断することになり、話し手が聞き手の意見を尊重することになる。つまり、聞き手に強制的に要求せず、聞き手に選択、或いは断わる機会を与えているから、両方とも a の方が b より婉曲的な意味を持っているのである。

話し手が絶対そうしてほしいと聞き手に命令する時(絶対的的命令文)、つまり聞き手に断わる余地を与えず、話し手の意志・要求を一方的に伝える時は、「吧」があつたら不適當である。例えば、例文(25)、(26)、(27)。

(25) a 务必明天上午十点把货送到。(明日の午前10時に必ず荷物を届けなければならない)

b *务必明天上午十点把货送到吧。(明日の午前10時に必ず荷物を届けなければならないでしょう)

丁寧に命令する時でも、もし聞き手に絶対に服従してもらわなければならず、話し手の一方的な意志を表す場合なら、「吧」は使えない。例えば、飛行機の機内の放送

(26) a 飞机马上就要起飞了,请大家系好安全带。(飛行機はまもなく離陸します。安全ベルトをお締めください)

b *飞机马上就要起飞了,请大家系好安全带吧。(飛行機はすぐ離陸します。安全ベルトをお締めくださいましょう)

の b のような言い方はしない。

同じように、軍隊用語の場合も「吧」が使えない。

(27) a 立正！（気付け）

b * 立正吧！（気付けましょう）

公における発話と号令の場合は、語気助詞の使用と合わない。というのはモダリティを表す語気助詞は話し手の心情を表しているから、それらと共に起できないのである。

また、話し手がもし、聞き手に動作・行為の程度を完全に成し遂げるという意味を強調するなら、「吧」との共起はできない。次は袁（1993：75-76）の用例を引用する。

D	D'	D''
掐断！（撮んで切れ）	掐断吧！（撮んで切りましょう）	* 掐断了！（撮んで切れよ）
放倒！（倒せ）	放倒吧！（倒しましょう）	* 放倒了！（倒せよ）
拿走！（持っていけ）	拿走吧！（持っていきましよう）	* 拿走了！（持っていけよ）
堵住！（遮れ）	堵住吧！（遮りましよう）	* 堵住了！（遮れよ）
E	E'	E''
站好！（ちゃんと立て）	* 站好吧！（ちゃんと立ちましよう）	站好了！（ちゃんと立てよ）
拿稳！（しっかり持て）	* 拿稳吧！（しっかり持ちましよう）	拿稳了！（しっかり持てよ）
听明白！（ちゃんと聞け）	* 听明白吧！（ちゃんと聞きましよう）	听明白了！（ちゃんと聞けよ）
扫干净！（きれいに掃け）	* 扫干净吧！（きれいに掃きましよう）	扫干净了！（きれいに掃けよ）

袁はD類は「吧」が使えるのに、D'類は使えないという事実を指摘する。なぜかについては説明されていない。ここで考えられるのは、D'の文は $V_1 + V_2$ の組み合わせで、相手に動作の結果を要求するのに対して、E'は $V + A$ の組み合わせで、動作の状態・動きに対する要求を表すのである。D'はある動作・行為に対して、聞き手が行うかどうかの判断を配慮することができるが、E'の場合は補語を表す形容詞は、「到達点」を示すため、話し手はその動作・行為の状態が完璧であるようと相手に求めるので、段階性はなく、完全な度合を表す概念は「吧」の語彙的な意味と相容れないのである。以上の用例から「吧」が全体的ではなく、部分的な概念を示すことが一層明らかになり、筆者の主張を裏付けている。

1.3.3.2 「吧」と依頼文

聞き手の存在を考慮して依頼する場合、例（9）のaのように「吧」が必要である。

（9）a 老师您就让我去吧。（先生、私に行かせてください）

「吧」の依頼文における丁寧な用法は、一種の間接表現だと考えられる。というのは「吧」は相手に直接命令するのではなく、「命題的態度（信念）を表す表現」として丁寧さを表すのである。命題

的態度 (propositional attitude) の表現とは、談話内容の操作単位である「命題」 (proposition) に対して、話者が取る態度・信念を表す表現である (西村1992: 280 - 281)。命題的態度の表現は、一種のメタ談話であり、断定・命令など、話し手が命題を通じて行う発語内効力を相対化し、緩和する緩衝となる (Austin 1962) のである。「吧」はある命題に対し、話し手はこれが自分の考えであることを表明し、聞き手の意志を尊重し、聞き手の個人的な問題に立ち入った事態の断定を緩和するのである。

Tannen は、対人コミュニケーションにおける間接表現を会話のスタイルの理論として展開している。Tannen の会話のスタイルの理論は次である。

- ① 押し付けがましくしてはいけない。(距離)
- ② 選択権を与えること。(敬意)
- ③ 親しみを示すこと。(仲間意識) (Tannen 1984)

Tannen の規則 ②の敬意は、話し手が自分で決断せずに、相手に任せる態度をとったり、躊躇をする態度を表すのである。Tannen は更に、間接表現が持つ二つの機能、防御と調和的な関係が会話のスタイルに重要な意味を持つと指摘する。防御とは、話し手が相手に依頼をする時、話し手が自分の要求をあからさまには言わないようにする。聞き手の側は、要求があからさまにされない時には、その要求を好まない場合、はっきりと拒絶の意志を表示しないですむ。このように間接表現は双方にとって防御の機能を果たすのである。中国語の「吧」も話し手が自分の要求をはっきり相手に示さないのは自分の面子を守ることと、相手への敬意を表すのである。

もし話し手の一方的な依頼なら、例 (2) a のように、「吧」は使えない。

(2) a ? 我求求你别叫他们杀我吧。(彼等に私を殺さないようにお願いしましょう)

1.3.3.3 「吧」と勧め文

勧めることが相手にとって利のあることに違いない。そのため、人に何かを頼む時ほど控えめな態度を取る必要はなく、ストレートに勧めればよいのである。

(28) a 吃吧、吃吧，别客气。(召し上がって、召し上がって、遠慮しないで)

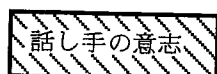
b 吃、吃，别客气。(食べて、食べて、遠慮しないで)

(29) a 请坐吧、请坐吧。(おすわりください。おすわりください)

b 请坐、请坐。(座って、座って)

図<1-5>

(28) b、(29) b



「吧」があれば、聞き手への配慮を適切に表せるというわけはでない。(28)と(29)のように話し手が聞き手の利益になる行為を勧めるなら、「吧」がないほうが、「吧」があるのより話し手の誠意が見られる。つまり、聞き手の利益のため、話し手が独断的に必死に勧めるので、話し手の熱い気持ちを感じさせるのである。「吧」があつたら、二人で決断することになり、一部分は話し手自体の判断で聞き手に勧め、残りは聞き手に任せる形で、聞き手に遠慮する機会を与えていることになる。言い替えれば、aとbと比べれば、aのほうが聞き手に勧めているのは話し手のすべての気持ちではなく、誠意がないように感じさせるのである。

ここではイントネーションの要素を考慮していない。中国語のテレビ番組ではこのようなシーンがある。

(30) 车 夫：小姐，上车吧。去哪儿啊？（お嬢さん、車に乗って。どこへ行くのかね？）

留学生：去西单……。 （西单へ）

车 夫：好。上，上，上。（はい、乗って、乗って）（中国1998：30-31）

ここでの「上、上、上」というのも必死な誘いである。

中国語の勧め文では、「吧」の使用があれば、逆に丁寧という意味がなくなる。Brown & Levinson (1978) のフェイスを脅かす行為 (Face threatening acts (FTAS)) の理論によると、話し手が FTA をすると決めたら、そこには4つの可能性がある。まず、FTA を表に出して (on-record) FTA をする3つの上位ストラテジーがある。その中の何の緩和策も講じずにむき出しのまま (bald-on-record) FTA をするというストラテジーは、聞き手の利益になると見なされる時、話し手が単刀直入にものを言うということである。つまり、聞き手にとって、有益な何らかの行為を提供するにあたっては、話し手は聞き手が「ノー」と言える機会に制限を加えることによって、肯定的な結果に向かうよう発話内行為を片寄らせるべきであって、聞き手に「ノー」と言わせない命令文は、（非公式の状況では）申し出をする際の積極的に丁寧な方法となるのである（Leech 1983：訳書 156 - 157ページ）。以上はまた、Leech の「気配りの原則」が適用される。Leech の「気配りの原則」には二つの側面がある。

- i 聞き手への負担を最小限にする（消極的側面）
- ii 聞き手への利益を最大限にする（積極的側面）

つまり、聞き手にとって利益のある行為の提供であれば、「いいえ、ありがとう」などという遠慮をしなければならないような状況を作らない方が気配りをしていることになり、より丁寧である。

聞き手への利益を最大限にする英語の例としては、Leech は次のようなものを挙げている。

- (31) Help yourself.
 (32) Have another sandwich.
 (33) You MUST have another sandwich!

中国語でも、英語と同じように聞き手の利益になる場合、「選択の余地を与えることは中国では礼儀正しいとは見なされないのである」(Thomas 1995: 訳書 176-177ページ)。というのは、ここで「吧」のある表現はない方より丁寧な感じがし、勧めが強ければ強いほど丁寧なので、ストレートに勧めるのがポライトネスだと見られている。

しかし、日本語では、「うち」、「そと」の世界の違いがはっきりしているため、「うち」の世界であれば、英語と中国語と同じような用法を持つが、「そと」の世界になると、人間の上下関係、社会的な地位などの制約により気配りの原則が適合しなくなるのである。例えば、日本語では、自分の先生に対して、

- (34) *どうぞ、召し上がれ!

は言わないだろう。同じ状況で、逆に中国語では、

- (34') a 老师，您吃！（先生、召し上がって）
 b 老师，您吃吧！⁵⁾（先生召し上がってください）

の中で、aの方がbより、積極性が感じられる。

勧め文以外に話し手に対するプラス評価をする時、やはり、「吧」がないほうが聞き手を一方的に認め、話し手の積極的な評価が感じられ、表現の丁寧さと繋がるのである。

- (35) 今天我做的菜的味道怎么样？（今日の料理の味はいかがですか）
 a 还可以吧。（なかなかいいでしょう）
 b 还可以。（なかなかいいですよ）

「吧」がある場合、話し手の積極的な評価が感じず、この評価を出すのは話し手の本心ではないという意味が隠されている。

逆に、ある評価が聞き手にとってマイナスである場合、「吧」があったほうが、話し手の遠慮深

5) 中国語で相手の年齢や地位が話し手の上であれば、二人の間はあまり親しくない場合、「您（あなたの尊敬語）」などの尊敬の呼びかけ語によって相手を一段高い位置へ持ち上げる必要がある。また、一定の距離を保つ「请（丁寧な要求行為を表し、一種の「敬辞」として、「乞う、頼む」という動詞本来の意味を残している）」によって、話し手の要求を丁寧化することも必要とされている。

い気持ちが読みとれ、聞き手の気持ちを考慮することになり、表現の婉曲さが感じられるのである。

(36) a 这次事故你也有责任吧。(今回の事故であなたも責任があるでしょう)

b 这次事故你也有责任。(今回の事故であなたも責任がある)

以上のように「吧」は丁寧さと深く関わっていることが分かった。

1.3.3.4 「吧」と禁止文

禁止を表すには中国語では、「別～」(～しないでください)、「不要～」(～しないでください)を使う。禁止の意味を表す文は、話し手が聞き手にそうしてほしくない意味を表すのが殆どであるので、話し手の一方的な主張が多い。話し手の要求が相手の利益になる場合、その意味で禁止文は勧め文に近い。相手の利益になるなら、何の緩和策も講じずに、むき出しのまま FTA をするというストラテジーを取るのである。そのために、「別～」、「不要～」は「吧」を伴わないのが普通である。

(37) a 你别忘了吃药。(薬を飲むのを忘れないで)

b* 你别忘了吃药吧。(薬を飲むのを忘れないでしょう)

もし、「別～」、「不要～」は話し手の強い禁止の意志を表さず、何かを考慮するならば、「吧」がつけられることになる。

(38) a 你别走了吧。(行かないで、いい?)

b* 你别走吧。(行かないで、いい?)

c 你别走。(行かないで)

(38) の a は、「了」があることによって「走」は聞き手の判断・意志、聞き手の決定済なこととして表に出し、その上、話し手が判断を付け加えることによって、「吧」が用いられ、聞き手の意見も伺っている意図が見られるのである。b の「走」は聞き手の表に出している意志というより、聞き手のこれから行おうとする行動、或いは進行中の行動であり、聞き手の判断ではない。聞き手の判断でなければ、話し手の一方的な意志になり、「吧」の使用も不可能である。つまり、ここでの「了」は機能的に参照点を表すマーカーだと言える。「了」によって、先ほど聞き手が行くという意見に対して、話し手が聞き手の意見を考慮しながら、自分の意思を表明するというのを表す。「了」は話し手の今の発言は先の状況を対照にして行ったということを意味する⁶⁾。この「了」が二つの状況に関与するところから「吧」の基本的な意味と適合する。しかし、(37) の「忘了」の「了」は参照点マーカーではなく、動詞「忘」(忘れる)の結果補語として使われ、「忘了」は非意志動詞である。

「別」を使うことによって、話し手の一方的な主張を表すことになる。また、(37) は勧め文で、(38) は依頼文である。

1.3.4 「吧」は疑問文と共起できない（話し手と聞き手とに了解された前提がなければならない）

話し手と聞き手がこれから一緒に決断する事柄が存在しないと、つまり明示的な前提、或いは文脈から分かる暗黙的な前提がなければ、「吧」の使用は不可能である。従来命令文に「吧」があれば、婉曲的な語気になるという説明がされてきたが、丁寧に依頼する場合なら、「吧」が必ず使えるというわけではない。例えば、聞き手にコピーを頼む時、

(39) *能不能帮我复印一下吧? (コピーしていただけますでしょうか)

図<1-7>



のような言い方は普通しない。つまりこの時、二人で決断する前提が存在していないからである。というのは、聞き手がコピーしてくれるかどうかまだ分からないため、成り立たないことに対して二人で共同で決断する話にもならない。「吧」で依頼する時、聞き手が明示的に行為を遂行してくれる可能性があることが前提になるのである。(39)は「吧」があったら、不自然である。これは聞き手に依頼するというより、疑問の意味を表しているのである。

よって、次のような文脈で、もし聞き手Bがコピーしてくれるという明示的な前提があれば、「吧」を用いた文が成立する。

(39') a: 能不能帮我复印一下? (コピーしていただけますか。)

b: 没问题。(いいですよ。)

a: 复印三份吧。(三部コピーしてください。)

ただし、「吧」を用いているにも関わらず、上のような前提なく発話されるように見える場合も多い。それは普通の会話では、暗黙の前提が多いためである。例えば(28)の例。

(28) a 吃吧、吃吧，别客气。(召し上がって、召し上がって、遠慮しないで)

ここでは、既に話し手が聞き手を家に招待しているため、これから一緒に食事をし、食べるという

6) 禁止命令文について、林(1982: 11)は次のような研究がある。中国語では、相手にある動作をするなと禁止する時、その動作の時間の軸における在り方に関して、二通りの可能性がある。即ち、過去にその経験があることを強く意識して禁止する場合と、その過去の経験の有無に関係なく禁止する場合である。「别抽烟了」と言えば、過去に飲んだことがある人に対する禁止、及び今飲んでいる人に対する禁止である。また、「别抽烟」と言えば、過去に飲んだことがあるか否かということとは問題にせず、単に飲むのを禁止するという意味である。また、林は「别抽烟了」は「别抽烟」より、少し丁寧なニュアンスが加わっていると指摘する。というのは「别抽烟了」は「今までタバコを飲んでいたのは、それとして許容するが、これから飲まないでほしい」というニュアンスを幾分抑制した気持ちで伝える言い方であるからである」と言う。また、中国語では「了」を加えることで、丁寧度を増加させていると指摘される。林が「别抽烟了」に対する二通りの解釈は適切かどうかは別として、観察した結果はここでの「了」のある禁止命令文は「吧」との共起ができるという主張とは一致する。

のが暗黙的な前提として隠れているのである。

疑問表現が「吧」構文と共起できないことは、森山（1992）の疑問文に関する意味的理論から説明できる。森山（1992:49）によると、「疑問文では、yes-no 疑問の場合は肯定と否定、不定疑問の場合はその不定内容というように、矛盾対立する内容が、選択すべき関係にある」ということである。つまり、疑問文では、矛盾対立する内容について派他的に選択を迫るのに対して、「吧」は二つの事柄の間から一つを選択されねばならないというのではなく、事柄の肯定、否定（推量）、或いは話し手と聞き手の判断両者が共存しなければならないのである。よって、疑問文に「吧」をつけたら、意味の関係として矛盾することになる。

1.4 語気助詞と認識的モダリティ

古川（1989:26-27）⁷⁾は文法的な意味から語気助詞を二分類した。

①話し手の疑問、命令、主観的な感情などを表す modality 的なもので、 y_1 とする。

啊、呕、哎、欸、嘿、吧、吗、呢₁

②完成、持続、過去などを表す aspect,tense 的なもので、 y_2 とする。

了、呢₂、来着、的

文中の副詞（ f_1 はモダリティ的な副詞、 f_2 は非モダリティ的な副詞）と文末の語気助詞は述語を中心に対称関係（symmetric relation）をなしていると指摘する。つまり、非モダリティ的な要素は述語に近い、モダリティ的な要素は述語から離れているという指摘である。

(40) 他们大概都是昨天来的吧。

f_1 f_2 y_2 y_1

「吧」⁸⁾は当然古川の分類①に入る。よって、 f_1 の副詞との関係はどうだろうか。それは次のようなことが言える。

(41) 文中に部分的モダリティを表す副詞は「吧」と共起できる。

以上の提案を説明するには次の例を見られたい。

(42) a 你明天出发吧。（あなたは明日出発しましょう）

b *你务必明天出发吧。（あなたは是非明日出発しましょう）

7) 古川（1989）についての詳しい紹介は、第一章の3.2.3.1を参照。

8) 紙幅の関係で、他の語気助詞をここで考慮しない。

- c 你还是明天出发吧。(あなたはやはり明日出発しましょう)

上の例では、「務必」は他に選択させる余地がないことを表し、全面的モダリティ副詞だと言え、「吧」とは共起ができないが、「还是」は選択させる余地を与える意味を表し、部分的モダリティ副詞だと言えるので、「吧」とは共起ができる。

1.5 まとめ

「吧」の基本的文法的な意味は、話し手が事柄を部分的に把握しており、その文で取り上げる内容を話し手が一人で判断するのではなく、その内容を部分的に判断し、聞き手の判断も配慮するという捉え方である。事柄を部分的に把握することによって、ほかの要素も同時に存在することをほのめかすことがある。また、話し手と聞き手が両者とも関与し、且つ両者が共同で決定するということである。会話の場合、話し手が部分的にしか把握していないということは聞き手の存在を考慮することと繋がっている。

命令・依頼表現における「吧」は、話し手が聞き手の存在を考慮し、話し手が事柄への部分的参与を示し、聞き手に断わる、決定する余地を与えているために、丁寧な場合があるが、話し手の一方的な意志を表さなければならない時、「吧」があったら、丁寧になるどころか、不自然になる場合もある。特に、聞き手にとって利のあることを勧める時、「吧」がないほうがより話し手の誠意が見られる。

よって、今までの辞書や、教科書の「吧」に関する文法的な説明には、「吧」の独自の意味だけではなく、文・文脈或いは場面によって、作り出された一時的な意味までも織り込まれているのである。文末につけて、「推測、推量」、「相談」、「丁寧な要求、命令」などを表すというのは、「吧」のその基本的な意味ではなく、前後の文の意味とここで述べたような「吧」の持つ基本的な意味とによって生み出された意味に過ぎないと言える。

文法機能からいうならば、中国語の「吧」は必ずしも必須的な要素ではない。任意的で、「吧」があれば、話し手のある意図を反映することになる。

§2 日本語の終助詞「ね」⁹⁾について

2.1 はじめに

終助詞「ね」は、日本語の日常の会話で最も頻繁に用いられるものの一つである。「ね」に関わる問題は複雑で、多岐にわたる。「ね」については、特に情報伝達の観点¹⁰⁾から、その意味・機能に関

9) 本論文は「ね」のイントネーション(上昇調、下降調)を考察の対象外とする。

10) 情報伝達機能から「ね」について論じている論文が神尾(1990)の「情報のなわ張り理論」のほかに、森山(1989)が機能論的な理論の枠内で、「聞き手情報配慮非配慮の理論」から、「ね」を規定したものが挙げられる。

する論考が多くみられる。本論文はそれぞれの理論全体の妥当性を問う用意はないが、中国語の「吧」との対照する立場から、「ね」のプロトタイプ的な意味を探る試みをし、具体的な用法を分析する。

2.2 先行研究及び問題提起

「ね」についての研究は今まで様々あるが、まず挙げられるのが、神尾昭雄（1990a）の議論である。神尾は「ね」の有無による文法性の違いについて、情報の帰属（情報のなわばり、情報の近接性）の観点から精密な分析を行った。しかし、神尾（1990a）のように「ね」の基本的な機能を情報帰属の概念と直接結び付けて説明することについては、いくつかの問題点が指摘されている（北野 1993、田窪・金水 1996、井上 1999、大島 1996: 137-138など）。

例えば、井上優（1999: 80）は「文法形式としての「ね」の基本的な機能の説明に情報帰属の概念は必要ない」という批判的な観点を示している。しかし、井上（1999: 82）は「「ね」の使用不使用の決定には、まず、その場に存在する証拠をどのような証拠として評価するか」と述べ、次の例を挙げている。

- (43) a 今日はいい天気です（ね/??φ）。
b ええ、そうです（ね/??φ）。

「(43) の（～φ）の使用が不自然なもの、その場にいればだれでも考えるであろうこと、常識的に考えれば聞き手の方がよく知っているのに決まっていることを「排他的判断（話し手の個人的判断）」の形で述べることに、重要な価値の意味を見出しにくいからである。これに対し、＜弱い判断＞を表す「～ね」は、「話し手の判断の妥当性に関する検証はいまだ不完全である（話し手の判断は可能な判断の一例にすぎない）」という含みを持つ」（井上 1999: 83-84）ということ述べているが、しかし、天気ぐらいの話なら、「天気がよいかどうか」という単純で、一目瞭然なことを判断するには、その妥当性を問う必要があるのかという素朴な疑問が湧いてくるのである。

北野浩章（1993）は神尾（1990a）のなわ張りの概念での「ね」の分布について次のように検討している。「「ね」の分布に決定的なのは聞き手のなわ張りの内か外かということではなく、聞き手にとって既知情報か、未知情報かということなのである」（北野 1993: 74-75）。北野は終助詞「ね」の基本的な機能は「聞き手に対し、話し手の発話が妥当かどうかを確認するために用いられる」という主張をし、「ね」を解釈するには「共有情報という前提は不要で」あって、「「ね」が共有情報であることを示す一種のマーカーであるという考えは、本稿の立場では容認できない」（北野 1993: 78-79）と述べ、この機能を「発話確認」と呼んでいる。「発話確認」はどのようなものかという点、北野は次の例を挙げている。

- (44) <天文学や物理学に関して全く門外漢である人物が天文学の専門家に対して>
a 月の表面の重力は地表の約 6 分の 1 だそうですね／らしいですね。

b* 月の表面の重力は地表の約6分の1です (よ)。

まず、神尾 (1990a: 39) の説明によると、この情報は聞き手 (専門家) にとっては、なわ張りの内に属し、話し手 (門外漢) にとってはなわ張りの外に属するため、間接ね形を用いた a が適切であり、直接を用いた b は不適切であるということである。一方、「話し手が自らの不確かな「月の表面の重力は地表の約6分の1だそうだ／らしい」という知識を発話し、同時にその妥当性を聞き手に確認しているのが a で」、「b が不適切なのは、門外漢が天文学の専門家に、月の表面の重力に関する事実を一方的に伝達することが、現実の状況としてあり得ないからである」というのは北野 (1993: 79) の説明である。神尾と北野の説は以上の例に対して、うまく説明ができたが、しかし、次の例はどうだろう。

(45) 今日は暑いですね。

という発話については、「話し手の意見表明と同時に、聞き手の意見を求めるである」という説 (北野1993: 79) と、同意要求や確認といった発話意図の表明 (金水1991a, 1991b) という説があるが、よく考えてみると、(45) は日常では、挨拶表現としてよく使われ、別に話し手がわざわざ聞き手に同意要求や確認を求める必要はないのではないだろうか。

また、神尾の説に疑問を持つのは、大島 (1996: 137-138) が挙げられる。大島の指摘によると、「聞き手に関する評価文は、「ね」を伴って現われることが多い」。

(46) 君はドイツ語がずいぶんうまいね。

「しかし、「ね」なしの文も見つかり、「ずいぶん」の所にアクセントを置いて感嘆的に発音すれば、「ね」なしでもおかしくない」という。

(47) 君はドイツ語がずいぶんうまい¹¹⁾。

神尾の縄張り理論では上の文を説明できない。

つまり、大島が疑問だと感じているのは、話し手の聞き手に対する一方的評価の表現もしくはその独白的表現として解釈されると、どうして縄張り関係が変わるのだろうという点である。

11) (47)について、神尾の説明は次である。(47)が「話し手の聞き手に対する一方的評価の表現もしくはその独白的表現として解釈することが比較的容易であるためと考えられる。このような解釈は『いい天気ですねえ』の類についても不可能ではなく、例えば、青空を見上げて、『ああ、いい天気だ』と、感嘆のあまり漏らす発話は自然であろう。この場合には、話し手が自己の縄張りに属する情報を聞き手を考慮することなく、発しているものと思われる。そのため、Aの場合 (情報が話し手の縄張りのみに属し、聞き手の縄張りに属さない) が成立し、この表現が自然となるのであろう。これらの考察から、Bの場合 (文の伝達する情報が話し手、聞き手両者のなわ張りに属する場合) が成立するのは、話し手が一方的な思考や感情の表現を行う場合でなく、聞き手に向かって話しかけている場合であると考えられる。」 (大島1996:137-138)

大島は(46)、(47)の違いについて、単純に二つの表現法の違いであると解釈している。

I 融合型表現法

II 全責任引受型表現法

Iの表現法は、「話し手が、聞き手の同意、承認があつて初めて自分の発話の責任をとるという持つて行き方で、言い替えれば、その発話の中に初めから聞き手の参加がプログラミングされているような表現法で」(p.138)あるという。

IIの表現法は、「話し手が、自分の発話を自分のものとして全責任を取りながら提出するという表現法で」ある(同上)。

しかし、次の文

(48) ああ、いい天気ですね。

については、「聞き手が必ず存在し、話し手は聞き手の同意を求める形のコミュニケーションをしている」と説明しているが、やはり納得性のある説明ではないと思われる。

本論文は神尾(1990a,1993)の日本語の「ね」の用法は、情報帰属と密接な関連があるという指摘に賛同する。また、ここでの議論の背景として、情報の把握・伝達に注目する最近の研究の成果があることも付け加えておきたい。

本論文は「ね」に関しては、聞き手の存在を認識しておかないと、「ね」の特質を明らかにすることはできないと主張する。以上の研究を認める上で、中国語の「吧」との対照研究という立場から、先行研究を紹介しながら、議論を進めていきたい。

2.3 本論文についての研究方法

「談話の研究は往々にして、第三者の観察として記述される事が多い……(中略)……しかし、実際の言語表現の使用規則は、言語主体(話者)の観点から決定されていると考える方が実態を捉えている」(田窪1997:i)。神尾は「情報のなわ張り」という概念を提唱し、話し手の情報と聞き手の情報という立場から、数多くの論文でこの概念を使って分析を行っている。また、話し手と聞き手の関係を第一義的には「目上——同等(或いは目下)」ととらえ、更に「疎——親」という二つ目の軸で捉えることができる。表現としては、聞き手に対しては「尊敬語」、話し手自身に対しては「謙譲語」という対立で示されるように、日本語では話し手の領域の事と聞き手の領域の事に関しては、表現的に使い分けをしている。

田窪(1990:54)は言語表現は、人称依存型の視点を取るのか、人称独立型の視点を取るのか、更に、人称依存型の視点を取る場合、対立型の視点¹²⁾を取るのか、融合型の視点を取るのかによって分類できるとしている。日本語は対立型の視点を多く取る言語であると考えているという。

以上のように「話し手」と「聞き手」が相対して立つということは、日本語においては、一つの大きな特徴だと言えよう。終助詞「ね」には類似した言語表現を指摘することができる。日本語の言語表現は「話し手」（内）、「聞き手」（外）との関係調整に関わる現象が大変多く、そのキーワードによって、多くの言語現象を説明することができる。例えば、日本人が古代から生活の場として、ウチとソトを明確に区別していたことは、代名詞の体系、コソアの用法、敬語の使用等の言語面に多くの対応関係を持つことにも現われている（大野1978）。以上の言語事実が、話し手、聞き手が共に身のまわりに心理的空間を構えていることに対応して、表現が成り立っていることを意味する。話し手と聞き手の相互作用を考える視点はとても重要である。一般に、日本人は自己を独立した存在と見なさず、自分は多くの人々からなる集団の一員であるとし、その視点から自らの思考や行動を律していると言われる。本論文は「話し手」、「聞き手」という筋に沿って、話し手と聞き手の情報に依存する状況を分析し、従来の情報に関する多くの研究と異なった見地から「ね」の説明を試みる。

本論文で使われる用語は、できる限り先行研究のを使うことにするが、いくつかの概念について、先に決めておく。

2.3.1 情報 (information)

他者から発せられたメッセージのうち、自分が解釈し、選択しているもので、話し手または聞き手が自己に帰属するものと見なすものである。

2.3.2 話し手（聞き手）に関する情報¹³⁾

「話し手（聞き手）に関する情報」とは、具体的にいうと、話し手（聞き手）の生活や所有物、行動などに関する個人的事実（近親者またはごく身近な人物も含む）、直接体験、職業的或いは専門領域における基本的事実のことである。話し手或いは聞き手のもともとのプライベートに関するものも含まれている。もっと簡単に言うなら、話し手（聞き手）がしたこと、聞いていたこと、話し手（聞き手）に関して起こったできごとに言及するものである。

2.3.3 状況

ここでは、「状況」に対する概念の規定は神尾（1990a：8）のに従うことにする。つまり、「状況」とは、ある文の前後に生じる文によって形作られる談話或いは言語的文脈と、談話の場面、話し手または聞き手の意図・知識・心理状態などを広く含む非言語的文脈の双方を含めた総体である。

2.3.4 話し手と聞き手

12) 対立型の視点とは、田窪（1990:57）の説明によると、話し手が聞き手の知識領域を認め、そこでの状態が自分の記述に影響を与えるという視点である。

13) 情報の概念というのは「特別な関係で手に入れた、その面で必要とされる知識」（『新明解国語辞典』三省堂）ということであるが、ここで指している情報はもっと意味概念が広く、話し手或いは聞き手のもともとのプライベートに関するものも情報の一部だと認めている。

本論文での話し手というのは、「ね」を発話する主体のことだと規定する。「ね」を発話した主体以外の発話者は聞き手だとする。

2.4 「ね」の基本的な機能

「ね」は語用論的なマーカーだと言える。「ね」を伴う発話は聞き手の存在が必要条件となる。つまり、聞き手がない時、「ね」を使う発話が成り立たない。よって、「ね」の基本的な機能を以下のように規定する。

(49) 話し手と聞き手の共感 (empathy) の場を持つことを意味する。

ここでの所謂共感 (empathy) というものは、以下のような二つの要因が含まれていると考えられる。

- (a) 情報の共有に関する話し手と聞き手の認知状態であること
- (b) 対人機能を表す共感の場であること

まず(a)は、話し手と聞き手の認知状態を表すもので、つまり、ある話題に対して、話し手と聞き手が情報を持つ状態、情報を把握する状態を指すものである。話し手と聞き手の認知状態は具体的には次の四つのタイプが考えられる。

- i. 話し手が情報を持っていて、聞き手が持っていない
- ii. 聞き手が情報を持っていて、話し手が持っていない
- iii. 話し手と聞き手がともに情報を持っている
- iv. 話し手と聞き手がともに情報を持っていない

本章は「話し手」、「聞き手」という軸に沿って、発話内容の状況（発話内容が話し手に関するものなのか、聞き手に関するものなのか、或いは第三者に関するものなのかに分ける）から「ね」について分析するが、その中で「ね」が使えるかどうかの条件の一つは、話し手と聞き手がともに情報を共有するかどうかということである。つまり、話し手と聞き手が認知状態が同一であるiii.とiv.の場合は「ね」の使用は基本的に許容され、同一でないのi.とii.の場合は、「ね」の使用が許容されないということである。話し手と聞き手の認知状態における「ね」についての観察は、それぞれ2.4.1、2.4.2、2.4.3で論じることにする。

(b)の共感の場というものは、話し手が聞き手と関わりを持つ意図を指すのである。つまり、ある情報に関して、話し手が聞き手に同一の認知状態を持つことを求める場合のことである。この場合は話し手の心理状態と大きく関わって、話し手と聞き手の認知状態を考慮しない場合がある。つまり、あ

る情報について話し手が聞き手と関わりを持とうとすれば、「ね」の使用が可能である。これは語用論的性質を持つことにも起因するが、しかし、(a)と(b)はそれぞれ独立的な要素ではなく、お互いに関連しているのである。

また、情報伝達機能から考えれば、「ね」に関する使用する状況には、以下のようなものが挙げられる。

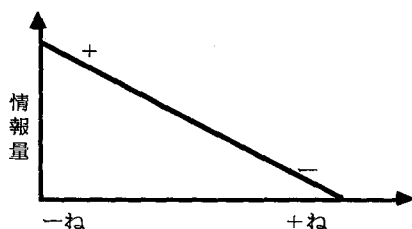
i. 聞き手に伝達する情報量が多ければ、「ね」の使用が「弱」になる

話し手による一つの文法形式の選択は、聞き手にどのぐらいの情報量を与えるかによって左右される。例えば、日常生活では、人と人が出会って、初めて話す言葉は、意識的にせよ無意識的にせよ、共通の語彙を見つけようとする。このような「交話的機能 phatic function」は聞き手に情報を伝達すると目的せず、「儀礼化したあいさつのおびたしいやり取りや、会話をひきのばすことを唯一の目的とするだらだらした対話などに現われる。」(Jakobson 1973: 訳書 191 ページ)。人間の挨拶行動は動物における挨拶的行動と共通しているところがある。動物界において、二個体が出会った際、「あいさつ」のように見える行動をとるのは、基本的に相手の攻撃衝動を宥和するのが最大の目的であるらしい。相手の攻撃衝動を抑制するためにはいくつかの基本戦略があり、服従の信号を送ったり、幼児的しづさをしたり、攻撃的武器を隠すことにより達成される(橋元1999: 14)。

人間は相手と路上等で偶然出会った時の挨拶は、「攻撃性の宥和」という本来的機能を保持しており、「この種の挨拶の大きな役割は、相手の存在(アイデンティティ)および相互の関係を、自分が十分認識していることを相手に表明するところにある」(橋元1999: 14)。

話し手が聞き手に伝達する情報量から考えれば、聞き手に伝達する情報量が多ければ多いほど「ね」を使う要求が薄れてくる。つまり、相手に伝達する情報量は「ね」を使うか使わないかの義務性と反比例する。次のモデルを参照されたい。

図<2-1>



以上のモデルによって、「ね」の情報伝達機能から、「ね」の用法を二つに分けることが可能である。つまり、聞き手に情報を伝達することを目的としない挨拶に使われる場合の「ね」と、聞き手に一定の情報を伝達する場合の「ね」に分けられる。二つに分けても、「ね」の基本的な機能は聞き手との共感を表すというところは変わらない。挨拶の場合は話し手が聞き手に実質的な内容を表現したり、伝達することには主眼が無く、その場の人間関係を作り、情報を共有することを明確に表現する。この「ね」で維持するのが phatic な機能であるから、この機能を主に果たす挨拶言葉は、おのずから「内容の無意味性」という特徴を持つこととなる。真実を伝えるべき言葉の役よりも、むしろ仲間意

識を固めるのを第一義とする。日本人の間の天候気象を話題にした挨拶は、いずれも内容は希薄で、コミュニケーションの本題に入るための形式的な「つなぎの挨拶」にすぎない。このような挨拶表現に「ね」が不可欠になるというのは、個人よりも相手との関係や場に意味を認め、お互いの違いよりもお互いに場の「共有」を期待するからなのであろう。

もう一方、聞き手に一定の情報を伝達する、聞き手に伝達する情報量が多ければ多いほど、「ね」を使う要求が薄れてくるといえるのは、聞き手に伝達する情報量が多ければ、話し手の知識・認知状態に属する可能性が高く、聞き手と共感する必要性がだんだんなくなるのである。

ii. 話し手の意図に基づき「ね」の使用を選択する

発話に「ね」を付けることにより、その発話内容が話し手と聞き手（聞き手の情報）が共感の場を持つというのを意味し、更に話し手が聞き手との関わりを持とうとする時にも使われる¹⁴⁾。即ち、話し手が意図的に聞き手との関わりを求めようとする場合は、「仲間意識または、連帯感を表現して、発話に丁寧さを加える働きを持つ」（神尾1990a: 65）のである。「ね」は基本的な機能のほかに、具体的な文脈でまた派生的な意味が現われる。

次は、発話内容の依存状況、情報依存状況から話し手の意図に基づく「ね」の使用を含めて、「ね」について詳しく分析する。便宜上、発話内容の依存する状況を三つのタイプに分けることにする。

- (50) 発話内容が話し手に関する情報の場合
- 発話内容が聞き手に関する情報の場合
- 発話内容が第三者に関する情報の場合

2.4.1 発話内容が話し手に関する情報の場合

話し手が自分の確定情報を聞き手に伝達する時、聞き手との関わりがなく、「ね」を使わないのが普通である。

- (51) a どこへ行くの？
- b ちょっと銀行へ行ってきます（*ね/φ）。

つまり、この場合の発話状態は、話し手と聞き手が分離して、共有情報を持たず、認知状態が同一でないのが特徴である。話し手と聞き手が共感の場を持たない場合のモデルは次である。

14) ここでの主張は森山（1991:4）の「もし聞き手に当該内容に関する情報があるということが話し手において認識されているなら、話し手はそのことを形式として表さなければならない。」というのとほぼ一致する。

図<2-2>



S: 話し手 H: 聞き手

「ね」は普通話し手と聞き手が共有情報を持つ時に用いる。例えば、話し手が自分のこと・ものについて評価し、発言をする時、勿論聞き手の知識・情報として欠けているので、聞き手から分離し、「ね」を使わないのである。

話し手が聞き手に、

(52) ??私の部屋、きれいですねえ。

というような発話はしない。聞き手のものであれば言える。

(53) あなたの部屋、きれいですねえ。

つまり、(53) は話し手が「ね」を使うことによって、聞き手との共感の場を強調し、融合的な視点を取ることににより、情報の共有を図るのである。

(52) の状況では、日本語と違って、中国語では「吧」が使える。

(52') 我的房间漂亮吧。

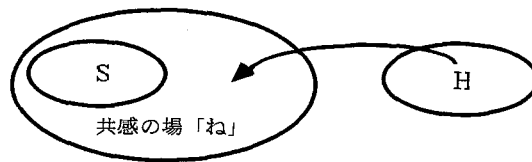
中国語が言えるというのは、「吧」は話し手の評価を表すというより、話し手自身の意見を述べた上で、聞き手の意見・同意を求めているのである。中国語では、「吧」が情報源にこだわらないのである。

しかし、実際の会話では、話し手に関する発話文であっても、「ね」を使う場合がある。こういう時は、話し手が聞き手に伝達する情報量と話し手の意図から解釈しなければならない。例えば、

(54) ちょっと、郵便局行ってきます (ね/φ)。

神尾の説明によると、(53) の意味することは「私は郵便局へ行ってきますから、そのことをよく承知しておいてください」ということであり、「私が郵便局へ行くことをあなたに関わりのあることにしたい」という希望が込められている(神尾1990a:76)ということである。つまり、情報伝達の観点から考えれば、ここでの発話は、話し手が聞き手に一方的に情報を伝達するのではなく、話し手の個人的な行動を表すと同時に、「ね」を付けることによって、意図的に聞き手を共感の場に誘い、聞き手に向かった働きかけがなされるのである。図式で表すと、次のようになる。

図<2-3>



次の例も同じである。これは料理教室における発話である。

(55) 塩はこさじ三ばいすね。(木村・森山1991:7)

ここの「ね」は談話の共感的な進行のために、もともと知らない相手に「ね」を使用するのである。対人機能的に話し手が聞き手に同一の認知状態を持つことを積極的に求める態度であって、先生が、教室で新たな内容を導入しつつ「ね」を使用する場合だと言える。

話し手が意図的に「ね」を使うというのは、また、次のような状況からも伺うことができる。

話し手が聞き手に質問された時、答える時十分な確信を持っていないなら、相手が情報を持っていない状況に近づけようとする姿勢を示し、相手と同じ気持ちを共有する仲間とするためには、相手と分離されない形を取る。

(56) a 家族を犠牲にしても彼女を愛せる？

b 分かりません (ね/φ)。(北野1993:81)

しかし、中国語では、話し手自身のことについて、その感想・考え・判断を述べる時、確信を持っていなくても、聞き手との関わりがないのが事実で、言語表現では「吧」の使用が認められていない。

(56') a 你即使牺牲了你的家庭也爱她吗？

b* 不知道吧。

つまり、中国語では話し手が自分の感想・判断を述べる時、聞き手の情報事情を無視することができるが、日本語では、話し手と聞き手が共通するところがあれば、それを言語で示すのが、聞き手のことを考慮することになり、一種の親近感を演出する行為となりうるのである。「ね」は聞き手が情報を持たない時、話し手も断定的な情報を持たないことを示すことは、話し手が聞き手との知識・観点の共有を強調し、聞き手との距離を縮め、親近感を生み出し、親しさを装う行為と言える。

以上の例に対し、北野(1993:80)はこの場合の「ね」の基本的な機能は「発話確認」であると指摘するが、しかし、聞き手が情報を持たない時、聞き手に確認するということとはありえないと考えられる。つまり、この場合は「発話確認」によって、「ね」の機能を規定するのは多少無理があると思われる。

以上のような用法については、蓮沼（1988）が違う立場から説明を行っている。蓮沼は「ね」の基本的用法は次のようなものであるとする。「発話時において自分が述べようとしていることと、他の何らかのよりどころとなるものとの間に、食い違いがないということを、話し手が話の場に持ちだし確認する」（蓮沼1988: 95）。

具体的例として、次のようなものがある。

(57) a 理想の女性は？

b やっぱり、しとやかで優しい女ですね。^{ひと}

この例は、話し手が「自己内部知識、記憶といったものに照らして、今述べていることが確かにそうだということを、話し手が確認しつつ発言しているといったプロセスが読み取れるが、それを示しているのが他ならぬ「ね」だと考えられる」（蓮沼1988: 95）。また、

(58) a お住まいはどちらですか？

b *神戸ですね。

のような例が不適格なのは、自分の住所を述べるのにわざわざ自分の知識や記憶を吟味する必要がないから、ということである。以上の例に対する蓮沼（1988）の説明は非常に説得力があるが、北野（1993: 76-77）が蓮沼の「内部確認行為説」に反論している¹⁵⁾。確かに、「内部確認行為説」で、

(57) のような個別な文について説明ができるが、「ね」のすべての現象を説明するには、無理なところがあると思われる。

(57) の文について、やはり話し手は自分の一方的な断定を避け、聞き手との不確定な知識を持つという同一の認知状態を求め、聞き手との認識に対する距離を縮めようとする意図が伺えられ、対人機能が十分働いていると言える。

もし、話し手が聞き手の質問に対し、十分な確信を持っている時、この情報は話し手のものであり、聞き手とは何の関わりはないため、「ね」が使えないのが当然だと見られる。

(59) a お母さんの病気はよくなりましたか？

b *お陰様で、よくなりましたね。

(60) a 不正な株取引は、本当にやってないですね？

b *絶対にやっていませんね。（北野1993: 82）

つまり、話し手自身のアイデンティティに関わるプライベートな属性を直接問いかける場合や、発話時現在の話し手自身の感覚・感情を直接問いかける際には、「ね」を用いることが不自然に感じら

15) 具体的な議論は北野（1993: 76-77）を参照されたい。

れる。というのは、話し手自身のプライベートな属性及び発話時における話し手自身の感覚・感情とは、まさに話し手に属する情報以外の何ものでもなく、それについての質問は、当然話し手に依存する形で行われるべきであり、もし、それを敢えて聞き手の情報を考慮する形にすれば、日常の言語運用の在り方としては不自然さを免れない。この場合の発話は明らかに話し手と聞き手が共有情報を持たず、「ね」が担う話し手と聞き手の共感の場を表す機能を窺い知ることができる。

逆から言うと、もし発話されたことが、完全に話し手だけの情報ではなく、聞き手にも関連がある時、「ね」なしでの発話は不適當である。例えば、二人が歩きながら、話し手が聞き手に

(61) *今日は暑いです。

のように「ね」なしの発話は日本語では認められないのである。中国語の「吧」にはこのような制約がなく、話し手が自分の感想などを述べる時、聞き手との情報事情には無関心であって、或いは自分の感想・判断を述べる時、「吧」があったら、不自然である。

(61') 今天很热 (*吧/φ)。

2.4.2 発話内容が聞き手に関する情報の場合

発話内容が聞き手のことに関する場合なら、基本的には「ね」の使用が欠かせないのである。これは神尾(1990a)の縄張り理論のBとCの場合(文の伝達する情報が聞き手の縄張りに属する時)

「ね」は不可欠の要素であるに相当する。しかし、聞き手に関する発話文は「ね」なしで現われる場合もある。その使われる状況が非常に特殊であるため、縄張り理論のような認識論的カテゴリーでは、うまく説明できないものがある。以下は、聞き手に関する発話文に「ね」を使う状況と、「ね」なしの状況に分け、「ね」についての議論を進めていきたい。

2.4.2.1 「ね」を伴う表現

日本語では、話し手は聞き手のことについて、普通自分の感想・評価・判断などをそのまま述べることができない。

(62) a すてきな帽子です (ね/*φ)。

b そうですか、パーゲンで見つけたんですよ。

聞き手がビールをうまそうに飲むのを見て、

(63) あなたって、本当にビールが好きなんです (ね/*φ)。(井上1999: 80)

しかし、中国語では話し手が自分の目の前の光景について、自ら自分の感想・意見を述べ、一方的

な評価をする時は、「吧」の使用ができない。

(62') a 很漂亮的帽子 (*吧 / ϕ)。

b 是吗? 我在大降价时买的。

(63') 你好象真能喝酒 (*吧 / ϕ)。

というのは、自分の感想・意見はあくまでも自分のものであって、相手との関わりがないからである。

話し手が聞き手のことについて、自分の判断などを入れずに、完全に聞き手の情報に依存し、聞き手と情報を共有する場合、日本語では、「ね」を付けるのが必須条件である。

(64) a 奈良まで一枚ください。

b 奈良ですね。(森山1991:5)

しかし、中国語では聞き手が情報を提供してくれた時、話し手が確認するために、「吧」を使うことができない。

(64') a 请给一张去奈良的票。

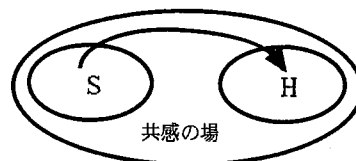
b* 奈良吧。

というのは、聞き手が情報を提供した場合、話し手は判断を下したり、行動したりすべきであり、聞き手の情報を考慮するのはこの場面にふさわしくないからである。或いは聞き手が情報を提供してくれたら、その情報は完全に話し手のものになり、更にその情報源を追及しない。逆に、日本語は話し手と聞き手はあくまでも、別世界で、話し手の知識の中に聞き手の知識に直接言及するのを避けるのである。

図<2-4>



中国語の「吧」



日本語の「ね」

聞き手が情報を提供してくれたら、話し手は確認するつもりで、聞き手の情報に完全に依存するという形を取ることが可能であるが、その時「吧」ではなく、疑問形で確認しなければならない。

(64'') a 请给一张去奈良的票。

b 奈良（吗／φ）？

逆に、話し手がもし、聞き手のことに関して、確実な情報を持っていなければ、話し手自身が推測しながら、聞き手の情報に依存することができる。しかし、日本語では、「ね」を伴う表現は推測というより、聞き手の情報に依存する形になって、「吧」と違う機能を表すのである。

(65) 你是田中先生吧？

(65') 田中さんですね。

ここでの「吧」の意味は推測だと解釈しているが、それは聞き手の事柄への配慮だということを意味する。しかし、日本語における「配慮」というのは狭い意味での配慮で、つまり聞き手への配慮だと解釈される。

言語形式で、第三者に関する発話の場合、もし、その情報が話し手より聞き手のほうが多く持っている場合なら、聞き手の情報領域に属すると見なし、発話する時「ね」を伴うのである。

(66) 彼は確か岡山の出身だったね。

(66) の「ね」については、益岡・田窪（1989: 48）が「確認要求」だと説明している。これも(57)と同じように、「確認要求」は下位レベルの意味で、話し手が「ね」を使って発話するのは聞き手の知識と共有しようとする意図が込められているのである。

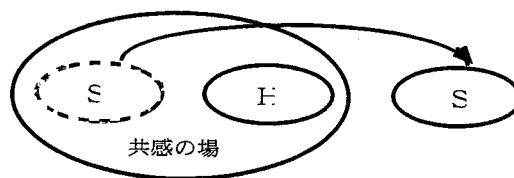
こういう時は、中国語は日本語と同じように、他人のことについて、自分の意見を述べると同時に相手の意見を考慮し、何う場合は、「吧」の使用が可能である。

(66') 他的确是冈山出身的吧。

2.4.2.2 「ね」を伴わない表現

聞き手のことについて発話する時、「ね」なしの表現は普通ではないが、使えるとしたら、その表現は特殊な意味効果を持っているのが殆どであって、語用論的性質を持つのである。この場合の用法は有標（marked）的だと考えられる。「ね」の有標的な用法は、対人機能の立場から解釈すれば、話し手と聞き手が共感の場を持っていないと考えられる。聞き手に関する発話なのに、聞き手の情報に依存しないということは、話し手のほうから意図的に、聞き手との共感の場を切り離したいのと考えられる。聞き手から独立するというのは、聞き手との共通した情報を自分のものだと見なし、改めて一方的に聞き手に情報を伝達することに焦点を当てるのである。こういう場合のモデルは次である。

図<2-4>



具体的に以下のようなものがある。

2.4.2.2.1 話し手の断定、一方的な評価を表す場合

神尾 (1990b: 50-51) は情報のなわ張り理論が丁寧さの研究にとっての基礎をも提供するものであることを示す。神尾は「なわ張り関係」を正しく守った発言には非礼さがなく、これを破ったような発言は丁寧さを欠く非礼な発言となりやすいという。しかし、丁寧さとなわ張り理論とは必ずしも一対一の関係にあるとは言い難い。次のいくつかの例文から分析すると、「なわ張り関係」を正しく守らなくても、丁寧さを表せる場合があることが分かる。例えば、聞き手の着ている服を見て、

(67) うわあ、すてき。新しいの？

のような文は、話し手が聞き手のものに関してコメントをする場合に、話し手が自分の観察・意見を詠嘆の形で表現しているので、「ね」を使わなくてもよいのである (大曾1986: 92)。

「ね」を使わなくてもよい状況は、もう一つある。それは聞き手のことについて、話し手が自分の発言に対し、確信を持っている時、「ね」なしでもよいわけである。つまり、話し手が確信をもって発言する時は、聞き手との関わりを切り離し、自分の主張・判断を優先する形になる。

(68) 今回の事件で、あなたも責任を取らなければならない (ね／φ)。

勿論、(68) のように確信を持っていない時、「ね」をつけて発話し、聞き手との関わりを表すこともできる。以上のように聞き手のことに関して、普通、「ね」がなければ、話し手が自分の観察・判断を相手に押し付けるようになって、丁寧さに欠けているような印象がある。

しかし、もし、次の (69) のように聞き手に対するプラス評価をする時、その観察・判断・評価は、形態的に話し手のものだとし示せば、丁寧さが現われる。逆に、「ね」をつけると、この評価は話し手一人のものでなくなり、直接評価を避けることは、少し失礼な感じがする。

(69) a 今日着ている服、どう？

b そうですねえ。似合うと思います (ね／φ)。

しかし、(68)、(70) では、相手を責める内容になると、直接的な言い方が逆に、相手を傷つけやすく、「ね」があったほうが今の判断は私個人のものではなく、あなたにも関係があるのをほの

めかし、独断的な主張をやめ、丁寧さを示すのである。

(70) a 彼はテストに受かるでしょうか？

b そうですね。だめだと思います (ね／ ϕ)。

以上で見たように、「ね」の発話状況から外れた用法は対人機能が働いて、話し手の意図性が強く感じられ、話し手の何かの意図をほのめかしているのである。

2.4.1では、中国語では話し手自身のことについて、その感想・考え・判断を述べる時、確信を持っていなくても、聞き手との関わりがないのが事実で、言語表現では、「吧」の使用を認めていないと指摘した。

(56') a 你即使牺牲了你的家庭也爱她吗？

b *不知道吧。

つまり、中国語は相手の知識状態に言及する事なく、自分の知識のみに基づいて使用条件が決められ、聞き手の知識状態は言語形式に影響を与えていないのである。

もし、その感想・判断する内容が聞き手のことであれば、「吧」の使用は認められる¹⁶⁾。

(69') a 我今天穿的衣服怎么样？

b 嗯，还可以 (吧／ ϕ)。

(70') a 他能考上吗？

b 嗯，我想不行 (吧／ ϕ)。

また、ここにおける解釈は日本語と同じで、(69')は「吧」がないほうが、失礼な表現ではなく、(70')は「吧」があったほうが、丁寧さが感じられる。(69')はプラス評価で、(70')はマイナス評価である。日本語の「ね」がここにおける発話内容の状況を見捨てる用法は、中国語の「吧」の用法に近い(本章の1.3.3.3を参照)。

2.4.2.2.2 聞き手との共感の場であることを拒否し、独自の主張を強調する場合

(71) (君は)お酒を飲んだ (ね／でしょう)。

16) (62')と(69')はともに聞き手のことに対する話し手の感想・意見を表すのに、語気助詞における使い分けが違う。というのは、(62')は話し手が自ら自分の感想・意見を述べることに對し、(69')は聞き手に感想を聞かれた状況における発話の違いによるものと思われる。つまり、(62')は話し手が意図的に聞き手との関わりを切り離し、一方的自分の感想・意見を強調し、「吧」との共起は認められず、(69')は「吧」をつけることにより、いまの述べている感想・意見は話し手の一方的な意見ではなく、聞き手の気持ちを考慮した上での意見だということをほのめかすのである。分かりやすいと、「还可以」という評価を下すのは、話し手のすべての気持ちではなく、聞き手に聞かれた状況の気持ちだということを意味する。

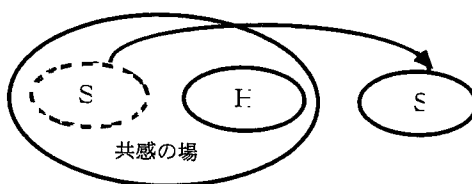
聞き手がお酒を飲むという行為に対して、話し手がそれを確信していても、日本語の言語上の制約によれば、話し手は疑問文を使うか、「ね」や「だろう」等を伴った文を発話する。というのは、聞き手は自分の行為に関しては、よく把握しているはずなので、話し手が改めて「ね」なしでそれを情報として一方的に伝達することが現実の状況として有りえないからである。よって、話し手は「ね」で、言語形式から聞き手と情報を共有すること、認知状態が同じであることを示さなければならない。これは聞き手に伝達する情報量と「ね」の義務性と反比例することに一致する。

しかし、「ね/でしょう」なしの文も可能であるが、それは、しらばっくれている相手に喧嘩腰で怒鳴るような場合である（大島1996:134）。

(72) (嘘をついても無駄だ!) 君はお酒を飲んだ!

この場合の例は、聞き手がお酒を飲んでいないという主張に対し、話し手が自分の判断に依存し、独自の断定を主張し、聞き手との情報を共有することを拒否するのである。

図<2-5>



2.4.2.2.3 聞き手に関することであるが、聞き手の知識（記憶）として欠けている場合

聞き手に関することであるが、「聞き手の知識（記憶）として欠けている場合（厳密には、話し手がそう判断している場合）」（大島1996:134）は、話し手が一方的に新たに情報を伝達することができる。

ここでは、主に大島の例文を引用する。

(73) 去年の誕生日にも君は同じものをくれた（ね/φ）。

「ね」がある表現は話し手と聞き手が認知状態が同じで、情報を共有して、それを懐かしがっているような場合が使われる。「ね」がなければ、聞き手が自分がしたことを忘れ、その記憶が欠如していることに対して、話し手との共感の場が失われ、話し手が新たに聞き手に情報を提供することにより、話し手への不満を感じさせるのである。つまり、聞き手が話し手と情報を共有していないという想定が話し手によってなされているからである。

また、次の例も「ね」がないというのは、聞き手がもともと話し手と共有した情報を無くし、話し手の独自の情報に変わったため、「ね」を使っていない。黒沢明の『夢』の中の一節であるが、元中隊長は夢の中で、実際に戦死した自分の部下に会い、その兵士が、「中隊長殿、自分は本当に戦死したのではありますか。自分は自分が本当に戦死したとは思いません…」という質問に対して、次のよ

うに答えている。

(74) しかし、おまえが死んだのは事実なんだ。私の腕の中でおまえは死んだ。

(73)、(74) はともに聞き手が話し手と共有した情報を失ったため、話し手が言及する内容を自分の側だけの知識のように扱い、新たに聞き手に提供するのを表すのである。

以上をまとめると、もともと認知状態が同じで、情報を共有していたが、話し手或いは聞き手が共感の場から抜き出し、独立する方向へ向かい、話し手が新たに聞き手に情報を伝えるように、自分の意見・判断を強調したり、聞き手の情報を無視したり、突き放したり、或いは距離を置いて物を言ったりするという印象の発話になるのである。話し手が聞き手との共感の場から独立する要因は、話し手による場合（自分の判断を強調する）と聞き手による場合（知識・記憶が欠如する）がある。その要因の違いにより、文の意味も少し違って来る。

2.4.3 発話内容が話し手と聞き手の情報でない場合

発話内容が話し手と聞き手のものでないなら、その内容は第三者に関することや、自然現象に関する事だと推測できる。また、第三者のことについて論じる時、話し手と聞き手がともに当該の知識を同じように持っている場合と、話し手と聞き手がともに不確定な知識を持っている場合と二つの状況に分けることができる¹⁷⁾。しかし、この二つの場合はともに話し手と聞き手が情報を共有し、認知状態が同じであることとして変わりはない。

まず、話し手と聞き手の持っている知識・情報が一致する場合の発話について考える。

2.4.3.1 話し手と聞き手がともに確定な情報を持つ場合

話し手と聞き手が確定な情報を持つというのは、同一の対象に対して、ほぼ同じような情報量を持ち、同じような判断が出される場合のことである。例えば、aとbがよく晴れた空を見上げている時の発話である。

(43) a 今日はいい天気です (ね/??φ)。

b ええ、そうです (ね/??φ)。

(43) の文脈では、aは「同意要求」で、bは「同意」を表すと大曾美恵子(1986:91)は説明している。ここでの「同意要求」や「同意」というのは、「ね」の具体的な文脈においての下位レベルの意味であって、基本的な意味とは言い難い。まして、日本語では、(43)の文脈なら、「ね」なしでは、会話自体が不自然で、成り立たなくなる。「同意要求」行為がなければ、「ね」をつけなくてもいいというわけではないから、意味的というより、文法的に「ね」を使用するのが必須的な条件

17) 以上の状況以外に、当該のことについて、話し手がその知識を持っていて、聞き手が持っていない場合と、聞き手が当該の知識を持っていて、話し手が持っていないという状況が考えられるが、それらをそれぞれ話し手の領域と、聞き手の領域に分類することにする。

であると言える。よって、「ね」を「同意要求」行為と積極的に関連づけることは難しいように思われる。「ね」の基本的な機能は語用論的に話し手と聞き手との共感の場を表すマーカーだと言える。

中国語では、(43)の文脈では、「吧」を用いたら、aの方は不自然であり、bの方は不適切な表現である。

(43') a? 今天的天气不错吧。

b* 是吧。

というのは、aは天気ぐらいの話なら、一目瞭然のことで、話し手が自分の判断を述べながら聞き手の意見を配慮する必要がないと考えられるからである。bも当然一目瞭然のことに対して、聞き手が率直に自分の意見を述べることができるので、客観的な事実の前で話し手と違う意見があるとはまず考えられないし、話し手の意見を考慮する必要も全くない。自分の意見（同意するかどうか）を述べる時、中国語の「吧」は基本的に使えない¹⁸⁾。もともと天気に関する会話は、中国語では日本語のように、慣用化されていないため、表現の実用性があるかどうかに関する面では、日本語よりこだわるようである。

英語でも、(43)の文脈で、話し手が聞き手の同意を得る表現を用いる必要はない。

(43'') It's a beautiful day.

日本語では、「話し手」と「聞き手」、「外」と「内」の区別を意識する。情報の帰属に関する「なわ張り」関係が存在するという仮定は間違っていないが、「ね」の解釈に関しては、もっと根本的な根拠は、「話し手」と「聞き手」を区別して、発話するのではないかと考えられる。

しかし、もし、判断される対象に対して、両者が同じ評価をするのではなく、個人差によって、それぞれ違う評価する可能性がある場合なら、中国語は「吧」を使うことができる。

例えば、話し手と聞き手が一緒に観劇をする時、

(75) この人の演技は上手です (ね/??φ)。

を言う時、日本語は「ね」がなくてはいけない。一方中国語は、

(75) 这个人的演技不错 (吧/φ)。

のように、話し手が聞き手の意見を顧慮することなく、一方的な評価を発する時、「吧」なしの言い

18) 同意というのは、聞き手の意見に対して、話し手の一方的な意見を述べることを意味する。話し手が相手の意見に対して、自分の同意を表す時、中国語では、語気助詞「啊」を使うことができる。「吧」が使えないというのは、「吧」を使う時、聞き手の意見を考慮する必要があって、話し手が一方的に自分の意見を述べることができないからである。

方でもよい。「演技が上手かどうか」、自分の判断が必ずしも相手と同じであるとは限らないから場合、「吧」を使って、聞き手の意見を配慮する言い方もできる。

以上の例から、日本語と中国語の違いについては、少なくとも次のようなことが言える。つまり、当該の発話内容に話し手と聞き手がともに関与する場合、或いは聞き手のことに関与する場合は、日本語は文法形式でそれを明記しなければならないのに対し、中国語は当該の発話内容が誰の領域に属するか、或いは今二人で同じ認知状態にいるにしても、相手がどう判断するかは、文形式の選択に特に影響を与えないのである。話し手と聞き手が同じ状況におり、同じ対象に対し、判断をする時、日本語は話し手の個人的な判断にならず、中国語は話し手の考え・感想なら、話し手の個人的な判断にしかねないという所に違いが見えてくる。

2.4.3.2 話し手と聞き手がともに不確定な情報を持つ場合

不確定な情報というのは、同じ判断対象に対し、話し手、聞き手ともに断定できない情報を持つ場合のことである。

ある発話内容について、話し手と聞き手がともに、不確定な情報を持っている時、「ね」でその立場が同じであることを明記するのが普通である。

(76) a 京都は近い内本当に大地震が起こるのでしょうか？

b 起こると思いますね。

ここでの「ね」は話し手が聞き手と同じ状況にいる場合、自分の意見を全面に押し出すのではなく、聞き手の考えも配慮し、丁寧さが出る。中国語の「吧」の用法も話し手が第三者のことについて、自分の判断を言いながら、聞き手の判断も考慮する時は、聞き手の意見を尊重する効果が出るのである。

(76') a 京都近期真的会发生大地震吗？

b 我想会吧。

勿論話し手の一方的な判断として「吧」がなくてもいい。

(76'') a 京都近期真的会发生大地震吗？

b 我想会的。

以上のように、「ね」を使うか否かは、発話の表現している情報に関する話し手と聞き手の認知状態、対人機能による話し手が聞き手と共感の場を持つかどうかという意図性に関わるものである。

2.5 「ね」と命令・依頼表現との共起

この節では、「ね」が命令・依頼表現が相関する現象を考察する。

2.5.1 「ね」と命令文

命令は基本的に話し手が聞き手に一方的に情報を伝達し、行為遂行を要求するのであるから、「ね」を使う義務性が殆どないと言える。

(77) *しっかり勉強しろね。

「ね」は命令文において、言語形式の制限を受けている。つまり「ね」は聞き手と認知状態が同一であることを示し、聞き手への配慮が入っているため、絶対的の命令を表す「～しろ、～せよ」と共起できない。というのは、絶対的の命令は話し手が聞き手に一方的に目標まで達成するよう働きかけ、聞き手と妥協する、或いは選択する余地を与えないため、聞き手と対立する立場にあり、共感の場を持つことがありえない。

(78) 寝る前に歯を磨きなさい (ね/φ)。

(79) *ここでたばこを吸ってはいけませんね¹⁹⁾。

しかし、(78) は相対的な命令文で、話し手が聞き手に一方的な命令を強調しながら、念を押すということで、聞き手との共感の場であることを表す。命令文で、聞き手と共感の場を求めるというのは、対人機能的に話し手が一方的に自分の意志を聞き手に押し付ける同時に、聞き手に納得させ、同意を得られるのを期待するのである。

「ね」と共起できる相対的の命令文は、今すぐに相手に動作・行為を起こしてもらうのではなく、後程でという特徴を持ち、強い命令というより、念を押すという意味が込められている。

2.5.2 「ね」と依頼文

依頼というのは、聞き手に働きかけ、自分の要求を実現するというのを表す。依頼は聞き手に選択する余地を与えることで、聞き手への考慮を表すことになり、聞き手と共感の場を持つことによって、目的を達成するのである。依頼文は「ね」と共起しやすい。

(80) お願いですから、帰らないでください (ね/φ)。

しかし、もし、次の文のように、形式的に依頼であるが、意味的に話し手の一方的な意志を強く強調する場合なら、発語内効力は命令で、「ね」があると、許容度が落ちる。

19) 「ね」なしで、話し手が一方的に聞き手に情報を伝達する働きを持っている。もし、相手が吸っているのを咎めようとする場合、「ね」を伴うことができる。

(81) ?お願い、私を殺さないでね。

2.5.3 「ね」と勧め文

勧めというのは聞き手の利益のため、話し手が何かを提案するという意味を表す。話し手が勧めたこと、提案したことが、聞き手が聞き入れるかどうかは聞き手次第で、基本的に聞き手を考慮することになり、「ね」との共起ができる。

(82) どうぞお入りください (ね/φ)。

(83) どうぞたくさんお召し上がりください (ね/φ)。

本論文では、勧め文を機能的に狭義の「勧め文」と「勧誘文」に二分類する。狭義の「勧め文」は聞き手の利にする表現で、中国語では聞き手の情報を配慮せず、或いは話し手の部分的な気持ちを表す場合の「吧」があるほうがないほうより丁寧さが欠けていると述べた(1.3.3.3を参照)が、日本語にはそのような違いがないようである。中国語では「吧」を伴わない表現が、丁寧である。

(83') 请吃 (吧/φ) (どうぞ召し上がってください)。

「勧誘文」の場合は、話し手が聞き手にともに行動するのを要求するので、聞き手の情報を配慮するほうが丁寧である。この点に関しては、中国語、日本語は同じことが言える。

(84) 今年一緒に中国へ旅行に行きましょう (ね/φ)。

(85) 今晚一緒に食事をしませんか (ね/φ)。

(84') 今年一起去中国旅行 (吧/φ)。

(85') 今天晚上一起吃饭 (吧/φ)。

以上で分析したように、「ね」は話し手が聞き手との共感の場を表すから、命令であれ、依頼であれ、文法形式から判断することは不適切で、語用論的な分析が深く関わっていることが分かる。話し手が聞き手に伝達する情報量が多ければ多いほど、「ね」を使う義務性が弱い。話し手が聞き手を考慮し、聞き手との共感の場であることを強調すれば、「ね」の使用は認められる。「ね」の使用は話し手の心理的状態にも大きく関わるのである。話し手が心理的に自由に拡大・縮小するので、客観的な尺度から見れば、きわめて不安定なものとなる。

§ 3 おわりに

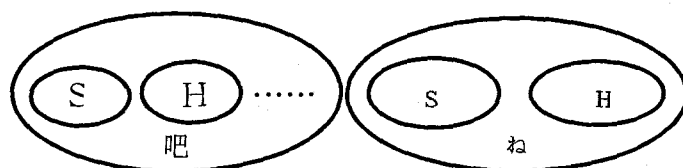
3.1 中国語の「吧」と日本語の「ね」との比較

3.1.1 話し手と聞き手の立場から

これまで見てきた中国語の「吧」と日本語の「ね」の用法をまとめ、話し手と聞き手の観点から、図で次のようにイメージ化する。

図<3-1>

中国語の「吧」の使用状況 日本語の「ね」の使用状況



中国語の「吧」は部分的モダリティを表すため、相手がいなくても、話し手が選択する事項が複数であれば、いいわけである。しかし、日本語の「ね」は聞き手が存在するのは必須条件になっている。中国語の「吧」は話し手がある物事に対して、不確定な判断をする時や、聞き手の意図を考慮する時など使われるが、聞き手の発話状況を無視することができる。つまり、話し手は聞き手の知識状態に言及することなく、自分の知識状態のみに基づいて発話するのである。強いて言えば中国語の「吧」は日本語の「ね」と基本的に違っているところが、聞き手の知識状態は言語形式に影響を与えないということである。しかし、日本語の「ね」は発話内容が聞き手と関連があるかどうかを使用条件とし、その後は話し手の意図にも関わっている。中国語と日本語の使用状況を表にまとめてみる。

図<3-2>

	情報源への配慮	事柄への配慮	
		聞き手	聞き手以外
中国語	×	○	○
日本語	○	○	×

中国語の「吧」は聞き手の情報事情に関与しないのは、次の例から明らかになる。

- (86) a 我没带手表。你有吗？（私腕時計をしていないのですが、あなたおもちですか？）
b 我有。（持っていますよ）
a 已经过了十点了吧？（もう十時過ぎたでしょう）（木村・森山1991: 16）
- (87) a 我没带手表。你有吗？（私腕時計をしていないのですが、あなたおもちですか？）
b 我没有。（持っていませんよ）
a 已经过了十点了吧？（もう十時過ぎたでしょう）

(86) と (87) の聞き手の答えが違っているにも関わらず、話し手の答えにともに「吧」を使うことができる。つまり、聞き手が当該の情報を持っているかどうかとは無関係である。勿論、意味的な解釈において、(86) の「吧」は聞き手の情報に依存し、聞き手に確認するという意図が込められている。(87) の「吧」は聞き手が情報を持っていないのが明らかで、話し手の自らの推測か、聞き手にも考えてほしいという意図が入っている。

3.1.2 「吧」、「ね」が「当為」を表す表現との共起について

「吧」と「ね」については、「当為」を表す言葉と共起できるかどうかによって、その違いが明らかになる。次の例文のように、中国語の「吧」は部分モダリティを表すため、話し手の一方的な要求・提案と相容れない関係にある。しかし、日本語の「ね」の特徴は、聞き手がいるから成立するものなので、聞き手の立場を考慮することになっている。たとえ話し手の一方的な要求・提案を表すとしても、同時に聞き手の気持ちを配慮することができる。

(88) 你应该好好学习日语 (*吧 / ϕ)。

(88') あなたは日本語をしっかりと勉強すべきだ (ね / ϕ)。

ここで「ね」に関しては、「ね」が省略しても、文意に大きな違いが生じない随意的なものと、省略すると文意が異なってしまう必要的なものの二つに大きく類別できる(神尾1990a)。しかし、中国語の「吧」は随意的な用法しかないと考えられる。「ね」の使用は聞き手の情報が関わっていれば、それを使うというのが必須的条件になっているが、意図的に聞き手と共感の場を持とうとすれば、「ね」の使用も許すのである。

3.1.3 命令・依頼表現の違いから

モダリティの立場から分析すれば、「吧」と「ね」の違いを次のように表現することができる。

図<3-3>



日本語では、話し手が発話のうち「ね」の部分は聞き手との関わりを表し、命題の部分のバラエティーは話し手が聞き手との上下・親疎関係に関わりを持つのである。例えば、話し手が聞き手より絶対的な権威を持つ場合、命題部分の表現がぞんざいになる。

(89) 先生のいうことをよく聞きなさい (ね / ϕ)。

ここの命令形は話し手と聞き手の上下関係を表し、「ね」は話し手が聞き手に承知してもらいたい気持ちを表すのである。ただし、話し手の一方的な強制要求を表す時、「ね」の使用は不適格である。

(90) 先生のいうことを聞け(*ね/φ)!

(89) は相対的命令で、(90) は絶対的命令である。

中国語の「吧」も命題の外側にあるが、ただ単に聞き手との関わりを表すだけでなく、話し手が物事を部分的に把握するのを表すのである。例えば、相手がいなくても、「吧」の使用が可能である。

(91) 算了, 我还是明天再去吧。(もういい、やはり明日に行くことにしよう)

(91) の発話は話し手の独り言である場合も成立する。

中国語の「吧」も絶対的命令文との共起ができない。

(92) *滚吧!(出てけ)

(93) *站住吧!(待て)

3.2 全体的なまとめ

中国語は発話内容の存在事情に関して、あまり考慮せず、話し手が自分の観察・意見などをそのままに発話できるのに対し、日本語は発話内容の情報の存在事情に依存し、相手の気持ちを考慮し、探りながら発話するのが特徴である。つまり、日本語では、話し手が相手と会話をする時、自分の意見を述べる際に、相手が自分と同じ意見を持っているかどうか、相手はこれから自分が言うことに関してどのくらい知っているかなどに関する話し手の判断によって微妙に表現の仕方が変わってくる。その話し手の判断の表現を受け持つのが終助詞である。よって、日本語では「ね」のような終助詞なしでは、自然な日本語の会話は成り立たないのである。また、中国語の語気助詞や日本語の終助詞は丁寧さと関わりがあって、丁寧さが中国語と日本語の談話操作に深く関わっていると言える。丁寧さという対人関係の調整機能が、言語にとって普遍的で、基本的な機能であることは、言語活動を人と人との相互行為という語用論的視点から見ると容易に理解される。

話し手が自分だけで発言するのではなく、聞き手を意識して、お互いの会話を密にしようとしているのが、助詞「ね」の働きである。「ね」は話し手と聞き手の共感の場を表すという証拠の一つは土井晃一・大森晃(2000: 110-111)によって証明されている。例えば、会議の時司会者があまりあいづちを打たないことにより、会議参加者には様々な心理的な負担(例えば、伝達に対する不安や疎外感)が生じ、それを解消するためにコミュニケーションを密にしようとする心理が働いて、助詞「ね」を多用するものと推察される。「ね」は会議参加者に心理的負担を生じさせないことによって、

会議参加者は了解・情報の共有にもっと専念でき、コミュニケーションの質が向上するものと考えられる。つまり、話し手は「ね」を使用する背後にある心理的なメカニズムと関連していると推測される。

同じような特徴を持っているのは、中国語にしても、日本語にしても、直接形は話し手が与えられた情報の真偽について最も強い確信を抱いている場合に用いられ、間接形は話し手が情報の真偽について多少とも確信に欠けるところがある場合が用いられるのである。直接形は明確な発言である反面、もの柔らかさや丁寧さに欠ける場合が多い。これに対して、間接形やその他の発話形式は明確さに欠けるが、もの柔らかさや丁寧さを持つ傾向がある。命令・依頼表現では、中国語は「吧」の使用により、話者の判断を示す表現を弱める方法で、依頼する時の丁寧さを表すのであるが、それに対して、日本語は話し手の一方的な断定を回避するため、「ね」で聞き手と情報を共有するのを示すのである。

発話において、「中国語の場合、話し手の認識こそが基準となるのに対して、日本語の場合、聞き手の認識を談話の内部で尊重しなければならないのである」（木村・森山1991:20）。日本語では聞き手の知識を非常に強くした形で対話が進められ、話し手と聞き手が共有する情報に対しても、聞き手を無視して直接形を使うのが禁止されるという特徴がある。日本語の言語表現では、話し手に帰属する知識か、相手に帰属する知識かを対立型の視点を取って区別し、話し手と聞き手の相対する意識がとても強いと言える。

第七章

結語

本論文は、理論的に命令・依頼表現を考察するのではなく、中国語の命令・依頼表現におけるいくつかの統語現象（動詞、形容詞、副詞、語気助詞（終助詞））に着目し、語用論的、対人機能的観点から個々の具体的な分析を行った。同時に日本語との比較も行い、筆者なりの考えを述べたつもりである。比較することを通して、中国語の命令・依頼メカニズム、丁寧さを表すいくつかの手法は、ただ本来的に丁寧さを表すのではなく、文法的なマーカーでもあることが、日本語の命令、依頼のメカニズムと違うことを明らかにした。

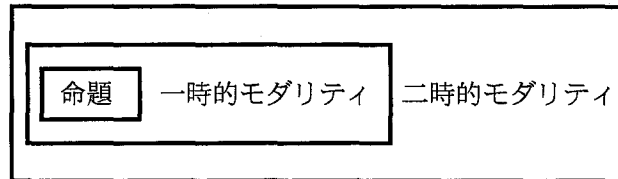
中国語では、単に意味理論からは説明できないような文法項目——動詞の重ね型、「形容詞の命令文」などを語用論、認知の観点から分析すれば、納得できる帰結が得られる。中国語の動詞の重ね型、「形容詞の命令文」などのような言語現象は、文法に動機づけられたところがあるとするならば、それは少なくとも部分的には語用論的な配慮によるものである。本論文では、従来からの中国語の動詞の重ね型がなぜ「少量」を表すか、なぜ命令・依頼表現でよく使われるかという疑問に対して、答えを出した。また、中国語の「形容詞の命令文」という先行研究に疑問を持ち、認知の観点から「一点儿」の正体を明らかにした。それは今までの「動的化させている」（荒川 1979）働きを持つだけでなく、参照点マーカーであることを提案した。更に、命令・依頼表現における形容詞のある命令、依頼文に関して、中国語と日本語の形容詞の機能が違うことを指摘した。語気助詞「吧」の使用は、命令・依頼表現では必ずしも丁寧さを表すとは言えない。語用論的な用法を分析し、「吧」の機能を明らかにし、日本語の「ね」との比較を行った。

§1 日中命令・依頼表現のモダリティ的分析

ここで中国語と日本語の間で見られる相違を確認しておこう。仁田（1989: 1）は日本語文の基本構造を入れ子の中心となる「言表事態」（命題）とそれを包み込む「言表態度」（モダリティ）から成していると主張する。発言内容或いは聞き手に対する話し手の態度を表すモダリティの表現は、日本語では文末表現などの具体的な形を取る。統語的な立場から考えれば、日本語は「～してくださいませんか」、「～していただけませんか」のように授受表現等を補足的に組み合わせることによって、丁寧度を高めている。逆に言えば、中国語では、構造的に語の補足による丁寧度の調整が困難であるために、利益交換など、ダイナミックな語用論的手段を駆使することによって、丁寧度を高め、依頼を実現するのであるが、形態的にも命令・依頼表現を表す形式は存在する。それは、中国語の動詞と形容詞の意味的な特徴によって、命令・依頼表現では、聞き手に依頼すること、要

求することを明確に指示するのを強く要求されるからである。日本語の依頼表現は、その丁寧さの程度に応じて、状況や依頼の内容の軽重、或いは相手との関係によって、適切な組み合わせで使われることが要求される。中国語の命令・依頼表現は、モダリティの形で表すことができるが、命題とモダリティ成分に分けるなら、いくつかの段階に分けることができる。

図<1-1>



モダリティ表現の選択には二種類のものがある。一つは、語用論上の選択が義務的なモダリティ表現でありながら、文法的な要請からもモダリティ表現の使用が義務だと位置付けられる。この種のモダリティは話し手がコンテキストを気遣うものであり、話し手がコンテキストを配慮してそれに適合させるという他律的な気遣いをする言語使用である。もう一方話し手が主観的態度や意志で随意に選ぶものである。前者は一時的モダリティとして、動詞の重ね型、「形式上の形容詞の命令文」などが挙げられる。後者は二時的モダリティで、語気助詞の「吧」が挙げられる。一時的モダリティは命題の内側の成分として機能しがなら、聞き手のことを配慮し、依頼表現を丁寧化するにはモダリティの機能も果たしている。中国語では、話し手が聞き手に行為を要求する時、動詞に後置成分（動詞に接尾語「了」、「着」をつけたり、動詞を重ねたり、各種の補語をつけたりする）をつけたり、動作・行為の状態・性質に基づいて要求する時、参照点「一点儿」をつけたりするのが要求されるのである。こうして、一時的モダリティを使い、言語形式とコンテキストとの語用論的一致が中国語では義務化されている。一時的モダリティは命題と二時的モダリティの中間的なものとして位置づけられる。このように中国語では、語用論は文法的な側面に傾斜し、語用論的な効果は文法から生じると言える。

日本語の動詞の活用変化によるモダリティ表現は話し手が会話参加者の上下・親疎や場面の改まりの度合についていかなる捉え方をしているかを表現しなければならない。そう言えば、日本語は発話のコンテキストが話し手に関する話題なのか、或いは聞き手に関する話題なのかの違いによって、言語形式を選択しなければならない。言語形式とコンテキストとの語用論的一致が、日本語でも義務的だと言える。以上のように中国語では、依頼の丁寧さに関するモダリティ表現の義務的選択は、文法的一致、つまり動詞の語尾の要素によるものであると言えるのに対して、日本語では、表現の丁寧さのモダリティ表現の義務的選択は、コンテキストに関する社会的基準で決められ、ともにモダリティ表現が文構成上義務的な要素であると言える。

二時的モダリティは「吧」のような語気助詞が挙げられる。特に「吧」の使用は、文の命題の意味に変化をもたらすことはないが、その指標的機能によって話し手がコンテキストに適格な言語行動を行うことができる。特に「吧」と「ね」については、最も大きな違いは日本語は話し手と聞き手が対立する視点を取るため、「ね」は情報が話し手に属するものであるか否かの証拠性 (eviden-

tial) を明示することが義務的である。逆に中国語の「吧」は相手の知識状態に言及する事なく、自分の知識のみに基づいて使用条件が決められ、表現上義務的な要素ではない。二時的モダリティ成分は、他にもいろいろあるが、本論文では言及することができず、別の機会に譲る。

§2 日中命令・依頼表現の語用論的な相互関係 —— 丁寧さの問題

2.1 依頼文における丁寧さ

命令・依頼表現の話をするには、待遇表現及び「丁寧さ」の話に触れるのが普通である。Leech の丁寧さの原則に従えば、話し手が自分の依頼・要求を達成するために、相手に働きかけるストラテジーは多く共通だということを見てきた。次は中国語と日本語の丁寧さの違いについて少し考える。

まず、日本語には、尊敬語、謙譲語、丁寧語、美化語などと呼ばれる語彙が多く、いわゆる敬語体系を構成しているのに対して、中国語には、「您」と「请」などの敬称を除くと、日本語の敬語体系のように、対人関係を直接表現する語彙は極めて少ない。従って、語彙論の中で丁寧表現を論じるのが無理なところがある。もし、談話や構文における語法にまで目を向ければ、中国語、日本語にも丁寧さの表現手段が多様に存在するのである。中国語は日本語ほど豊富な敬語体系を持たないが、構文操作などにおいては、対人関係の調整手段を発達させているのである。ある意味で、一見相互に関係のないこれらの様々な談話や、構文操作の背後に、語用論の視点に立つと、丁寧さという一つの要請が働いていることが見えてくるのである。

日本語と中国語で命令・依頼表現における丁寧さの表し方には、全体から眺めると、結局は本論文で述べたように丁寧さを表現するために、独自の表現形式の体系を持つ日本語と、いくつかの統語的手段を用いながら、その場、その場の言葉のつなぎ具合、或いは、言葉の全体的な流れによって丁寧さを表現する中国語との違いに帰着するものと思われる。

日本語においては、特別な接辞が動詞に付加されると、話し手の指示物に対する敬意や謙遜を表すことができる。日本語の話者は、この豊かな敬語体系を利用して、あてこすりをしたり、話し手と聞き手の間の関係が変わったという所信や、敬語形式が暗示する関係へ移行したいという所望を表すために、敬語のレベルを変えたりする。しかし、中国語のように敬語接辞を持たない言語では、英語のように既存の単語が頻繁に話し手の聞き手に対する敬意を示す役割を担わされることになる。

以上のように日本語は助詞・助動詞を駆使して、表現パターン、丁寧度的手段を多様に構成しているが、中国語は孤立的で、動詞の活用もなく、敬語に専用の助動詞もなく、ましてその助動詞の活用もないから、婉曲をつくすことに大変不得手である。

中国語は話し手が自分の依頼を敢えて明示的に提示せず、曖昧・漠然的な表現で自分の要求を相手にほのめかし、相手に察してもらうようなストラテジーを取るのである。このような依頼をここでまとめて「ぼかし表現」と言う。具体的な用法としては、例えば、話し手が依頼をする時、FTAによって引き起こされた不都合さを緩和しようとするため、規則的な形態論上の形を持つ「指小語」

(diminutives)により、或いは不正確な語彙表現により、相手にかける負担を最小限度にし、脅威や強制の強さを最小限度にすることである。このような方略が中国語では、動詞の重ね型、「形式上の形容詞の命令文」、語気助詞「吧」などによって表されている。動詞の重ね型と語気助詞「吧」の基本的なところは、要求表現において用いられた場合、依頼することを聞き手に判断を委ねようとしていることにより、聞き手の意志を尊重することに繋がり、依頼表現として成立するのである。また、「吧」のモダリティ的分析、動詞の重ね型の統語論的分析は、ポライトネスなどの対話における表現効果の分析とも関係を持つのである。また、両者ともに話し手が聞き手に対する要求的な表現において、直接的にその要求を表明するのではなく、自分の要求をぼやかすことによって、間接的に要求することが表されるに至って、間接性が加われば、丁寧さが加わると言える。

話し手が聞き手に依頼行為をしたら、利益の均衡関係を修復しなければならない。利益の均衡関係を修復するには、日本語は言語的に慣用的な依頼形式があるが、中国語は決まっている形式が少なく、言葉で明示的に利益関係を提示することにより、依頼行為を完成するのである。利益関係を明示するというのは、話し手の依頼する意志をはっきりさせることになり、話し手の面子にかかるのが普通である。よって、中国語では、動詞の重ね型、語気助詞「吧」のように話し手の要求、依頼する意志をぼやかすという言語形式を持つのが特徴である。

相手との関係による方略の使い分けについては、日本語では、親疎による頻度の差に比べ、上下関係による頻度の差が大きい。日本では人間関係が縦であり、何らかの要因により地位の差をわずかでもつけ、上下関係の違いで丁寧さが変わるが、中国語では親疎・利益軸の方に大きな頻度差が見られる。中国語ではできる限り同等の地位を保とうとし、依頼に関しては日本語ほど地位の差が影響しない。また、中国語では人間関係とお互いの利益関係によって、表現の丁寧度が決まる。日本語では直接依頼が多く、丁寧さは文末表現で表すし、授受表現などを補足的に組み合わせることによって丁寧度を高めている。逆に言えば、中国語では、構造的に語の補足による丁寧度の調整が困難であるために、ダイナミックな語用論的手段を駆使することによって丁寧度を高める必要があるのであろう。日本語では文末表現で丁寧さを調節できるので、中国語・英語ほど直接依頼を避けないようである。結果的に日本語では人間関係の上下、遠近などの概念によって、基本的に相手を遠ざけることによって、丁寧さを表すのである。中国語は話し手と聞き手との間の距離を近づけることによって、丁寧さを表すのである。

2.2 勧め文における丁寧さの問題

中国語では、相手が目上でも、自分の考えをはっきりと伝えることにプラスの価値感が置かれている。中国人は実にオープンに自分の感想や感情を言葉にするのである。中国語は相手の利益になれば、目上であっても、率直な勧めは必ずしも失礼には当たらない。むしろ相手への関心を示す積極的な姿勢は、親しみを表し、相手との心的距離を縮める効果を期待している。一方、日本語の場合は、いくら相手の利益のためになると言っても、ストレートに勧めることが相手の領域に侵入することになり、礼儀に反することになる。目上の人の領域に入るような立ち入った発言を控えたり、

親しい相手にも場面によっては敬語を使うことが習慣的に礼儀とされている。

§3 今後の課題

本論文は、意味論・統語論にわたって、中国語と日本語の命令・依頼表現に関わるいくつかの言語形式を見てきた。人々は目的を達成するために、さまざまな言語形式を使うが、それらは言語の語用論的な側面が関わりと考えられる。特に、中国語では、文法と語用論の関わりに関して、はっきりした言語形式がないため、語用論的な配慮が大きく、語用論的な観点からその機能を解釈しなければならないが、語用論はまた文法形式から派生するのである。中国語では、話し手が依頼を成功させる場合、ほのめかしなどのような自分の「欲」をはっきり言わない表現を使うのが特徴である。「中国人は相手のメンツより自分のメンツを尊重する傾向がある」(彭 1992)。日本語は統語的、如何に相手を尊敬し、自分を謙遜し、依頼の実現を求めるのである。

中国語と日本語の比較研究とは言っても、時には対応する表現だけを取り出したにすぎず、更に深く論じる必要があるところがある。中国語の命令・依頼表現にはどんな形式があるかという点は、他の様々な要因がからまって繁雑を極めるため、深く追及することができなかった。シンタックスの立場からいうと、中国語の命令・依頼表現は一体形式化される可能性はあるか、もしできるとしたら、各形式ごとがどのように語用論と関わっているのか非常に興味深い問題ではあるが、今後の課題としたい。

以上、日本語と中国語に関する命令・依頼表現の対照研究を試みた。筆者の力不足と紙幅の関係で、言及できなかった問題も少なくない。また、議論が十分でなく、事実を私的したにとどまるものもあったように思う。が、もし、少なくとも中国語の命令・依頼表現に関するいくつかの言語事実、中国語と日本語の命令・依頼表現に関する具体的言語使用状況に対する読者独の理解への一助となれば幸いである。

<参考文献>

- 阿部圭子 1999「日米のあいさつことばの輪郭——「ウチ・ソト」「上下」「男女差」「点と線」からの視点——」『国文学』第44巻6号, 98-103.
- 相原茂 1995「初次见面, 请多关照」『中国語』11月号, 64.
- 荒川清秀 1979「中国語における形容詞の命令文」『中国語学』226, 33-47.
- Austin, J. L. 1962: *How To Do Things With Words*. London: Oxford University Press. [坂本百大 (訳) 1978 『言語と行為』大修館書店].
- Brown, P. & S.C. Levinson 1987 [1978]: *Politeness. Some universals in language usage*. Cambridge: Cambridge University Press.
- ヤーホントフ, C.E. 1957『中国語動詞の研究』[橋本萬太郎 (訳) 1987 白帝社].
- Chao, Y. R. 1968: *A grammar of spoken Chinese*. University of California Press.
- Comrie, B. 1976: *Aspect*. Cambridge University Press. [山田小枝 (訳) 1988 『アスペクト』むぎ書房].
- 丁秀山 1985『中国語百問百答』東方書店.
- 土井晃一・大森晃 2000「あいづちを統制したコミュニケーションにおける助詞ねの頻度の変化」『認知科学』7 (1), 107-111.
- ドラグウノーフ 1952『現代中国語文法の研究(1)品詞論』モスクワ・レニングラード, ソ連科学アカデミア出版局.
- 袁毓林 1993『现代汉语祈使句研究』北京大学出版社.
- Garey, H.G. 1957: "Verbal aspect in French" *Language*, vol. 33, 91-110.
- 贺阳 1996「性质形容词作状语情况的考察」『词类问题考察』北京语言学院出版社, 133-146.
- Goffman, E. 1971: *Relations in Public*. London: Penguin.
- 吴洁敏 1986「试论汉语动词的复迭及其语法意义」『杭州大学学报』第16巻第3期, 98-106.
- 吴之翰 1966「形容詞用法研究」『中国语文』第2期, 119-128.
- Grice, H.P. 1975: "Logic and conversation". In P. Cole & J. Morgan (eds.) *Syntax and semantics, vol. 3: Speech acts*. New York: Academic Press, 41-58.
- Green, G. M. 1989: *Pragmatics and Natural Language Understanding*. Lawrence Erlbaum.
- Halliday, M.A.K. & R. Hasan. 1976: *Cohesion in English*. London: Longman.
- 春木仁孝 1992「時制・アスペクト・モダリティー」大橋保夫 (他著) 『フランス語とはどういう言語か』駿河台出版社, 143-168.
- 浜田麻里 1995「依頼表現の対照研究——中国語における命令依頼の方略——」『日本語学』10月号, 明治書院, 69-75.
- 范方蓮 1964「試論所謂“動詞重疊”」『中国语文』第4期, 264-278.
- 畠郁 1991「第一部 副詞論の系譜」『副詞の意味と用法』国立国語研究所, 大蔵省印刷局, 5-46.

- 橋本進吉 1959『国文法体系論』岩波書店.
- 長谷川真理子 1999「進化ゲーム理論と動物行動」『認知科学』6(2), 168-179.
- 橋元良明 1999「コミュニケーションにおけるあいさつの役割」『国文学』第44巻6号, 14-20.
- 蓮沼昭子 1988「続・日本語ワンポイントレッスン・第2回」『言語』6月号, 94-95.
- 蓮沼昭子 1993「「たら」と「と」の事実的用法をめぐって」益岡隆志(編)『日本語の条件表現』くろしお出版, 73-97.
- 蓮沼昭子 1997「終助詞「よ」の談話機能」—— その2 ——」日本語教育論文集凡人社, 581-598.
- 飛田良文・浅田秀子 1994『現代副詞用法辞典』東京堂出版.
- 匹田軍司 1981「指示詞コ・ソ・アについて」『言語』12月号, 84-94.
- Hopper, P. J. & S.A. Thompson. 1980 "Transitivity in Grammar and Discourse." *Language* 56, 251-299.
- 彭国躍 1992「「謝罪」行為の遂行とその社会的相関性について中日社会語用論的比較研究」『日本学報』11.
- 堀江・インカピロム・プリヤー 1995「依頼表現の対照研究——タイ語の依頼表現——」『日本語学』10月号, 明治書院, 76-83.
- 方梅 1994「北京話句中语气词的功能研究」『中国语文』第2期, 129-138.
- Howell, W. S. & 久米昭元(共著) 1992『感性のコミュニケーション——対人融和のダイナミズムを探る——』大修館書店.
- 篠堂明保 1979『中国語概論』大修館書店.
- 福地肇 1985『談話の構造』新英文法選書第10巻, 大修館書店.
- 古川裕 1989「副詞修飾“是”字考察」『中国语文』第1期, 19-31.
- 井出祥子 1986『日本人とアメリカ人の敬語行動』南雲堂.
- 井出祥子 1995「語用論から見た敬語——わきまえを指標するモダリティ表現としての丁寧語——」『国文学』12月号, 第40巻14号, 10-17.
- 池上嘉彦 1981『「する」と「なる」の言語学』大修館書店.
- 井上和子 1976『変形文法と日本語・下』大修館.
- 井上優 1993「発話における「タイミング考慮」と「矛盾考慮」——命令文・依頼文を例に——」国立国語研究所報告105, 研究報告集14, 333-360.
- 井上優 1999「状況認知と終助詞——「ね」の機能——」『日本語学』9月号, 明治書院, 79-86.
- 糸井通浩 1982「文末表現の問題」『日本語学』12月号, 明治書院, 56-64.
- Jakobson, R. 1973: *Essais de Linguistique Générale* [川本茂雄(監修) 田村すゞ子・村崎恭子・長嶋善郎・八幡屋直子(共訳) 1973『一般言語学』みみず書房].
- Johnson, M. 1987: *The Body in the Mind: The Bodily Basis of Meaning, Imagination, and Reason*. Chicago: University of Chicago Press. [菅野盾樹・中村雅之(訳)『心の中の身体』紀伊国屋書店].
- 上神忠彦 1968「文末語気助詞類連用のきまりについて」『中国語学』179, 1-8..

- 影山太郎 1993『文法と語構成』ひつじ書房.
- 影山太郎 1996『動詞意味論』くろしお出版.
- 蒲谷宏 1993「待遇表現における省略」『日本語学』9月号, 明治書院, 27-33.
- 神尾昭雄 1990a『情報のなわ張り理論——言語の機能的分析——』大修館書店.
- 神尾昭雄 1990b「情報のなわ張り理論」『言語』4月号, 44-51.
- 河上誓作 1996(編著)『認知言語学の基礎』研究社出版.
- 北野浩章 1993「日本語の終助詞「ね」の持つ基本的な機能について」『言語学研究』12, 京都大学言語学研究会, 73-88.
- 北尾健治・北尾キャスリーン 1988「ポライトネス——人間関係を維持するコミュニケーション手段——」『日本語学』3月号, 明治書院, 51-63.
- 木村英樹 1987「依頼表現の日中対照」『日本語学』10月号, 明治書院, 58-66.
- 木村英樹・森山卓郎 1991「聞き手情報配慮と文末形式——日中両語を対照して——」『日本語と中国語の対照研究』第14号, 日本語と中国語対照研究会編, 1-24.
- 金水敏 1989「『報告』についての覚書」仁田義雄・益岡隆志(編)『日本語のモダリティ』くろしお出版, 121-130.
- 金水敏 1991a「伝達の発話行為と日本語の文末形式」『神戸大学文学部紀要』第18号, 23-41.
- 金水敏 1991b「書評論文, 神尾昭雄:『情報のなわ張り——言語の機能的分析——』」『言語研究』第100号, 106-119.
- 金田一京助 他(編) 1982『新明解国語辞典』三省堂.
- 金田一春彦 1976「日本語の動詞のテンスとアスペクト」金田一春彦(編)『日本語動詞のアスペクト』むぎ書房刊, 29-59.
- 小林典子 1992「「必ず、確かに、確か、きっと、ぜひ」の意味分析」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』第7号, 1-17.
- 胡明扬 1981「北京話の语气助词和叹词(下)」『中国语文』第6期, 416-423.
- 高名凱 1951『漢語語法論』第2版, 上海, 開明書店.
- 高名凱 1957『漢語語法論』科学出版社.
- 高亨 1980『诗经今注』上海古籍出版社.
- 工藤浩 1982「叙法副詞の意味と機能——その記述方法をもとめて——」『国立国語研究所報告71研究報告集3』秀英出版, 45-92.
- 工藤真由美 1995『アスペクト・テンス体系とテキスト——現代日本語の時間の表現——』ひつじ書房.
- 熊取谷哲夫 1995「発話行為理論から見た依頼表現——発話行為から談話行動へ——」『日本語学』10月号, 明治書院, 12-21.
- 久野暁 1973『日本文法研究』大修館.
- 久野暁 1978『談話の文法』大修館書店.

- Lakoff, G. 1987: *Women, Fire, and Dangerous Things: What Categories Reveal about the Mind*. Chicago: The University of Chicago Press. [池上嘉彦・河上誓作他(訳) 1993 『認知意味論』紀伊国屋書店].
- Langacker, R.W. 1990: "Settings, Participants, and Grammatical Relations." In Savas L. Tsahatzidis, ed. *Meanings and Prototypes: Studies in Linguistic Categorization*, 213-238. London: Routledge.
- Langacker, R.W. 1991: *Foundations of Cognitive Grammar*. Vol.2, Stanford: Stanford University Press.
- Langacker, R.W. 1993: "Reference-point Constructions." *Cognitive Linguistics* 4, 1-38
- Leech, G. N. 1983: *Principles of Pragmatics*. London: Longman. [池上嘉彦・河上誓作(共訳) 1987 『語用論』紀伊国屋書店].
- Levinson, S. 1983: *Pragmatics*. Cambridge: Cambridge University Press. [安井稔・奥田夏子(訳) 1990 『英語語用論』研究社出版].
- 林淑珠 1982 「日本語と中国語の命令・依頼表現の比較」『国語学研22』1-13.
- 李人鉴 1964 「关于动词重叠」『中国语文』第4期, 255-263.
- 李珊 1998 「汉语短时体重叠动词源流考」『中国語学』245, 21-31.
- 李宇明・唐志东 1991 「儿童反复问句和“吗”“吧”问句发展的相互影响」『中国语文』第6期, 417-424.
- 呂叔湘 1945 「个字的应用范围, 附论单位词前的一字的脱落」『汉语语法论文集』科学出版社.
- 呂叔湘 1951 『中国文法要略』第三卷, 上海, 商務印書館.
- ソーントン・ロザリンド 1983 「形容詞の連用形のいわゆる副詞的用法」『日本語学』10月号, 明治書院, 64-76.
- 刘月华 1983a 「动词重叠的表达功能及可重叠动词的范围」『中国语文』第1期, 9-19.
- 刘月华 1983b 『语法研究和探索』(中国语文丛书2) 北京大学出版社.
- 刘月华 1985 「从『雷雨』『日出』『北京人』看汉语的祈使句」『语法研究与探索』(三).
- 刘月华 1989 『漢語語法論集』現代出版社.
- 刘月华・潘文娛・故綽 1996 『現代中国語文法総覧』[相原茂(監訳), 片山博美・守屋宏則・平井和之(共訳) 1996 くろしお出版社].
- 牧野成一 1993 「省略の日英比較——その引き込みの表現効果——」『日本語学』9月号, 明治書院, 41-49.
- 丸尾誠 1996 「動詞の重ね型について——動作者・話者の表現意図との関連において——」『中国語学』243, 39-48.
- 马清华 1998 「汉语祈使句理论本质」『中国語研究』第40号, 33-41.
- 益岡隆志・田窪行則(共著) 1989 『基礎日本語文法』くろしお出版.
- 益岡隆志・田窪行則(共著) 1992 『基礎日本語文法——改訂版——』くろしお出版.
- 松本克己 1998 「形容詞の品詞的タイプとその地理的分布」『言語』3月号, 18-25.
- 三原健一 1997 「数量詞連結構文と「結果」の含意」関西理論言語学研究会(KATL).

- 宮島達夫 1994『語彙論研究』むぎ書房刊.
- 三宅知宏 1999「モダリティとポライトネス」『言語』6月号, 64-69.
- 宮田一郎 1981a「熱一点儿、～有点儿熱」『中国語』259, 10.
- 宮田一郎 1981b「快点儿走、～走快点儿」『中国語』260, 22.
- 森田良行 1977『基礎日本語——意味と使い方——』角川書店.
- 森田良行 1989『基礎日本語辞典』角川書店.
- 森本順子 1994『話し手の主観を表す副詞について』くろしお出版.
- 森本順子 1990「副詞「ぜひ」について」『日本語学』1月号, 明治書院, 93-103.
- 森山卓郎 1988『日本語動詞述語文の研究』明治書院.
- 森山卓郎 1989「認識のムードとその周辺」『日本語のモダリティ』仁田義雄・益岡隆志(編)くろしお出版, 57-120.
- 森山卓郎 1997「うどんにマヨネーズかけたりして」『言語』2月号, 大修館書店, 56-61.
- 森山卓郎 1998「「独り言」をめぐって——思考の言語と伝達の言語——」『日本語文法』第14巻, ひつじ研究叢書, 173-188.
- 森山卓郎 1999a「お礼とお詫び——関係修復のシステムとして——」『国文学』第44巻6号, 78-82.
- 森山卓郎 1999b「モダリティとイントネーション」『言語』6月号, 74-79.
- 孟宗 1963「关于“着”的某些用法」『中国语文』.
- 毛修敬 1985「动词重叠的语法性质语法意义和造句功能」『语文研究』第2期, 34-41.
- 村松恵子 1988「“着”の文法的意味」『中国語学』235, 76-85.
- 繆锦安 1990『汉语的语义结构和补语形式』上海外语教育出版社.
- 長野ゆり 1995「シロとシテミロ——命令形が假定を表す場合——」宮島達夫・仁田義雄(編)『日本語類義語表現の文法(下)』くろしお出版, 655-661.
- 中川正之 1973「二重目的語文の直接目的語における数量限定語について」『中国語学』218, 19-22.
- 中川正之 1987「中国語と日本語の形容詞——意図と結果——」『日本語学』10月号, 49-57.
- 中右実 2000『言語表現の意味と形式——対応関係の多様性——』京都大学6月集中講義.
- 仁田義雄 1983「動詞に係る副詞的修飾成分の諸相」『日本語学』10月号, 明治書院, 18-29.
- 仁田義雄 1989「現代日本語文のモダリティの体系と構造」仁田義雄・益岡隆志(編)『日本語のモダリティ』くろしお出版, 1-56.
- 仁田義雄 1991『日本語のモダリティと人称』ひつじ書房.
- 仁田義雄 1999「モダリティを求めて」『言語』6月号, 大修館書店, 34-44.
- 西村淳子 1992「フランス語の丁寧語法——対人関係の語用論——」大橋保夫(他著)『フランス語とはどういう言語か』駿河台出版社, 263-292.
- 西尾寅弥 1972『形容詞の意味・用法の記述的研究』(国立国語研究所報告44)秀英出版.
- 岡田伸夫 1985『副詞と挿入文』大修館書店.
- 尾上圭介 1977「語列の意味と文の意味」『松村明教授還暦記念国語学と国語史』明治書院, 987-1004.

- 尾上圭介 1986「感嘆文と希求・命令文——喚体・述体概念の有効性——」『松村明教授古希記念国語研究論集』明治書院, 555-582.
- 尾上圭介 1979「そこにすわる!」『言語』5月号, 大修館書店, 20-24.
- Okamoto, S. 1994: *Augmentative verbal repetitive constructions in Japanese* Contents Volume (5-4), 381-404.
- 沖森卓也 1985「形容詞の成立」『日本語学』3月号, 明治書院, 36-46.
- 沖裕子 1995「勧めの依頼表現について」『日本語学』10月号, 明治書院, 42-49.
- 大河内康憲 1997『中国語の諸相』白帝社.
- 王还 1963「動詞重疊」『中国语文』第1期, 23-25.
- 王希杰・华玉明 1991「论双音节动词的重叠性及其语用制约性」『中国语文』第6期, 425-430.
- 王力 1955『中国語法理論』上海, 商務印書館.
- 大西智之 1988「中国語の要求表現」『徳山大学論叢』第30号, 171-198.
- 大野晋 1978『日本語の文法を考える』岩波書店.
- 大島弘子 1996「聞き手に関する発話文について」『日本語教育』第89号, 133-143.
- 大曾美恵子 1986「誤用分析1『今日はいいい天気ですね。』——『はい、そうですね。』——」『日本語学』9月号, 明治書院, 91-94.
- 大滝幸子「中国語語気詞の意味記述(その1)」『中国語学』226, 59-70.
- 大塚みさ 1996「日本語の動詞の語彙的意味と文脈的意味をめぐって——移動動詞を例として——」日本言語学会112回大会発表要旨.
- 王志英 1996「命令・依頼表現における日本語と中国語の対照研究」修士論文, 京都教育大学.
- 王志英 1997「中国語の動詞の重ね型の意味」日本中国語学会第47回全国大会口頭発表.
- 王志英 1999a「動詞の重ね型の意味とその拡張」『漢語教学研究』春季号, 在日華人漢語教師協会編集・発行, 52-63.
- 王志英 1999b「中国語の「形容詞の命令文」と「一点儿」について」『中国語学』246, 79-88.
- 王志英 1999c「中国語の語気助詞“吧”の伝達機能」『中国語研究』第41号, 白帝社, 8-17.
- 王志英 2000「中国語の動詞の重ね型の意味についての再検討」『中国語研究』第42号, 23-41.
- Palmer, F. R. 1986: *Mood and Modality*. Cambridge: Cambridge University Press.
- ザトラウスキー・ポリー 1986「談話の分析と教授法(I)——勧誘表現を中心に——」『日本語学』11月号, 明治書院, 27-41.
- 砂川有里子(他) 1998『日本語文型辞典』くろしお出版.
- 坂口和寛 1995「辞書ではわからない副詞の語彙的意味の記述——「ぜひ」「どうか」について——」『東北大学文学部日本語学科論集』第5号, 37-48.
- 坂口和寛 1996「副詞の語彙的意味が統語的現象に与える影響——働きかけ文での共起関係を中心に——」『日本語教育』91号, 1-12.

- 阪倉篤義 1974『改稿日本文法の話』教育出版株式会社.
- 阪田雪子 1987「依頼要求命令禁止の表現」『国文法講座6時代と文法——現代語——』明治書院, 299-327.
- 佐久間鼎 1983『現代日本語の表現と語法』くろしお出版.
- 佐藤里美 1992「依頼文——してくれ、してください——」『ことばの科学5』むぎ書房, 109-174.
- Searle, J. 1969: *Speech Acts*. Cambridge: Cambridge University Press. [坂本百大・土屋俊(訳) 1986『言語行為: 言語哲学への一試論』勁草書房].
- Searle, J. 1975: "Indirect speech acts". In Cole P, Morgan J (eds.) *Syntax and semantics 3: Speech acts*. New York: Academic, 59-82.
- Searle, J. 1979: *Expression and Meaning: Studies in the Theory of Speech Acts*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 史有为 1994「动词重叠及其句法功能」『中国語研究論集』2, 大東文化大学語学教育研究所, 24-42.
- Spencer-Oatey, H. D. M. 1992: *Cross-cultural politeness: British and Chinese conceptions of the tutor-student relationship*. Unpublished PhD Thesis, Lancaster University.
- 鈴木睦 1997「日本語教育における丁寧体世界と普通体世界」『視点と言語行動』田窪行則(編) くろしお出版, 45-76.
- 将平 1984「形容词谓语句」『中国语文通讯』第5期, 中国語社会科学出版社, 579-585.
- 朱德熙 1956「现代汉语形容词研究」『语言研究』1.
- 朱德熙 1997『现代汉语语法研究』商务印书馆.
- 高橋太郎 1994『動詞の研究——動詞の動詞らしさの発展と消失——』むぎ書房.
- 高橋太郎 1976「すがたともくろみ」『日本語動詞のアспект』金田一春彦(編) むぎ書房, 117-154.
- 高水徹 1998「日本語の量・程度表現に関する認知言語学的分析」修士論文中間発表, 京都大学.
- 田窪行則 1990「談話管理の理論——対話における聞き手の知識領域の役割——」『言語』4月号, 52-58.
- 田窪行則 1997(編)『視点と言語行動』くろしお出版.
- 田中聡子 1996「動詞「みる」の多義構造」『言語研究』110, 日本言語学会発行, 120-142.
- 谷部弘子 1986「話し手の評価を担う形容詞」『日本語学』11月号, 明治書院, 64-75.
- Tannen, D. 1984: *Conversational Style: Analyzing Talk Among Friends*. Norwood: New Jersey: Ablex.
- Tannen, D. 1986: *That's Not What I Meant!: How Conversational Style Makes or Breaks Relationships*. New York: Balantine.
- Taylor, J. R. 1985, 1995: *Linguistic Categorization. Prototypes in Linguistic*. Oxford: Clarendon Press. [辻幸夫(訳) 1996『認知言語学のための14章』紀伊国屋書店].
- 寺村秀夫 1983「「付帯状況」表現の成立の条件——「XヲYニ…スル」という文型をめぐる——」

『日本語学』10月号, 38-46.

Thomas, J.A. 1995: *Meaning in Interaction. An Introduction to Pragmatics*. London: Longman. [浅羽亮

一 (監修) 田中典子・津留崎毅・鶴田庸子・成瀬真理 (訳) 1998『語用論入門』研究社出版.]

東郷雄二 1998「フランス語の話し言葉の特徴—— 談話方略を中心に——」『話し言葉のフランス語
に見る文法の形成過程の研究』平成7~9年度科学研究費補助金基盤研究 (C) 研究成果報告書,
1-33.

東郷雄二 1999『談話モデルと指示—— 談話はどのように構築されるか——』京都大学大学院講義レジ
メ, 2.

東郷雄二 2000「談話モデルと指示—— 談話における指示対象の確立と同定をめぐって——」『談話にお
ける名詞句の指示性確率のメカニズム』大木充 (研究代表者) 平成10~11年度科学研究費補助金
基盤研究 (C) 研究成果報告書, 12-30.

Trivers, R. 1971: "The evolution of reciprocal altruism". *Quarterly Review of Biology*, 46, 35-57.

Traugott, E. C. 1982: "From Propositional to Expressive Meanings: Some Semantic
Pragmatic of Grammaticalization." In Winfried P. Lehmann and Yakov Malkiel (eds.),
Perspectives in Historical Linguistics, 245-71. Amsterdam: John Benjamins.

Traugott, E. C. 1988: "Pragmatic Strengthening and Grammaticalization." *BLS* 14, 406-416.

Traugott, E. C. 1989: "On the Rise of Epistemic Meanings in English: An Example of
Subjectification in Semantic Change." *Language* 65, 31-35.

赵金铭 1997『新视角汉语语法研究』北京语言文化大学出版社.

张国宪 1995「论单价形容词」『语言研究』第1期, 52-65.

張麟声・渡辺実 1983「日中副詞の比較—— ムード副詞を中心に——」渡辺実 (編)『副用語の研究』
明治書院, 453-473.

张 静 1987『汉语语法问题』中国社会科学出版社.

鵜殿倫次 1977「動詞重疊と意図」『中国語学』224, 20-30.

内田道夫 1960「中国語の願望文について—— 著・着・者を中心に——」『中国語学』創刊100
号記念論文集, 34-40.

Vanderveken, D. 1994: *Principles of Speech act Theory*. Ca National Library of Canada. [久保進 (訳)
1995『発話行為理論の原理』松柏社].

Vendler, Z. 1967: *Linguistics in Philosophy*. Cornell University Press.

渡辺実 1971『国語構文論』塙書房.

渡辺実 1974『国語文法論』笠間書房.

山田小枝 1984『アスペクト論』三修社.

山田孝雄 1936『日本文法学概論』宝文館.

山田陽子 1997「評価的モダリティと認識的モダリティの連続性」日本言語学会第115大会.

山本俊英 1955「形容詞のク活用・シク活用の意味上の相違について」『国語学』第23集, 71-75.

- 山梨正明 1989「語用論」『講座日本語と日本語教育11』言語学要説（上），明治書院，214-250.
- 山梨正明 1993「語用論」『国文学』第38巻第12号，80-85.
- 山梨正明 1986『発話行為』大修館書店.
- 山梨正明 1995『認知文法論』ひつじ書房.
- 山梨正明 2000『認知言語学理論』くろしお出版.
- 安井二美子 1999「“把”構文述部における必要条件」『中国語学』246，154-164.
- 吉川武時 1975「「～てみる」の意味とその実現する条件」『日本語学校論集』2号，東京外国語大学外国語学院附属日本語学校，36-51.
- 吉井健 1998「現代語副詞の意味用法の記述（一）——「ぜひ」と「どうか」——」『文林』第32号，神戸松蔭女子学院大学学術研究会刊，65-83.
- 湯廷池 1979『国語語法研究論集』台灣學生書局印行.

[用例の出典]

- <丰>/于伶 1984『丰收』《于伶剧作集一》，中国戏剧出版社.
- <蓝>/扬永怀 1997『蓝领贵族』《中篇小说选刊》，中篇小说选刊杂志社.
- <弃>/航鹰 1997『弃婴』《中篇小说选刊》，中篇小说选刊杂志社.
- <朋>/王鲁平 1997『朋友再见』《中篇小说选刊》，中篇小说选刊杂志社.
- <断>/周克芹『断代』（一代かぎり）[渡辺晴夫・劉静（編著）1997『中国の短い小説』朝日出版 62-70].
- <火>/周而复 1961『火炬』作家出版社.
- <曹>/曹禺 1955『曹禺剧本选』人民文学出版社.
- <朝>/马忆湘 1962『朝阳花』中国青年出版社.
- <东>/康濯 1963『东方红』作家出版社.
- <現短10>/『現代短編名作選10』1980日本文芸家協会編.
- <現短2>/『現代短編名作選2』1979日本文芸家協会編.
- <废>/贾平凹 1993《废都》北京出版社.
- <白>/陈忠实 1993《白鹿原》人民文学出版社.
- <中国>/『中国語会話』1998，7，日本放送出版協会NHKテレビ.